一般国道23号中勢道路(9工区)道路建設事業に伴う

# 橋垣内遺跡発掘調査報告

1 9 9 7 • 3

三重県埋蔵文化財センター

三重県の県庁所在地である津市は、伊勢湾に面した温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれ, 古来より多くの遺跡が営まれてきました。

今回報告する橋垣内遺跡は、一般国道23号中勢道路建設に伴って、遺跡の現状保存が困難な部分について、緊急の発掘調査を実施して記録保存に努めてきた遺跡です。調査の結果、弥生時代の方形周溝墓とそれに随伴する土坑墓群をはじめ、弥生時代から古墳時代にかけての膨大な土器類、飛鳥時代から平安時代にかけての掘立柱建物群など、多数の貴重な調査成果を得ました。

開発と埋蔵文化財の保存との調和は、古くて新しい問題ですが、少なくともこのように調査後やむなく破壊される遺跡について、わたくしどもに課せられた重要な責務のひとつは、その膨大な記録を整理して、その遺跡が後の学術的な検証に耐えうるだけの報告書というかたちにして、世に公開することであると考えています。そして、それをもとに、当該地域の歩んできた歴史を少しでも明らかにすることができれば、ひいてはそれが今後の埋蔵文化財の保存・啓蒙にかならずや結びつくと確信しております。

調査にあたり協力いただいた関係諸機関および地元の皆様に厚くお礼申し上げます。

最後に、本書が地域の歴史と文化に対するご理解の深まりの一助になることを願いますとと もに、県民の皆様の埋蔵文化財へのより一層のご理解とご協力を念願して序文といたします。

平成9年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 奥 村 敏 夫

## 例 言

- 1. 本書は、平成6~8年度に三重県教育委員会が建設省中部地方建設局から委託を受けて実施した、一般国道23 号中勢道路(第9工区)建設予定地に所在する埋蔵文化財発掘調査(整理・報告書業務)にかかる橋垣内遺跡の 報告書である。
- 2. 橋垣内遺跡は津市大里窪田町字橋垣内他に所在し、発掘調査は平成元年~3年度にかけて実施した。また、橋垣内遺跡に隣接する大古曽遺跡のA地区(平成4年~5年度調査)は、発掘区の小字が大古曽ではなく橋垣内であることが判明するとともに、発掘調査でも両者が一連の遺跡であることが確認された。従って、旧大古曽遺跡A地区は橋垣内遺跡として扱い、本報告に含めた。
- 3. 発掘調査は、昭和63年度の第一次調査(範囲確認調査)以降、本調査を平成元年~5年度まで実施した。 調査の体制は、以下の通りである。
  - ·調査主体 三重県教育委員会
  - ・調査担当 三重県教育委員会事務局文化課(昭和63年度) 三重県埋蔵文化財センター(平成元年度以降)
  - ·調査協力 津市教育委員会
  - ·現場作業 社団法人中部建設協会
- 4. 橋垣内遺跡の現地調査は、昭和63年度の範囲確認調査を和気清章が、平成元年度に橋垣内遺跡 B 地区を森川幸雄・油田秀紀が、平成 2 年度の橋垣内遺跡 A 地区を森川幸雄・近藤 健が、平成 3 年度の橋垣内遺跡 B 地区パイロット道路部分調査を村木一弥・近藤健が、平成 4 年度の旧大古曽遺跡 A 地区パイロット道路部分を穂積裕昌が、平成 5 年度の旧大古曽遺跡 A 地区を穂積裕昌・小菅文裕がそれぞれ担当した。
- 5. 室内での報告書作成業務は、市川嘉子・畑ひろ子・小坂規美子・堀さや子・奥山晃代・太田浩子・森川尚子・ 駒田泉・一木八千代・伊藤友子・脇葉輝美・森川絹代・鈴木妙・黒川敬子・蒔田やよい・新田智子の協力を得た。 また、調査補助員として、新井ゆう子・清山健・大西貴夫・森貴子・河角龍典・藤田有紀・川崎志乃・杉﨑淳 子・田中美穂が現地調査もしくは整理作業に携わった。
- 6. 発掘調査ならびにその後の整理過程において、以下の方々のご指導・ご教示を得ました。記して感謝の意を表します。(順不同・敬称略、所属は当時))

青木哲哉(立命館大学)・井上喜久男(愛知県陶磁資料館)・植田文雄(能登川町教育委員会)・金原正明(天理大学付属天理参考館)・金原正子(古環境研究所)・永草康次(愛知県埋蔵文化財センター)・八賀晋(三重大学)・樋上昇(愛知県埋蔵文化財センター)・深沢芳樹(奈良国立文化財研究所)・富田靖男(三重県立博物館)・森勇一(愛知県埋蔵文化財文化財センター)

7. 本書の編集は、河北秀実、本堂弘之、森川幸雄、小菅文裕の協力を得て穂積裕昌と宮田勝功が担当し、それぞれの執筆分担は目次および文末に記した。遺物写真は、宮田勝功が撮影した。

- 8. 本遺跡については、すでに『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』 I ~ VIとしてその調査概要を報告しているが、本書をもって正式報告とする。
- 9. 本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて管理・保管している。
- 10. 本書で報告した遺跡の位置は国土座標第VI系に属している。挿図の包囲は全て座標北で示している。なお、真北は座標北のN0°21′W、磁北は座標北のN6°41′Wである。
- 11. 本書で使用した遺構の名称・番号は調査時点の呼称を踏襲せず、新たに改称したものである。
- 12. 本書で使用した遺構表示略記号は下記による。

SA: 柵・柱列・門 SB: 掘立柱建物 SD: 大溝・溝 SE: 井戸 SH: 竪穴住居

SK:土坑 SR:旧河道 SX:墓・方形周溝墓 P:柱穴・小穴

13. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。 各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

# 本 文 目 次

Ι.	前言		(穂積)	)1
		調査に至る経緯と経過		
	2.	橋垣内遺跡の調査経過	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	1
	3.	調査の方法	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	4
	4.	遺構番号付与方法 ·····	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	7
П	位置	と環境 ····································	(穂積	)9
		された遺構と遺物	( 12 12 1	,
		基本層序の概要(森川	・穂積	)11
	9	遺構配置とその概要 ····································	(穂積)	)14
		選件に直ことが成め 縄文時代の遺構と遺物		
		東京代の遺構と遺物		
		が至時代〜□墳時代♥ク週博ご園物 )弥生時代中期単独時期の遺構と遺物		
		) 弥生時代中期早週時期の遺構と遺物 ************************************		
		a. 刀形尚傳基b. 土坑		
		b. 工功 ···································		
	(2	)弥生時代~古墳時代の遺構と遺物	•••••	32
		a. 旧河道·溝 ·······		
		b. 竪穴住居 ······	•••••	70
		c. 土坑 ······	••••••	72
		d. ピット		
		)包含層等出土遺物		
		飛鳥時代から平安時代の遺構と遺物(本堂		
	(1	)飛鳥時代から奈良時代の遺構と遺物		
		a . 竪穴住居	•••••	78
		b. 掘立柱建物 ····································		
		c. 井戸 ·······		
		d. 土坑 ·······	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	123
		e. 溝 ·······	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	131
		f. ピット		146
	(2	) 平安時代の遺構と遺物	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	150
	(3	)飛鳥時代から平安時代の遺構と遺物		151
		鎌倉時代から江戸時代の遺構と遺物		
		)鎌倉時代の遺構と遺物 ······		
	(2	) 江戸時代の遺構と遺物 ·······		177
		・ 11 / 11 / 11 / 12 / 12 / 12 / 12 / 12		
		) 包含層出土遺物		
π/		・遺物のまとめと考察 ····································		
14 .		) 橋垣内遺跡における弥生時代中期の墓制 ·······(		
		) 衛生ハ遺跡におりるが生時八千朔の霎问		
		) 飛鳥時代掘立柱建物群の成立とその背景 ····································		
		)飛鳥時代細立柱建物群の成立とその育景		
		) 飛鳥時代の土師器甕について ·······(		
		) 陶馬について (		
		)攪乱土坑群について		
			. 槵槓)	209
(作	才編 1			
		パリノサーヴェイ株式会社	••••••	21.1
(作	<b>计編</b> 2			
		パリノサーヴェイ株式会社		212

# **挿図 目次 240図 S D34実測図**

第1凶	中勢道路(8・9・10工区)内遺跡位置凶…2	第40凶	S D34実測図 ·······31
第2図	試掘坑位置図3	第41図	S D34出土遺物実測図31
第3図	調査区位置図5	第42図	SR2実測図33
第4図	調査区地区割図(1)6	第43図	SR2杭列実測図34
第5図	調査区地区割図(2)7	第44図	SR2杭列の杭実測図 ·····35
第 6.図	遺跡位置図8	第45図	SD4実測図35
第7図	調査区東壁土層断面図(1)12	第46図	SR2出土遺物実測図(1) ······36
第8図	調査区東壁土層断面図(2)13	第47図	SR2出土遺物実測図(2) ······37
第9図	調査区東壁土層断面図(3)14	第48図	S D 4 出土遺物実測図(1) ······38
第10図	遺構配置図15	第49図	S D 4 出土遺物実測図(2) ······39
第11図	SR1, 黒ボク他出土遺物拓影図17	第50図	S D 4 出土遺物実測図(3) ······40
第12図	弥生時代・古墳時代遺構配置図18	第51図	SD5実測図40
第13図	S X 32実測図20	第52図	SD5出土遺物実測図 ······40
第14図	S X 32出土遺物実測図(1) ······21	第53図	SD5土層図40
第15図	S X 32出土遺物実測図(2) ······22	第54図	S D 19遺物出土状況図41
第16図	S X 151実測図 ······23	第55図	S D19出土遺物実測図(1) ······42
第17図	S X 151出土遺物実測図23	第56図	S D19出土遺物実測図(2)43
第18図	S K 55実測図24	第57図	S D19出土遺物実測図(3) ······44
第19図	S K 55出土遺物実測図24	第58図	S D19出土遺物実測図(4) ······45
第20図	S K70実測図25	第59図	S D19出土遺物実測図(5) ······46
第21図	S K70出土遺物実測図・拓影図25	第60図	S D19出土遺物実測図(6) ······47
第22図	S K 75遺物出土状況図25	第61図	S D19出土遺物実測図(7) ······48
第23図	S K75出土遺物実測図25	第62図	SR3実測図50
第24図	S K76実測図26	第63図	SR3下層・中層出土遺物実測図51
第25図	S K81実測図26	第64図	SR3中層出土遺物実測図・拓影図(1) …52
第26図	S K85実測図26	第65図	SR3中層出土遺物実測図(2) ······53
第27図	S K85出土遺物実測図26	第66図	SR3中層出土遺物実測図(3) ······54
第28図	S K 101 · 102実測図 ······26	第67図	S R 3 上層土器溜実測図55
第29図	S K 105実測図27	第68図	SR3上層土器溜出土遺物実測図(1)56
第30図	S K105出土遺物実測図・拓影図27	第69図	SR3上層土器溜出土遺物実測図(2)57
第31図	S K 106実測図28	第70図	SR3上層出土遺物実測図(1) ······58
第32図	S K107実測図·出土遺物拓影図28	第71図	SR3上層出土遺物実測図(2) ·····59
第33図	S K153実測図28	第72図	SR3上層出土遺物実測図(3) ······60
第34図	S K153出土遺物実測図·拓影図28	第73図	SR3上層出土遺物実測図(4) ······61
第35図	S K166遺物出土状況図 ······29	第74図	SR3上層出土遺物実測図(5) ······62
第36図	S K166出土遺物実測図29	第75図	SR3上層出土遺物実測図(6) ······63
第37図	S K177実測図30	第76図	SR3上層出土遺物実測図(7) ······64
第38図	S K190実測図30	第77図	SR3上層出土遺物実測図(8) ······65
第39図	S K190出土遺物実測図 ······30	第78図	S R 3 上層出土遺物実測図(9) ······66

第79図	SR3上層出土木製品実測図(1)67	第113図	S B145~148実測図
第80図	SR3上層出土木製品実測図(2)68		・出土遺物実測図97
第81図	SR3上層出土木製品実測図(3)69	第114図	S B 149・150・155実測図
第82図	SD23実測図・出土遺物実測図70		· 出土遺物実測図98
第83図	SH6~10実測図71	第115図	S B 156~159·162実測図
第84図	S H 8 ~10出土遺物実測図 ······72		· 出土遺物実測図 ·····99
第85図	S K29·30遺物出土状況図73	第116図	S B 160・161・164・165・169実測図
第86図	S K29·30出土遺物実測図73		・出土遺物実測図100
第87図	A-R15P1実測図・出土遺物実測図 …74	第117図	S B 167・168・170~172実測図
第88図	B-K18P1実測図・出土遺物実測図		・出土遺物実測図101
	· 拓影図74	第118図	S B 173・174・178~180・182実測図
第89図	包含層出土遺物実測図(1)75		・出土遺物実測図102
第90図	包含層出土遺物実測図・拓影図(2)76	第119図	SB181・184~188・197実測図103
第91図	歷史時代遺構配置図78	第120図	S B 189・191・193~196実測図
第92図	S H35焼土実測図79		・出土遺物実測図104
第93図	SH35実測図・出土遺物実測図79	第121図	SB201·202·206~209実測図
第94図	S H 64遺物出土状況図80		・出土遺物実測図105
第95図	SH63実測図81	第122図	SB211·212·215·216実測図
第96図	S H64実測図81		・出土遺物実測図106
第97図	S H 64出土遺物実測図81	第123図	SB217~219実測図
第98図	SH78実測図・出土遺物実測図82		・出土遺物実測図107
第99図	SH114実測図・出土遺物実測図82	第124図	SB220~223、SA210実測図
第100図	SB11~15·SA16実測図······84		・出土遺物実測図108
第101図	S B17·18·26~28実測図······85	第125図	SE52実測図118
第102図	SB36~40実測図・出土遺物実測図86	第126図	S E 52出土遺物実測図119
第103図	SB41~45実測図・出土遺物実測図87	第127図	SE59実測図120
第104図	S B46~50実測図・出土遺物実測図88	第128図	S E 133実測図 ······120
第105図	SB51·65~68実測図·····89	第129図	S E 59出土遺物実測図121
第106図	SB72~74·79·80·87実測図·····90	第130図	S E 133出土遺物実測図122
第107図	SB88~93・152実測図	第131図	S K31実測図124
	・遺物実測図91	第132図	S K31出土遺物実測図124
第108図	SB94~99実測図	第133図	S K 56実測図125
	・出土遺物実測図92	第134図	S K 56出土遺物実測図125
第109図	SB100·104·109~112実測図	第135図	S K 69遺物出土状況図126
	・出土遺物実測図93	第136図	S K 69出土遺物実測図127
		第137図	S K103実測図・・・・・・128
第110図	SB113·115·118~121実測図	第138図	S K 103出土遺物実測図 ······128
	・出土遺物実測図94	第139図	S K117遺物出土状況図128
第111図	S B 124~131実測図······95	第140図	S K117出土遺物実測図128
第112図	SB134~140·143実測図	第141図	S K122実測図129
	・出土遺物実測図96	第142図	S K122出土遺物実測図129

第143図	S K123実測図130		· 出土遺物実測図147
第144図	S K123出土遺物実測図130	第178図	B-U10P3実測図
第145図	S K144実測図131		·出土遺物実測図148
第146図	S K144出土遺物実測図131	第179図	B-U12P1 実測図
第147図	S K154実測図132		· 出土遺物実測図······148
第148図	S K154出土遺物実測図132	第180図	B-W15P5実測図
第149図	S K 205遺物出土状況図 ······132		·出土遺物実測図148
第150図	S K 205出土遺物実測図132	第181図	B-X20P18実測図
第151図	S D19~22·24実測図133		·出土遺物実測図······148
第152図	S D 20出土遺物実測図(1) ······134	第182図	B-Z11P4実測図
第153図	S D 20出土遺物実測図(2) ······135		・出土遺物実測図148
第154図	S D21出土遺物実測図(1) ······137	第183図	Bーイ10P10実測図
第155図	S D21出土遺物実測図(2) ······138		·出土遺物実測図148
第156図	S D 22出土遺物実測図139	第184図	B-口12P12実測図
第157図	S D 24出土遺物実測図140		· 出土遺物実測図149
第158図	S D33実測図142	第185図	B-口17P4実測図
第159図	S D33土層図142		· 出土遺物実測図149
第160図	S D33出土遺物実測図142	第186図	B-口18P1実測図
第161図	S D61出土遺物実測図143		· 出土遺物実測図149
第162図	S D 62出土遺物実測図143	第187図	Bーハ12 P 1 実測図
第163図	S D83出土遺物実測図143		· 出土遺物実測図149
第164図	SD86実測図144	第188図	D-B11P5実測図
第165図	S D86土層図144		· 出土遺物実測図149
第166図	S D86出土遺物実測図144	第189図	S K53実測図150
第167図	S D141出土遺物実測図145	第190図	S K53出土遺物実測図150
第168図	SD176出土遺物実測図	第191図	S K54実測図
	· 拓影図145		・出土遺物実測図150
第169図	S D183出土遺物実測図146	第192図	S D199出土遺物実測図150
第170図	S D198出土遺物実測図146	第193図	S D58実測図152
第171図	S D 200出土遺物実測図 ····· 146	第194図	S D 58出土遺物実測図(1) ······153
第172図	B-I22P7実測図	第195図	S D 58出土遺物実測図(2) ······154
	· 出土遺物実測図147	第196図	S D 58出土遺物実測図(3) ······155
第173図	B-J18P1実測図	第197図	S D 58出土遺物実測図(4) ·····156
	・出土遺物実測図147	第198図	S D 58出土遺物実測図(5) ······157
第174図	B-J21P6実測図	第199図	S D 58出土遺物実測図(6) ······158
	・出土遺物実測図147	第200図	S D 58出土遺物実測図(7)159
第175図	B-016P1実測図	第201図	S D 58出土遺物実測図(8) ·····160
	· 出土遺物実測図147	第202図	S D 58出土遺物実測図(9) ·····165
第176図	B-R10P5 実測図	第203図	S D 58出土遺物実測図(10)164
	・出土遺物実測図147	第204図	S D 58出土遺物実測図(11) ······165
第177図	B - S17P 3 実測図	第205図	S D 58出土遺物実測図(12) ······166

包含層出土遺物実測図(2)185	第223図	S D 58出土遺物実測図印3 ······167	第206図
包含層出土遺物実測図(3)186	第224図	S D 58出土遺物実測図(14) ······168	第207図
包含層出土遺物実測図(4)187	第225図	S D58出土木製品実測図(1) ·····169	第208図
包含層出土遺物実測図(5)188	第226図	S D58出土木製品実測図(2) ·····170	第209図
包含層出土遺物実測図(6)189	第227図	S D58出土木製品実測図(3) ·····171	第210図
包含層出土遺物実測図(7)190	第228図	S D58出土木製品実測図(4) ·····172	<b>第211図</b>
包含層出土遺物実測図(8)191	第229図	S D58出土木製品実測図(5) ·····173	<b>第212図</b>
包含層出土遺物拓影図(9)192	第230図	S D58出土木製品実測図(6) ·····174	第213図
橋垣内遺跡の土坑分類195	第231図	S D58出土木製品実測図(7) ·····175	5214図
伊勢湾西岸の弥生中期の墓域196	第232図	S D58出土木製品実測図(8) ·····176	₹215図
	(付編)	攪乱土坑群178	第216図
橋垣内遺跡 H G 1 · H G 2 地点土層断面	第1図	土坑群出土遺物(1)178	₹217図
柱状図および試料採集層位215		SB25実測図179	₹218図
橋垣内遺跡HG1地点	第2図	土坑群出土遺物(2)179	219図
おける花粉化石群集の変遷216		S K203実測図180	220図
		O 17 04 0 dt ) TILLER	
実測図卷末	付凶遺植	S K213実測図 ·······180	
·実測図 ······卷末	付凶,遺標	包含層出土遺物実測図(1) ······184	第221図 第222図
	村図遺標		
		包含層出土遺物実測図(1)184	第222図
次	料目	<ul><li>包含層出土遺物実測図(1) ······184</li><li>表 ● 資</li></ul>	等222図
<b>次</b> #戸一覧表193	<b>料</b>	包含層出土遺物実測図(1)	第222図 第1表
<b>次</b> 井戸一覧表193 歴史時代土坑一覧表194	<b>料</b>	<ul> <li>包含層出土遺物実測図(1)184</li> <li>表 ・ 資</li> <li>中勢道路 (8・9・10工区) 内遺跡 調査経過・予定表… 3</li> </ul>	等222図 等1表 等2表
<b>次</b> 井戸一覧表193 歴史時代土坑一覧表194 歴史時代溝一覧表194	料 第15表 第16表 第17表	記念を	等222図 等1表 等2表 等3表
井戸一覧表	料 第15表 第16表 第17表 第18表	記念を	5222図 51表 52表表 53表
井戸一覧表	料 第15表 第16表 第17表 第18表 資料1	表 ・ 資	2222図
井戸一覧表	料 第15表 第16表 第17表 第18表 資料1 資料2 (付編)	記念を	2222図 表表表表表表
井戸一覧表	料 第15表 第16表 第17表 第18表 資料1 資料2 (付編)	記念を	2222図 表表表表表表表表
#戸一覧表	料 第15表 第16表 第17表 第18表 資料 資付 第1表	表・資 中勢道路(8・9・10工区)内遺跡 調査経過・予定表… 3 橋垣内遺跡調査一覧表… 5 弥生時代中期土坑一覧表 74 古墳時代竪穴住居一覧表 76 歴史時代竪穴住居一覧表 82 掘立柱建物一覧表1 109 掘立柱建物一覧表2 110	2222図 表表表表表表表表表表
大 井戸一覧表 193 歴史時代土坑一覧表 194 歴史時代溝一覧表 194 県内出土陶馬一覧表 205 如来象御建立録(抜粋) 207 一札証文之事 208 橋垣内遺跡 B 地区 **C 年代測定試料表 および結果 211	料 第15表 第16表 第17表 第18表 資料 資付 第1表	表 ・ 資	2222図 表 表表表表表表表表表
ナア 井戸一覧表 193 歴史時代土坑一覧表 194 歴史時代溝一覧表 194 県内出土陶馬一覧表 205 如来象御建立録(抜粋) 207 一札証文之事 208 橋垣内遺跡 B 地区 *C 年代測定試料表 および結果 211 橋垣内遺跡における	料 第15表 第16表 第178 第18 第 4 2 (付第 1 3 5 7 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	表 ・ 資	2222 表 表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表
上次 井戸一覧表・・・・・・193 歴史時代土坑一覧表・・・・・194 歴史時代溝一覧表 194 県内出土陶馬一覧表・・・・・205 如来象御建立録(抜粋)・・・・・207 一札証文之事・・・・・208 橋垣内遺跡B地区 <sup>M</sup> C 年代測定試料表 および結果・・・・211 橋垣内遺跡における 放射線炭素年代測定結果・・・・214	料 第15表 第16表 第178 第18 第 4 2 (付第 1 3 5 7 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	表 • 資 中勢道路 (8 · 9 · 10工区) 內遺跡 調査経過·予定表… 3 橋垣內遺跡調査一覧表 5 弥生時代中期土坑一覧表 74 古墳時代竪穴住居一覧表 76 歴史時代竪穴住居一覧表 82 掘立柱建物一覧表 1 109 掘立柱建物一覧表 2 110 掘立柱建物一覧表 4 111 掘立柱建物一覧表 4 112	\$2222
大 井戸一覧表	<b>料</b> 第15表 第16表 第 第 第 第 17	表 ・ 資	第
井戸一覧表 195 歴史時代土坑一覧表 196 歴史時代溝一覧表 196 歴史時代溝一覧表 205 県内出土陶馬一覧表 205 如来象御建立録(抜粋) 207 一札証文之事 208 橋垣内遺跡 B 地区 C 年代測定試料表 および結果 215 橋垣内遺跡における 放射線炭素年代測定結果 215 橋垣内遺跡における HG1地点における花粉分析結果 215	<b>料</b> 第15表 第16表 第 第 第 第 17	表 資 中勢道路(8·9·10工区)內遺跡 調査経過·予定表… 3 橋垣內遺跡調査一覧表… 5 弥生時代中期土坑一覧表 74 古墳時代竪穴住居一覧表 76 歴史時代竪穴住居一覧表 82 掘立柱建物一覧表 1 109 掘立柱建物一覧表 2 110 掘立柱建物一覧表 3 111 掘立柱建物一覧表 4 112 掘立柱建物一覧表 5 113 掘立柱建物一覧表 6 114 掘立柱建物一覧表 7 115	\$2222

# 図 版 目 次

PL1	橋垣内遺跡A地区221	P L 21	縄文土器	241
	橋垣内遺跡B-1地区221		縄文土器	241
P L 2	橋垣内遺跡B-2地区222	P L 22	出土遺物 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	242
	大古曽遺跡A地区222	P L 23	出土遺物	243
P L 3	パイロット道路部分223	P L 24	出土遺物 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	244
	S R 3223	P L 25	出土遺物	245
P L 4	S D19~24······224	P L 26	出土遺物	246
	S R 2 井堰······224	P L 27	出土遺物 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	247
P L 5	SR3遺物出土状況······225	P L 28	出土遺物 ·····	248
	S R 3 上層土器溜······225	P L 29	出土遺物 ······	249
P L 6	S X 32 ······226	P L 30	出土遺物 ······	250
	南周溝土器出土状況226	P L 31	出土遺物	251
P L 7	S K55土器出土状況227	P L 32	出土遺物 ······	252
	S K85土器出土状況227	P L 33	出土遺物 ······	253
P L 8	S K105土器出土状況228	P L 34	出土遺物 ······	254
	S K166土器出土状況228	P L 35	出土遺物 ······	255
P L 9	S H 7 · 8 ······229	P L 36	出土遺物	256
	S H 9 · 10······229	P L 37	出土遺物	257
P L 10	S H 35 ·····230	P L 38	出土遺物	258
	S H64230	P L 39	出土遺物	259
P L11	S B 18·····231	P L 40	出土遺物 ······	260
	S B 88·····231	P L 41	出土遺物	261
P L 12	S B 91 ·····232	P L 42	出土遺物	
	S B 110232	P L 43	出土遺物	263
P L 13	S B 121233	P L 44	出土遺物 ······	264
	S B 119 · 120 ·····233	P L 45	出土遺物 ······	265
P L 14	S B 124 ·····234	P L 46	出土遺物	266
	S B 127 ·····234	P L 47	出土木製品	267
P L 15	S B 170235	P L 48	出土木製品	268
	S B 179 ·····235	P L 49	出土木製品	269
P L 16	S E 52236	P L 50	出土木製品	270
	S E 133236	(付編)		
P L 17	S K69237	P L 1	花粉の顕微鏡写真	217
	S K123 ·····237	P L 2	花粉の顕微鏡写真	
P L 18	S D58238	P L 3	花粉の顕微鏡写真	
	S D58遺物出土状況······238		状況写真	219
P L 19	S D58遺物出土状況······239	P L 4	状況写真	220
	S D58遺物出土状況······239			
P L 20	攪乱土坑群240			
	作業風景240			

## I 前 言

#### 1. 調査に至る経緯と経過

昭和58年4月に都市計画道中勢バイパスとして鈴 鹿市北玉垣町から一志郡三雲町までの33.8kmの区間 が都市計画道路に決定された。

この中勢バイパス建設計画にかかる埋蔵文化財保護については、昭和57年1月に建設省から事業地内の埋蔵文化財の有無についての照会を受けたので、三重県教育委員会が主体となって、当該市町村教育委員会の協力を得て分布調査を昭和58年度に実施した。その後、この結果を受けて、三重県教育委員会と建設省中部地方建設局が埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った結果、現状保存が困難な遺跡については発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。

調査は、建設省中部地方建設局から三重県が委託を受け、昭和63年度は三重県教育委員会文化課、平成元年度からは新たに発足した三重県埋蔵文化財センターが調査を担当している。

調査にあたっては、「県教育委員会・市町村教育委員会人事交流要綱」に基づき、津市教育委員会から2名の派遣職員を得ている。また、現地作業は、調査の円滑化を期して、建設省中部地方建設局が社団法人中部建設協会に委託している。そして、調査事業の実施にあたっては、建設省中部地方建設局・三重県・中部建設協会の三者で「協定書」を締結し事業を推進している。

#### 2. 橋垣内遺跡の調査経過

さて、橋垣内遺跡の発掘調査は、昭和63年5月の 範囲確認調査(試掘調査)の結果を受けて、周知の 遺跡であった六大B遺跡と大古曽遺跡の間を埋める かたちで追加確認され、平成元年度より本調査を開 始した。以下、年次を追って調査経過を記していこ う。

平成元年度調査は、調査区西側に作業用道路(パイロット道路)部分を残し、津西病院へ通じる市道より北で、毛無川南側の農業用水路よりも南側の7,000㎡(B地区)を対象として実施した。5月20日より開始したが、弥生時代中期から中世を中心とする時期の遺構・遺物が極めて密で、しかも低湿性の遺跡であったため何度も冠水して排水対策に悪戦苦闘しつつ年度も押し迫った平成2年3月27日に調査を終了した。ただし、後に残した作業用道路部分は隣接する調査区から続いてくる遺構が確認されていたにもかかわらず、遺憾ながら諸般の事情で一部を除いて結局発掘されず、後に問題を残した。

平成2年度調査は、前年同様、パイロット道路部分を除いて、前年度調査区(橋垣内遺跡B地区)と毛無川に挟まれた約4,925㎡について4月26日より調

査を実施し、これまたほぼ一年をかけて平成3年3月15日に終了した(A地区)。調査区の北東側は河川法に伴う毛無川保全区域にあたっており、ちょうどそこから遺物を多量に包含する弥生時代後期から古墳時代にかけての旧河道を検出したが、保全区域ということで調査区に制限があり、トレンチを最大限拡張する程度で旧河道を完掘するには至らなかった。しかしながら、調査としては完全なものにはならなかったが、現在の法体系の枠内では精一杯の努力は払われものと思われる。今後、こういった場合には別途協議を行い、記録保存のための発掘以外の次善の策として磁気探査等の万全の体制を敷く必要性が痛感された。

平成3年度調査は、平成元年度調査区の西側に残したパイロット道路部分うち、奈良時代を中心とする大溝(今回報告のSD58)の延長部分に狙いを絞って100㎡の補完調査を11月11日より実施し、12月4日に終了した。大溝の他、新たに掘立柱建物1棟と井戸1基を検出した。

平成4年度調査は、市道を挟んだ南側、次年度調査予定の大古曽遺跡A地区パイロット道路部分240㎡



第1図 中勢道路(8・9・10工区)内遺跡位置図(1:50,000)

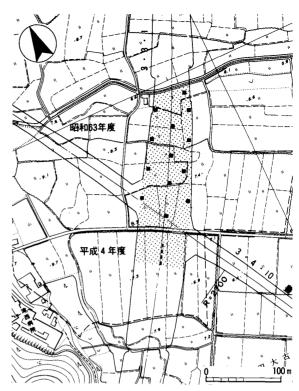
(国土地理院1:25,000 椋本・白子・津西部・津東部)

I	番	番 遺跡名				周	3	<b></b>	年 月		度			
区	号	道跡名	範囲確認調査	本調査	昭和63	平成1	2	3	4	5	6	7	8	9
	18	丸市遺跡	128	_						範				
0	19	山王遺跡	128	_						範				
8	20	内垣内遺跡	128				,			範				
I	21	天堤古墳	55							範				
区	22	河崎遺跡	256							範				
	23	六大A遺跡	448	(13,020)						範	範 8,830	4,130	60	
	24	六大B遺跡	456	26,235	範		17,525	3,420	範 3,350	1,270	670			
	25	橋垣内遺跡	176	12,000	範	7,000	4,925	75						
	26	大古曽遺跡	680	12,435	範		範	5,160	範 240	7,035				
	27	新池2号墳		(500)									範 500	
	28	新池1号墳	20		範									
	29	西岡古墳	70	2,000				範	2,000					
9	30	西岡2号墳	30	_	·			範						
I,	31	山籠遺跡	208	1,100	範	1,100								
区	32	門脇北古墳		1,100		1,100								
٠	33	コウゼンジ 遺 跡	80		範									
	34	宮ノ前遺跡	144	2,800	範	2,700				100				L
	35	森山東遺跡	240	5,230	範 4,230	1,000								
	36	太田遺跡	469	3,320	範 3,320									
	37	松ノ木遺跡	144	7,800	範	7,800								L
	65	長 遺 跡	0	3,700								3,700		
	38	蔵田遺跡	1,356	(16,400)		範					5,600	範 6,810	3,600	390
10	39	位田遺跡	416	(5,500)		範							5,500	
I	40	替田遺跡	176	(13,400)		範							範 7,500	5,900
_	41	弐ノ坪遺跡	320	(5,700)		範								5,700
区	42	里前遺跡	160	(3,000)		範								3,000
	43	鎌切3号墳												
範	囲る	確 認 調 査	6,288		2,249	1,680	300	100	68	1,047	96	748	範	
本	調	査 合 計		135,240	7,550	20,700	22,450	8,655	5,590	8,405	15,100	14,640	17,160	14,990

第1表 中勢道路(8・9・10工区)内遺跡 調査経過・予定表 〔 〕一部調査済( )未調査 (1996.3.)

についての調査を9月7日から同月18日まで実施し た。遺構密度は希薄であったが遺跡範囲の広がりを 知るうえで貴重な成果を得た。これまでパイロット 道路部分の調査については、一部分しか調査がなさ れておらず問題を残した部分もあったが、これ以降、 本来の原則に立ち返り、道路予定地内の記録保存に 対しての万全の体制が敷かれることとなる。なお、 例言でも記したとおり、本調査区は当初大古曽A地 区として調査を行ったが、後にここが地籍上、津市 一身田大古曽ではなく、津市大里窪田町字橋垣内に 所在することが判明し、遺跡の広がりのうえからも 橋垣内遺跡として扱うことが適当であることが明ら かとなった。従って、当報告以降、「大古曽遺跡A 地区」とされていた部分は、橋垣内遺跡として扱う。 なお、今回の成果を受けて、遺跡南側へ続く次年度 調査予定地の面積を再確定するため、計40m<sup>2</sup>の範囲 確認調査を平成5年2月12日に実施した。

平成5年度調査は、前年の範囲確認調査の成果を受け、道路本体部分2,825㎡の調査を5月6日から9月6日まで実施した。調査の結果、調査区北半から飛鳥~平安時代の掘立柱建物群が確認され、橋垣内遺跡の南縁部と位置づけるのが妥当と考えられるようになった。また、橋垣内遺跡B地区とのつながり



第2図 試掘坑位置図(1:5.000)

を確認するため、迂回路を設けて現道(市道)の下 も調査を実施し、多大の成果を得た。なお、この調 査区も、当初は「大古曽遺跡A地区」としていたが、 上述の理由により、橋垣内遺跡として扱う。

なお、最終の本調査面積は、15,090m<sup>2</sup>である。

#### 3. 調査の方法

橋垣内遺跡の調査では、年度によって調査区の区割り設定方法、遺構番号の付与方法等が異なっていて、統一されていなかった。以下、それぞれの調査年次に従い、その方法を概述する。

·平成元年度調査区(旧「橋垣内遺跡 B 地区」)

調査区を国土座標に基づいて4m×4mを1単位とするグリット(地区割)を調査区を覆うように任意で設定した。その設定については、各グリッドの北西隅を表示の原点とし、調査区の西から東へは算用数字、北から南へはアルファベット(Zより南側へ延びる部分については片仮名でイロハ~)で表示した(第4図参照)。

遺構番号は、ピットや土坑、溝といった遺構の種別を問わずグリッド毎の通し番号で付与されている(一部、大溝等の大型遺構は一つの番号で統一されてはいるが)。従って、同一遺構であっても、グリッ

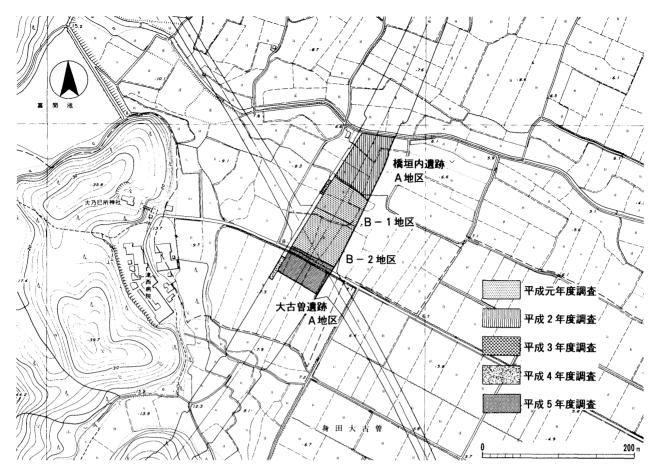
ド毎に遺構番号が異なっている。

・平成2年度調査区(旧「橋垣内遺跡A地区」)

基本的に、グリッドの設定方法や遺構番号の付与 方法は前年度と同じであるが、グリッドの設定は前 年度の番号を踏襲せず、調査区の北西隅を基準に新 たに設定している。従って、グリッドのラベル表示 については、別の場所を掘っているにも係わらず、 前年度とグリッド番号が共通している場合もあり、 「A地区」なのか「B地区」なのかを確認しなければ 遺構を取り違えることもあり、注意を要する(第4 図参照)。

・平成3年度調査区(旧「橋垣内遺跡B地区」パイロット道路部分)

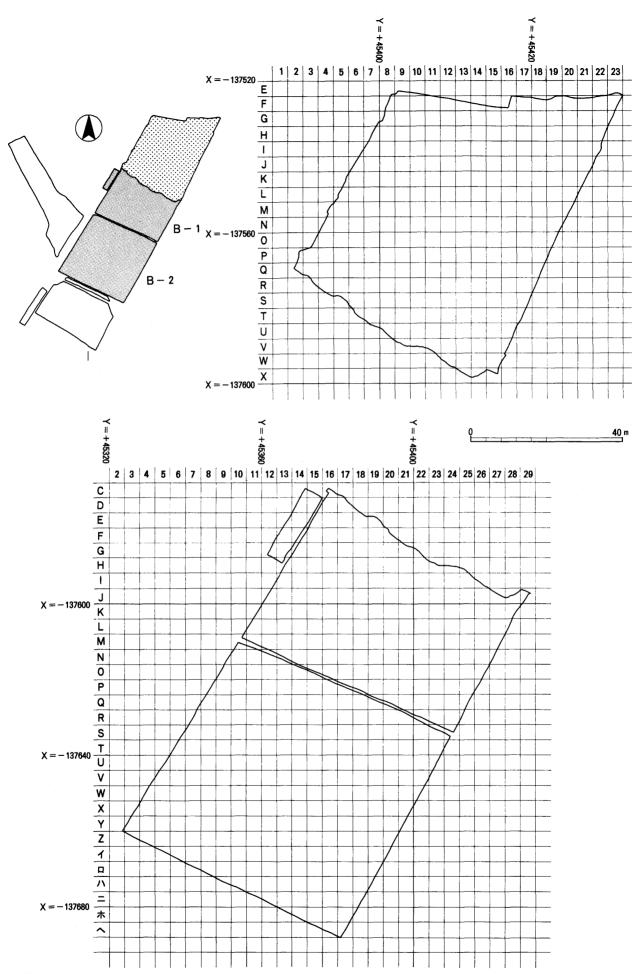
トレンチ調査で調査区が狭いため、新たなグリッド設定は行われていない。発掘調査時の遺構番号の付与方法は、橋垣内遺跡B地区と明示したうえで、



第3図 調査区位置図(1:5,000)

番号	遺跡名・地	区名	調査区分	所 在 地	調査面積 (m²)	調査期間	調査担当者	備考
	橋垣内遺跡		範囲確認調査	津市大里窪田町字橋垣内	176m²	昭和63年 5 月25日~ 昭和63年 7 月 6 日	和気清章	グリッド 13か所
	橋垣内遺跡	B地区	本調査	津市大里窪田町字橋垣内	7,000 m²	平成元年 4 月20日~ 平成 2 年 3 月27日	森川幸雄 油田秀紀	
25	橋垣内遺跡 A地区 本調査		本調査	津市大里窪田町字橋垣内	4,925 m²	平成 2 年 4 月26日~ 平成 3 年 3 月15日	森川幸雄 近藤 健	
	橋垣内遺跡	B地区	本調査	津市大里窪田町字橋垣内	100 m²	平成3年11月11日~ 平成3年12月4日	近藤健村木一弥	平成2年度 補完調査
26	(旧称) 大古 <b>曽遺跡</b>	A地区	本調査	津市一身田町大古曽字山口	240 m²	平成 4 年 9 月 7日~ 平成 4 年 9 月18日	穂積裕昌	橋垣内遺跡 として報告
	(旧称) 大古曽遺跡	A地区	範囲確認調査	津市一身田町大古曽字山口	40 m²	平成 5 年 2 月12日	穂積裕昌	同上
	(旧称) 大古曽遺跡	A地区	本調査	津市一身田町大古曽字山口	2,825 m²	平成5年5月6日~ 平成5年9月6日	穂積裕昌 小菅文裕	同上

第2表 橋垣内遺跡調査一覧



第4回 調査区地区割図(1)(1:1,000)

1000番からの通し番号とし、平成元年度B地区のものと区別した。

・平成4年度調査区(旧「大古曽遺跡A地区」パイロット道路部分)

この年度より、調査区の設定は、平面直角座標系の第VI原点からの座標値に基づいて行った。座標値の100m単位を大地区の境界線とし、大古曽遺跡の調査区全体を8か所の大地区に分割し、A~Hの名称を与えた。さらに、大地区を南北・東西とも北西隅を基準に1辺それぞれ4mを単位として25分割し

(小地区)、各大地区毎に北から南へA~Y、西から東へ1~25の記号を与え、大地区の名称と組み合わせて表示した(第5図参照)。

遺構番号は、ピットのみ小地区毎の通し番号、そ の他は調査区全体での通し番号とした。

·平成5年度調査区(旧「大古曽遺跡A地区」本調査部分)

前年度の調査区設定方法、遺構番号の付与方法を 踏襲した。従って、調査区は前年度調査区との対応 が容易である(第5図参照)

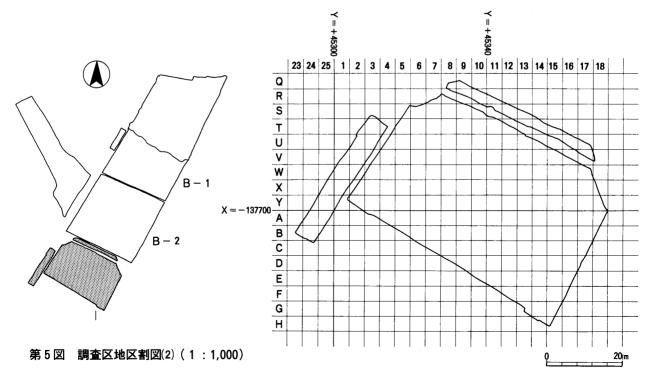
#### 4. 本書での遺構番号付与方法

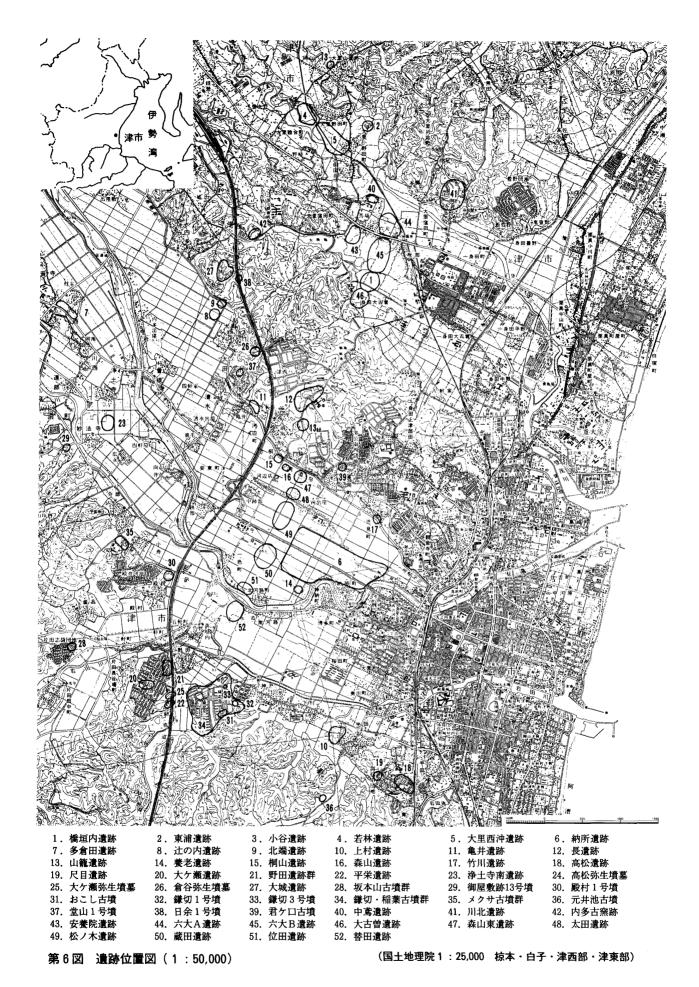
以上のように、橋垣内遺跡の発掘調査は、旧大古 曽遺跡A地区の部分も含めて5年間にわたって実施 されており、遺構番号も年度毎に付与され、その方 法についても年度・担当者によって統一されていな かった。特に、平成元年度と2年度の遺構番号の付 与に関しては、同一の遺構であっても、グリッドが 異なれば別の名称が与えられている例が多い。

従って、本報告において、それぞれ個別に付与されてきた遺構番号を踏襲すると、多少の対応表を付けても大混乱は免れない。そこで、今回の報告にあたっては、年度毎に便宜上与えられてきたA地区、B地区といった名称を廃止し、各調査区毎、あるいは各調査年次毎に与えられてきた遺構番号を全調査

区・調査年次を通した遺構番号とするため、遺構番号の抜本的な再編成を行った。ただし、ピットについては、膨大な番号になる煩雑さを避けるため、旧来のグリッド単位で遺構番号を付与したほか、包含層出土遺物の出土位置も旧来のグリッド単位の表示を行った(例; A地区D-8包)。

検出した遺構は、掘立柱建物や溝を中心に非常に多く、そのうち報告にあたって必要不可欠と考えられる遺構数は225を数えた。また、これとは別に、近世の瓦用粘土採掘に伴うと考えられる近世土坑群が存在するが、これらは一括して報告することとしたため、個別の遺構番号は本報告においては基本的には付与していない。 (穂積裕昌)





## Ⅱ.位置と環境

#### 〔地理的環境〕

橋垣内遺跡は、三重県津市大里窪田町字橋垣内に 所在する。

三重県の県庁所在地である津市は、伊勢平野のほぼ中央部に位置し、北西にはひときわ高い標高819mの経ケ峰、日の没する西側には標高321mの長谷山を仰ぎ、東は伊勢湾に望む。津市を流れる代表的な河川には、北から志登茂川、安濃川、岩田川があり、それぞれの流域には沖積地が広がっている。

このうち、志登茂川流域と安濃川・岩田川流域の間には、安濃町より延びる見当山(長岡)丘陵が割って入っており、海岸近くの津市上浜町付近でやっと南北の沖積地がひとつに繋がっている。

今回報告する橋垣内遺跡は、志登茂川流域に相当 する地域で、志登茂川支流の毛無川の上流部右岸に 広がる遺跡である。

毛無川は、橋垣内遺跡のすぐ西側に所在する大沢池に端を発して東流し、中世には浄土真宗高田派総本山である専修寺の寺内町の南側を画し、一身田中野で志登茂川に注ぐ。毛無川の下流部は標高1~2mの沖積低地であるが、橋垣内遺跡付近は標高7~8m程度の段丘となっている。志登茂川が開析した平野は、丘陵を越えた安濃川・岩田川流域の平野部に比べると格段に狭く、海岸寄りの低地部は常に洪水の影響を被ってきたが、橋垣内遺跡周辺は比較的安定しており、生産性は高い。

この状況をもう少し細かく見ると、標高6.1 m付近の毛無川から南に向かって徐々に高くなり、橋垣内遺跡B地区付近が最大約8 mで最も高い。そこを頂点として再び下がりだし、橋垣内遺跡の南端(旧大古曽遺跡A地区南端)が標高7 m前後となり、そこを境として南の大古曽遺跡に向かって再び高くなりだしている。この段丘上には、通称「黒ボク」と呼ばれる腐蝕土が堆積しており、植物相の生育の良好な土壌となっている。

#### [歴史的環境]

これまでの知見では、安濃川流域のほうが志登茂 川流域よりも考古学的な注目を集めることが多かっ たが、ここでは、志登茂川流域を中心とした歴史的 環境を、適宜安濃川流域の状況とも対比しつつ概観 していきたい。

志登茂川流域の最古の人間活動の痕跡は、旧石器時代末まで遡る。橋垣内遺跡の南隣、見当山丘陵の北側端部に所在する津市一身田の大古曽遺跡や志登茂川を望む台地上に立地する津市大里窪田町の六大 B遺跡では、ナイフ形石器の出土がある(註1)。量的には少ないが、低地部を見下ろすやや小高い台地上に当時の生活拠点があったようである。

縄文時代に入っても、津市大里野田町の東浦遺跡での草創期の木葉形尖頭器の出土(註2)や小谷遺跡での早期末条痕文系土器の出土(註3)、橋垣内遺跡や芸濃町赤坂遺跡での早期押型文土器の出土(註4)など断片的な資料が知られる程度で、縄文時代の草創期や早期といった古い時期の遺跡確認は今のところ県内他地域と比べると低調である。今後の確認例の増加が待たれる。

縄文時代の中期でも後半以降になると、関東系の加曽利E式系統の土器の流入とともに、当地の縄文遺跡は次第に活発化していく。志登茂川左岸の台地上に所在する津市大里野田町の大里西沖遺跡や、丘陵を越えた安濃川流域の芸濃町大石遺跡では、中期末の竪穴住居が確認されている(註5)。この時期は、県内全体で遺跡数が増加に転ずる時期であり、この時期以降、当地域も徐々に発展しながら遺跡形成が進むと見られ、まだまだ遺跡の発見数は少ないものの、後晩期もこの流れで捉えてよかろう。

弥生時代になると、県下最大の弥生遺跡である納 所遺跡(註6)をはじめとして、安濃川流域では広 い沖積地を舞台として弥生文化が一気に開花する。 納所遺跡の西側に展開する森山東遺跡では水田が (註7)、蔵田遺跡では灌漑用の溝と井堰が確認され ており(註8)、納所遺跡を支えた経済基盤的な遺跡 の所在も知られる他、納所遺跡を見下ろす見当山丘 陵の長遺跡では中期後半の200基以上(推定400~500 基)もの竪穴住居が確認された(註9)。

このような弥生時代の安濃川流域の発展は墓制に

も見ることができる。弥生時代を代表する墓制である方形周溝基は納所遺跡西側の松ノ木遺跡で中期初頭には認められるし(註10)、集団墓から離れていく有力者層の墓制でもある方形台状墓が中期中葉の安濃町清水の倉谷弥生墳墓以来認められ(註11)、弥生時代後期頃には個人墓的様相を強めてくる。

こうした状況に対し、志登茂川流域では、今回報告の橋垣内遺跡で中期の方形周溝墓や土坑墓が発見されているが、志登茂川流域での弥生墓制の発見はこれまで弥生末~古墳前期の川北遺跡しか知られておらず、弥生時代中期の遺跡自体も今のところあまり有力なものはない。

古墳時代に入ってもこの状況は同様に、5世紀の 大方墳である安濃町明合古墳や、海を見下ろす全長 85mの前方後円墳である池ノ谷古墳など、当地域の 有力古墳は全て安濃川以南の水系で認められる。志 登茂川流域では小規模古墳は認められるものの、前 方後円墳等の首長墓に属する古墳は見られない。こ のことは、直接的には志登茂川流域の開発が、安濃 川流域よりもやや遅れていたことと、平野部自体の 面積の狭小性を示すものであろう。

ただし、大里窪田町の六大A遺跡から安濃町内多にかけての谷筋には、当地域における初期の須恵器生産が開始された場所の可能性がある(註12)。そうした場合、小地域毎に異なる性格の遺跡が所在していた可能性があり、単純に現在判明している遺跡内容で流域の優位・劣勢を判断することはかなり危険であろう。

律令時代には、志登川流域は奄芸郡、安濃川流域は安濃郡に編入される。志登茂川流域は、奄芸郡のなかでは最も南側の地域ということになろう。平城宮跡出土の木簡には「伊世国奄伎郡」(表)「久菩多里私部小」(裏)といた墨書の残るものも存在しており(註13)、当地域と機内中央部との交渉の一断面が知られている。

中勢道路建設に伴って発掘調査された遺跡群、南から大古曽遺跡、橋垣内遺跡、六大B遺跡、六大A遺跡は、県道建設に伴って発掘調査された大垣内遺跡とともに、古代奄芸郡南部の様相の一端を明らかにしつつある。8世紀末頃より顕在化する掘立柱建物による集落の成立を受け、六大B遺跡では木簡が

出土するなど官衛的な性格も指摘されており(註14)、 大型掘立柱建物や多量の緑釉陶器の存在とともに、 平城宮出土木簡に「伊世国奄芸郡」(表)(久善多里 私部小」(裏)とある奄芸郡の中心地の一画であった ことが予想される。北に隣接する六大A遺跡(平成 6~8年度調査)でも、優秀な蹄脚硯や暗渠排水を 伴った高級な建物の存在を予想させる土管の出土な ど、当地域の発展の様子を如実に示している。

中世以降も、当地域は衰退することなく、安定して集落が継続し、「伊勢別街道」も次第に整備されてきて、中世後期(文明年間)には県内最大の寺院である一身田専修寺の前身となる寺院も成立する。

今後は、今回の橋垣内遺跡を含め、以上のような成果を受けて、当地域の歴史的発展の様子を具体的に明らかにしていく作業が望まれる。

(穂積裕昌)

註

- (1) 三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道 路建設事業に伴う大古曽遺跡・山籠遺跡・宮ノ前 遺跡発掘調査報告』1995
- (2) 三重県埋蔵文化財センター『東浦遺跡発掘調査報告』1989
- (3) 三重県埋蔵文化財センター『平成3年度農業基盤 整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告-第1分冊-』 1997
- (4) 三重県埋蔵文化財センター『安芸郡芸濃町 赤坂 遺跡発掘調査報告』1991
- (5) 前掲註(3)に同じ
- (6) 三重県教育委員会『納所遺跡ー遺構と遺物ー』
- (7) 三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道 路建設事業に伴う松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺 跡発掘調査報告』1993
- (8) 津市教育委員会『三重産業振興センター埋蔵文化 財発掘調査概報』1993
- (9) 三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道 路建設道路埋蔵文化財発掘調査概報 2 1996
- (10) 前掲註(1)に同じ
- (11) 1995年安濃町教育委員会調査
- (12) 三重県考古学の先達、故鈴木敏雄氏によって安濃町 内多で採集された資料が現在津市教育委員会に保 管されている。
- (13) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡 概報』12 1978
- (14) 三重県埋蔵文化財センター・三重県教育委員会 『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報V』 1993

### Ⅲ. 発掘された遺構と遺物

#### 1. 基本層序の概要

橋垣内遺跡では、幅が40~60mなのに対して、長さが東北-南北間で約260mにも及ぶ 細長い調査区となっており、北側を画する無毛川が形成した下位段丘上に遺跡が存在している。そして、多少の凹凸地形を持ちながらも、巨視的にはそこから南の大古曽遺跡へ向かって、次第に高くなっていく。

しかし、橋垣内遺跡最南部(旧大古曽遺跡 A 地区の南端)はやや標高が低くなっており、南側の大古曽遺跡と区画されるようにやや厚い「黒ボク」の堆積が認められた。この黒ボクは、厚薄はありながらもほぼ追跡全体を覆っており、北側へいくに従って遺構検出面より下位にもぐり込んでいく。つまり、黒ボクの堆積自体は標高6.5m前後を中心として、ほぼパラレルに南北を通して存在しているが、その上にのるかたちとなる土層の堆積が南側は薄く、北側は厚いものとなっている。

従って、遺跡の基本層序は、南端分(旧大古曽A 地区)とそれ以北(旧橋垣内A・B地区)ではやや 異なったものとなっている。基本的には、①一耕作 土、②一褐灰色砂混じりシルトもしくは黄色土粘土 (床土)、③一褐灰色砂質混じりシルトもしくは次灰 褐色土、④一暗褐灰色砂混じりシルトもしくはやや 砂混じりの淡褐色土(③~④が分層できずに一体と なった部分もある)までは同じで、その下が前者で は、⑤一黒色土(黒ボク)、さらに実際の遺構検出を 行った面である⑥一黄灰色粘土が、後者では実際の 遺構検出面となった⑤一黄色(黄灰色)砂、さらに ⑥一灰色粘土(もしくはシルト)を挟んで⑦一黒ボ クとなる。

遺構は、基本的に土層断面で確認するかぎり、③ より掘り込まれているが、平面で遺構が確認できた のは⑤からで、⑤が黒ボクのため検出状況が悪くて 検出しづらい前者については、さらに下の⑥ー黄灰 色粘土で遺構検出を行った。現地表土から⑥までは 約60~80㎝ほどである。

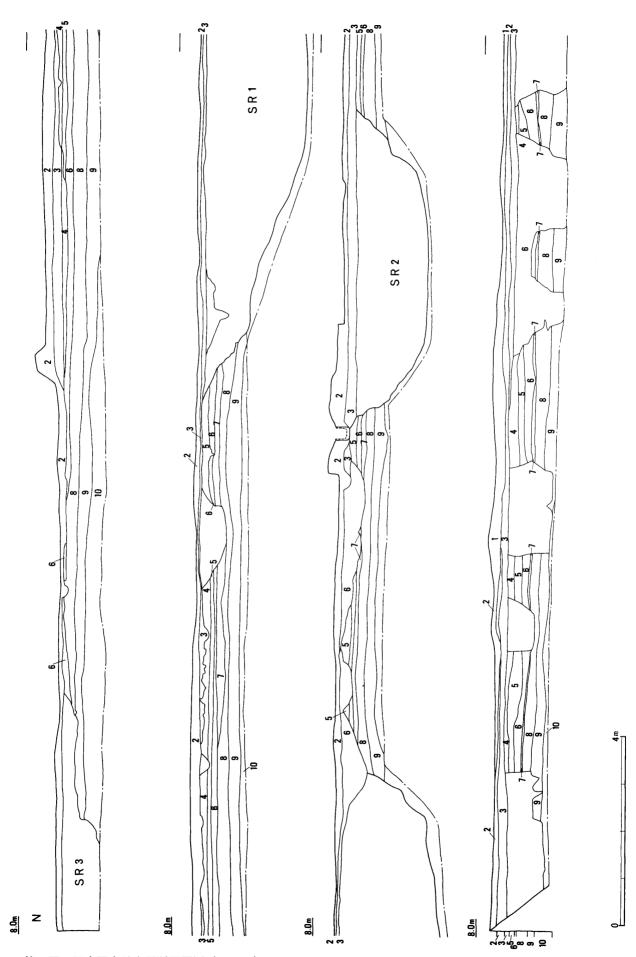
従って、調査当初は③と④を包含層として認識し

ていたが、以上のような層位所見からすると、厳密にはそれらは「包含層」ではない。橋垣内遺跡でのいわゆる「包含層遺物」の多くは、③・④で遺構が認識できなかったことにより、遺構未確認のまま検出面を下げていき、「あげられてしまった」遺物群ということになろう。この部分は、厚さにして計20~30cm分程存在する。なお、当時の生活面は、すでに削平を受けているものと思われる。

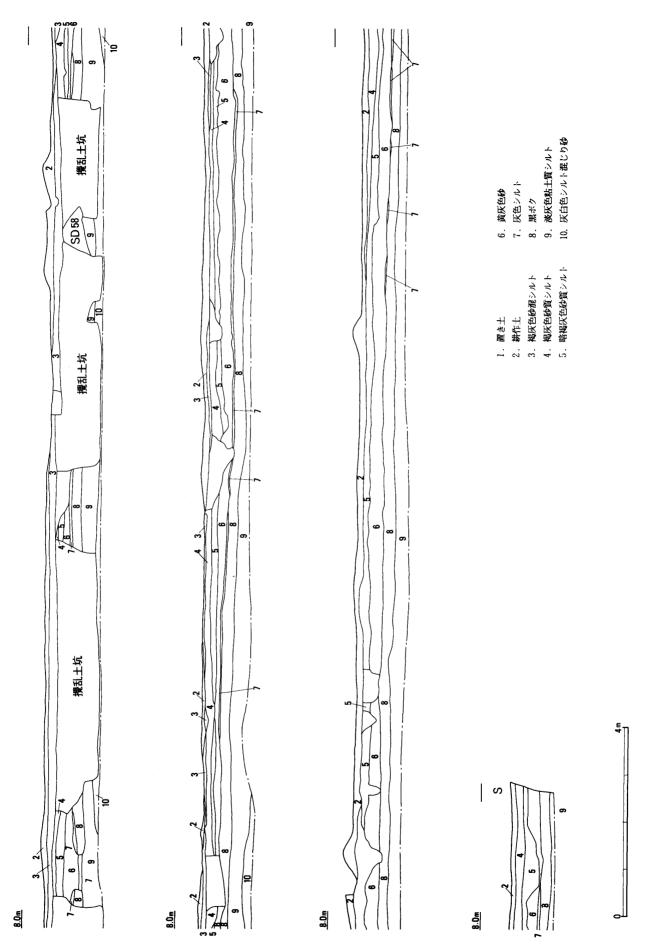
このように、たまたま橋垣内遺跡の調査では、土層観察によって、いわゆる「包含層」が上から遺構が掘り込まれた層であることが判明した。こうした「遺構が検出できる比較的美しい面」の上面に乗っている「遺物を含んだやや汚れた層」(包含層と呼ばれることが多い)は、以上のように実際に遺構が掘り込まれた層でありながらも、土質の汚れによって遺構検出が困難なため、遺構面であるという扱いを受けなかった場合も多いと思われる(註1)。

以上のように、橋垣内遺跡の土層所見を総括した のであるが、若干疑問もないわけではない。

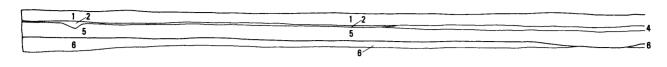
疑問点とは、黒ボクについてである。橋垣内遺跡 では、旧大古曽遺跡A地区部分と、旧橋垣内遺跡の 間に津西病院へ到る市道が走っており、この部分の 南北16m程は土層確認を通しでできなかった。とこ ろが、ここを境として北側では黒ボクが実際の遺構 検出面よりも下位で、南側ではその上位で検出され ている。現段階では、ともに黒ボク層が標高6.5 m 前後に堆積していることから両者は同一のものであ り、それより上位で堆積状況が異なるという理解に たっているが、南と北の黒ボクが別のものとの可能 性も否定しきれない。北側(旧橋垣内A・B地区) でも土層部分にはかからなかったが、検出面上面に 一部「黒っぽい土」が薄く堆積していたのを確認 (森川) している。これも黒ボクと捉えることができ るならば、南側の旧大古曽遺跡A地区部分の黒ボク もこれに対応している可能性がある。そうした場合、 黒ボクは上下2面存在することになる。

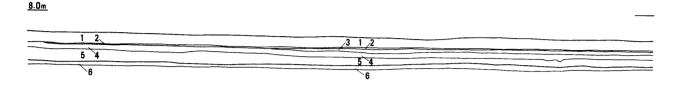


第7図 調査区東壁土層断面図(1)(1:80)



第8回 調査区東壁土層断面図(2)(1:80)







#### 第9図 調査区東壁土層断面図(3)(1:80)

しかし、現段階では、それを決定する根拠はなく、 今後の調査によりこのことが結論されるまで最終的 な結論は留保しておきたい。

ところで、橋垣内遺跡では、黒ボク中から押型文 土器が出土しているほか、5100±y.B.P (Gak-14890) という放射性炭素年代値が得られており、森勇一氏 はこのことも考慮にいれたうえで、黒ボクの形成時 期を縄文時代前~中期頃に比定されている(註2)。 黒ボクは、伊勢湾沿岸の広い範囲で確認されており、 遺構の時期決定のひとつの「キー層」にもなるものと期待されるが、各地で認められる黒ボクがすべて同一時期の堆積による同性格のものなのか、あるいは複数次にわたるのかなど、今後の資料増加に期待していきたい。 (森川幸雄・穂積裕昌)

- (註)
- 1. 青木哲也氏のご教示。
- 2. 森勇一・永草康次「橋垣内遺跡における黒ボク土について」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報 II』三重県埋蔵文化財センターほか 1991

#### 2. 遺構配置とその概要

#### (1) 遺跡全体の遺構配置

そもそも橋垣内遺跡は、志登茂川右岸の六大A遺跡から、南へ六大B遺跡・橋垣内遺跡・大古曽遺跡と続く一連の遺跡群中の一遺跡である。それらはほぼ連続して続くものの、途中の小河川や小さな谷地形の貫入等によって区別することが可能で、橋垣内遺跡は、北側は東流する毛無川を境として六大B遺跡と区別でき、南側は遺構の存在しない黒ボクが堆積した谷状地形が間に入ることによって大古曽遺跡と区別される。これら遺跡は、相互に重複する時期をもちながらも、遺構密度や遺構内容、遺跡の盛期等でそれぞれの遺跡の個性が異なっている。

今回の発掘調査は、道路建設事業に伴う調査であ

ることから、遺跡を南北に縦断する幅広の大トレンチを入れるかたちとなった。その結果、調査部分での遺跡の南北への広がりは、約240mを測った。ただし、平成4年度県道津・関線道路建設事業に伴う橋垣内遺跡の調査区が橋垣内遺跡の西側への広がりの一端を捉えており、その結果も踏まえると、橋垣内遺跡は、中勢道路での発掘区(本報告部分)から西側及び西北側(山側)へ広がっているものと判断される。

今回の調査区を東西に分断するかたちで、縄文晩期の河道1条(SR1)とそれに重複する弥生時代中期の河道1条(SR2)、弥生後期~古墳時代後期の旧河道1条(SR3)、それに飛鳥~奈良時代



第10図 遺構配置図(1:1,000)

の大溝1条(SD58)が東西方向に流れていた。これらは、調査区北側を現毛無川に沿ったかたちで流れている。毛無川を挟んだ北側の六大B遺跡南端部にも東西方向の旧河道が存在しており、これらは当該時期の毛無川の旧流水路であった可能性が高い。また、SR2では、その後、5条以上の溝が重複して存在しており、幅を狭めながらも一貫してこの位置に東西方向の溝が流れていたことが知られる。

掘立柱建物の遺構密度が最も高い部分は、大溝SD58よりも南側で、かなり重複した掘立柱建物の存在が認められる。ここでの建物の集中は、さらに西側(平成4年度県道調査部分)へ続いていく。南側は、旧大古曽遺跡A地区の南側が黒ボクの堆積した小さな谷地形となっていくため徐々に掘立柱建物が疎らとなっていく。

#### (2) 各時期の遺構配置

#### a) 縄文時代の遺構

この時期の遺構として認められるものは、東西方向の河道であるSR1(晩期)のみである。ただ、遺跡各所で認められたいわゆる「黒ボク」の堆積中に縄文時代の土器が少数ながら混じっており、その堆積が縄文時代に遡ることを示している。今後、周辺での遺構確認が待たれる。

#### b) 弥生~古墳時代の遺構

河道・溝では、SR2が縄文時代晩期のSR1と 重複するかたちで存在し、さらにそれに方向を変え て重複する弥生時代後期~古墳時代初頭の溝SD19 等が存在する。また、毛無川の旧流水路と思われる SR3は、弥生時代中期から古墳時代後期まで存続 する。

弥生時代中期の橋垣内遺跡は、河道・溝以外に、 密度は薄いながらも広い範囲が墓域となっていたようで、方形周溝墓2基と、土坑墓と思われる長楕円 形の土坑が存在する。このうち方形周溝墓2基はと もに弥生河道SR2の南側に存在するが、土坑墓は 調査区全体に散在する傾向を示す。

古墳時代では、前述の旧河道SR2のほか、竪穴

住居5基と若干の土坑、小溝が存在するが、全体に 遺構密度は疎らである。

#### c) 飛鳥時代~平安時代の遺構

遺跡ほぼ中央に存在する飛鳥~奈良時代の大溝 S D58を中心に、総数棟以上の掘立柱建物や井戸・土坑・小溝等が存在する橋垣内遺跡の最盛期であり、とくにその前半期(飛鳥~奈良時代)が中心である。掘立柱建物は北側に所在する六大 B 遺跡のものに比べて比較的小規模なものが多い。竪穴住居はごく少数で、本遺跡においては主体とならない。小溝も多数存在し、そのいくつかは建物群を区画する性格をもつものであろう。

#### d)中世以降の遺構

遺跡全体で遺構密度が疎らとなり、少数の掘立柱 建物や小溝・土坑等が存在するのみとなる。遺跡の 各所に耕作痕と思われる素掘り小溝が掘削されてお り、これらは中世以降の農地開発の跡と思われる。

調査区東側には、近世の粘土採掘用と思われる土 坑群が存在するが、埋没の過程ではそれ以前の時期 の遺物群も混入している。 (穂積裕昌)

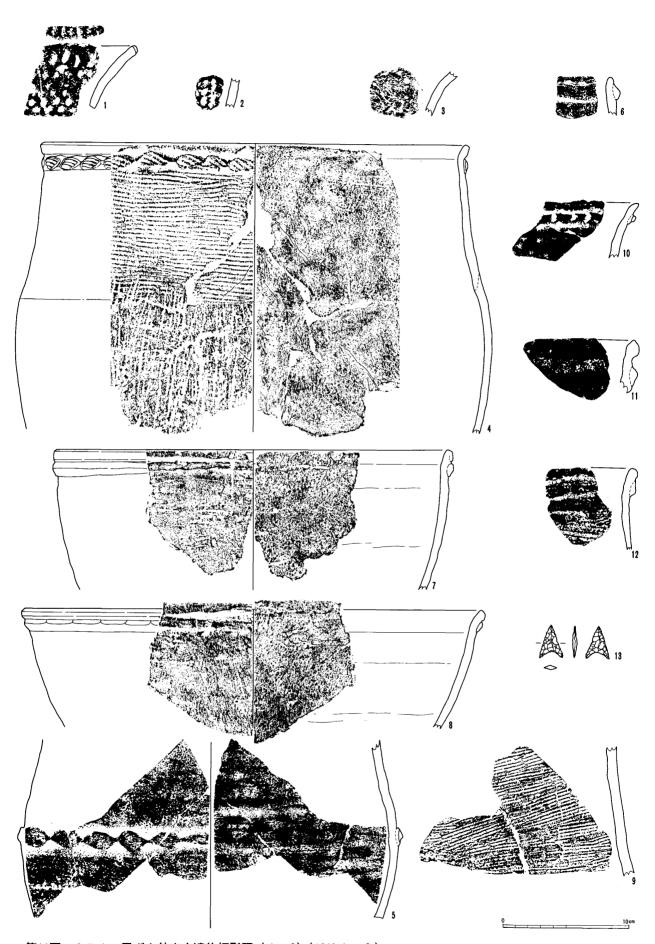
#### 3. 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構としては、旧河道SR1のみであるが、いわゆる「黒ボク」中から縄文土器がごく微量出土した。また、後世の遺構埋土に混入するかたちで少量の遺物が出土している。

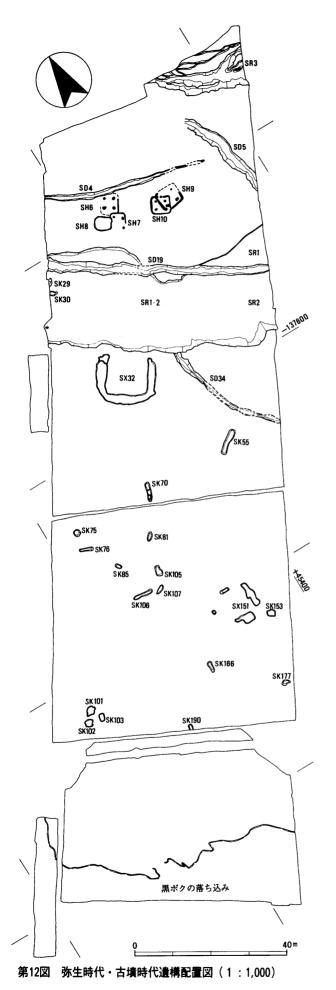
#### a. 「黒ボク」層中出土土器

層位のところでみたとおり、厳密には遺構ではな く、遺構検出面の下位に存在する腐植粘質土で、地 形的に窪んだ部分を中心に遺跡全体を覆っている。 前述のように、南端部とそれ以北では、その連続性 に若干疑問がないでもないが、ここでは出土量自体 も微量なので、いっしょに扱う。この層中には縄文 土器がごく微量ながら含まれており、この堆積が縄 文時代に遡ることを示している。

出土遺物 早期押型文土器( $1 \sim 2$ )と、繊維を含んだ早期末~前期と思われる土器(3)が出土している。土器はいずれも磨耗が激しい。



第11図 SR1, 黒ボク他出土遺物拓影図(1:3)(13は1:2)



押型文土器の口縁部片(1)は、口縁部を外側へ 屈曲させて外面に格子押形文を施した大川式に属す る破片で、早期前半の所産と思われる。胴部片(2) も、格子目の押型文が施されており、同じく大川式 に属するものと思われる。もうひとつの胴部片であ る(3)は、内外面とも無文になるものと思われる。 やや厚手で胎土に繊維を混入させており、早期末か ら前期にかけての所産であろう。

#### b. 河道

SR1 これのみが該当する。弥生時代中~後期の河道であるSR2や、飛鳥~奈良時代の溝群と重複するため平面的にはいまひとつ明確ではない。調査区の西側から中央にかけてはほぼSR2と同じ部分を東流するが、調査区東側ではSR2とは重ならず、間に島状の中州が入ってそれぞれ独立した河道となり、それは調査区東壁土層断面によって確認できる。推定幅11m・深さ約215cm(東壁)を測り、断面は緩い逆台形を呈する。埋土から、縄文時代晩期の突帯文土器が出土している。なお、本調査区の西側の平成4年度県道津関線道路改良事業に伴う橋垣内遺跡(B地区)にも縄文時代の旧河道が確認されている。

出土遺物 一条刻目突帯深鉢(4)・2条刻目突帯深鉢(5)・素文突帯森鉢(6)・素文突帯鉢(7~8)・深鉢頸部片(9)がある。深鉢肩部の屈曲はいずれも緩やかである。9の調整は二枚貝によるものであろう。いずれも馬見塚式に相当しよう。

#### d. その他出土遺物

包含層から出土したり、後世の遺構に混入した状態で出土した遺物である。10~12は、いずれも晩期 突帯文土器である。10は刻目突帯で、やや細くて高い突帯にシャープな刻みが施されている。13は凹基式の石鏃であるが、所属時期は不詳である。

#### 4. 弥生時代~古墳時代の遺構と遺物

本来、弥生時代の遺構と古墳時代の遺構は別個に扱うべきものであるが、旧河道などのように弥生時代~古墳時代まで連続して存続する遺構もあり、ここでは一括して扱うこととする。 なお 6 世紀末以降の時期については、その時期以降に本遺跡における

掘立柱建物群が広汎に成立することを考えて遺構の 連続性を重視し、古墳時代とは切り離して扱うこと とする。

この時期の遺構は、大別すると、①-弥生時代中期の単独時期の遺構(方形周溝墓・土坑と溝の一部)、②-弥生時代から古墳時代まで継続する(旧河道・溝の一部)ないしは連続的な推移が見られる遺構(竪穴住居及び一部の土坑)、③-古墳時代の単独時期の遺構(土坑および溝の一部)に分けることが可能である。しかし、古墳時代の単独時期の遺構はごく少数で、弥生時代から古墳時代へ連続する旧河道等と特に分ける必要性もないので、本書では一括して記述を進める。

以上をまとめると、以下のようになろう。

1. 弥生時代中期の単独時期の遺構

S X 32 · 151

S K55 · 70 · 75 · 76 · 81 · 85 · 101 · 102 105 · 106 · 107 · 153 · 166 · 177 · 190

S D34

2. 弥生時代から古墳時代に連続する遺構、もしくは弥生時代後期以降の単独時期の遺構

SR2 · 3

SD4 · 5 · 19 · 23

SH6 · 7 · 8 · 9 · 10

S K 29 · 30

その他ピット

#### 全体の遺構配置

まず全体の弥生~古墳時代の遺構の概略について

述べておこう。

弥生時代中期には、旧河道SR2を北限として同時期の方形周溝墓と土坑(土坑墓の可能性が高い)が散在的にその南側に展開しており、橋垣内遺跡南半部はこの時期、墓域であったようである。また、SR2右岸(南岸)にしがらみを設けてそこからの水をSR34に引き込んでおり、これが耕作に伴う施設とした場合、墓域の東側の調査区外には生産域が広がっていた可能性が高い。SR3もこの時期(弥生時代中期)から存在しているが、SR2とSR3の間には明確な遺構はみられない。

弥生時代後期から古墳時代初頭にかけては、SR2は埋没しつつあり、その南側の墓域はその活動を終え、代わりに小規模な単位集団による竪穴住居が建てられ、ごく小さな居住域が形成される。また、土坑も少数存在するが、全体として生活の痕跡は前代に比べて薄い。SR3はこの時期も存続する他、SD4やSD19などもこの時期に属し、多量の土器類が投棄されているが、これらを投棄した集団の居住域等は明確でない。

古墳時代に入ると、SR3以外にはあまり明確な 遺構はなくなり、ごく少数の溝が存在する程度で、 調査区内での生活の痕跡は前代以上に乏しくなる。 しかし、相変わらずSR3には大量の土器が投棄さ れていることから、おそらく調査区の西側を中心と する遠からぬところで何らかの人間活動は行われて いたようである。

以下、ほぼ上述の時代順に従って記述を進める。

#### (1) 弥牛時代中期単独時期の遺構と遺物

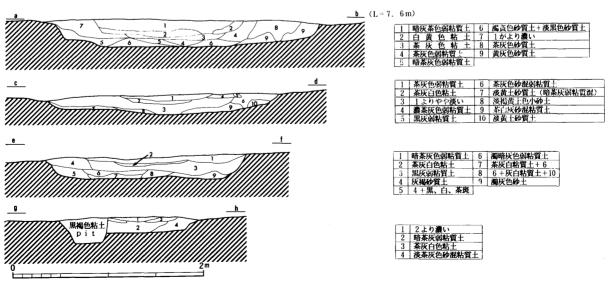
#### a. 方形周溝墓

SX32 SR2のすぐ南側に存在する方形周溝墓である。墳丘・主体部はもちろん、北側の周溝も削平により不明で、そのため全体のプランはわからないが、周溝も含めると東西16m×南北14m以上の規模をもつ(墳丘部の東西幅は10.8m)。残された3方の周溝のコーナー部分(南東隅と南西隅)は、いずれも細くなりながらも繋がっており、陸橋部は存在しない。周溝の幅は最大で3mある。削平のため周溝は全体に浅くなっており、約30cmを残すのみで

あるが、残されたプランを見る限り、周溝内側ライン (墳丘部) のラインはより方形に近く、周溝外側はやや丸みを帯びている。

遺物出土状況 南側周溝および東側周溝から、完 形土器を中心とした遺物の出土がみられる。特に集 中して出土するわけでもなく、全体に単独で出土し ている例が多い。周溝中央部よりも外寄りで出土し た遺物もあり、墳丘からの転落以外に、何らかの行 為によって方形周溝墓の外側から転落もしくは投入 された遺物も存在する可能性がある。





第13図 S X 32実測図(遺構図は1:100, 土層図は1:40)



第14図 S X 32出土遺物実測図(1)(1:4)

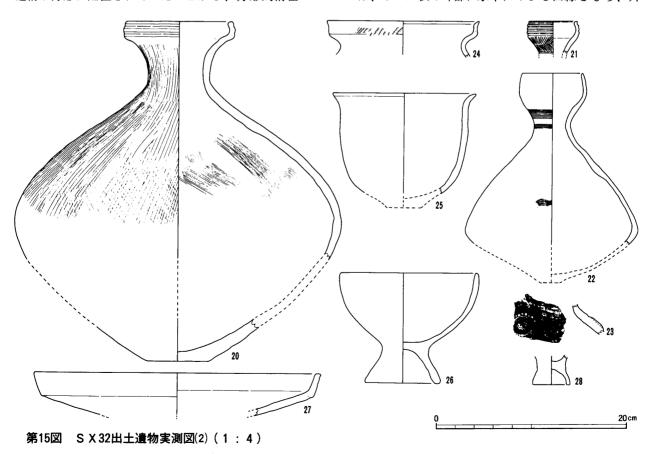
出土遺物 広口壺は、口縁端部を波状文もしくは 無文として口縁内面に刻みを施し、胴部を櫛描の簾 状文・波状文・横線文で飾る土器 (14~16) と、口 縁端部に2条の凹線文を施して体部を基本的に無文 とする受口口縁の広口壺(17~20、17のみは頸部に 直線文を入れる)とに分かれる。14~17は、いずれ も頸部に1段の櫛描文様帯を有する。弥生中期の櫛 描文で飾る土器は、体部文様の最下段を波状文で受 けるが一般的な施文であるが、14(15もその可能性 有) は最下段を横線文で受けており、通常の文様規 制からはややイレギュラーなものとなっている。細 頸壺(21~22)は、ともに口縁部が大きく膨らんで 発達した形態をなしており、21には凹線も施してい る。甕は、受口のもの(24)と通有口縁の小形のも の(25)が存在する。台付鉢(26)には全く装飾が 見られない。高杯(27)や無頸壺(23)、小形甕脚 部(28)については、小片であり、混入の可能性も 残る。

S X 151 S X 32の南側約54mのところに築造された方形周溝墓である。発掘当初は方形周溝墓としては認識されていなかったが、弥生時代に属する溝状遺構が方形に配置されていたことから、方形周溝墓

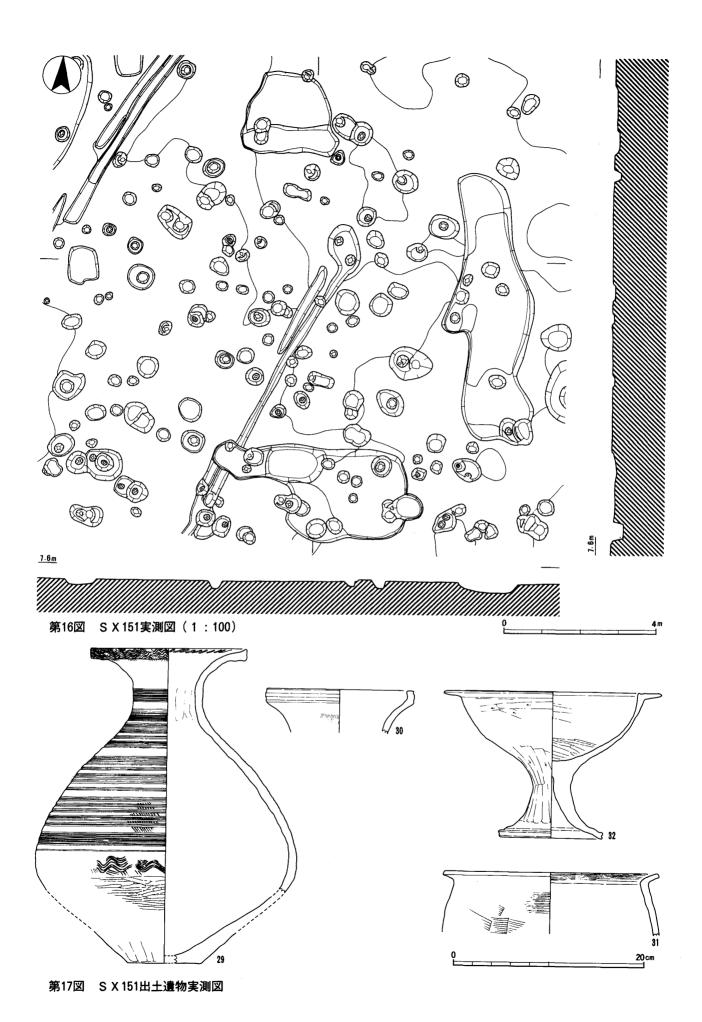
と考えた。削平及び後世の遺構との重複のため、遺存状況は極めて悪く、特に西側周溝については明確でないが、周溝も含めた大きさが南北12.5m×東西12.4m、墳丘部が南北8m×南北9.5mを測る。コーナー部がいずれも途切れているが、これも削平が激しいため元々コーナー部の深さが浅かった場合にはSX32のように本来は途切れていなかった可能性も残る。

遺物出土状況 ほぼ完形に復元できる広口壺 (29) と高杯 (32) は、いずれも北側周溝の出土である。 凹線を施した受口広口壺 (30) 及び甕 (31) は、南 側周溝から出土した。

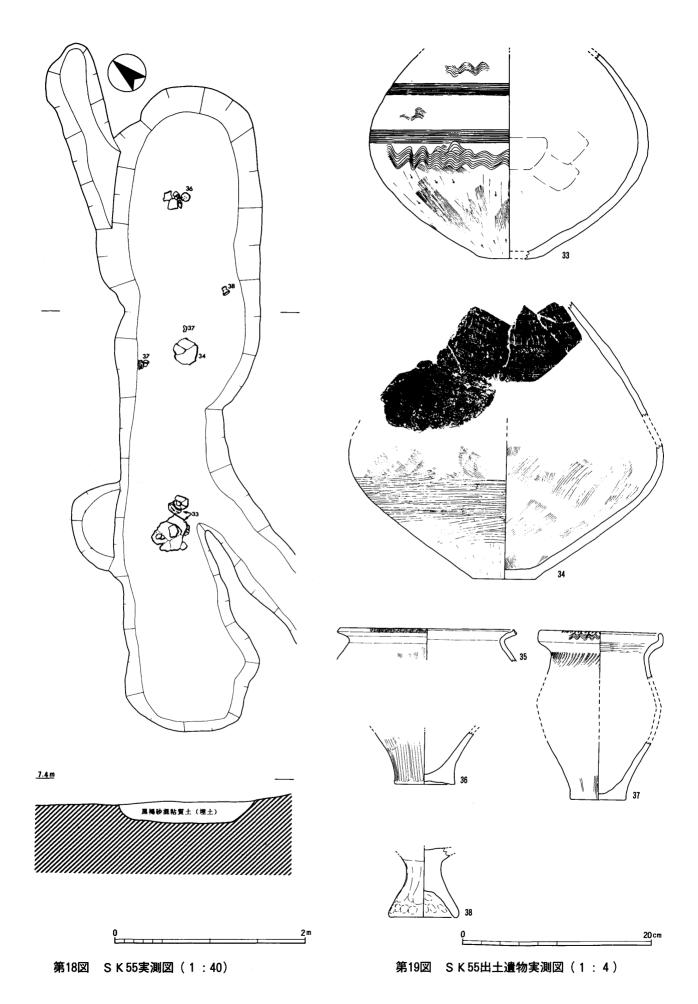
出土遺物 S X 32同様、広口壺は、土器全体を櫛 描文様で飾る土器と、口縁部に凹線文を施したのみ でおそらく体部は無文になるであろう土器とが共伴 する。文様で飾る29の体部文様は、頸部から体部最 大径付近までを櫛描直線文で飾り、最下部のみを波 状文で受ける。口縁部内面に刺突列があるような土 器で体部の殆どを横線文とする土器は珍しいが、最 下段を波状文で受けているてんではこの時期の広口 壺の文様施文の約束に則った土器といえよう。高杯 は、ボール状の坏部に水平にのびる口縁をもち、外



-22-



— 23 <del>—</del>



側に丸みを帯びて広がる脚部がつく。**甕**は、外面を ハケ調整、口縁内面にもヨコハケを施したものであ る。

#### b. 土坑

橋垣内遺跡の弥生時代中期には、複数の土坑が存在しており、形態上、以下のように5つに分類することが可能である。

第1類 溝状長方形or溝状長楕円形土坑

第2類 楕円形or隅丸長方形土坑

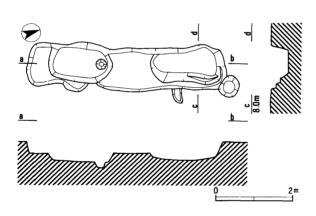
第3類 隅丸二等辺三角形土坑 (概報で「しゃも じ形」とされているもの)

第4類 円形土坑

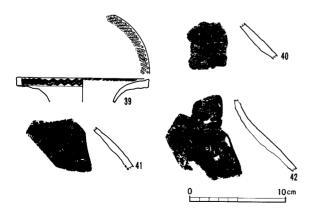
第5類 その他(不定型土坑など)

ここでは、以上の分類に基づき、記述していく。

SK55 長径6.9×短径1.5mの細長い隅丸長方形を呈した土坑(第1類)で、深さ25cmを測る。後世の削平のため浅くなっているが、本来はいま少し深かったものと思われる。土坑は、緩やかな角度で掘り込まれており、底面はほぼ水平を呈する。



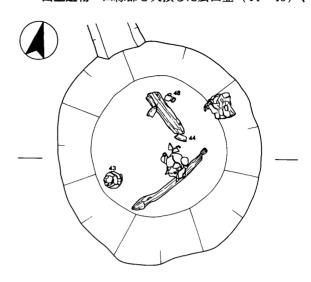
第20図 SK70実測図(1:100)

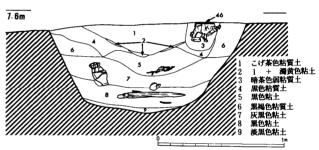


第21図 SK70出土遺物実測図・拓影図(1:4)

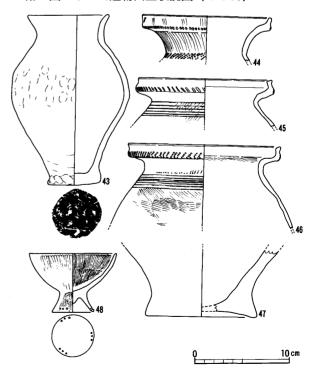
遺物出土状況 ほぼ土坑中央ラインに沿ったかた ちで主要な遺物が出土した。いずれも土坑底面より も若干浮いた状態で出土している。

出土遺物 口縁部を欠損した広口壺(44~45)、





第22図 SK75遺物出土状況図(1:30)



第23図 SK75出土遺物実測図(1:4)

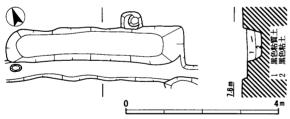
甕(46~48)、脚台(49)が存在する。このうち、 広口壺はいずれも横線文・波状文・簾状文等で飾る 土器で、45の体部はソロバン形で体中央部よりも下 の部分が張った器形をなす。く字形口縁甕は、口縁 端部に面をもつが、上下への拡張は見られず、受口 口縁甕は口縁部を全体に内斜させ、口縁端部を比較 的丸くおさめている。

SK70 時期の異なる別の土坑やピットと重複しているためわかりにくいが、弥生時代に属するものは、挿図の北側に存在する南北5.2×東西1.1m、深さ50cmの楕円形プラン(第2類)の土坑である。断面形は、箱形を呈しておいる。切り合っている長方形プランの土坑の時期は不明であるが、SK70よりは新しい。

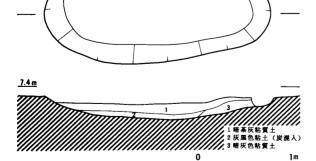
出土遺物 おそらく同一個体と思われる壺の破片 (39~42) が出土した。口縁部外面を波状文、内面を 刻み列とし、体部は波状文と横線文で飾った土器である。

SK75 長径1.8×短径1.6mのほぼ円形プランの 土坑(第4類)で、深さ70cmを測る。土坑の断面形 を見ると上から斜めに掘り込まれており、底部は平 らで径約1mである。土坑内には、土器とともに木 片も出土している。

出土遺物 壺(43・44)・甕(45~47)・台付鉢

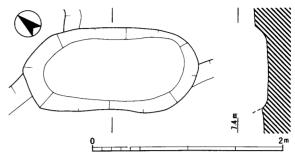


第24図 SK76実測図(1:100)

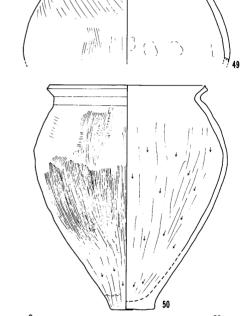


第25図 SK81実測図(1:4)

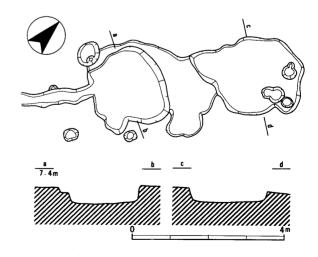
(48) がある。壺は、口縁部の立ち上がりが比較的短い粗製のもの(43)と、受口口縁を有する広口壺(44)がある。43底部には、土器製作時に敷かれたと



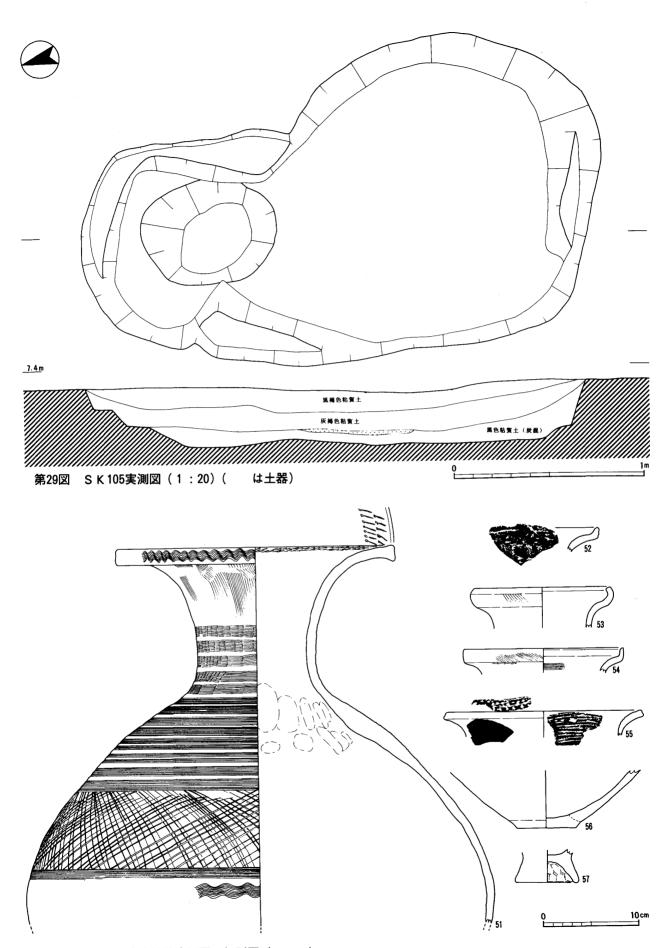
第26図 SK85実測図(1:40)



第27図 SK85出土遺物実測図(1:4)



第28図 SK101・102実測図(1:100)



第30図 SK105出土遺物実測図・拓影図(1:4)

思われる木の葉の圧痕が遺存している。甕は受口甕で、両者の文様構成は類似しているが、39の口縁部のほうが短く、全体に内側へ傾斜し、古相を呈している。台付鉢は、台部端部付近に3個1単位の小円孔が3対存在する。

SK76 南北1.0×東西4.7mの長方形プランの土坑 (第1類) で、深さ50cmを測る。出土遺物は小片で、図示しうるほどのものはないが、当該時期の所産と思われる。

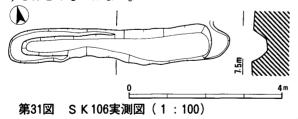
S K 81 長径2.4×短径1.0mの長楕円形プランの 土坑で、深さ25cmを測る。出土遺物は小片で、図示 しうるほどのものはない。

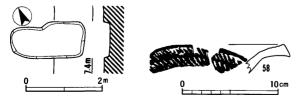
S K 85 長径1.8×短径0.9 m の楕円形の土坑 (第2類) で、深さ15cm、底部形は平らである。埋土より、甕 2 点が出土した。

出土遺物 甕はいずれもく字形口縁を呈するもので、50の口縁部が外反しながら立ち上がるのに対して、51では外側へ直線的に立ち上がって端部をやや上側へ拡張させている。

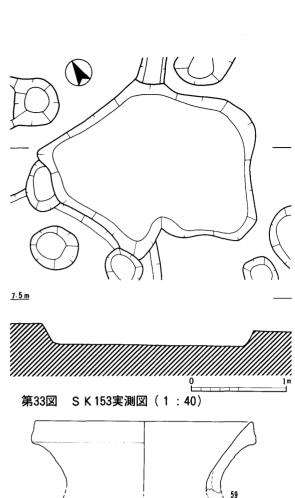
SK101 他遺構との重複が激しく、かなり削平されているが、一辺2m弱の略方形の土坑(第5類)で、深さ20cmを測りる。SK102と並んで存在している。図示しうるほどの出土遺物はないが、弥生時代の土器片が出土している。

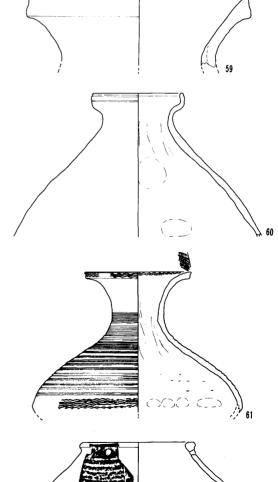
SK102 長径2.9×短径2.0mの土坑で、深さは30 cmを測る。削平や重複が激しく、プランはかなり歪んでいるが、本来は隣接するSK101同様の方形もしくは長方形を呈していたものと思われる。埋土出土の土器から、当該時期の所産と思われるが、図示しうるほどのものはない。



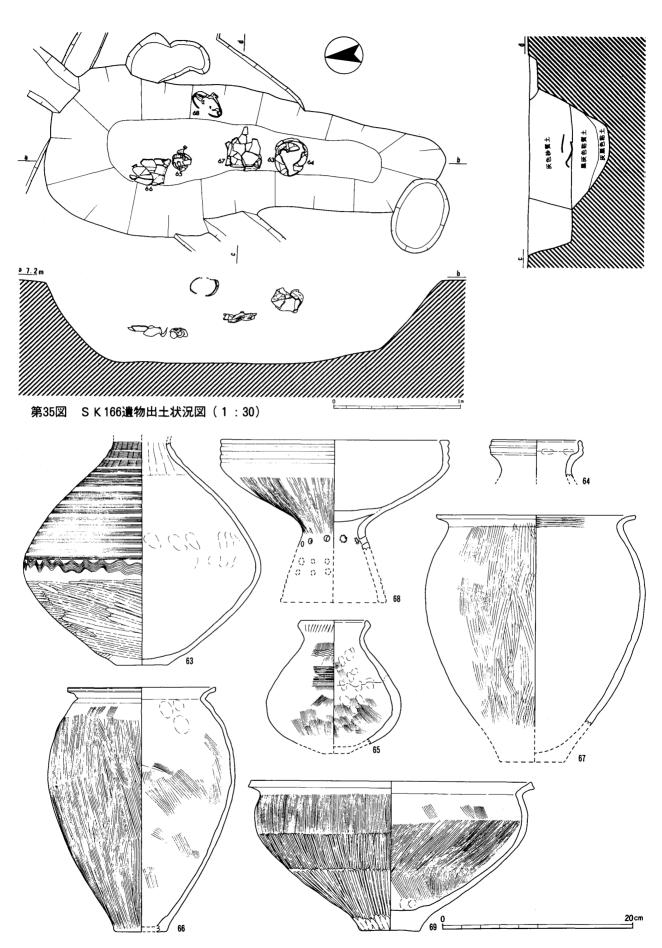


第32図 SK107実測図(1:100) 出土遺物拓影図(1:4)





第34図 S K 153出土遺物実測図(1:4)



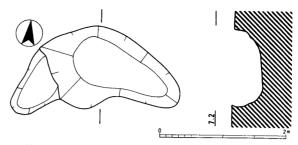
第36図 SK166出土遺物実測図(1:4)

SK105 平面形がいわゆる「しゃもじ」形を呈した第3類の土坑で、長径2.8×短径1.25m、深さ30cmを測る。土坑の両短辺部と「しゃもじ」とした場合の柄に相当する部分は、階段状に掘り込まれている。遺物は、土坑中央部の最下層の上面でまとまって出土した。

出土遺物 広口壺(52)以外は小片である。広口壺は、やや長めの頸部の下位にやや崩れた簾状文列を施し、体部を横線文・ヘラ描き斜格子文・最下部に波状文を施している。その他の壺甕類の口縁部片は、外反するく字形口縁で口縁内面にヨコハケを施した例(56)以外は、受口口縁である。壺底部片(57)は、52と同一個体の可能性があろう。

SK106 東西5m×南北1.0mの細長い楕円形を 呈した土坑 (第1類)で、深さは40cmを測る。土坑 断面形は、逆台形をなしている。弥生土器の小片が 出土した。

SK107 長径1.9×短径0.8m、深さ20cmを測る第3類の土坑である。削平によって浅くなっているが、 土坑断面形は箱形を呈し、底面が平たい。弥生時代

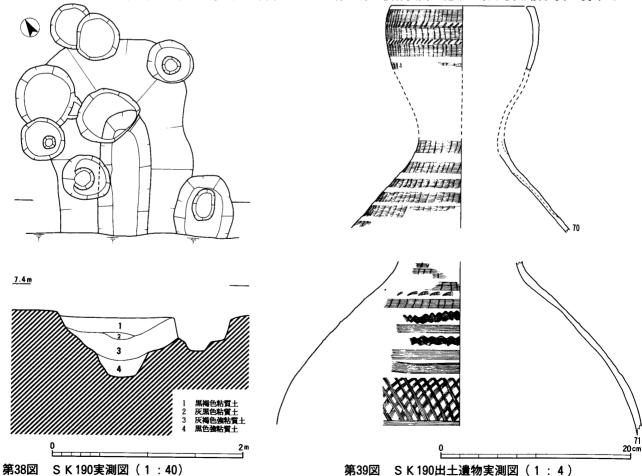


第37図 SK177実測図(1:60) 中期に属する広口壺の口縁部が出土した。

出土遺物 口縁端部に波状文、口縁内面に2段の 刻み列を施した広口壺である。詳細な時期は不明で あるが、中期でも後半に属するものであろう。

SK153 削平と後世の遺構との重複が激しく、本来の形態を把握しづらいが、長径2.3×短径1.6mの不定形土坑で、深さは25cmである。埋土から弥生土器が出土した。

出土遺物 広口壺(59~62)と無頸壺(62)が出土しているが、59と60は小破片である。60は、受口口縁に2条の擬凹線を施した頸部の立ち上がりが短い土器で、61は口縁外面に波状文、頸部に簾状文、体上部に横線文列を施して最下段を波状文で受けた



体下半部がソロバン状に張る土器である。

SK166 長楕円形の土坑であるが、西側半分が膨らんだ形状をなしており、本遺跡では通有のいわゆる「しゃもじ」形を呈した第3類の土坑である。長径3.7×短径0.7~1.3m、深さ60cmを測り、両短辺部が階段状に掘り込まれている。

遺物出土状況 比較的残りの良い土器が埋土からまとまって出土している。床面に埋置されたような土器はなく、いずれも土坑の中程より上位に単体で出土した。

出土遺物 広口壺には、口縁部は欠損しているものの頸部以下に櫛描の簾状文・横線文・波状文を施した装飾豊かな土器(63)と、口縁部に凹線文を施した土器(64)がある。 は口縁外面に刻み列を施した受口口縁の小形壺であま。甕は、いずれもく字形口縁甕の外面の最終調整にタテハケを用いた土器であるが、67は口縁部内面もヨコハケされている。高杯(68)は、脚部の大部分を欠損するが、口縁部に凹線文を施して脚部に円孔を穿っている。おそらく脚部最下部外面にも凹線文を施していたのであろう。鉢は、甕と同じく字形口縁で、肩部の張りが顕著である。



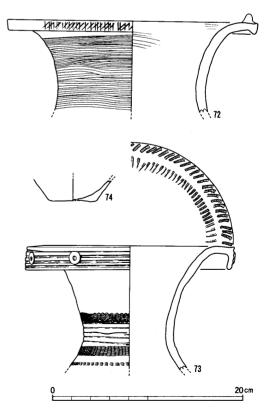
第40図 SD34実測図(遺構図は1:400, 土層図は1:40)

SK177 別遺構と重複しているが、長径2.35×短径1.35~0.8mの「しゃもじ」形の土坑(第3類)で、深さ50cmを測る。土坑は一部オーバーハング状に掘り込まれている。弥生時代の土器片が出土していることや、土坑自体の平面形態からも、当該時期の所産になるものと思われる。

SK190 ちょうど調査区が一時途切れる部分に相当しているため残念ながら全体形は不明であるが、短径0.8×長径2.1 m以上のおそらく楕円形を呈した土坑で、土坑の端部がやや広がるプランの微妙な形状から、第3類の土坑の可能性があろう。断面形は、緩やかなU字状を呈する。後世のピットによる重複が激しいが、2個体の壺が出土している。

出土遺物 両者は胎土や焼成等非常に類似しているが、文様配置の相違から別個体であると判断される。70は細頸壺で、頸部が欠損しているが口縁端部直下から体部まで細かい簾状文が丁寧に施され、口縁部にはさらに簾状文間に刺突列が存在する。71は広口壺になるものと思われ、頸部下部から体上半部にかけて、簾状文・刻み列・波状文・横線文・斜格子文等が施された非常に装飾豊かな土器である。

## C. 溝



第41図 SD34出土遺物実測図(1:4)

SD34 弥生中期から古墳時代にかけての旧河道 SR2の右岸に設けられた「しがらみ」(後述)から引き込んだ水を南方へ流す溝である。近世の粘土 採掘坑によって切られている部分も多いが、幅2.0~7.5m×長さ18m以上、深さ185cmを測る。溝の断面形はV字形を呈しており、旧河道からの引き込み溝であることも考慮すると、おそらく耕作用に人工に掘削された溝であろう。弥生時代中期の土器が出土している。

出土遺物 広口壺の口縁部 (72~73) と壺底部片 (74) がある。広口壺には、口縁端部を面取りしてへら描きの格子文を施し、口縁直下から頸部にかけて 櫛描横線文を間隔を置かず重ねた土器 (72) と、口縁内面に 2 段の刺突列をもち、垂下させた口縁部に 凹線文を施してその上に円形浮文を貼付し、頸部~体部にかけて波状文・へら描き沈線文・簾状文・刻み列等を施した土器 (73) がある。若干の時期幅があると思われるが、中期には納まるであろう。

# (2) 弥生時代~古墳時代の遺構と遺物

### a. 旧河道・溝

SR2 弥生時代中期の方形周溝墓・土坑墓群の 北を画するように存在する旧河道で、幅約20m×調 査区内での長さ60m、深さ2.0mを測り、底面が平ら で幅広である。縄文時代晩期の旧河道SR1とほぼ 同一地点を重複して流れていることが土層観察から 知られる。橋垣内遺跡の最も北側を流れる旧河道S R3が膨大な出土遺物があったのに対して、SR2 の出土遺物は比較的少ない。後世の遺構との重複に よって混入したと思われる新しい時期の遺物(120~ 121等)も存在するが、微量である。弥生時代後期~ 古墳時代初頭の溝SD19がSR2を切って存在して いることから、河道としての存続時期はSR3より は短く、弥生時代後期には河道としての機能を停止 し、その後は緩やかな窪み状となっていたところに 古墳時代初頭前後の土器が投棄されたものと判断さ れる。全体に遺構埋土には砂が多く、土層観察から、 SR2が南側から徐々に埋没していったことがわか る。また、岸側のほうが斜面が緩やかである。

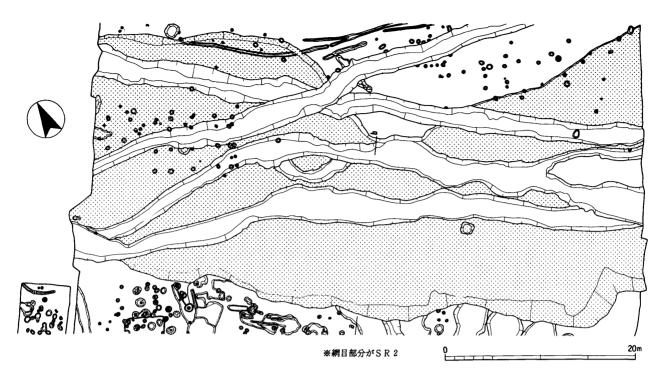
また、SR2の右岸には、遺構の肩部斜面に杭を 打ち込んだしがらみが設けられ、SD34に水を引き 込んでいる。しがらみは、現状で30本以上の杭が前 後重なりながらほぼ流路に対して直交方向に打ち込 まれたもので、おそらくそこに堰板となる横材が置 かれていたのであろう。

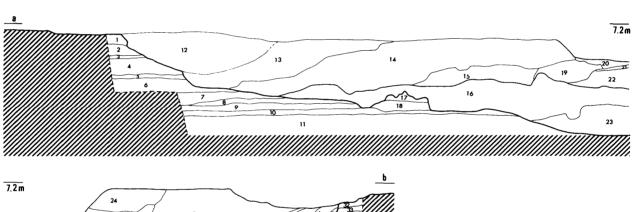
出土遺物 しがらみで使用された杭材は30本以上 出土しているが、比較的遺存状態が良好な17本を図 示した。最長ものでの長さ78cmが遺存している。自 然木の先端を尖らせただけの丸杭(75~83)と他の 部材からの転用杭(84~91)がある。丸杭は、全体 に細く、非常に折れ曲がったものも存在するのに対 し、転用杭は全体に大形のしっかりした材が多い。

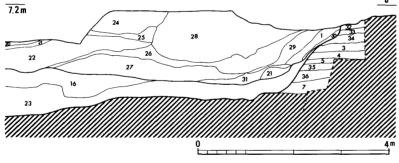
土器・土製品では、壺 (92~99) ・甕 (100~112) ・高杯 (113~115) ・ミニチュア土器 (116) ・手捏 ね土器 (117) ・坏 (120) ・須恵器坏身 (121) ・土 玉 (118) ・土製紡錘車 (119) がある。

弥生時代中期に属する壺には、92~96がある。このうち、92は無文で口頸部が長く、重心を下に置いた土器で、このなかでは最も古い所産であろう。受口口縁壺のうち、94は口縁部に刺突列を施した後、棒状浮文を貼付している。細頸壺(93)は、やや膨らんだ口縁部に3条の凹線文を施し、頸部以下を羽状刺突列・簾状文・横線文で飾り、ソロバン形となる体部最大径のところを波状文で受ける土器である。台付壺(98~99)は弥生時代後期~古墳時代初頭にかけての所産で、口縁部がやや内湾気味になる99のほうが新しい。口縁部の内外を羽状刺突列で飾った97は、古墳時代に入ってからのものであろう。

甕をみると、弥生時代中期の甕では、口縁端部の下側に刻み、口縁内面にヨコハケを施し、外面全体を粗いタテハケの後、外面体上半部に櫛状のヨコハケを施した100~103と、当地域としては比較的珍しい体部にタタキ後タテハケを施したく字形口縁甕(105)が存在する。受口口縁甕(108~111)は、多くが弥生時代後期~古墳時代初頭にかけての所産と思われ、文様で飾った土器と無文のものが見られる。概して、文様をもつ甕のほうが口縁端部を内側へ内傾させている。S字状口縁台付甕形土器(以下、S字甕と略)は本遺構からは出土しておらず、遺構の存続時期が基本的に古墳時代前期でも古いころに埋

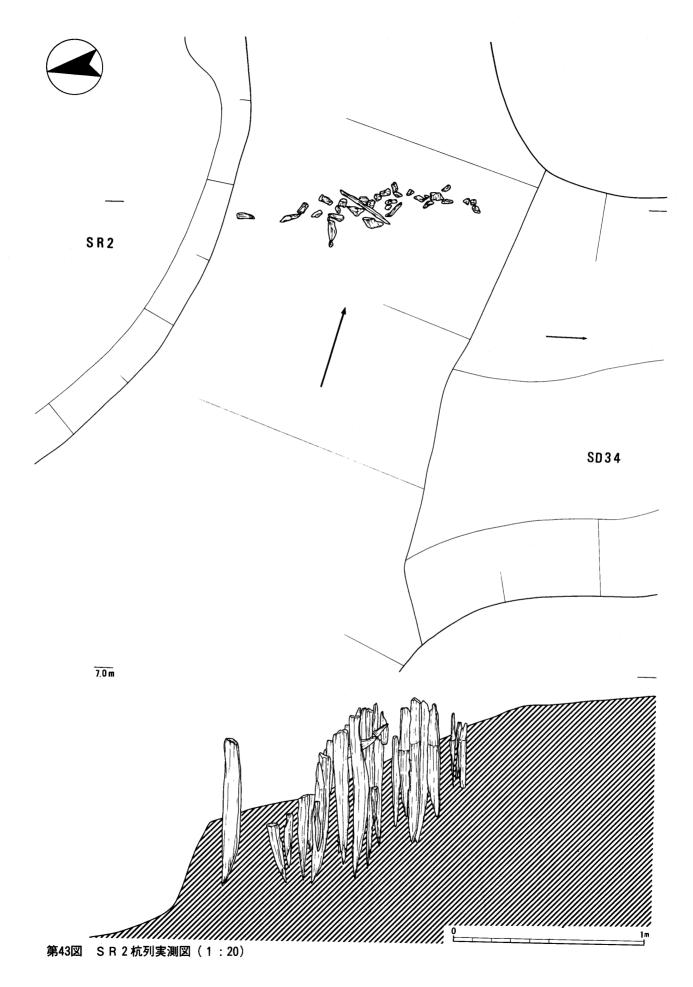






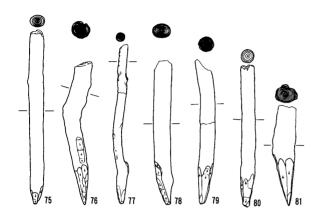
1	黒ボク	13	暗褐色 中細砂 下部に木片多量に混入し粗砂が堆積	25	灰色シルト混じり細砂 炭混入
2	灰色砂混じりシルト	14	暗灰褐色 中細砂 上部ではシルトの混じった細砂に変化 (=グレーディング) 木片混入	26	暗褐色シルト 木片多量混入 細砂がレンズ状に多数混入
3	黒灰色腐蝕質シルト	]		27	狭褐灰色 粗砂 グラニウル混入
4	<b>淡青灰色粘土質</b> シルト	$\vdash$	暗褐色 細砂 木片多量混入	- 28	灰色 細砂 腐蝕物混入
5	暗灰色腐蝕質シルト	16	淡灰褐色の粗砂と暗褐色の腐蝕質シルトの互属	29	灰色 シルト混じり細砂
6	淡褐色シルト混じり細砂	17	暗褐灰色シルト	30	灰色砂質シルト
7	褐色粗砂	18	暗褐色腐蝕質シルトと砂の互層	31	暗褐色の腐蝕質シルトと淡灰色の細砂の互層(砂がレンズ状
8	黒灰色粘土質シルト(=腐蝕質)	H	灰色細砂 木片混入	-	に提入)
9	灰色粘土質シルト 腐蝕物混入	<u> </u>	明褐色砂	-	暗灰色砂質シルト 鉄分混入
10	暗灰色砂混じり粘土質シルト 腐蝕物混入		暗褐色腐蝕質シルト	-	7,100 7, 1, 1,00,10
11	緑灰色砂混じり粘土質シルト 腐蝕物混入	_	淡灰褐色シルト   木片多量混入   細砂がレンズ状に多数混入	34	
12	暗褐色 細砂管シルト席鈴物と木片が多量に混入	23		35	灰色シルト
~	暗褐色 細砂質シルト腐蝕物と木片が多量に混入 南端で粗砂(淡灰褐色)に変化	24	黄褐色 細砂 炭混入	36	灰色シルト混じり細砂

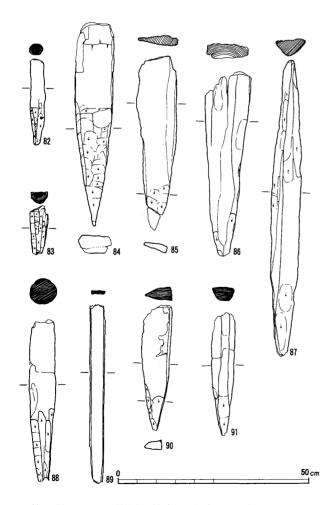
第42図 SR2実測図(遺構図は1:400, 土層図は1:80)



没していたことを明瞭に示している。土製の紡錘車(119)は、薄手で弥生時代の所産であろう。土師器坏(120)と須恵器坏身(121)のみ6世紀初頭前後の所産で時期が明らかに新しく、切り合っている他遺構からの混入品であろう。

なお、図示はしなかったが、本遺構からは植物遺体として「猿の腰掛け」がまとまって出土している。 最も大きいもので最大径20cmである。「猿の腰掛け」





第44図 SR2杭列の杭実測図(1:10)

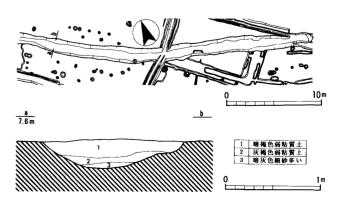
は中国では漢方薬として古くから利用されており、 その関連が注目される。大方のご教示を得たい。

SD4 調査区の北寄りに所在する長さ約42m以上、幅1.5m・深さ50cmの溝で、東西方向にほぼ直線的に延びている。東側は削平が激しく、途切れたかたちになっているが、本来はもう少し東側へも続いていたものと思われる。断面形は、開いたU字形を呈している。弥生時代後期を中心とした比較的まとまった土器が出土している。

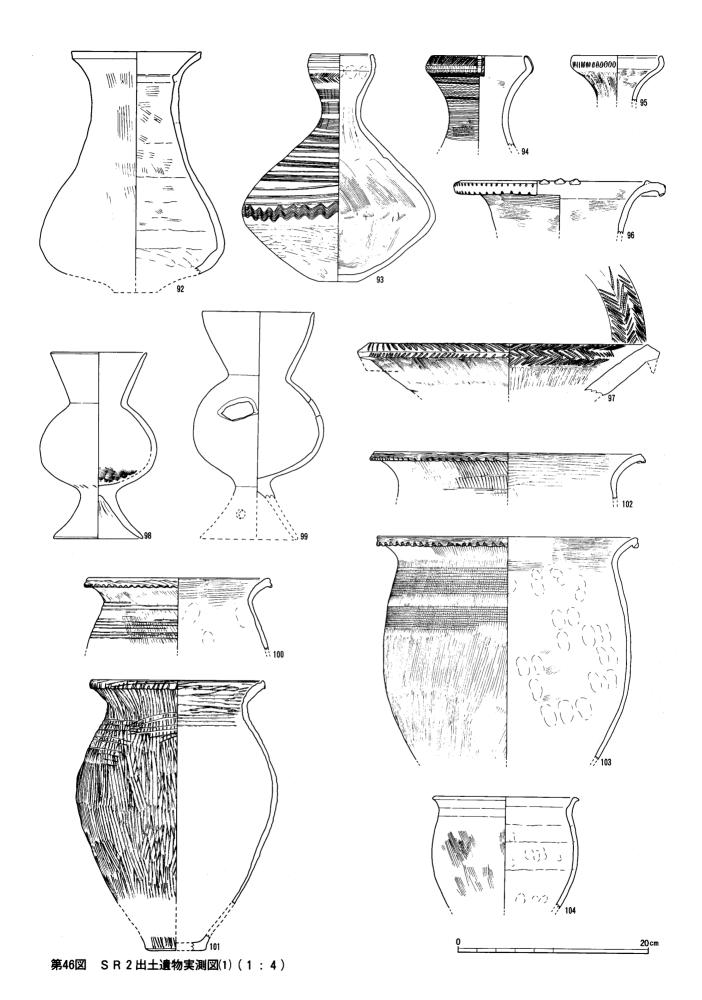
出土遺物 弥生時代中期の土器がごく微量含まれるものの、基本的には後期の土器が中心を占めており、壺(122~141)・甕(142~154)・高杯(155~166)・杯?(167)・器台(168~169)・ミニチュア土器と手捏ね土器(170~181)及び土玉(182~183)がある。壺は、広口壺を主体として台付壺や無頸壺が存在する。130は口縁部を欠損するが、頸部がよく締まり、やや長くなりそうな形態で、古相を残し、中期に遡るものであろう。後期の広口壺の口縁部形態には、端部を屈曲もしくは貼り付けによって口縁部を垂下させたり(122~124)、やや面をもったり(125~127)、受口状を呈したりする(128~129)などバリエーションが多い。台付壺の脚台部は、いずれも裾広がりを呈している。また、比較的小形の広口壺139の胴部下部には穿孔が見られる。

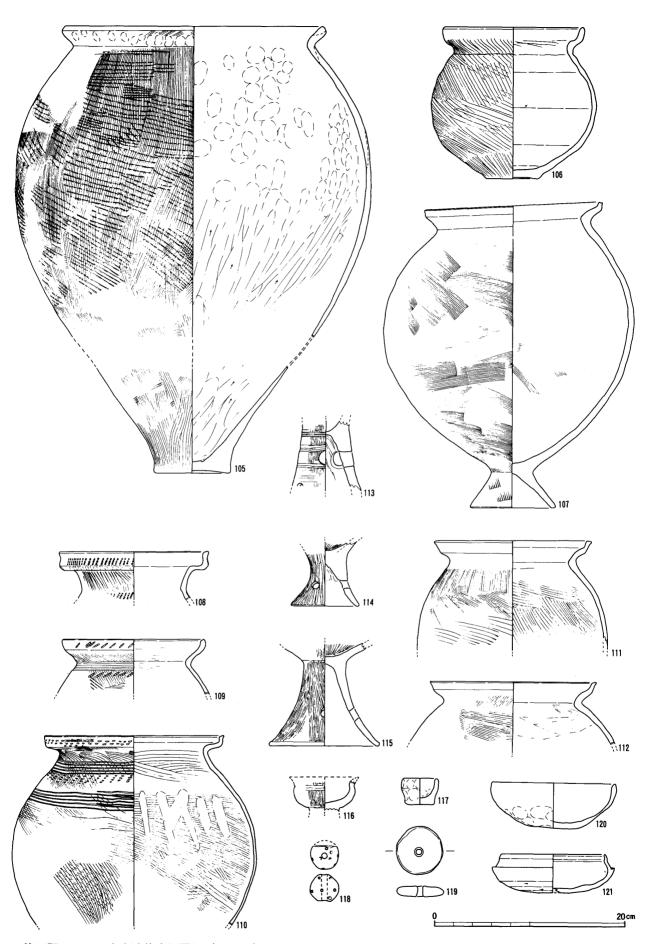
甕は、通有のく字形口縁蹇と受口甕が数量的に相 半ばする状況である。144は、頸部に刻み列を有する く字形口縁甕で、小さな脚台をもっている。受口甕 のうち、153と154は、口縁端部を外側へややつまみ 出す形態を取っている。

高杯は、脚部の形態がいずれも裾広がりを呈する もので、内湾する欠山式的な個体は見られない。

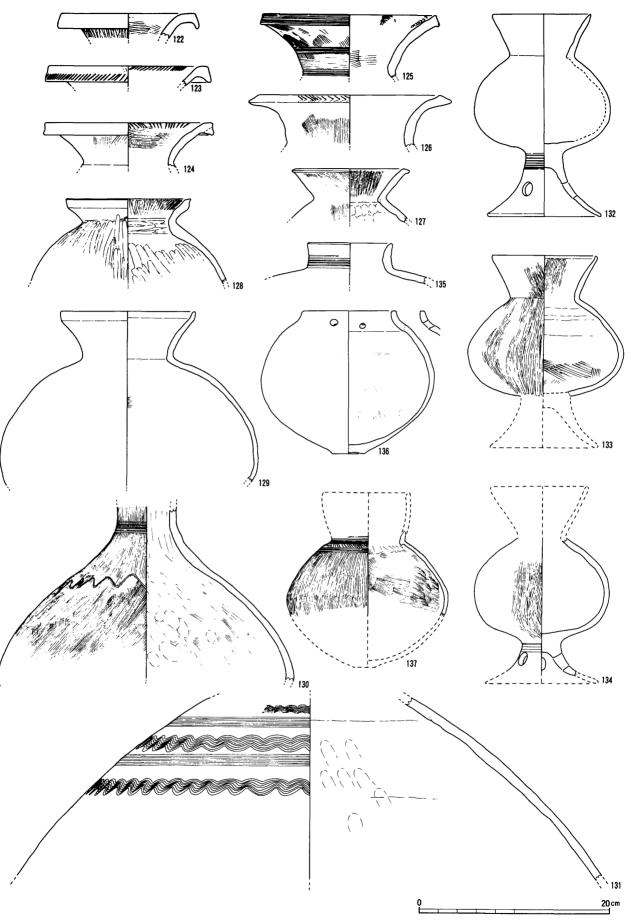


第45図 SD4実測図(遺構図は1:100,土層図は1:40)

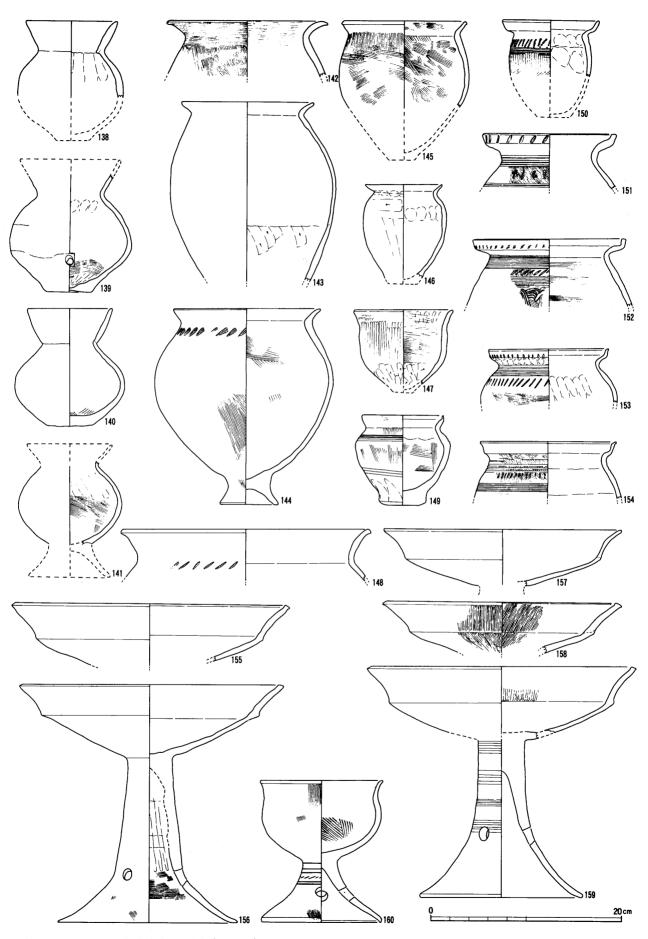




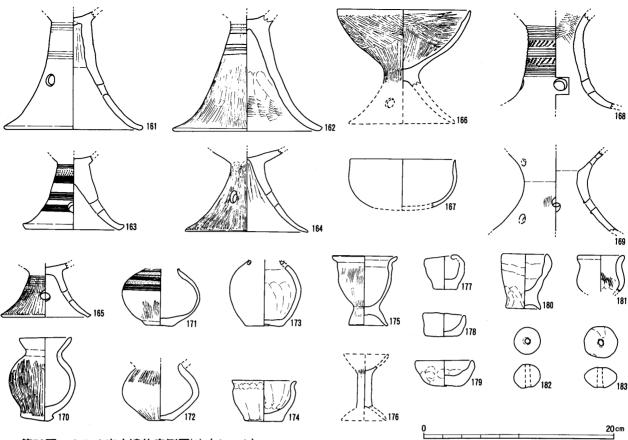
第47図 SR2出土遺物実測図(2)(1:4)



第48図 SD4出土遺物実測図(1)(1:4)

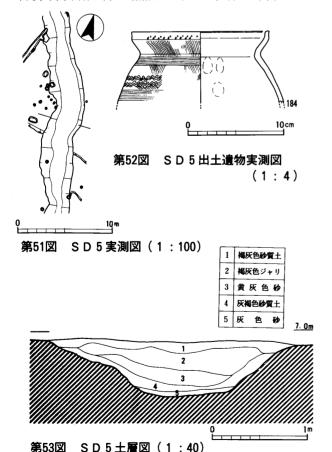


第49図 SD4出土遺物実測図(2)(1:4)



第50図 SD4出土遺物実測図(3)(1:4)

177~181は手捏ね土器である。手捏ね土器は通常、 古墳時代中期以降に増加してくるが、弥生時代でも



ないわけではなく、本例もそれに相当する。

SD5 調査区の北東側を、北から南に直線的に流れる溝で、北側が削平のため不明であるが、長さ約26m以上、幅2m弱、深さ60cmを測る。遺物は、ほとんど含んでおらず、確証はないが、遺構配置等から類推すると、旧河道SR3から取水された農業用水を通すための溝であった可能性も考えられる。土層観察からは、自然に埋没していったものと判断される。

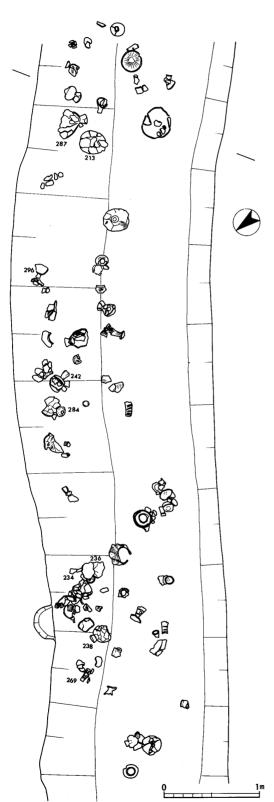
出土遺物 出土遺物は少なく、しかも細片が多いため、甕1点(184)を図示しえたのみである。口縁部端部に面をもってやや内傾する受口甕である。弥生時代後期でも若干古いものであろう。

SD19 旧河道SR2を切って流れる幅2.1m×長さ58m以上、深さ95cmを測る溝である。西から東へ向かって流れており、調査区の東西セクションでの比高差は cmである。小規模な溝ながら、埋没時に多数の土器が溝に投棄されており、埋没自体は短期間で終了したようである。弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器群が出土している。

遺物出土状況 土器類は、とくに一括して投棄されたような土器溜も認められず、溝一面から広く出土する。しかし、多くの土器が溝の検出面直下に存

7.4 m





第54図 S D 19遺物出土状況図(1:40)

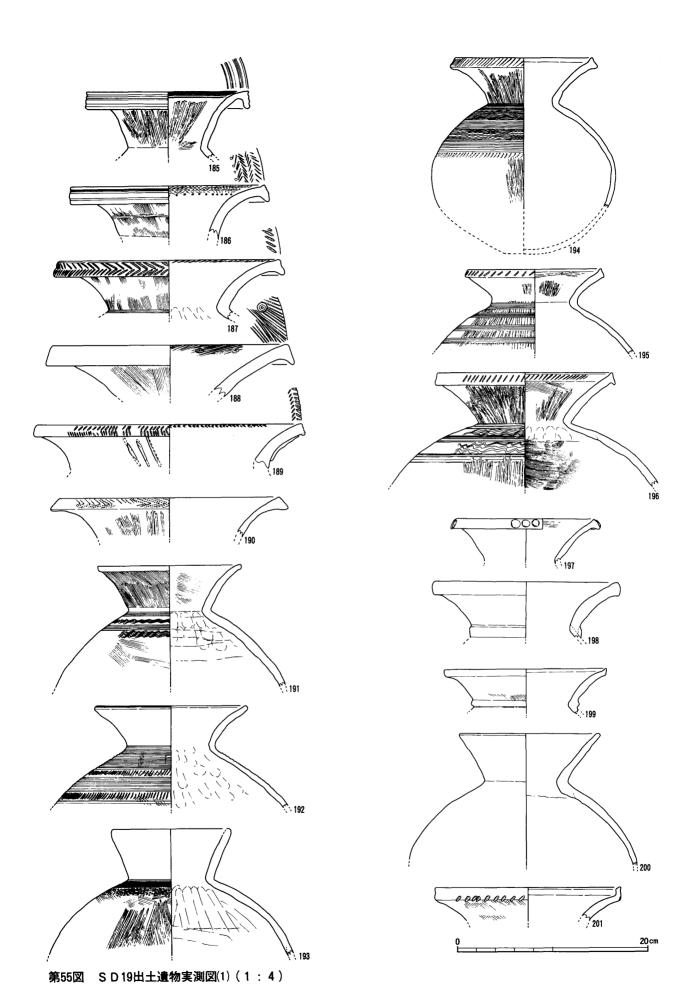
在しており、溝埋没の最終段階で投棄されたようで ある。

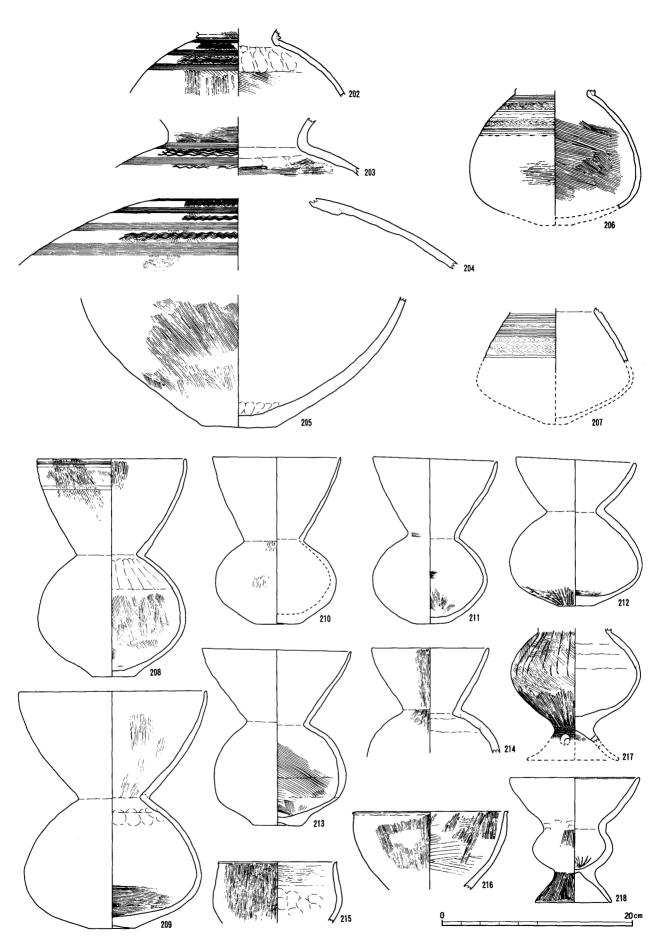
出土遺物 広口壺では、口縁をみると、口縁内面 に文様の施文を有する垂下口縁の土器(185~188)・ 内面に文様はもつものの口縁端部は面取り後の施文 のみで終わる土器(189)・口縁部を三角形状に肥厚 する土器(190)・口縁端部を上下もしくは上方に拡 張してそこに文様をもつ土器(194~197)・拡張は するものの文様は施文しない土器(198~199)・口 縁端部が丸く終わる土器(191~193・200)・受口口 縁をもつ土器 (261) がある。内湾壺 (206~217) で は、口縁から底部まで残っているものをみると、口 縁径と体部径がほぼ同じか口縁径のほうが大きいも のが多い。胴部しか残ってないが、206と207は貝殻 腹縁による刺突文が胴上部に存在する。小形の器種 では、218は台付小型内湾壺で、伊勢地域としてはな いこともないが珍しい器種である。また、小形広口 壺227の胴部下部には、焼成後穿孔が加えられている。 甕は、く字形口縁甕と受口甕とが相半ばする状況で ある。ともに、脚台を持つ例がある。S状口縁台付 甕形土器(以下、S字甕)は含まれない。く字形口 縁甕のなかに、内面をヘラケズリするもの(240や241 など)が少量見られる。受口甕の口縁形態には、223 のように口縁部が短く立ち上がるものや、244~245 のように口縁部が全体にやや内傾するもの、ほぼ直 角に屈曲して立ち上がるもの、あまり屈曲せず全体 に緩やかに丸みを帯びつつ立ち上がるものなどバリ エーション豊富である。

高杯は、坏部・脚部ともに外反する弥生後期型のものから、坏部・脚部が内湾する欠山式のものがあるが、欠山式のものは脚部が長く延びるものが中心で、292~294が若干短い程度である。297~305は、外反する短い脚部に椀状の坏部を載せるものである。手焙り型土器(310~312)は、体部下部に突帯を巡らした受口状口縁鉢を基本形として、口縁部内面に半ドーム状の覆いを付加した形態である。

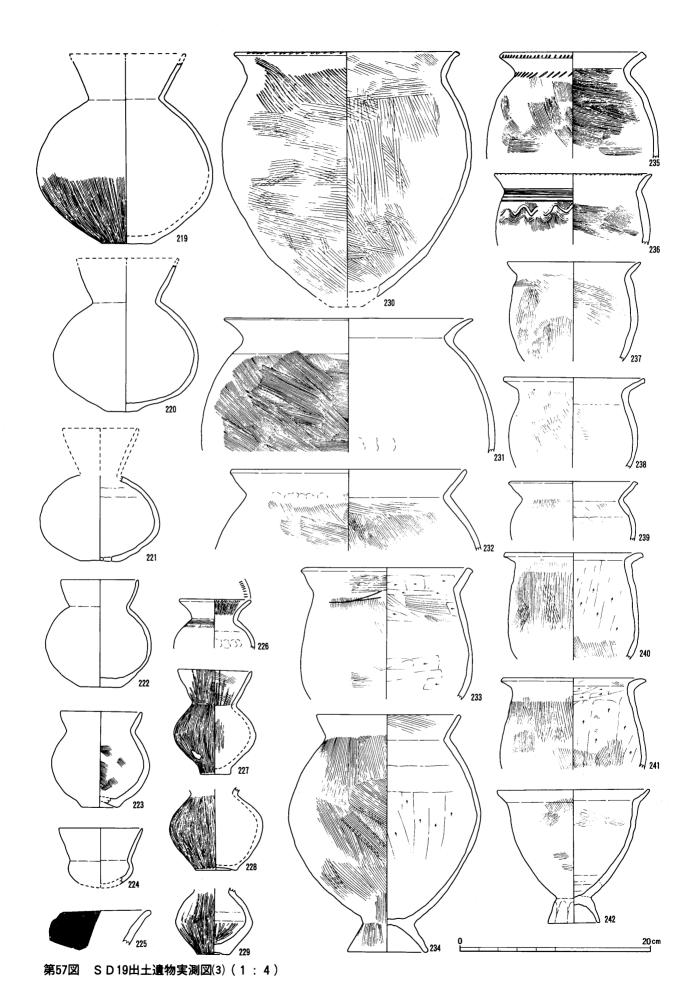
313は、逆U字形の把手を口縁部に付けた鉢もしく は甑的な土器である。

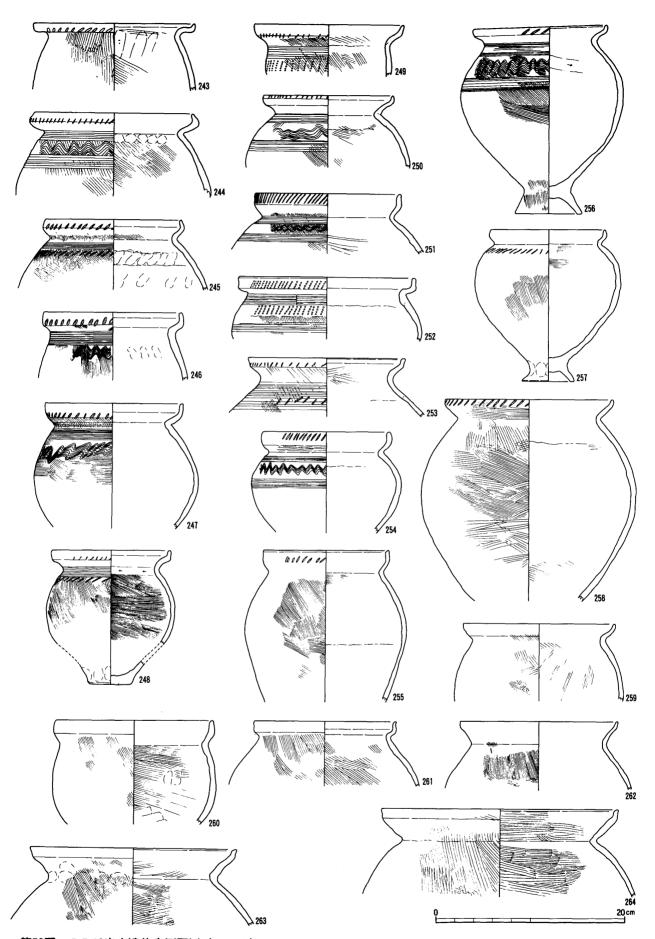
315~322は、小さいながらもどれもハケ調整が施されており、手捏ね土器ではなく、ミニチュア土器の範疇に入るものであろう。



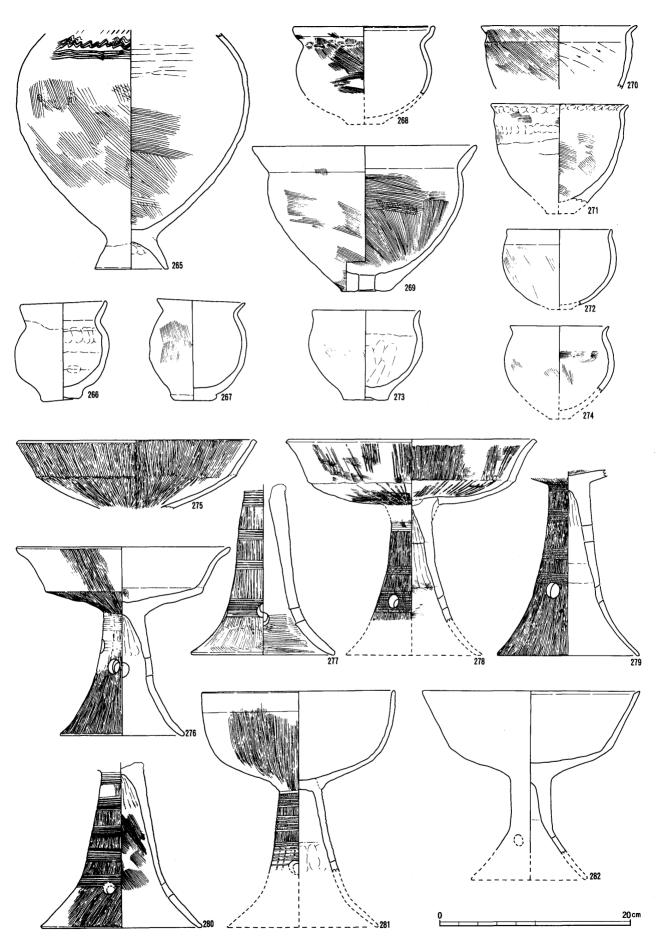


第56図 S D 19出土遺物実測図(2)(1:4)

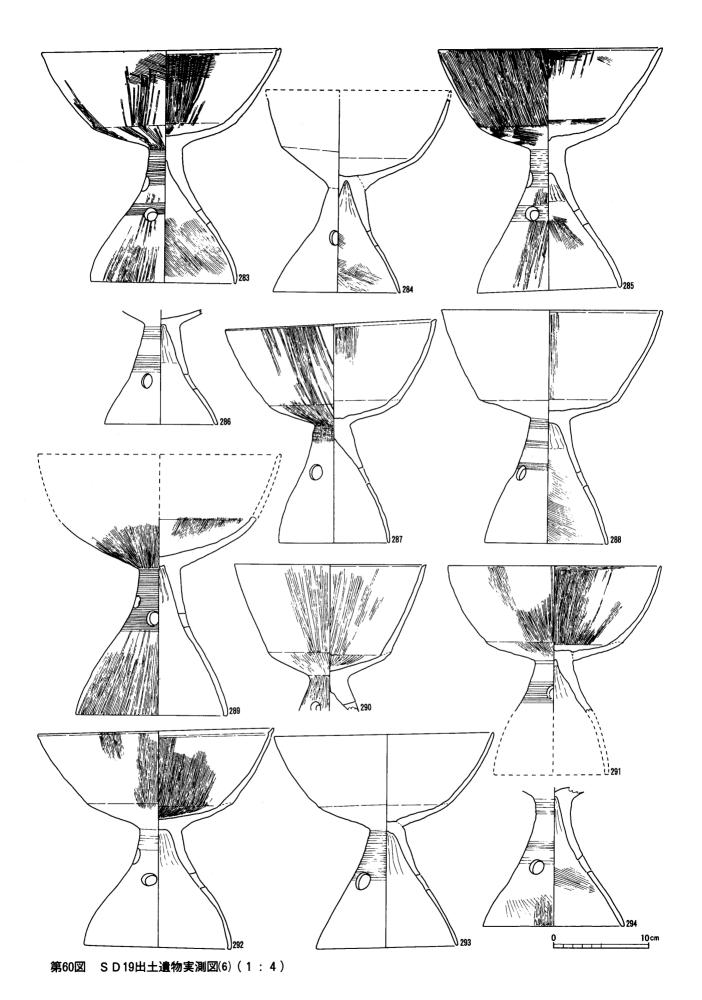


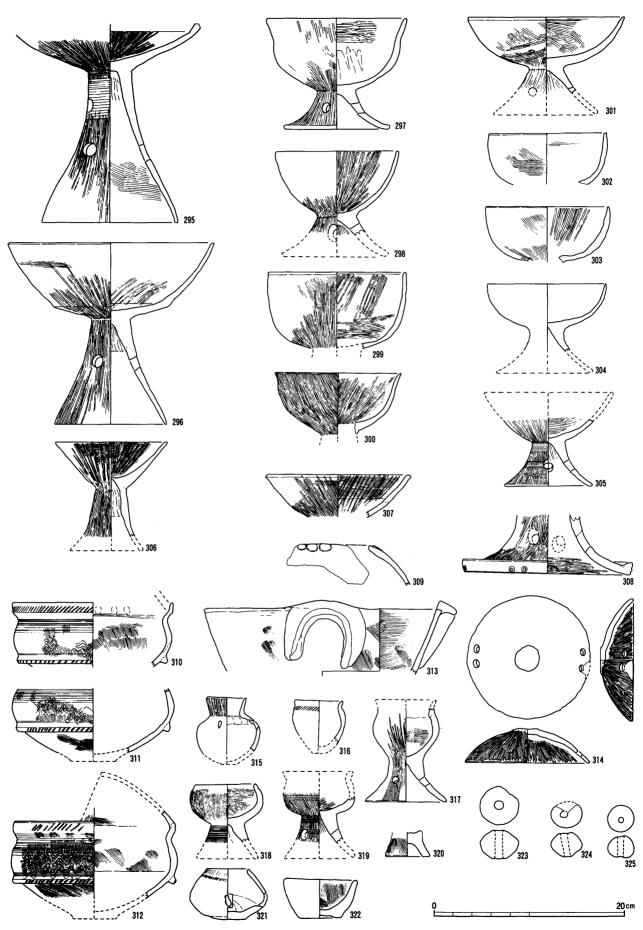


第58図 S D 19出土遺物実測図(4)(1:4)



第59図 S D 19出土遺物実測図(5)(1:4)





第61図 S D 19出土遺物実測図(7)(1:4)

その他、器台や蓋、土玉等も出土している。甕に S字甕を含まず、高杯も脚部の短くなった時期の欠 山式の高杯も含んでいないことから、全体として、 弥生時代後期から古墳時代初頭でも欠山式の後葉を 含まない時期と判断してよかろう。

SR3 調査区の北端に所在する弥生時代中期から古墳時代後期まで存続する旧河道で、出土遺物量は橋垣内遺跡全調査区中、最多である。調査区のすぐ北側には毛無川の現在の流路が存在していため、調査区は制約されたものとなっている。毛無川の旧河道であろう。

毛無川同様に西から東に流れており、幅約10m、深さ約2メートルを測る。埋土はかなり砂が多く、ある程度の水量はあったのであろう。

調査段階では、SR3は3条の旧河道の重複とし て「旧河道1~3」として分けて土器取り上げがな され、概報Ⅲでもそのように扱われている。確かに 土層の観察では、旧河道は埋没しかけては新たな流 路に切られているようにも見えるが、埋没しつつあっ た旧河道に再び掘削を加えたという可能性も考えら れ、流路の切り合いと考えた場合でも、最低5回程 度の重複が考えられる。取り上げられた土器を見て も、最も新しいとされる旧河道3では確かに新しい 土器の出土が多いものの、弥生中期に遡る土器の存 在もあってかなり混乱しており、旧河道間の出土土 器に時期的な断絶があまり認められず、継続する状 況にある。現時点では3本の流路の重複関係と結論 づけることはやや無理があり、将来的にSR3の上 流もしくは下流部が調査され、河道の重複関係が明 瞭になるまで結論を留保しておく。

従って、本報告では、概報の「旧河道1~3」は 基本的にひとつ遺構での上下関係として取り敢えず 理解し、旧河道SR3というひとつの遺構内におけ る変遷として扱うこととする。

なお、平成4年度に都市計画道豊里・久居線道路 改良事業に伴って発掘調査された橋垣内遺跡(県道 橋垣内)のB地区「ミゾ 」は、SR3とは同じ溝 でその上流部分に相当する可能性が高い。

遺物出土状況 概報Ⅲでは、SR3には「土器溜A」・「土器溜B」というふたつの土器溜の存在が 指摘されたが、このうち「土器溜A」は土器溜とい うには遺物の一括性や集中度に乏しく、また時期の 異なる堆積を平面的に同一で扱っており、同時代性 が認定できない。従って、発掘調査の取り上げであ る程度の一括性が認定できるものは概報のいう「土 器溜B」のみである。Aは土器溜としては存在しな いから、以後は概報の「土器溜B」を、単にSR3 「土器溜」と呼称する。

土器溜は、旧河道の右岸斜面に肩部から一括して 投げ込まれたような状況を呈している。断面図では 土器が「浮いた」状況となっているが、これは土器 が投げ込まれた時期には旧河道がここまで埋没して いたことを示している。遺物組成としては、甕が中 心で、そこに高杯が付随する。

土器溜以外には、特に際立った出土状況を示すものはなく、旧河道全体から多量の遺物が出土している。

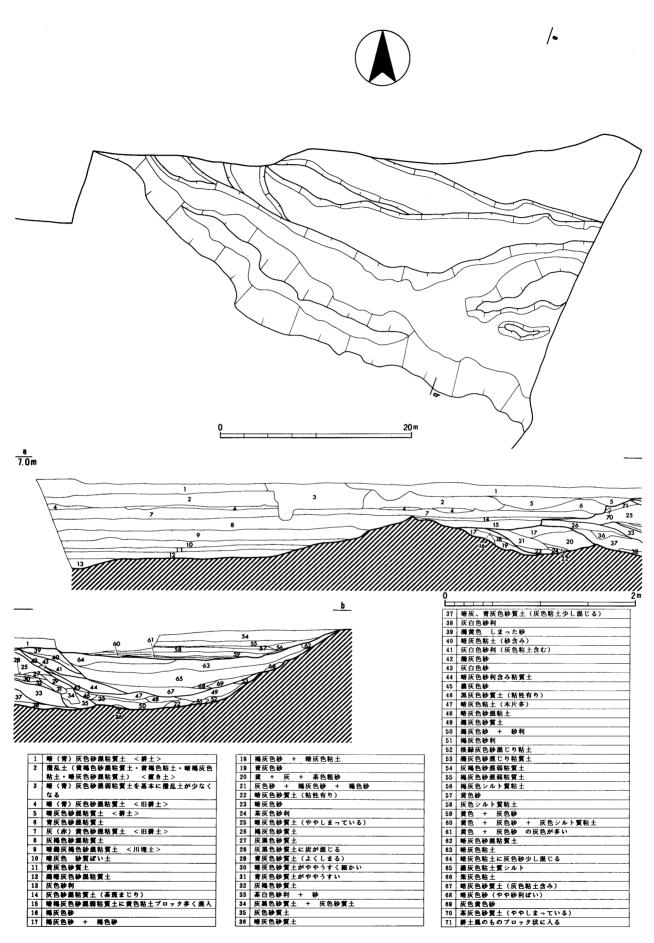
出土遺物 発掘時の状況が、調査区端の狭いところでの調査であったことや、毛無川現流域の出水の激しい部分であったことから、土器をうまく層位的に取り上げることは残念ながらできておらず、遺物の取り上げはかなり混乱した状況である。そうした中、概報の「旧河道1・2・3」は、一応1が古く3が新しいという層位所見があり、実際に土器を見ても概報の「旧河道3」には古い土器が混入しつも全体としては新しいものが中心である、ということがいえる。従って遺物の記述にあたっては、かなりの混乱も認められるものの、「概報旧河道1」をSR3下層、「概報旧河道2」をSR3中層、「概報旧河道3」をSR3上層として扱う。なお、「土器溜」はこのうちの上層に伴っている。

#### 下層出土遺物 (326~330)

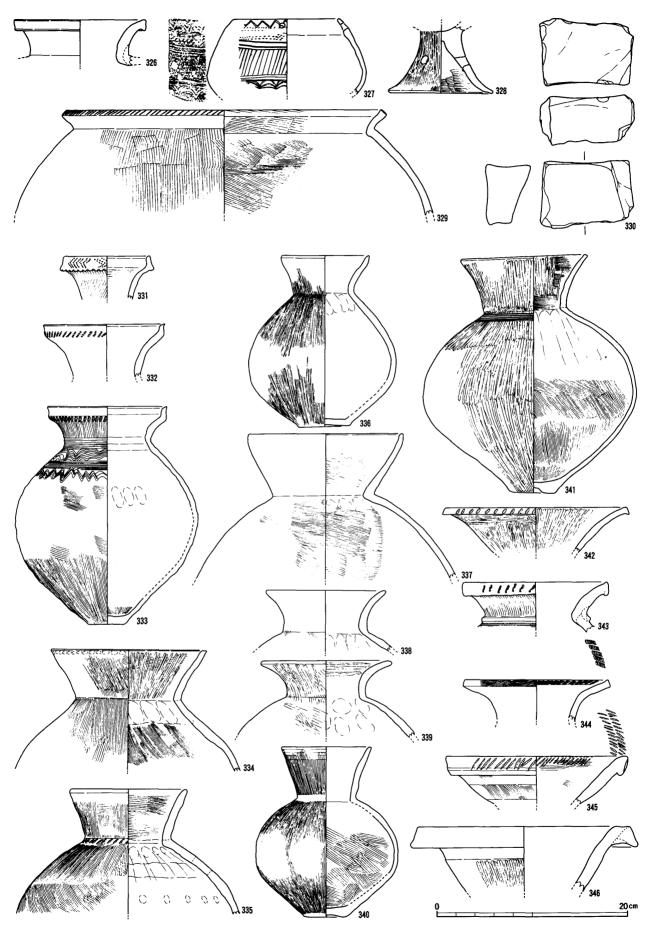
出土遺物は少なく、土器と砥石を図示しえたのみである。無頸壺(327)は、全面を波状門や列点文、斜線文等で飾る土器で、中期的な様相を残すが、壺(326)は明らかに後期の広口壺である。中期後葉から後期に比定されようか。

#### 中層出土遺物 (331~417)

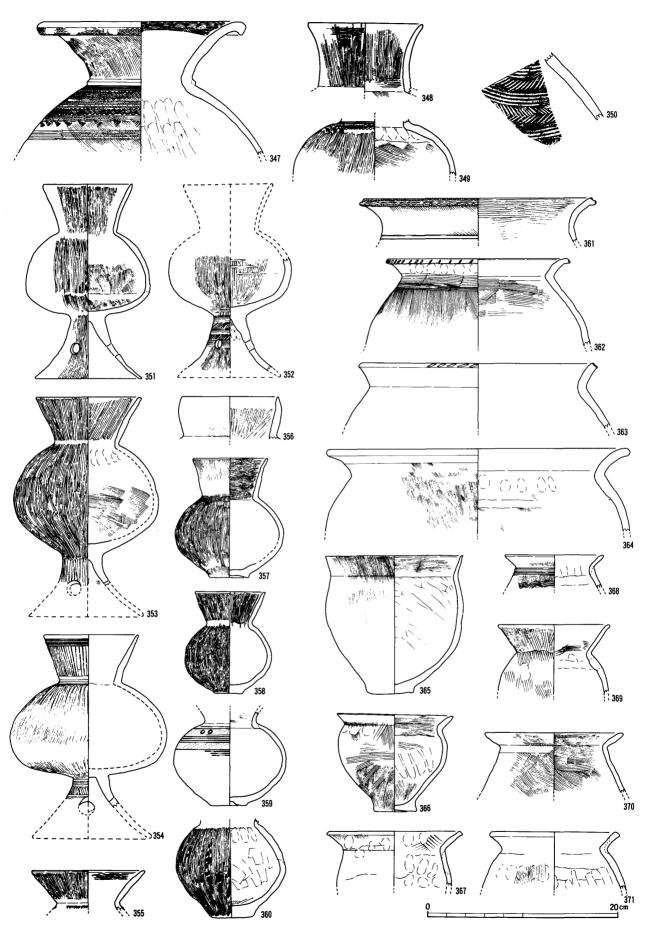
受口壺(331)やく字形甕(361)のように中期に 属するかと思われる個体もごく微量存在するものの、 基本的に弥生時代後期の山中式からから、欠山式期 でも二分した場合の前半期までの所産で、S字甕は



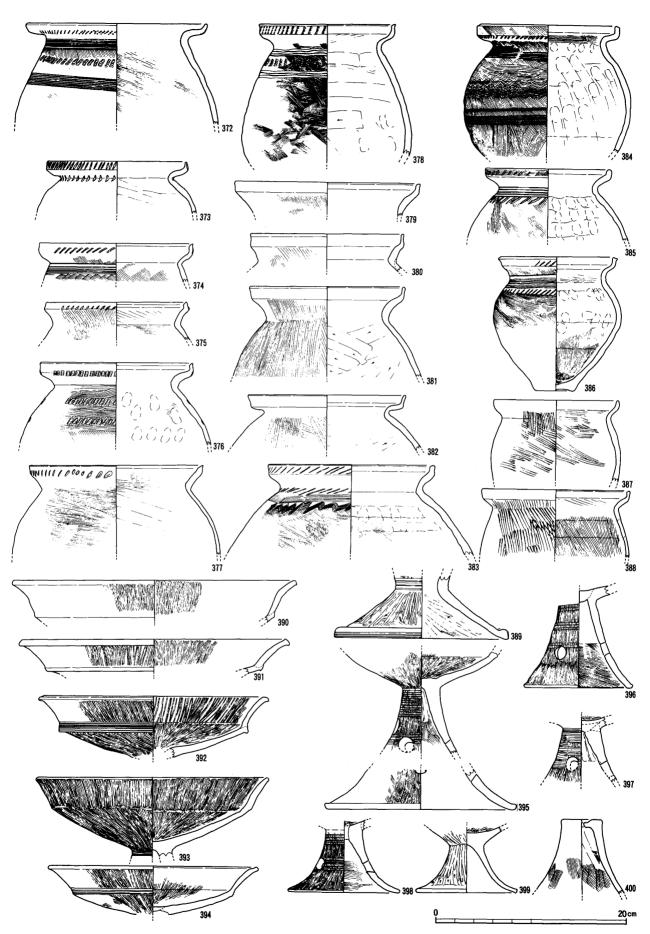
第62図 SR3実測図(遺構図は1:400, 土層図は1:80)



第63図 SR3下層・中層出土遺物実測図(1:4)



第64図 SR3中層出土遺物実測図・拓影図(1)(1:4)



第65図 SR3中層出土遺物実測図(2)(1:4)

含まれていない。壺(331~360)・甕(361~388)・器台(389・409)・高杯(390~408)・ミニチュア土器(410~415)及び土玉(416~417)があるが、高杯のうち405と406は脚部が付かず、坏の可能性もある。台付壺(351~354)はいずれも口縁部と脚台部がともに外反するものである。357~360は小型の精製土器である。ミニチュア土器のうち、410から414はいずれも蹇をミニチュア化したものであるが、高杯ミニチュア化の415に比べ粗製で、手捏ね土器様である。

#### 土器溜出土遺物(418~442)

土器溜の土器組成は、甕と高杯を中心として少量の壺とミニチュア土器が伴う。甕は、く字形口縁甕(419~423)と受口甕(424~430・432)・S字甕(431)がある。このうち受口甕は、ほとんどの個体が肩部の文様を消失し、無文化したもので、脚台の付くものも存在する。S字甕は、口縁部に列点列を施して頸部直下にハケ状具による横線文様を施したもので、S字甕としては最も古い形態のものである。高杯の脚部はいずれも短くいが、内湾するものから直線的なもの、外反するものまでバリエーションは存在しているが、欠山式新から元屋敷式期にかけて

の一括資料とみてよいであろう。

#### 土器溜以外の上層出土遺物(木製品を除く)

次ぎに土器溜以外のSR3の土器について見てみよう。ここでは、土器以外にも、農具等の木製遺物や、金環、有孔円板等も出土した。

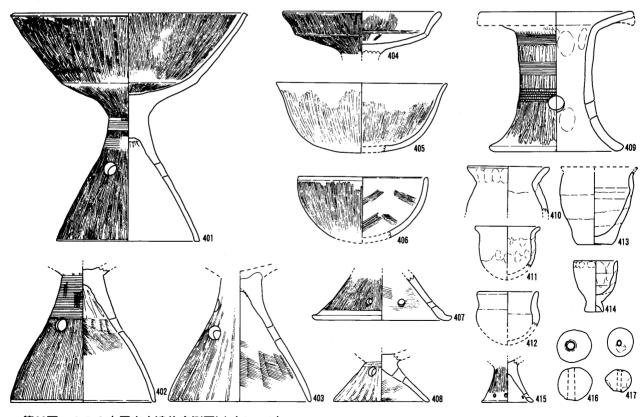
土器では、弥生次代中期の鉢(443)や壺(444) も含むものの、全体としては弥生時代後期以降古墳 時代の土器が中心で、そのなかでも量的中心は元屋 敷期以降のものである。以下、特徴的な遺物を中心 に見ていこう。

壺のうち、459~464は、程度の差こそあれ、口縁部外面に面をもち、端部をつまみ上げ、受口状を呈する。なかでも、464は受口口縁であるが、甕か壺かの峻別は難しい個体である。

481は、壺の体部と思われるが、胴部中央に焼成前 穿孔が行われている。残存状況から、土器中央部を 一周覆うかたちで幾つかの穿孔が施されていたのだ ろう。

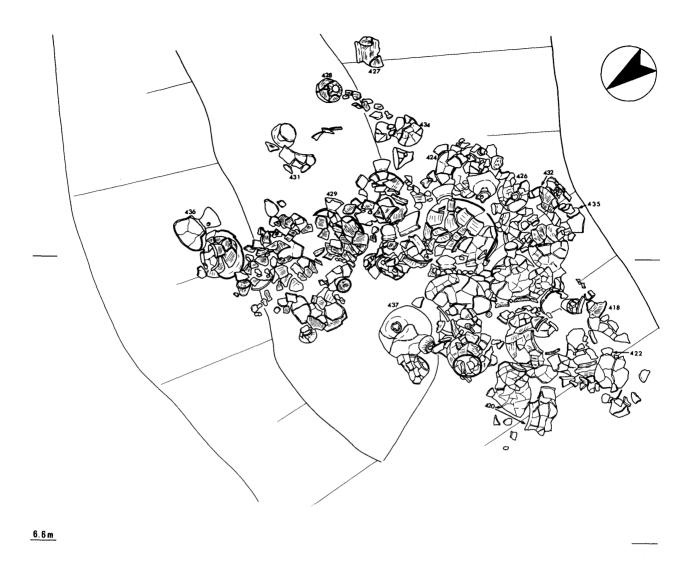
内湾口縁の壺のうち、479~480はいわゆる「瓠壺」で、特に480は貝殻腹縁による刻み列があり、古墳時代に入る個体である。

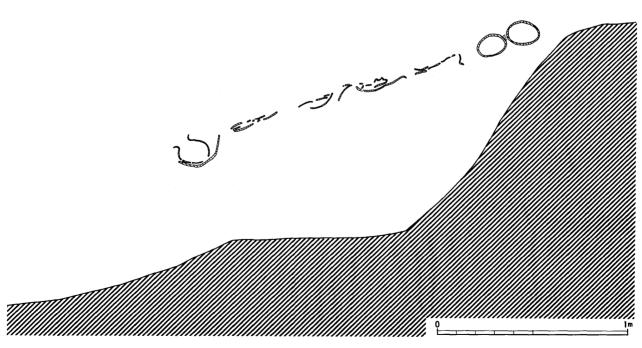
弥生時代後期から古墳時代初頭に時期的な主体を置



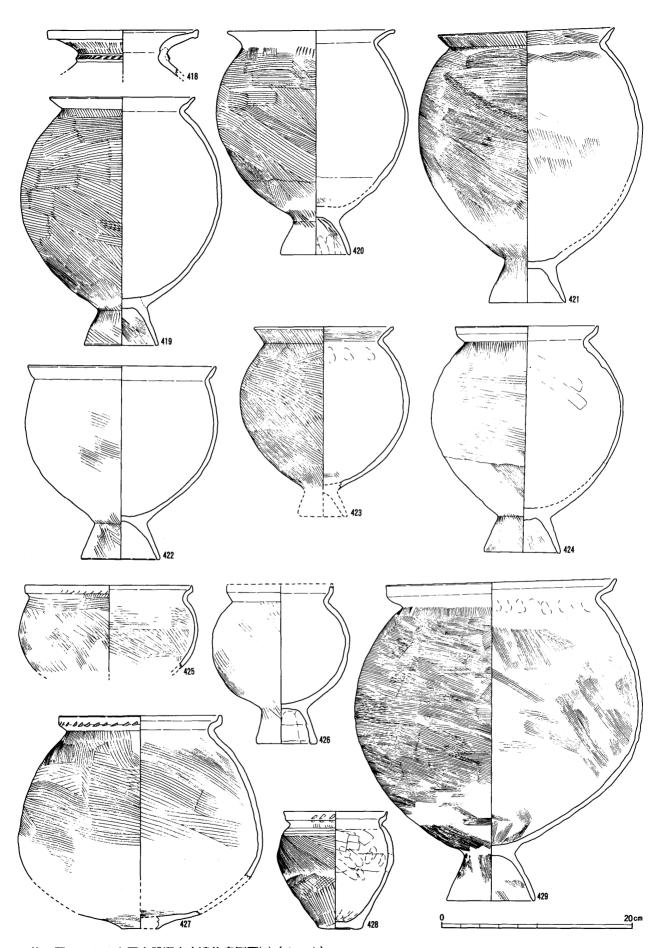
第66図 SR3中層出土遺物実測図(3)(1:4)

0 20cm

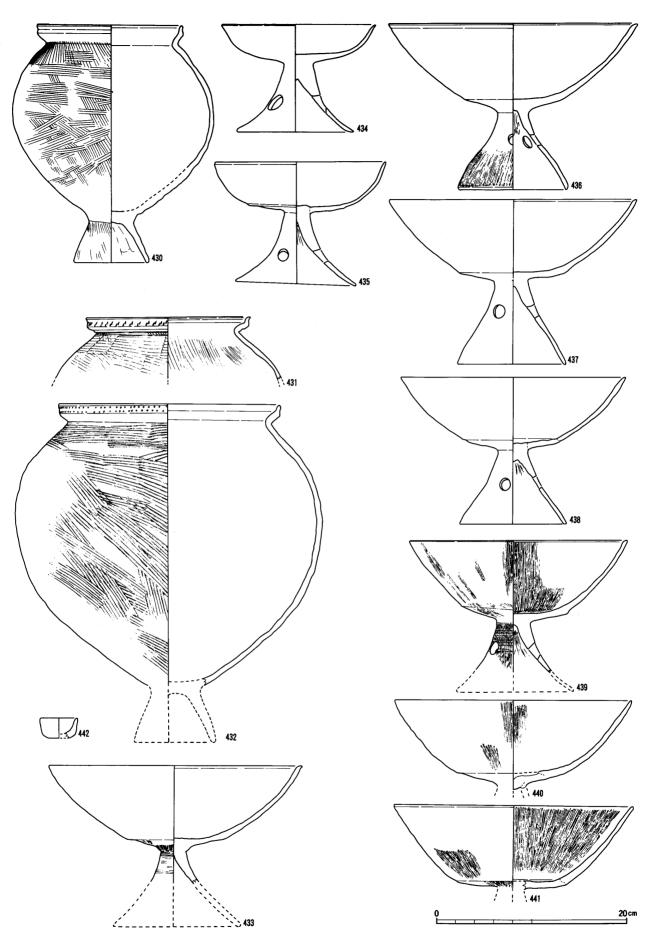




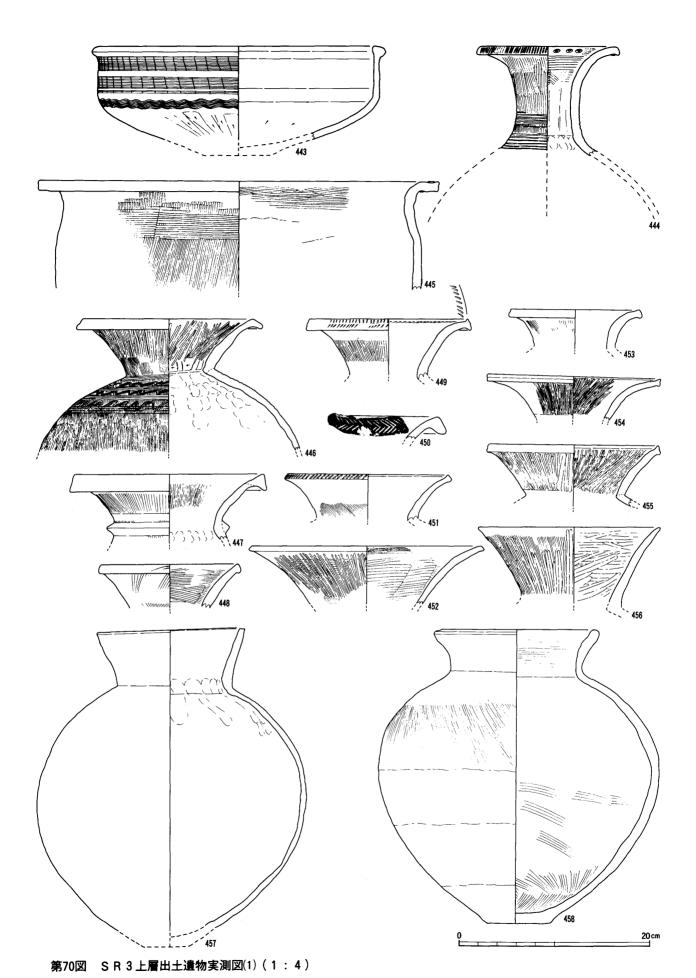
第67図 SR3上層土器溜実測図(1:20)

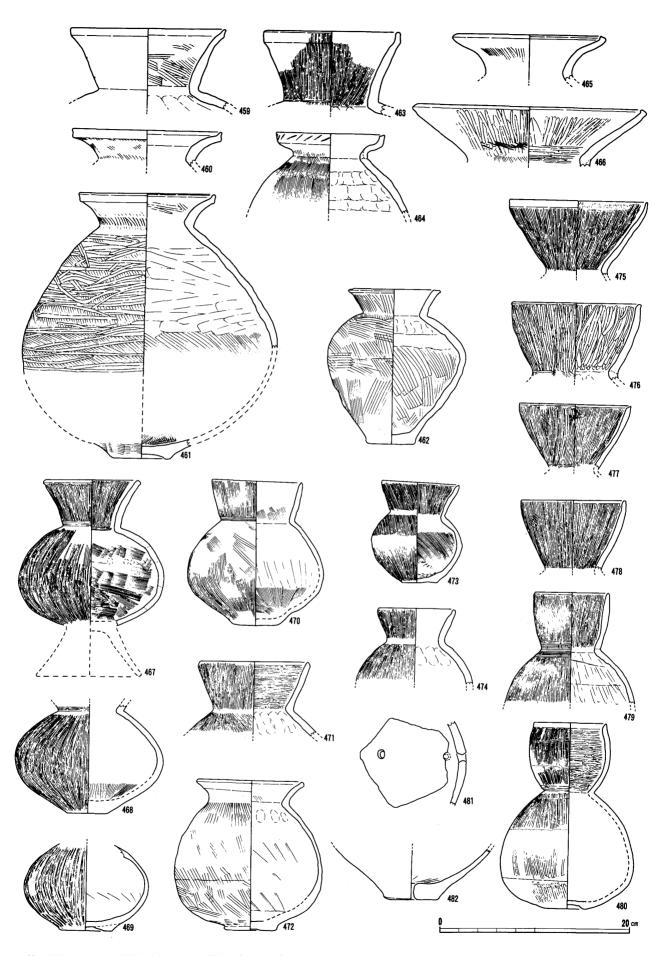


第68図 SR3上層土器溜出土遺物実測図(1)(1:4)

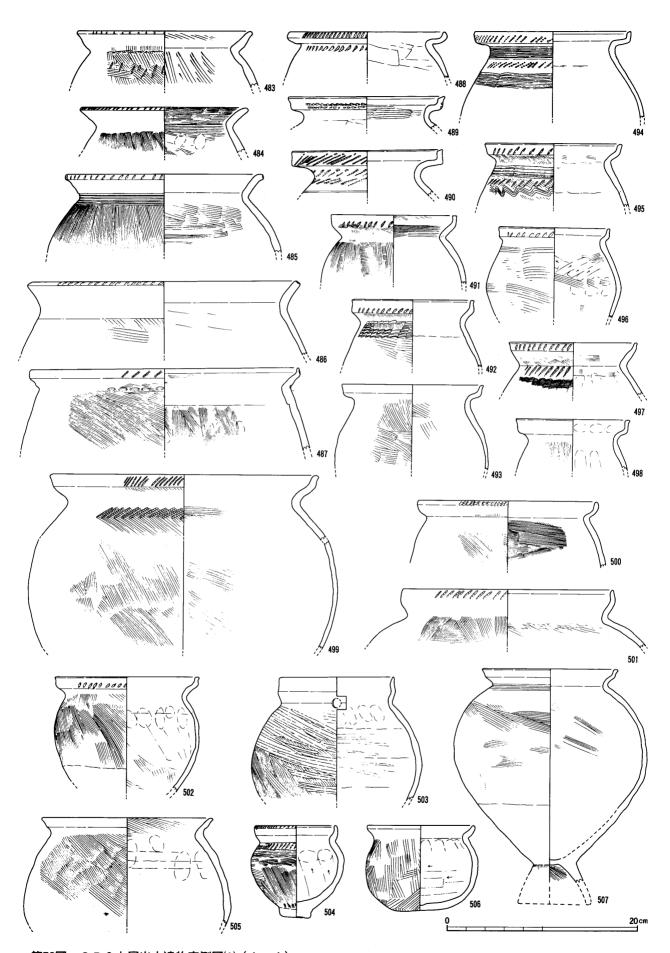


第69図 SR3上層土器溜出土遺物実測図(2)(1:4)

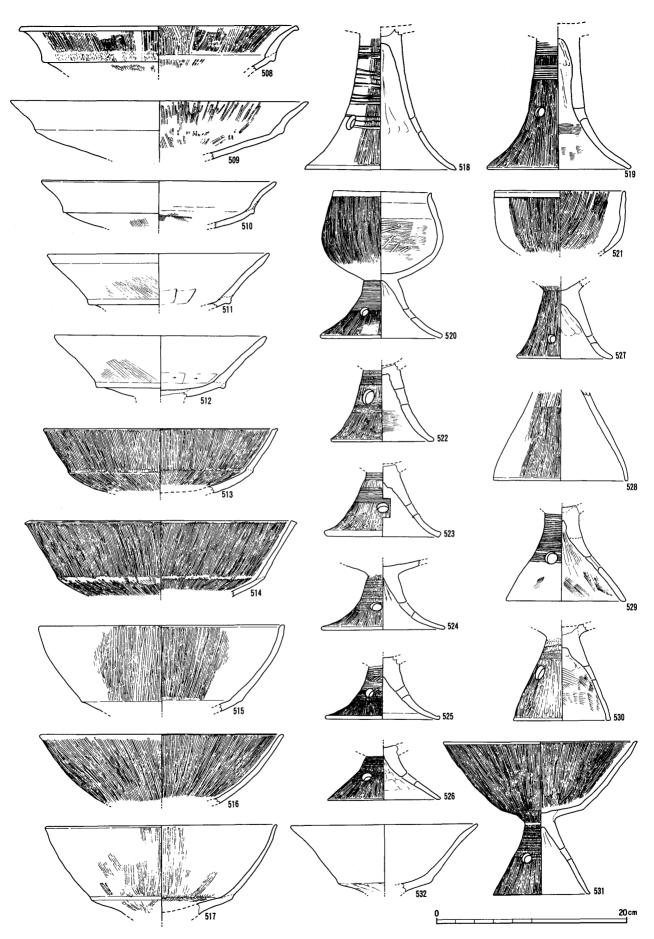




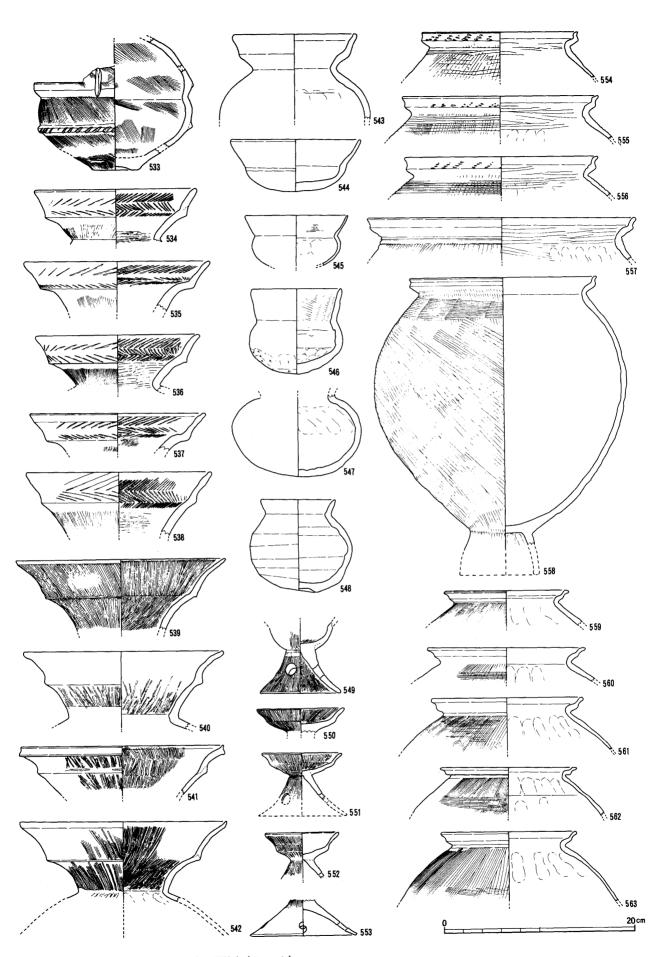
第71図 SR3上層出土遺物実測図(2)(1:4)



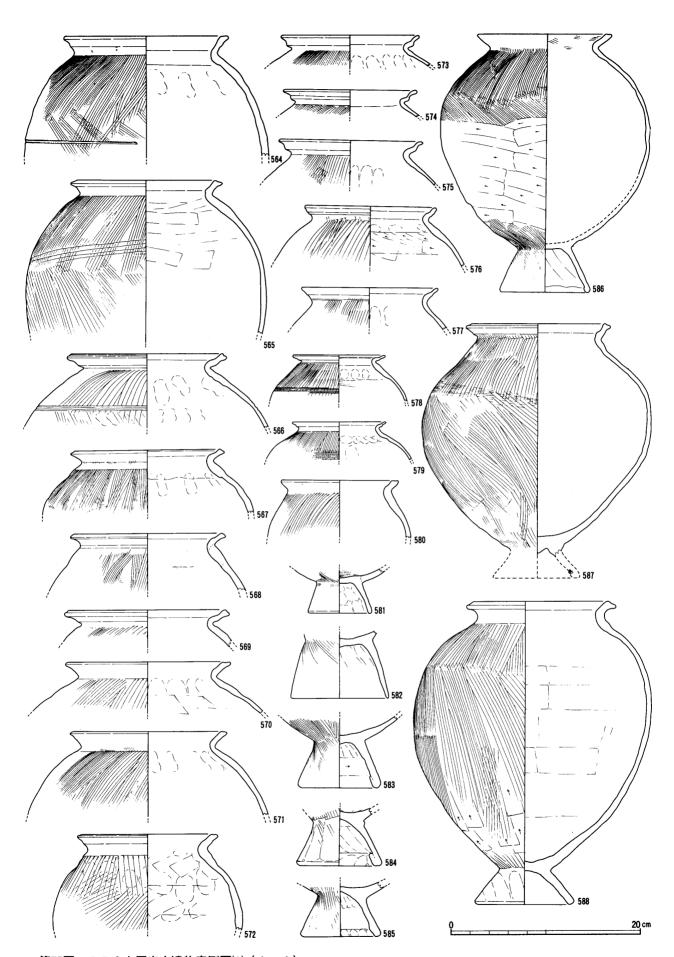
第72図 SR3上層出土遺物実測図(3)(1:4)



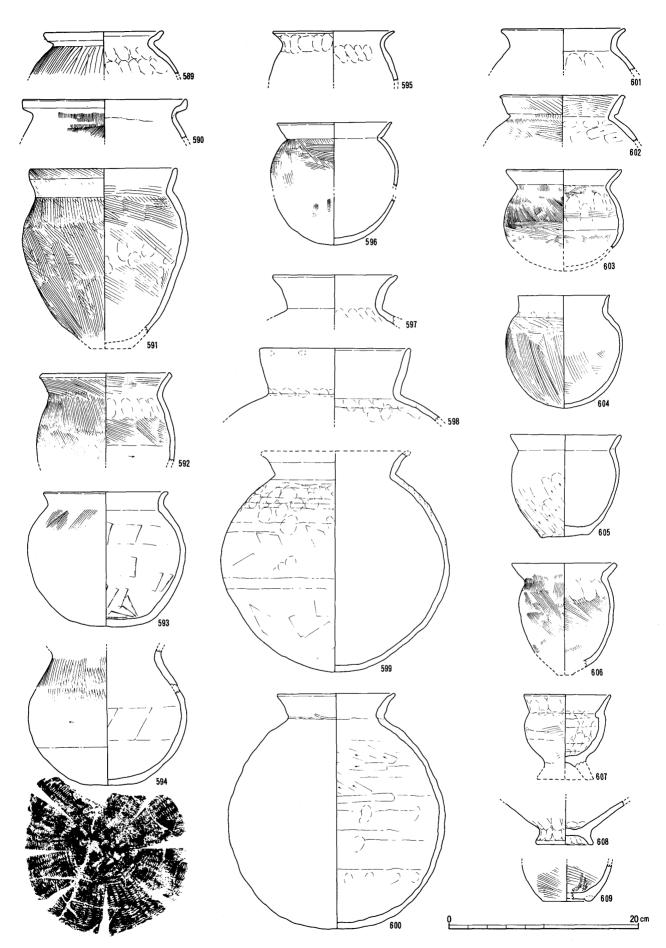
第73図 SR3上層出土遺物実測図(4)(1:4)



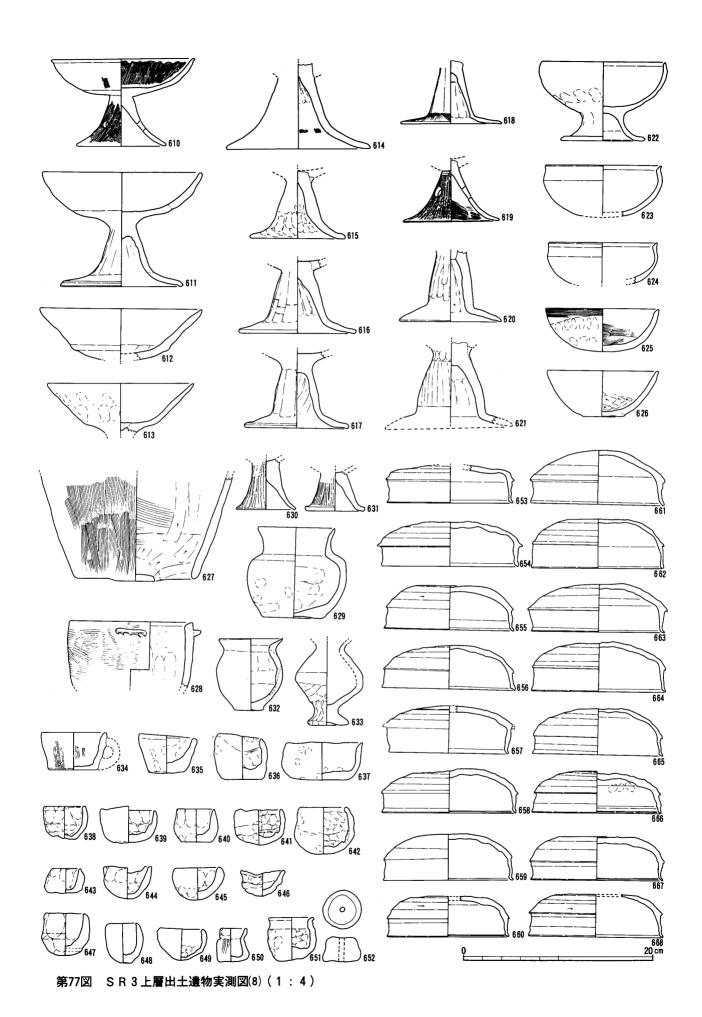
第74図 SR3上層出土遺物実測図(5)(1:4)



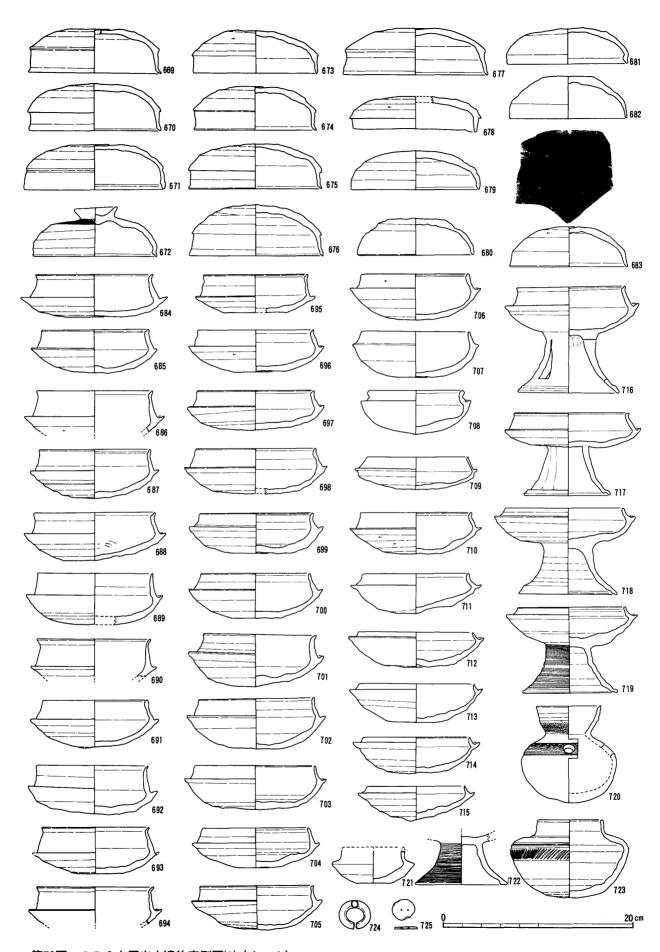
第75図 SR3上層出土遺物実測図(6)(1:4)



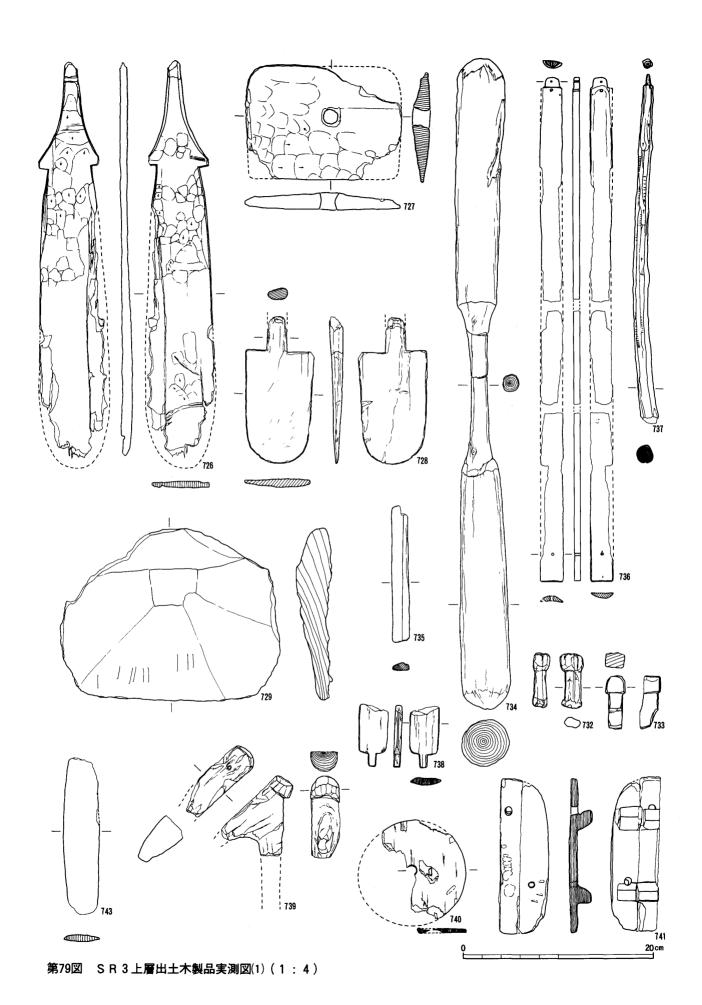
第76図 SR3上層出土遺物実測図(7)(1:4)

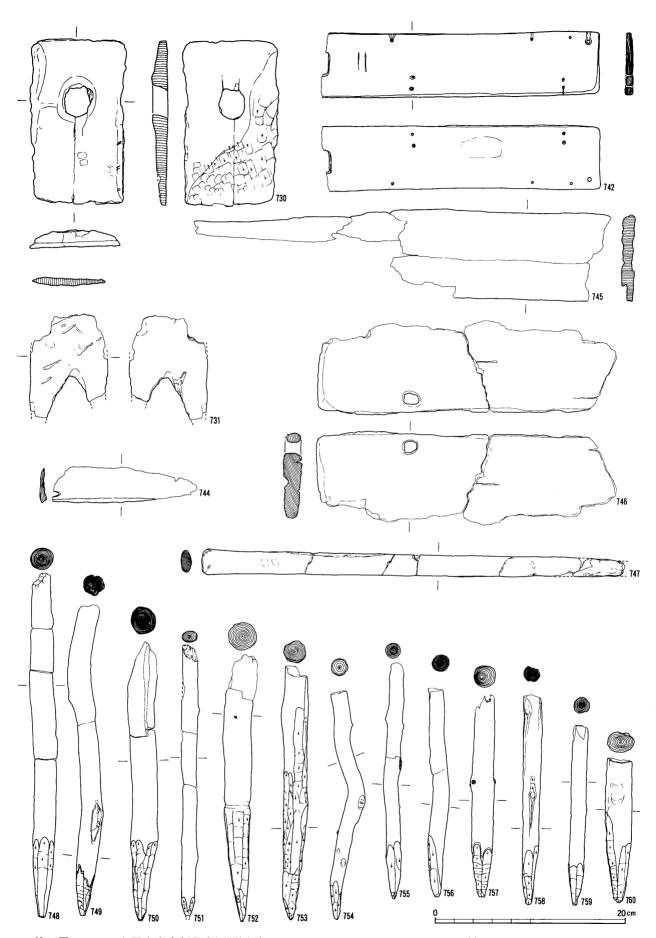


<del>---</del> 65 ---

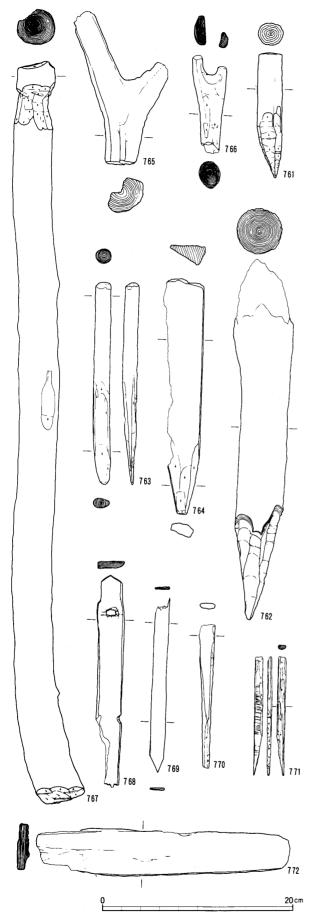


第78図 SR3上層出土遺物実測図(9)(1:4)





第80図 SR3上層出土木製品実測図(2)(730~747;1:3,748~760;1:10))



第81図 SR3上層出土木製品実測図(3)(1:8)

く甕には、〈字形口縁甕(483~487)と受口甕(488~504)があり、受口甕が量的主体である。487は、〈字形口縁甕の口縁端部をつまみ上げたものである。508~531は、弥生時代後期から古墳時代前期までの高杯である。このうち531は、それまで内湾していた脚部が直線化して低脚化したものである。

534~538は、いわゆる「柳ケ壺」である。屈曲部が明瞭で大きく外開きとなる435から、538のようなより直線的なものまで存在している。

二重口縁壺 (539~543) は、口縁端部を丸く収める539~541と、端部にヨコナデを加えて面的な処理を施す541~542、全体に退化した543がある。S字甕 (507・554~589) では、554~556のような口縁部刺突列を残す古いものから、580のように6世紀代に入る新しいものまで存在するが、586や588では整形技法としてケズリ手法をハケと併用している。

590~602は、古墳時代前期以降でもS字甕以外の 甕である。このうち、590は受口甕であり、やや古い 所産かもしれない。594はいわゆる「籠目土器」で、 体下半部には籠目の圧痕が付いている。596~604は、 おそらく底部が丸底を呈するものであろう。599~600 は、外面調整にハケを使用せずナデやオサエが中心 の土器で、口縁部は外反している。古墳時代中期頃 の所産であろう。

610~621は、古墳時代中期を中心とする高杯である。622~626は坏もしくは台付坏、627は甑、628器種は不明だが小形で甑状の器形であるが、口縁直下に把手状のつまみが付く。630~652は、ミニチュア土器および手捏ね土器である。この時期になると、手捏ね土器の出土量が一気に増加する。

653~723は須恵器である。坏身・坏蓋が大部分を 占め、その他の器種では高杯など小形のものが少量 存在するにすぎない。708など、非常に歪んだ個体も 含まれており、近くで窯が存在していた可能性が高 い。

なお、金環(724)や有孔円板(723)なども存在 する。

### 上層出土木製品

木製品は,主に器種別に個別に見ていこう。遺物自体は数少なく、杭類以外では耕作用農具が組成の中心である。

726~733は耕作用農具である。726は、ナスビ形装 着鍬、727や730も鍬、731は二股の鋤鍬類、728は一 木鋤、729は鍬の未製品であろう。732~733は、曲が り柄鍬の軸部であろう。

734は、収穫用農具の杵である。

735~738は武器関係遺物である。このうち、実用品は鞘(736)と弓(737)で、735は刀形、738は剣形の可能性がある。鞘は、非常に細長く、鞘尻部を釘状のもので止める形態をとる。

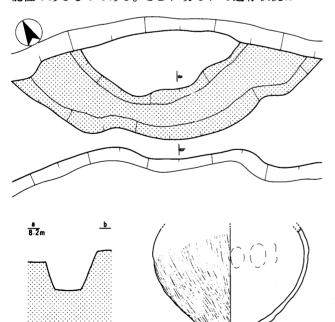
その他、739は工具の柄、740は中央部に円孔を穿った円板、741は下駄である。

742~747は、詳しい器種は不明であるが、745~746 は大きさからも建築部材の可能性があろう。748~764 は杭材で、748~763が丸杭、764が転用杭である。

765~766は先端が二股になっており、竪穴住居用 柱材等の建築部材の可能性がある。

767~772も詳しい種類は不明である。767は、大きさ的には建築材の可能性もあるが、垂木ではない太材の先端部全面に抉りを入れる仕事は建築部材としてあまり類例がない。

SD23 SR2の埋没後、東西方向に飛鳥時代~ 奈良時代を中心とした時期の溝がいくつか存在する が、SD23はそのなかでは古く、古墳時代に入る可 能性のあるものである。SDに切られて遺存状況は



第82図 S D 23実測図(1:4) 出土遺物実測図(1:40)

悪いが、小さな弧状を描いて流れる幅1.8mの溝である。深さは1.6mを測り、しっかりとしている。

出土遺物 出土遺物は少なく、壺の体部片(773) のみを図示し得た。体部が丸みを帯びた土器で、弥 生土器の可能性もあり、そうした場合には、重複関 係にあるSR2に包含されていた遺物の混入品の可 能性もある。

#### b. 竪穴住居

SH6~10 SR3の南側に存在する竪穴住居で、2か所の地点に2~3回の重複関係をもって5基が存在している。弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけて順次建て替えられていったものと思われる。どの住居跡も、削平や重複が激しく、遺物の遺存状況も極めて悪い。

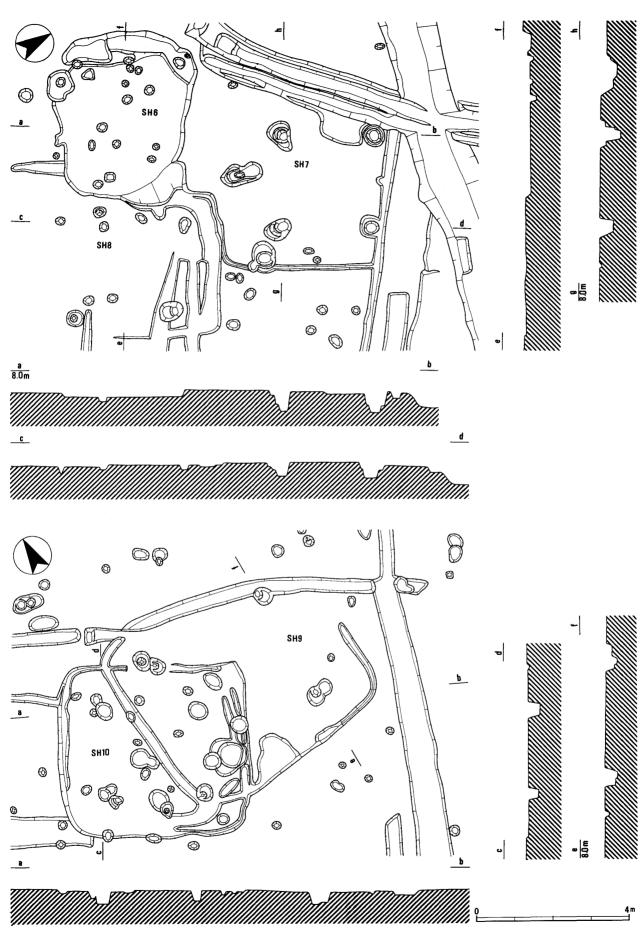
SH6 SH7~&や後世の溝との重複のため、 東壁以外はプランが明確でないが、南東隅が周溝から何とか確認でき、また主柱穴4本も明瞭である。 主柱穴は、2.5m間隔で正方形に配置されている。柱 穴から東周溝までは1m、南周溝までが1.5mあり、 これをもとに全体のプランを求めると東西4.5×南北 5.5mの隅丸長方形の住居が復元でき、SH6~8ま での3基の重複の住居のなかでは一番大きい。図示 しうる程の遺物は出土しなかった。

SH7 住居南半が削平されており、西側のふたつの主柱穴も確認できなかったが、東西は3.9m、南北は遺存した2本の主柱穴と北側周溝までの距離から5.3mと復元でき、隅丸長方形の南北主軸の住居であったようである。図示しうる程の遺物は出土しなかった。

SH8 周溝は確認できず、重複や削平のため現状で確認できたプランはかなり歪んでいるため、住居跡とするには疑問も残らないではないが、一応、東西3.5×南北3.5~4m程度の規模で、5基の住居跡のなかでは最も小さい住居跡である可能性が高い。そう見た場合、主柱穴に相当しそうな柱穴が東北側主柱穴以外は小さいながらも確認できる。弥生土器の細片が出土している。

出土遺物 高坏の坏部屈曲部の細片である。細片 ながら、弥生時代後期の特徴を示している。

SH9 東西5.1×南北4.6mの隅丸のやや長方形プランを呈する。削平のため遺存状況は悪いが、住



第83図 SH6~10実測図(1:100)

居には周溝が途切れながらも遺存しているほか、住居中央に炉の可能性もある炭化物混じりの浅い掘り込みが見られる。主柱穴は4本は非常に明瞭で、検出面より30~50cmの深さがある。切り合い関係からSH10よりも古い。埋土から、弥生時代後期の土器が出土している。

出土遺物 細片ばかりであるが、壺 (775) や甕 (776~777)、小型粗製土器 (778) 等が出土した。 ほぼ弥生時代後期の所産としてよいであろう。

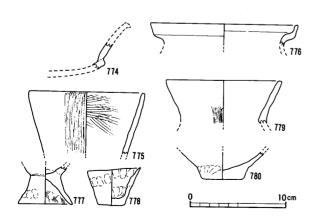
SH10 SH9を切って建てられた東西6.1×南北5.6mの隅丸長方形の住居跡で、SH9よりも一回り大きい。遺存状況は極めて悪く、周溝と主柱穴の存在によって竪穴住居と確認できる程度で、その周溝も北東部は削平のため確認できない。主柱穴4本は明瞭であるが、4本のうち3本の主柱穴に切り合い関係があることから、周溝等では確認できないものの、あるいはもう1基同一地点に占地して建て替えを行った住居があったのかもしれない。

出土遺物 壺口縁部 (779) と甕底部 (780) 7が出土している。明確に時期を示す個体ではないが、ほば弥生時代後期から古墳時代初頭の所産であろう。

#### c. 土坑

弥生時代中期の土坑群とはSR1を挟んで北に存在しており、時期的にも弥生時代後期以降のため中期土坑群とは直接の関係を持たないと思われる土坑が2基存在する。

SK29 調査区の端で検出されたため、楕円形の 土坑の長軸に沿うかたちで約半分が確認された。長 径1.72m以上×短径0.68m以上、深さ40cmの大きさ



第84図 SH8~10出土遺物実測図(1:4)

で、底の断面形は丸みを帯びている。

出土遺物 いずれも破片であるが、壺 (781)と高 杯脚部 (782~783)がある。壺は、直線的に外に開 く直口壺で、口縁内面に刺突列がある。高杯は、脚 が外反しながら開く弥生後期的なものと、内湾する 欠山式的なものがあり、やや混入した状況である。

SK30 土坑の西端は調査区の端となるため検出できていないが、長径1.56m以上×短径1.28m、深さ22cmの楕円形の土坑である。土器の出土位置のなかにはかなり高いものもあり、本来の検出面よりもかなり下の部分で検出されたようである。

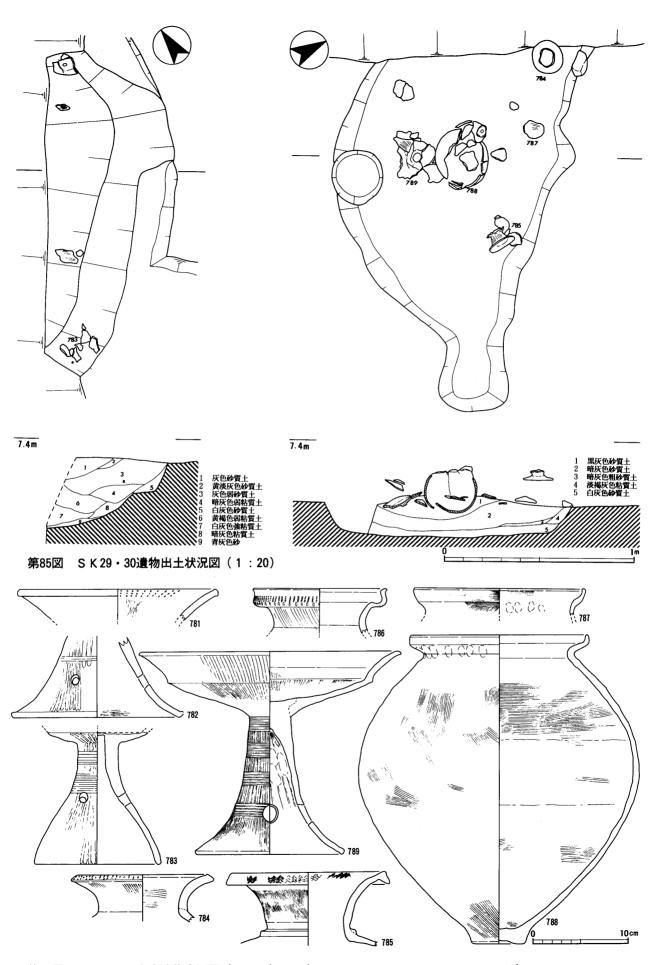
出土遺物 弥生時代後期の壺・甕・高杯がセットで出土している。甕は、受口口縁のものと、く字形口縁と受口口縁の折衷のような形状を示すような787がある。高杯は、坏部が外側へ大きく外反する典型的なV様式系の高杯である。

#### d. ピット

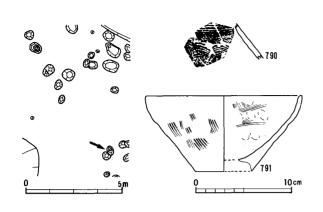
橋垣内遺跡では、掘立柱建物としては拾えなかった多数のピットが存在しているが、そのなかで、弥生~古墳時代の単独時期の完形に近い土器を出土したピットについて、遺物を中心に報告する。

A-R15のP1 径30cm程度の小さなピットであるが、完形土器の出土があり、小さいながらも土坑とすべきかもしれない。須恵器坏身と土師器鉢が出土した。鉢は、口縁部が新しい時期のS字甕口縁部と形態的に類似しており、時期的な近接性が窺われる。そうした場合、須恵器の示す年代とも矛盾がなく、5世紀後半の共伴例としていい資料といえる。

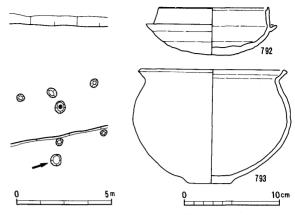
B-K18のP1 弥生土器の壺体部片と弥生~古 墳時代の鉢が出土している。鉢は、内外面にハケ調 整が施されたものである。



第86図 SK29・30出土遺物実測図(1:4) (781~783; SK29・784~789; SK30)



第87図 A-R15P1実測図(1:200) 出土遺物実測図(1:4)



第88図 B-K18P1実測図(1:200) 出土遺物実測図・拓影図(1:4)

# (3) 包含層等出土遺物

いわゆる包含層出土遺物(第89図)と、後世の遺 構に混入した状態の弥生~古墳時代の遺物、出土地 点不明の当該時期遺物(第90図)を一括した。以下、 代表的なものについて、その概要を述べる。

794は細頸壺で、膨らんだ口縁部から胴部にかけて 横線文と簾状文を連続して施している。中期でも新 しい所産であろう。

甕(795~798)も弥生時代中期の所産であろう。 このうち795がく字形口縁甕の口縁端部を上下に拡張 し、胴部ハケ調整の「畿内」的な甕であるのに対し、 796では、く字形口縁の口縁内面にヨコハケを施し、 体上部に列点文や横線文、波状文を施した大和形甕 に受口甕の文様を採用した甕である。

801は古墳時代前期の器台である。

須恵器坏・杯蓋類のうち、802は、体部に波状文を施し、その下にさらに稜線を有するもので、口縁部は丸く納めている。初期須恵器の範疇に入るものであろう。

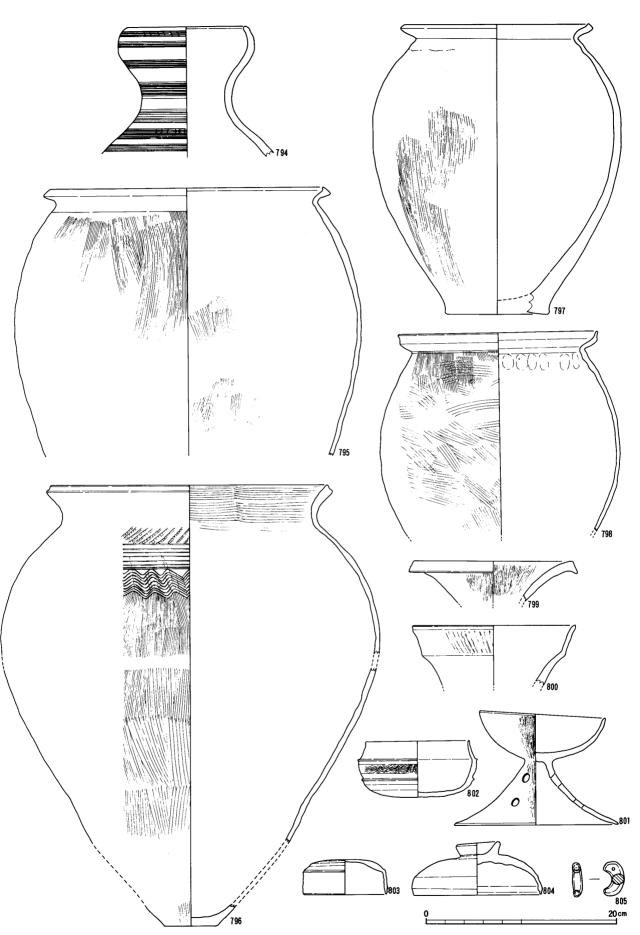
813の小型壺は、精製土器で、体部に焼成後の穿孔がみられる。

824の土師器高杯は、脚柱部内面を一回転ヘラケズリしたものである。

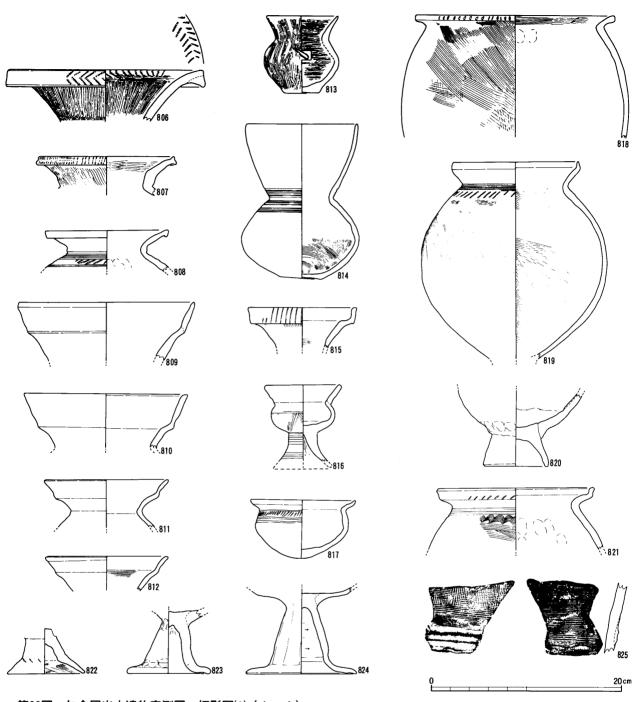
825は還元焔焼成の円筒埴輪片で、タガは低い。6世 紀代の所産であろう。 (穂積裕昌)

遺構番号 —	規模		Sant Se /	上 + □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □	т. т. ж. ж.
	長 軸 >	< 短軸 (m)	深さ(cm)	土坑形態	出土遺物
S K 55	6.9	1.5	25	第1類	壺 (33・34)
					甕 (35 ~37)、 脚 (38)
S K70	5.2	1.1	50	第2類	壺 (33 ~42)
S K75	1.8	1.6	70	第4類	壺 (43 · 44)
					蹇 (45 ~47)、
					台付鉢 (48)
S K76	4.7	1.0	50	第1類	
S K81	2.4	1.0	25	第2類	
S K85	1.8	0.9	15	第2類	蹇 (49 · 50)
S K 101	2.0	2.0	20	第5類	
S K102	2.9	2.0	30	第5類	
S K 105	2.8	1.25	30	第3類	壺 (51 ~54 · 56)、
					蹇(54 · 55 · 57)
S K 106	5.0	1.0	40	第1類	壺 (58)
S K 107	1.9	0.8	20	第3類	壺 (58)
S K 153	2.3	1.6	25	第5類	壺 (59 ~61)、
					無頸壺 (62)
S K 166	3.7	0.7~1.3	60	第3類	壺 (63 ~65)
					甕 (66 ・67)、 高坏 (68)
					鉢 (69)
S K17	2.35	0.8~1.35	50	第3類	
S K 190	2.1	0.8	40	第3類	壺 (70 ・71)

第3表 弥生時代中期土坑一覧表



第89図 包含層出土遺物実測図(1)(1:4)



第90図 包含層出土遺物実測図·拓影図(2)(1:4)

遺構番号	規 模	双云水铁	· + + + c	LL1 _L. \\\	備考
	南北 × 東西 (m)	平面形態	主柱穴	出土遺物	備考
S H 6	5.5 × 4.5	隅丸長方形	4個等間隔		周溝
S H 7	— × 3.9	隅丸長方形	2個確認		周 溝
S H 8	3.5 × 3.5 ~4.0		3個確認	高坏 (774)	周溝
S H 9	4.6 × 5.1	隅丸長方形	4個	壺 (775) 、蹇(776·777) 小型粗製土器 (778)	周溝
S H10	5.6 × 6.1	隅丸長方形	4個	壺 (779) 、蹇 (780)	周溝

第4表 古墳時代竪穴住居一覧表

## 5. 飛鳥時代から平安時代の遺構と遺物

この項では、飛鳥時代から平安時代までを扱うが、一般に古墳等の調査では、古墳時代の終わりを後期 古墳の終焉を以て考えることが多いが、本遺跡は集 落遺跡であり、掘立柱建物や溝・土坑などの多くの 遺構が、田辺編年のTK209型式併行期から存続 しはじめる。この時期は、畿内中心部において律令 政治が萌芽し始める時期でもあり、本書では古墳時 代末期のTK209型式併行期以降を飛鳥時代に含 めて取り扱うこととする。

また、調査区北側に位置する溝SD20・21・22は、 古墳時代中期から存続する溝であり、本来は前時代 で述べる遺物も含まれるが、遺構の連続性を考慮し て、この項で述べることにする。

この時期の遺構は、①飛鳥時代・奈良時代の遺構 (竪穴住居・掘立柱建物・柵・井戸・土坑・溝・門・ ピット)、②平安時代の遺構(掘立柱建物・溝・土 坑)、③飛鳥時代から平安時代まで続く遺構(大溝) に大きく分けられる。

以下は、時代別に遺構を挙げたものである。また ( ) つきの数字は想定されるものである。

## ① 飛鳥時代から奈良時代の遺構

#### a. 飛鳥時代

S H35 · 78 · 114

 $SB(12) \cdot 14 \cdot 27 \cdot (36) \cdot (37) \cdot 39 \cdot (43)$ 

 $46 \cdot 65 \cdot 72 \cdot 73 \cdot 79 \cdot 80 \cdot 87 \cdot 91 \cdot (93)$ 

 $95 \cdot 96 \cdot 97 \cdot 100 \cdot (110) \cdot (111) \cdot (115)$ 

 $118 \cdot 119 \cdot 120 \cdot 121 \cdot 125 \cdot 128 \cdot 129 \cdot 130$ 

 $(131) \cdot (136) \cdot (138) \cdot 139 \cdot (140) \cdot 143$ 

 $148 \cdot 149 \cdot 150 \cdot (152) \cdot 157 \cdot 158 \cdot 159$ 

 $160 \cdot (161) \cdot 162 \cdot 165 \cdot (169) \cdot 170 \cdot 171$ 

 $172 \cdot 173 \cdot 174 \cdot 178 \cdot (180) \cdot 181 \cdot 184$ 

 $(185) \cdot 186 \cdot 187 \cdot (191) \cdot 193 \cdot 194 \cdot 196$ 

 $(202) \cdot 206 \cdot 207 \cdot (209) \cdot 211 \cdot 218 \cdot 219$ 

(223)

S A 210 S E 59 · 133

S K31 · 56 · 69 · 103 · 117 · 122 · 123

 $144 \cdot 154 \cdot 205$ 

 $SD20 \cdot 21 \cdot 22 \cdot 33 \cdot 60 \cdot 61 \cdot 62 \cdot (82) \cdot 83$ 

 $132 \cdot 141 \cdot 176 \cdot 183 \cdot 192 \cdot 198 \cdot 200 \cdot 214$ 

その他ピット

#### b. 飛鳥時代から奈良時代

S B (26) · 41 · (94) · 98 · 112 · 113 · 126 137 · 146 · 182 · (189) · (195) · (197) (201) · 221

S D24

#### c. 奈良時代

S B 63 · 64

 $\begin{array}{c} \text{S H}(11) \cdot (13) \cdot (15) \cdot (17) \cdot (18) \cdot 38 \cdot 40 \\ 42 \cdot 45 \cdot 47 \cdot (48) \cdot 49 \cdot (50) \cdot (51) \cdot (66) \\ (67) \cdot (68) \cdot 74 \cdot (89) : (90) \cdot 92 \cdot (99) \\ 104 \cdot 109 \cdot 124 \cdot 127 \cdot (134) \cdot (135) \cdot 145 \\ 147 \cdot (155) \cdot 156 \cdot 164 \cdot 167 \cdot 168 \cdot 179 \\ (188) \cdot 208 \cdot 212 \cdot 215 \cdot 216 \cdot 217 \cdot 220 \\ (222) \end{array}$ 

SA16 SE52 SD86 その他ピット

#### ② 平安時代の遺構

SB28 · (44) · 88 SK53 SD199

## ③ 飛鳥時代から平安時代の遺構

S D58

## 全体の遺構配置

飛鳥時代は、住居が夥しく増加する時期である。 前時代の住居は、竪穴住居 5 棟が古墳時代初頭をもっ て終わる。その後、ある程度の時期をおく。飛鳥時 代なって竪穴住居・掘立柱建物が遅くとも 6 世紀末 には出現する。建物でも取り分け掘立柱建物が多く、 想定されるものも含むと73棟になる。掘立柱建物が 爆発的に建てられる。

住居の形態は、この時代に竪穴住居から掘立柱建 物へ移行したものと考えられる。遺跡として飛鳥時 代に竪穴住居から掘立柱建物へ移行することは早い と言えよう。

また6世紀末に飛鳥時代の住居群を取り囲むよう に幅1m程の溝が作られる。この住居群を巡る東溝・ 西溝は、南側がすぼまって開口しており、そこに門 (SA210)と考えられる柱穴を1間分検出した。ま



第91図 歴史時代遺構配置図(1:1,000)

た平成4年度に調査された西接する県道部分でも本調査区の溝から続くと考えられる溝SD39(第10図、橋垣内遺跡県道部分C地区)が検出されており、この溝を含めて住居群を囲む溝と考えると、かなり広い範囲に巡っていたことになる。この溝の性格としては、溝幅が狭く、深さも浅いため防御的な施設としては、性格が弱いと考えられ、住居群を区画する溝と考えられる。一早く成立する掘立柱建物との関係が今後の課題であろう。

大溝(SD58)は、出土遺物から飛鳥時代より流れていたと考えられる。毛無川の旧河道とも考えられるが、人工による流路の可能性ものこる。

奈良時代には、大溝(SD58)が中心となる時期である。この他にもSD24・SD86などの東西溝が流れる。住居は、竪穴住居2棟や掘立柱建物44棟などが存在するが、飛鳥時代に比べて相対的に遺構が減少する。このように飛鳥時代に比べると遺構は少なくなる。

平安時代には、遺構数は極端に減少し、希薄になる。掘立柱建物3棟に他、大溝(SD58)や数条の溝が流れるのみに留まる。

#### (1) 飛鳥時代から奈良時代の遺構と遺物

#### a. 竪穴住居

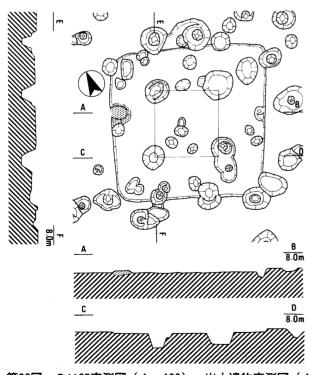
この時期に属する竪穴住居は、SH35・78・114の3棟である。この3棟は南北に距離を隔てて散在する。SH35は大溝の北側に位置し、SH78とSH114の2棟は南側に位置する。SH35とSH78の間は、直線距離にして42m程隔でており、SH78とSH114の間は、19m程の間隔をもっている。それぞれの住居は、多くの掘立柱建物の柱穴と重複しており、また検出面からの深さも浅いため、出土遺物も小片にとどまる。

SH35 南北4.0m×東西4.1mで、正方形に近い平面のプランを呈する。深さは10cmと浅い。棟方向は、長軸方向でE22°Sを測る。床面積は16.4㎡である。西壁中央やや北よりに竈跡と思われる焼土を検出した。竈は体部下半部を打ち欠いた長胴甕を据え付け、その周囲を濁黄色砂混粘質土および褐灰色砂混粘質土で補強して竈を作っている(第92図)。主柱穴は、4本とも確認できた。主柱穴間は、1.75m等間隔で

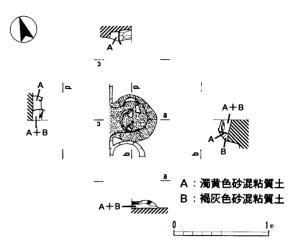
正方形に配置されている。掘立柱建物 S B 37と重複するが、S B 37との切り合い関係は不明である。出土した須恵器坏身(829)から住居の時期を 6世紀末葉と考えられる。

出土遺物 竈の焼土内から土師器甕の口縁部 (828) や体部が出土した。この他にも土師器甕 (826・827) や須恵器坏身 (829) が出土している。須恵器坏身 (829) は、口径12.0cmで、底部をヘラ切りの後に粗く調整するものである。

SH63 南北3.1m×東西3.8m、深さは10cm程である。棟方向は、長軸でE35°Sを測る。床面積は11.8㎡である。焼土は検出できなかった。主柱穴は推定4本と考えられ、南東の主柱穴1本を確認できなかったものの3本を検出した。主柱穴間は、推定で南北1.8m×東西1.95mと考えられる。出土遺物は細片のみで、時期を決定することは困難であるが、住居の規模11.8㎡から考えると、飛鳥時代の竪穴住居3棟(SH35・78・114)の平均床面積は約19.3㎡になり、飛鳥時代の竪穴住居より規模が小さく、奈良時代の竪穴住居SH64の10.9㎡に近似しているので、この時期とした。またSH63とSH64の2棟は、非常に近接しており、建て替えの可能性が高いと考えられる。このことからもSH64と同時代性が強いと考えられよう。



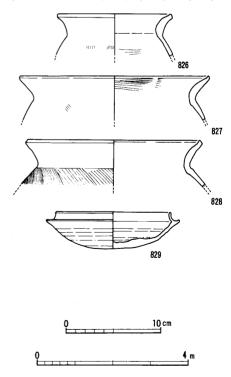
第93図 SH35実測図(1:100) 出土遺物実測図(1:4)



第92図 SH35電実測図(1:40)

SH64 南側の一部は、東西に縦断する排水溝により切れるものの、一辺約3.3mのほぼ正方形のプランをもっている。深さは10cmと浅い。棟方向は、N30°Eを測る。床面積は10.9㎡である。北辺のほぼ中央の壁際で竈跡と思われる焼土を検出した。主柱穴は、南東の1基を確認できなっかたものの推定4基と考えられる。主柱穴間は、推定で南北2.6m×東西2.4mと考えられる。住居の埋土は、第1層および第2層が住居以前のピットの埋土と考えられ、第3層の濃褐灰色砂混粘質土が、住居を建てるときに床張りされた土と考えられる(第94図)。

出土遺物 竈跡と思われる焼土から土師器甑 (838) が出土した。その他にも土師器坏 (830) ・甕 (831



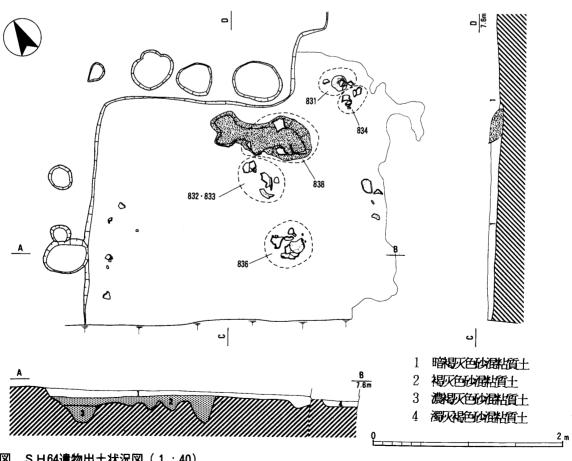
~836) ・甑 (837・838) 、須恵器坏蓋 (839) など が出土している。出土遺物より8世紀前半頃の住居 と考えられる。土師器坏(830)は、風化が著しいも のの外面にはヘラミガキが、内面の見込みには螺旋 状の暗文らしきものが見られる。土師器甕(832~ 836) は長胴甍である。831は、口径17.4cmの中型甍 で、832の口縁端部外面は凹状である。833~836の甕 は、口縁部を上につまみ上げて、端部外面に面をも つ。832・833の体部外面は、斜め方向に、内面は口 縁部から体部にかけて横方向にハケメを施す。須恵 器坏蓋(839)は、つまみを欠損するが、平らな天井 部から口縁部に至り、端部を下方に折り返す。

SH78 南北4.5m×東西3.9m、深さは20cmであ る。平面形態は方形を呈する。棟方向は、長軸方向 でN9° Eを測る。床面積は17.6㎡である。主柱穴は、 4本とも確認できた。主柱穴間は、2.0m等間隔で正 方形である。掘立柱建物SB79・80と切り合うが、 切り合い関係は不明である。

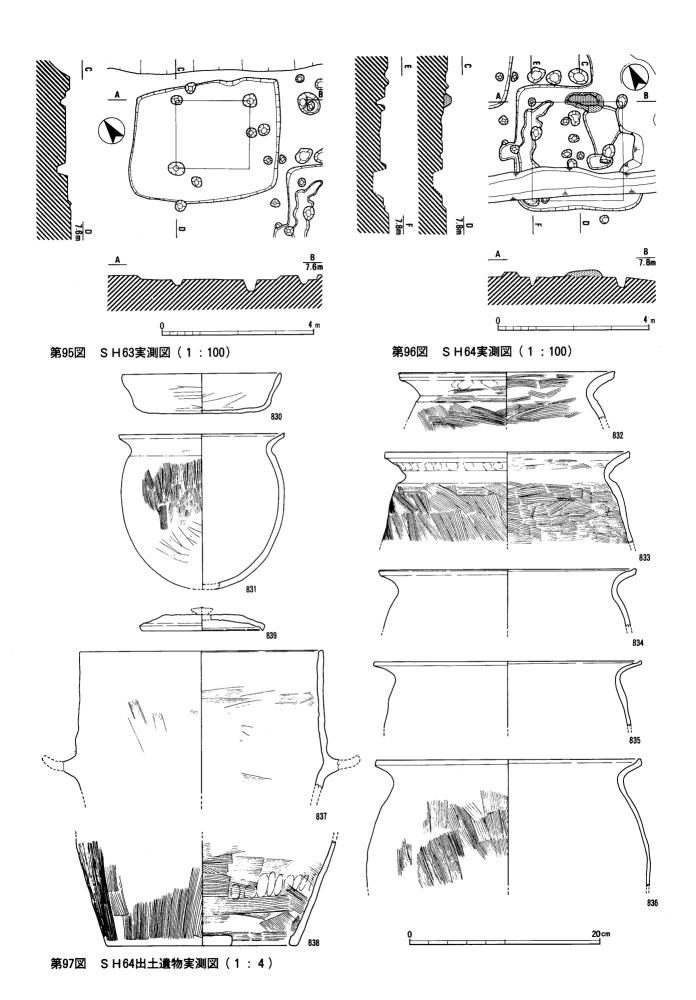
出土遺物 住居からは、土師器甕 (840) や須恵器 坏身(841)などが出土している。須恵器坏身(841) は、口径11.4cmで、底部はヘラ切り未調整である。 SH35やSH114の須恵器坏身より、形骸化しており、 若干新相と考えられる。住居の時期は7世紀前半頃 と考えられる。

SH114 南北4.8m×東西5.0m、深さは、平均す ると15cm程であるが、東側は10cmと浅い。平面プラ ンは、やや各辺々中央が膨れる隅丸正方形を呈する。 棟方向は、長軸方向でE24°Sを測り、SH35と 2°程異なるもののほぼ同方向の棟方向をもってい る。床面積は24.0m2である。焼土は検出されなかっ た。主柱穴は、4本とも確認できた。主柱穴間は、 2.5m等間隔で正方形に配置されている。またSB113・ 115と切り合うが、竪穴住居の埋土にこれら2棟の柱 穴が切り込んでいる。主柱穴のpit 1 より須恵器坏身 (844) が出土しており、住居の時期は6世紀末葉と 考える。

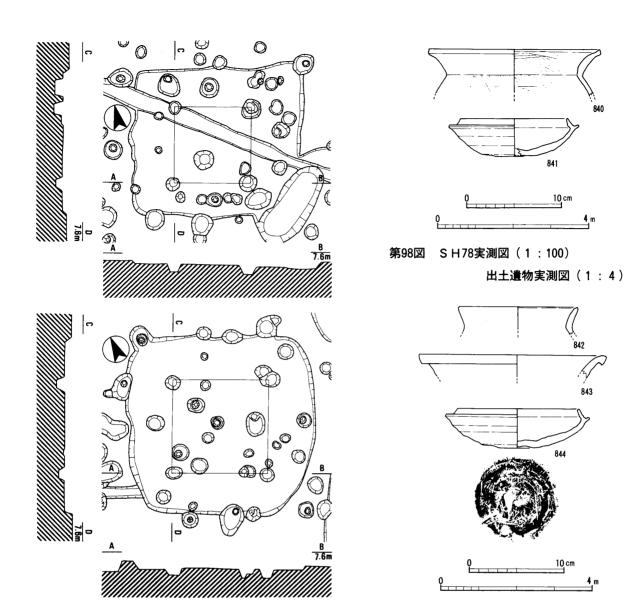
出土遺物 須恵器坏身(844)の他に、細片である が、土師器甕(842)や須恵器甕(843)などが出土 している。844は、口径12.8cmで、底部はヘラ切りの 後に板状工具によるナデが見られる。 (宮田勝功)



第94図 SH64遺物出土状況図(1:40)



**—81** —



第99図 SH114実測図(1:100) 出土遺物実測図(1:4)

遺構番号	規模	深さ (cm)	平面形態	方 位	主柱穴	出土遺物	備考
	南北 × 東西 (m)	(木で (dill)					
S H35	4.0 × 4.1	10	方 形	E22° S	1.75m 等間 4個	土師器甕(826~828) 須恵器坏身(829)	西壁中央に竈
S H63	3.1 × 3.8	10	長方形	E35° S	1.95m×1.8m 4個		
S H64	3.3 × 3.3	10	方 形	N30° E	2.6m×2.4m 3個確認	土師器坏(830) 、甕(831 ~836)、甑(837·838) 須恵器坏蓋(839)	北辺ほぼ中央に
S H78	4.5 × 3.9	20	長方形	N9°E	2.0m等間隔 4個	土師器甕(840) 須恵器坏身(841)	
S H114	4.8 × 5.0	10~20	隅丸方形	E24°S	2.5m等間隔 4個	土師器 <b>蹇</b> (842) 須恵器坏身(843)、 <b>蹇</b> (844)	

第5表 飛鳥・奈良時代竪穴住居一覧表

#### b. 掘立柱建物

検出された掘立柱建物の総数は136棟。うち飛鳥~ 奈良時代の掘立柱建物が132棟。この中には時期の決 定ができず、推測したものも含まれる。ほかにこの 時期の柵列が2条検出されている。柵列についても この項で合わせて記述する。

掘立柱建物の密度は、南北に長い調査区の北の方では比較的疎らであるが、SD20~SD24付近を境に南にくると高くなりはじめる。その中の最も密度の高い部分では3,000㎡程の範囲に数十棟もの掘立柱建物が集中している。そして、そのさらに南のSD176・SD200を境にほとんどみられなくなる。

時期的には飛鳥~奈良時代の掘立柱建物がほとんどである。中には古墳時代にさかのぼるものもあるかもしれないが、積極的に断定しうる根拠はなく、あえて飛鳥時代に含めた。時期の決定できるもので最も古いものではTK209の古である。下限は奈良時代でほぼ終息し、平安時代に連続していく様子はみられない。

「掘立柱建物(等)一覧表 $1 \sim 9$ 」に個々の掘立柱建物のデータを掲載してあるので、ここでは特徴的な遺構についてのみ記述する。

SB68は、北1間分床はりの可能性がある。

SB80は、3間 $\times$  3間であるが、3間 $\times$  2間の西面庇の可能性がある。

SB135は、南面や北東角のピットが2つ(以上) 切り合っており、その場所で建て替えられている可 能性がある。

SB147・SB148は、SB148北西角ピットの切り合いから、SB148からSB147へ建て替えられている。梁行の間数が異なるのは、後述①・②のようにそれぞれの時期の特徴よる。

SB149は桁(特に北側)の柱穴がない部分があるが、そこには猫石を置いていたと思われる。また、土坑(遺構番号なし)を介してSB156と切り合い関係にあり、SB149がSB156より古いことがわかる。 SB189は南1間分、SB201は西1間分、床を張っていた可能性がある。

SB195とSB196は、南面のピットの切り合いからS B196からSB195へ建て替えられている。

SB208は、全体に柱掘形が大きく不定形であり、

柱痕跡が2つあるものもあることから、柱に床束を 添えていた可能性がある。

SA16は、方向からSB15に伴うものであろう。

SA210は、SD176とSD200の間、溝の途切れた部分に位置しており、集落を区切る溝に設けられた門と考えられる。東にずれる形でもう一組ピットがあり、造り替えられた可能性もある。貫門、重塀門、あるいは棟門が考えられる。

出土遺物は、ピット出土だけでなく上層(包含層も含む)や周辺出土のものもあわせて掲載した。従って多少の時期幅がある場合もある。

SB150の879は木製品である。用途は不明。

SB211の908は灰釉椀の転用硯、SB220の942は須恵器 杯身の転用硯である。

2 棟以上の掘立柱建物の位置関係について、棟方 向が同じか90°のものを列挙する。

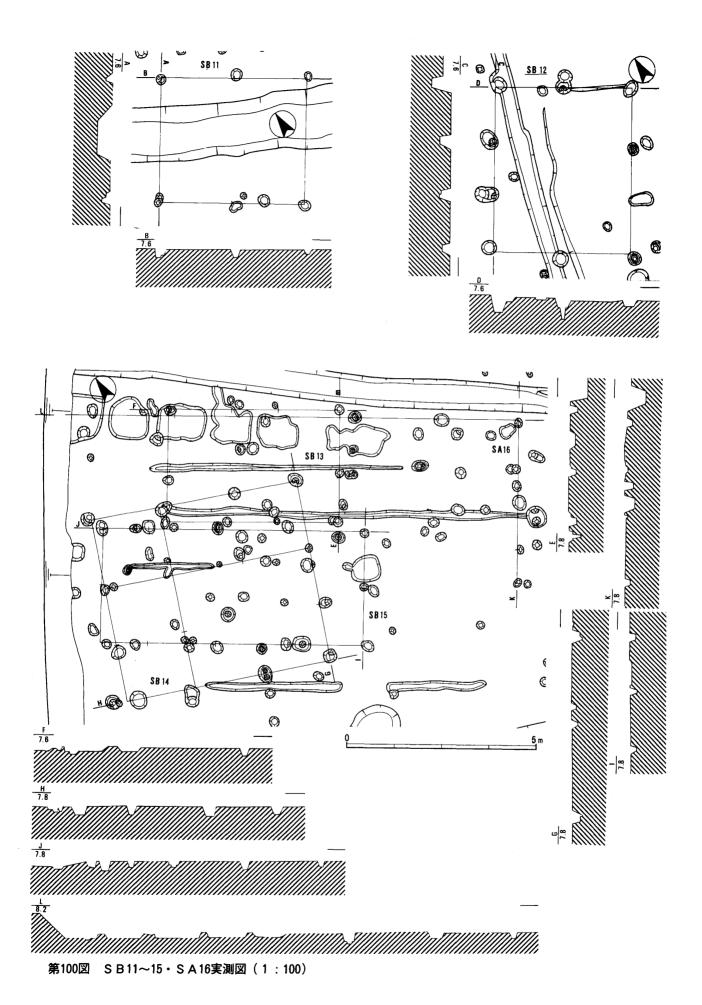
竪穴住居から掘立柱建物柱へ、ほぼ同じ場所で造り替えていると思われるものには次の4例がある。

SH35→SB37 SH64→SB67

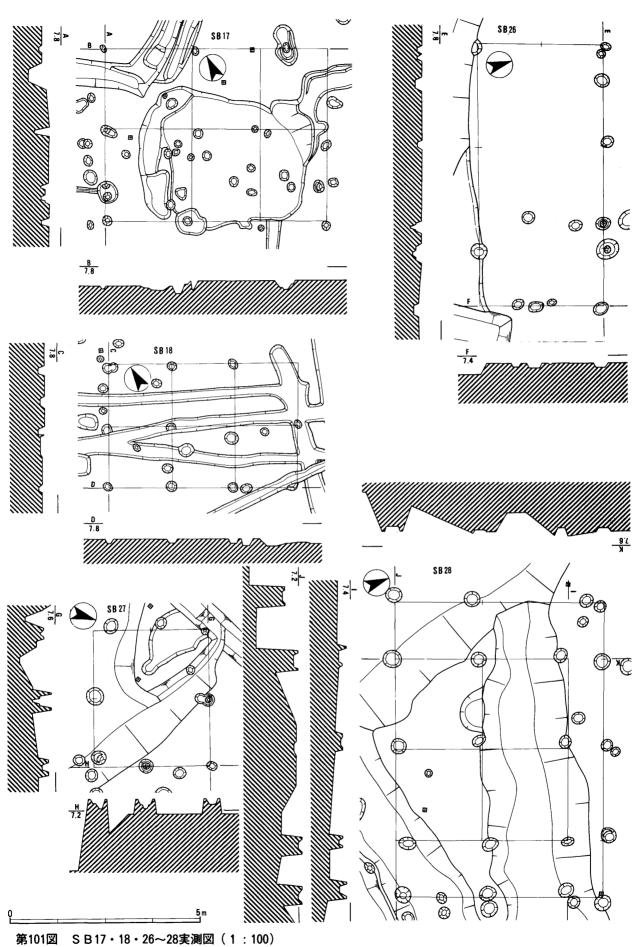
SH78→SB79 SH114→SB113

掘立柱建物全体の傾向として、次のような点が挙 げられる。

- ①飛鳥時代には、柱掘形がしっかりし、柱間が等間で、梁行が2間の掘立柱建物が多い。柱間は桁より梁で長いパターンが多い。
- ②奈良時代になると、柱間が等間でなくなるが、尺単位にはなる。梁行は3間のことが多い。梁行の一方で一間分柱穴のないパターンがある。ここは、扉を想定することができよう。 (本堂 弘之)

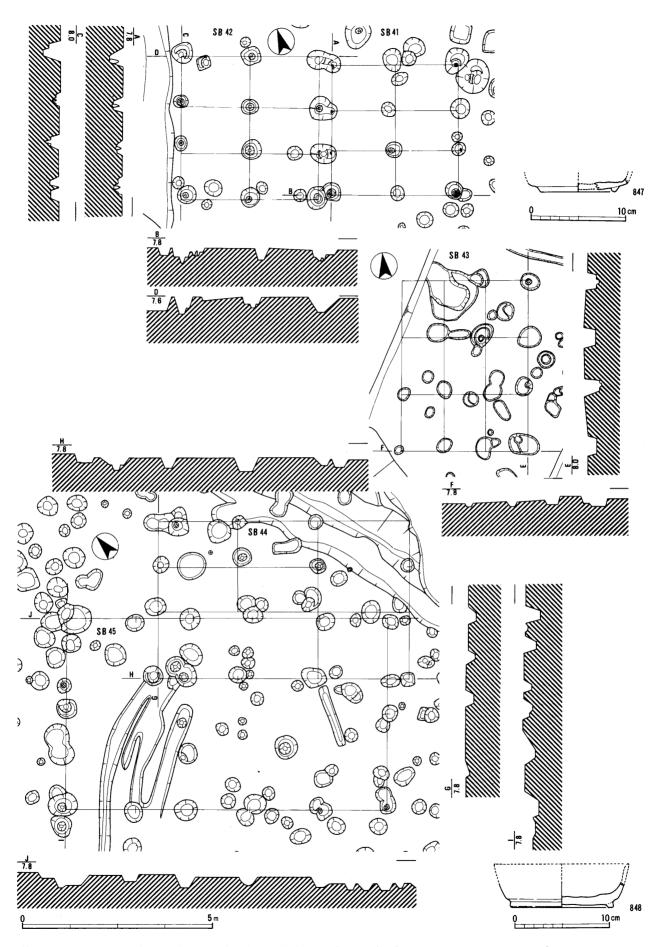


— 84 —

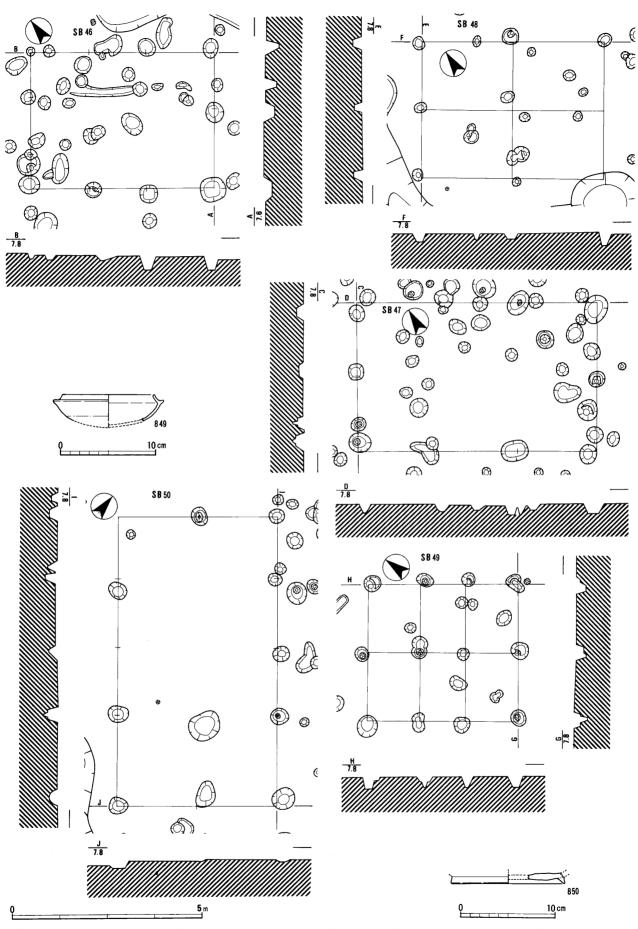




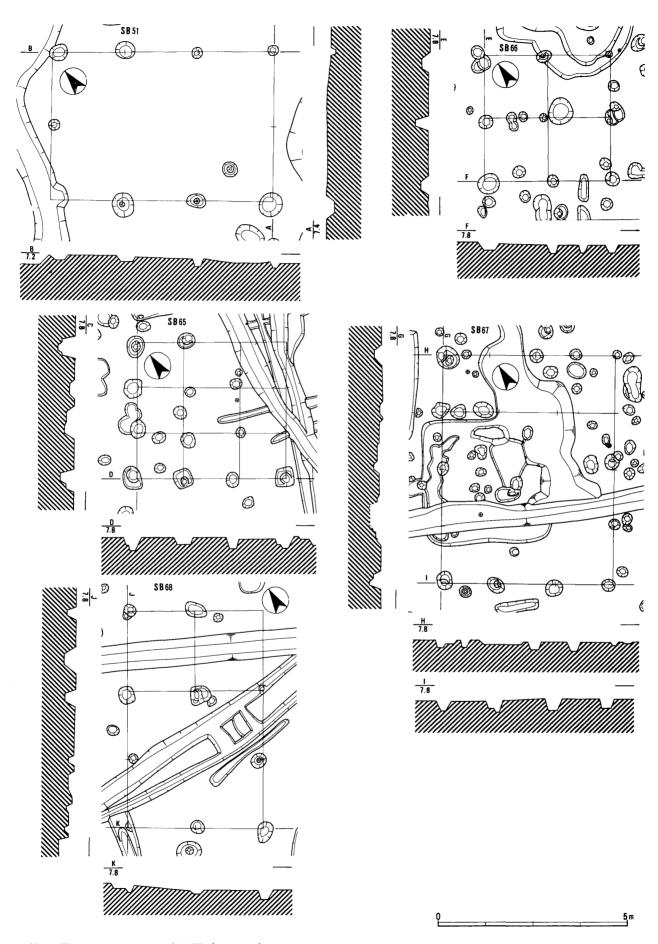
第102図 SB36~40実測図(1:100) 出土遺物実測図(1:4) [845:SB38,846:SB40]



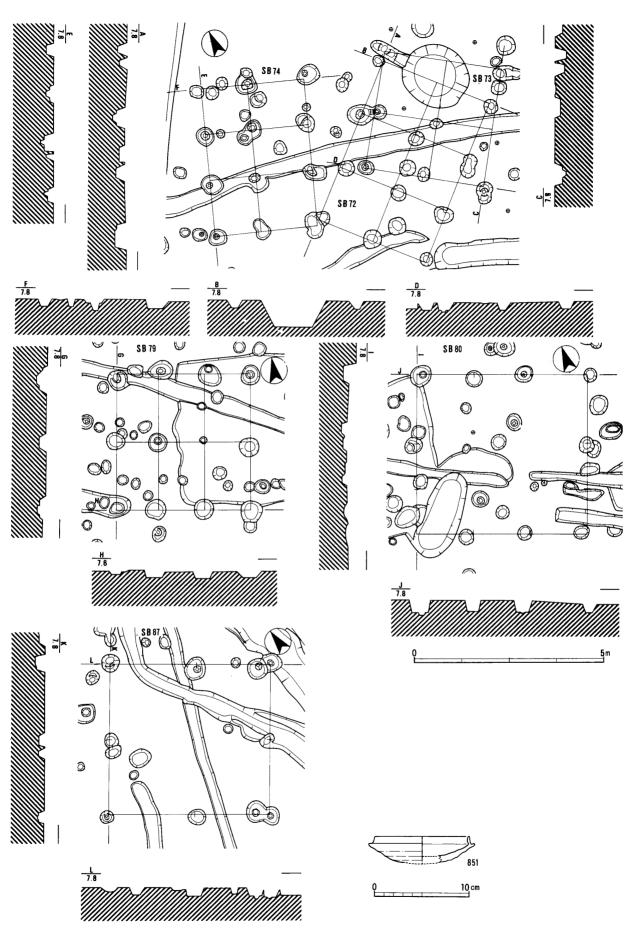
第103図 SB41~45実測図(1:100) 出土遺物実測図(1:4) [847; SB42, 848: SB45]



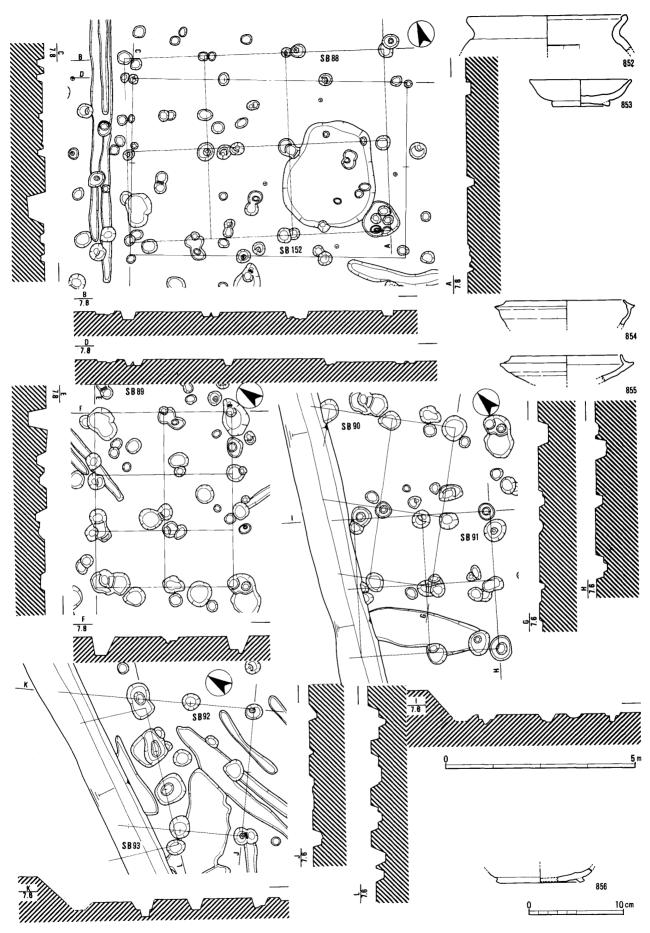
第104図 SB46~50実測図(1:100) 出土遺物実測図(1:4) [849; SB46, 850: SB49]



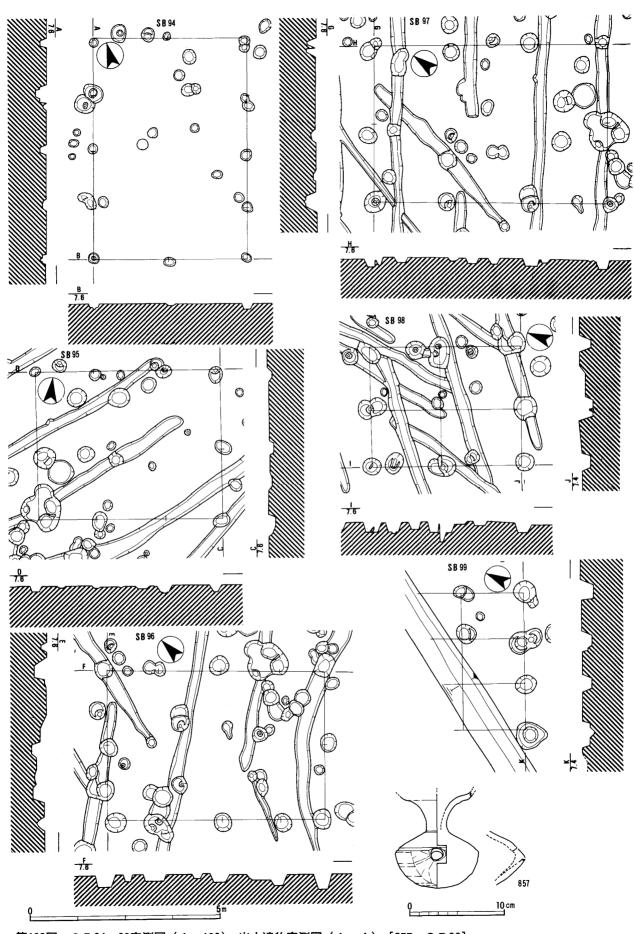
第105図 SB51・65~68実測図(1:100)



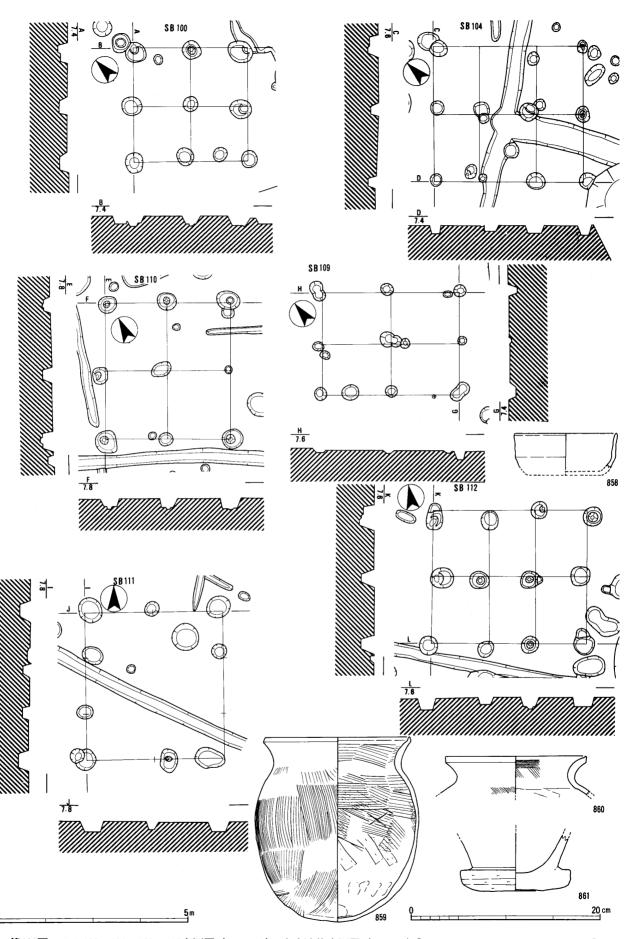
第106図 SB72~74・79・80・87実測図(1:100) 出土遺物実測図(1:4) [851:SB87]



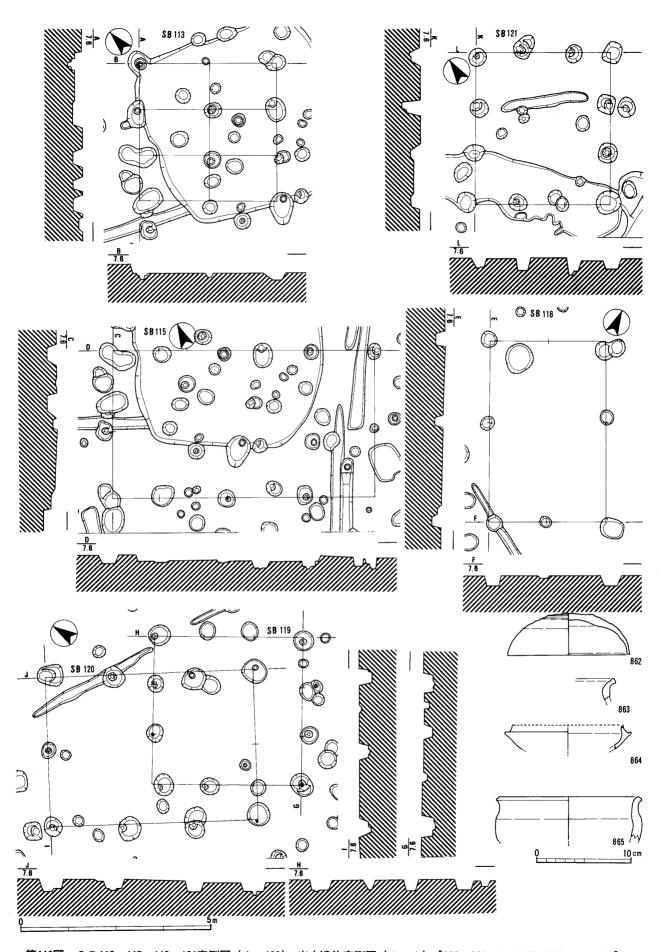
第107図 SB88~93・152実測図(1:100) 出土遺物実測図(1:4) [852~853; SB88, 854:~855: SB91, 856: SB92]



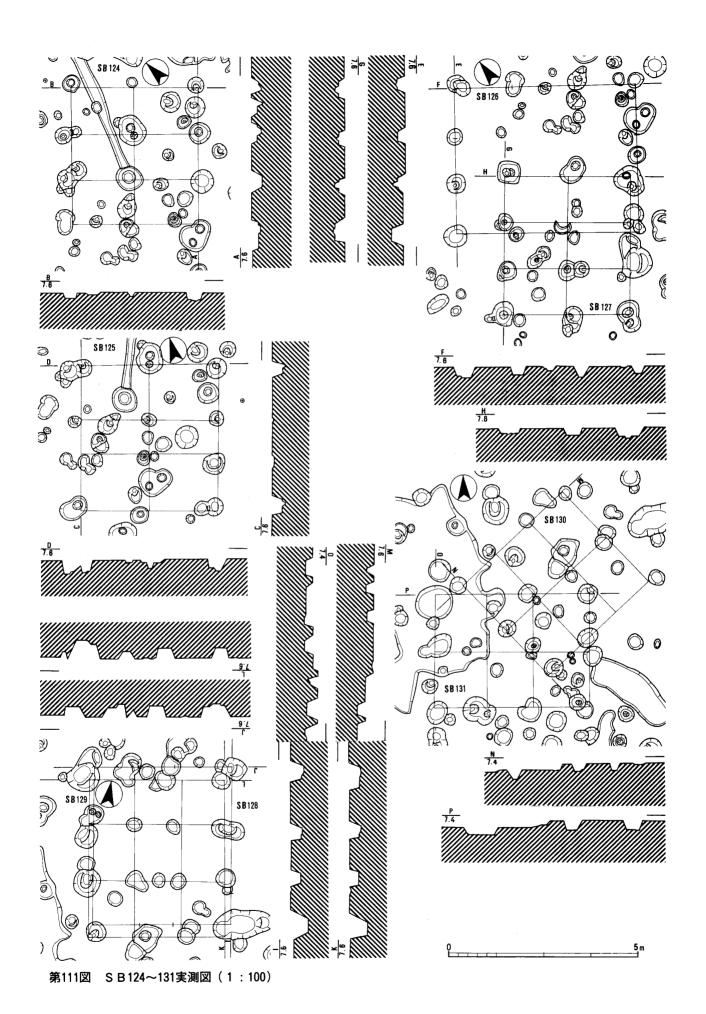
第108図 SB94~99実測図(1:100) 出土遺物実測図(1:4) [857:SB96]



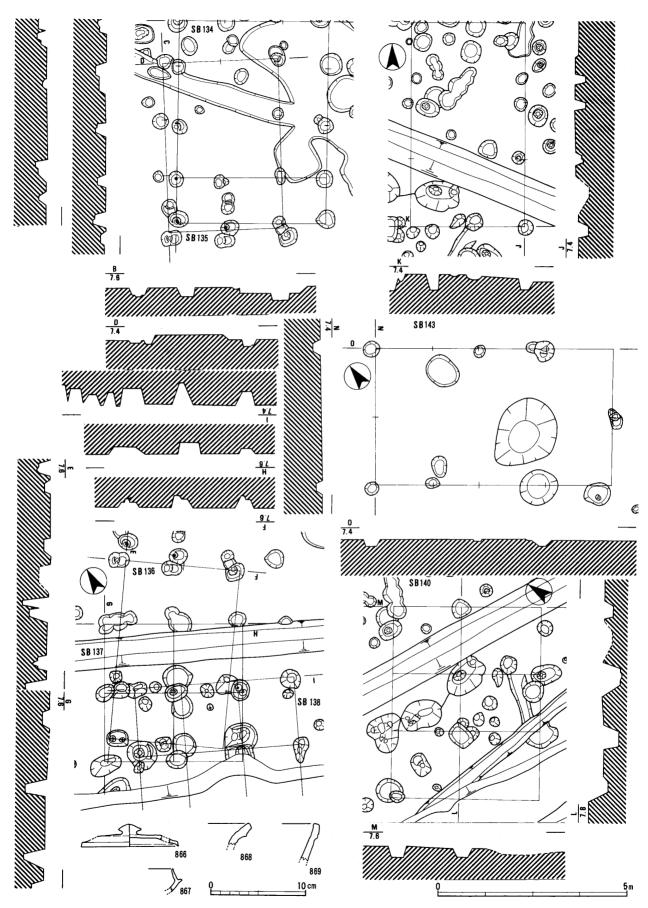
第109図 SB100・104・109~112実測図(1:100) 出土遺物実測図(1:4)[858; SB109, 859~861: SB112]



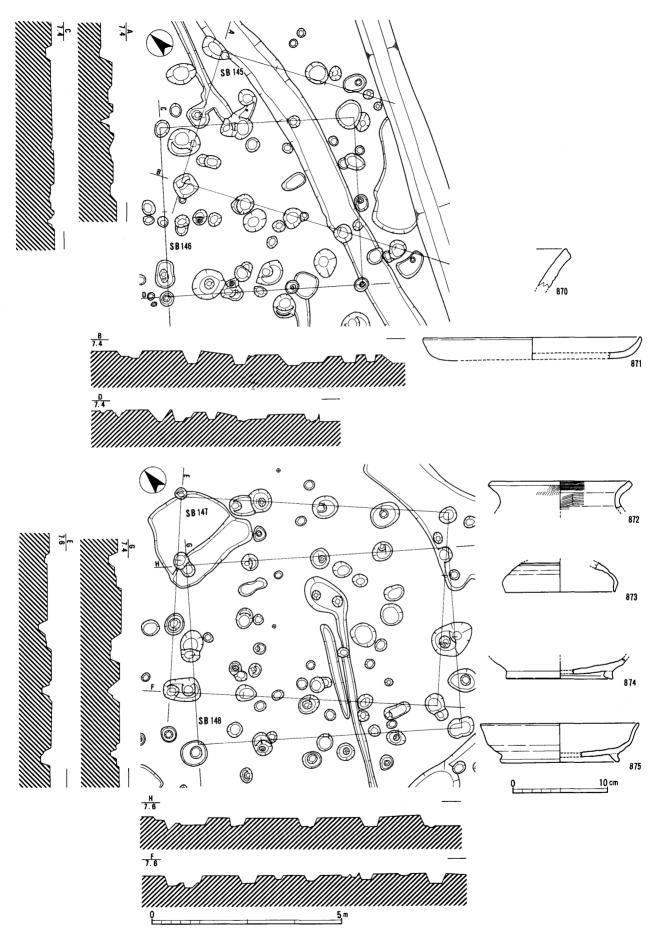
第110図 SB113・115・118~121実測図(1:100) 出土遺物実測図(1:4) [862~864; SB118, 865: SB119]



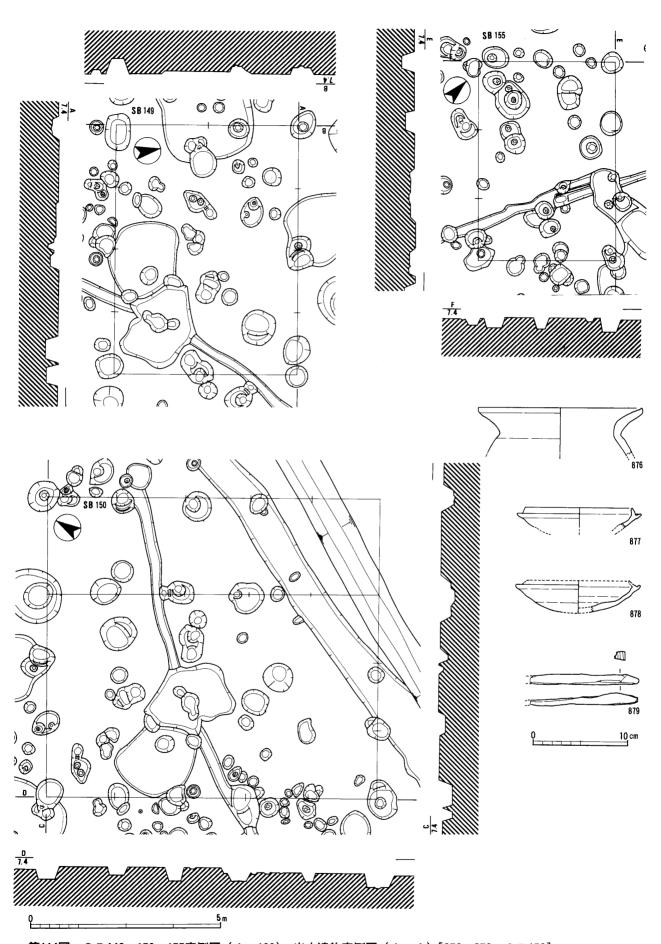
<del>---</del> 95 ---



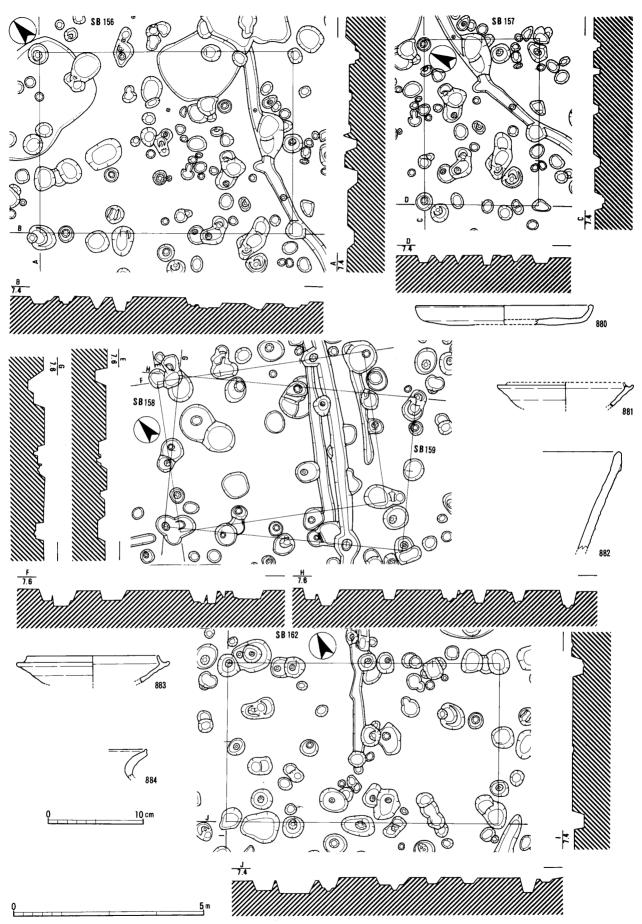
第112図 SB134~140・143実測図(1:100) 出土遺物実測図(1:4) [866~869:SB137]



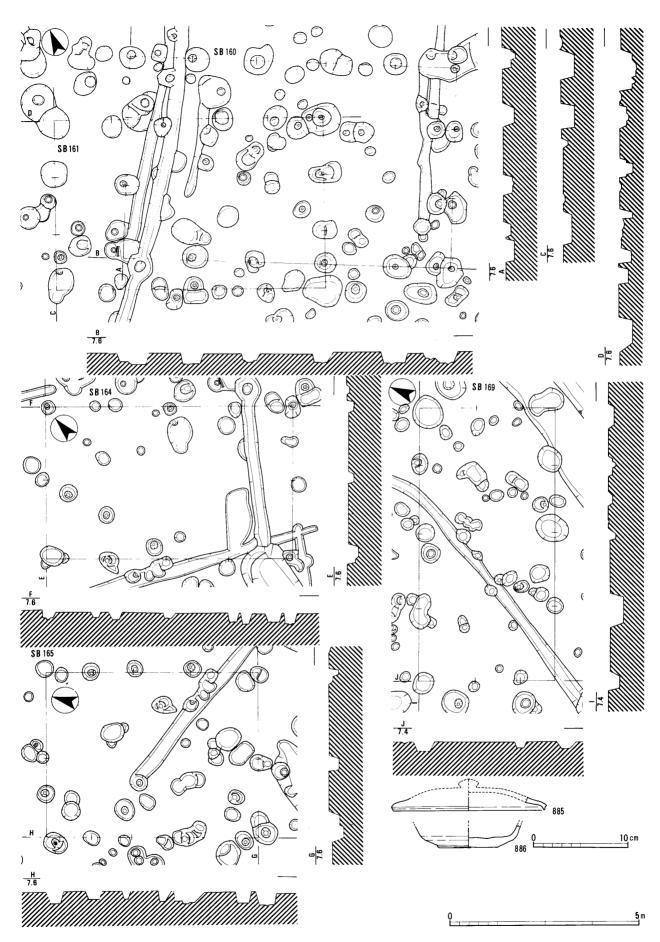
第113図 SB145~148実測図(1:100) 出土遺物実測図(1:4) [870~871; SB145, 872~875: SB147]



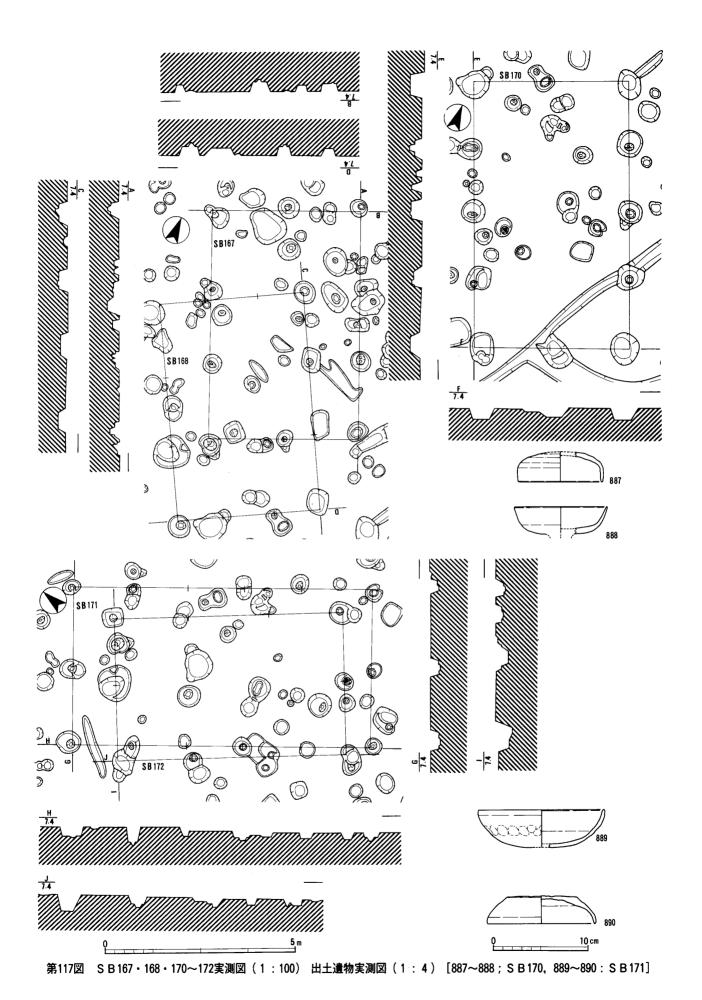
第114図 SB149・150・155実測図(1:100) 出土遺物実測図(1:4)[876~879:SB150]



第115図 SB156~159・162実測図(1:100) 出土遺物実測図(1:4) [880;SB156、881~882:SB157:883:SB159,884:SB162]



第116図 SB160・161・164・165・169実測図(1:100) 出土遺物実測図(1:4) [885~886:SB164]

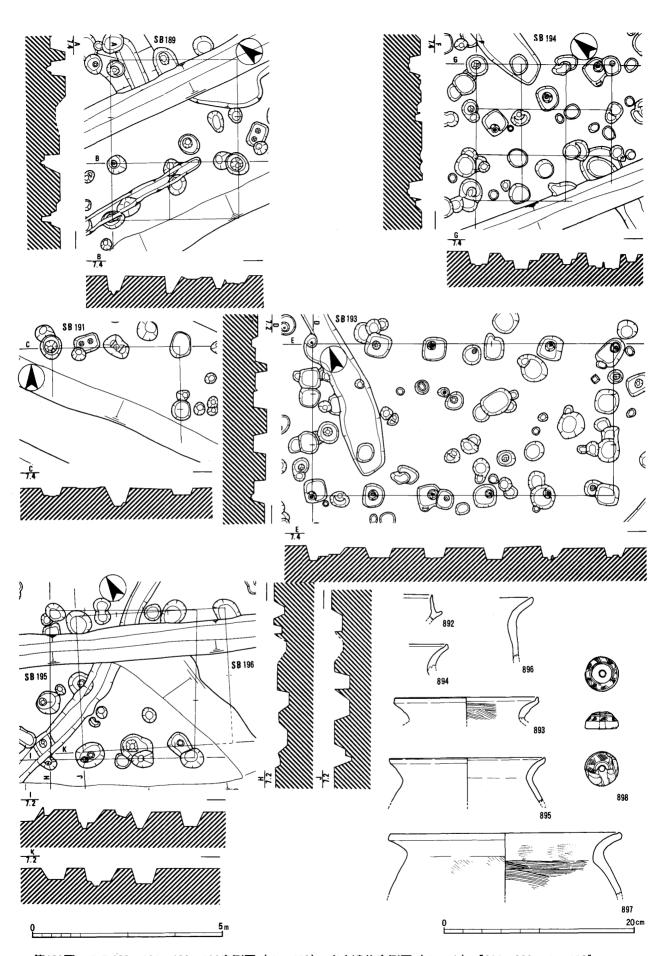


— 101 —

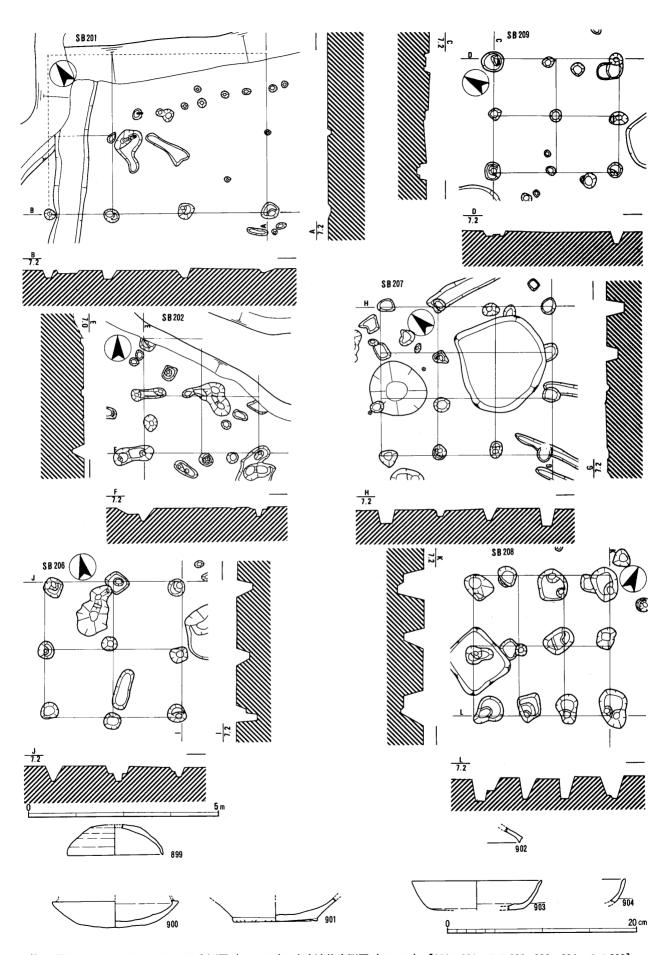


**— 102 —** 

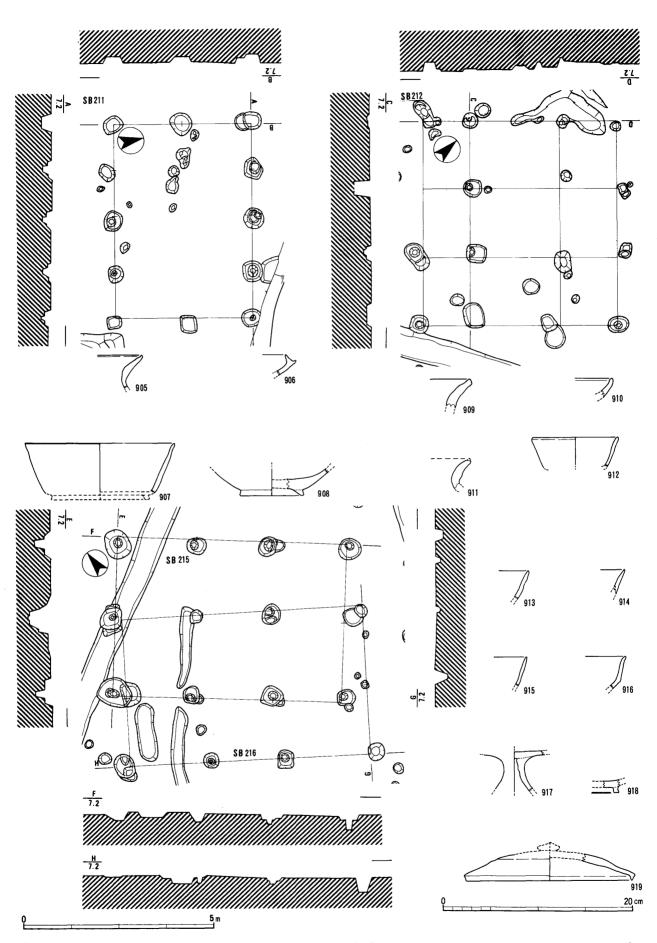




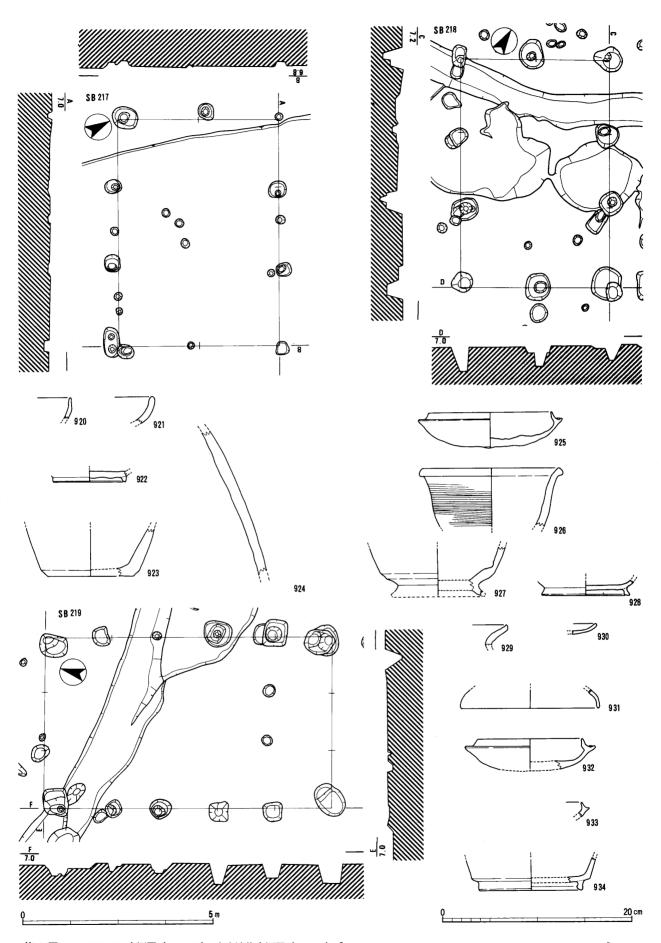
第120図 SB189・191・193~196実測図(1:100) 出土遺物実測図(1:4) [892~898:SB196]



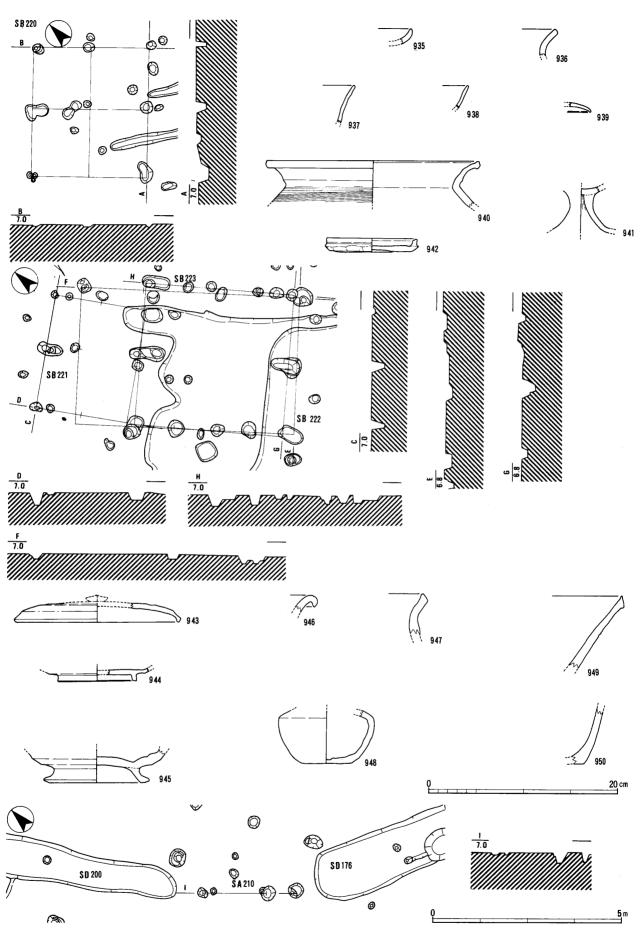
第121図 SB201・202・206~209実測図(1:100) 出土遺物実測図(1:4) [899~901:SB206, 902~904:SB208]



第122図 SB211・212・215・216実測図(1:100) 出土遺物実測図(1:4) [905~908:SB211, 909~912:SB212, 913~919:SB215]



第123図 SB217~219実測図(1:100) 出土遺物実測図(1:4) [920~923:SB217, 924~928:SB218, 929~934:SB219]



第124図 SB220~223、SA210実測図(1:100) 出土遺物実測図(1:4) [935~942:SB220, 943~950:SB221]

	間数(間)		桁	行	12.1.1.1		m+ 40			
遺構名	桁行×梁行(m)	柱間寸法 (m)	梁	行	棟方向	柱掘形・柱根・柱痕跡 	時代	図版番号	備	考
	2 ×( 2 )	1.8+1.8			E32° S	径20~30cmの円形	(奈良)	M*100 FFF		
SB11	3.6×3.3	1.65+1.65			東西棟	深さ15cm〜25cm		第100図		
C D 1 0	3 × 2	1.5+1.35+1	.5		N37° E	径30~40cmの円形	(飛鳥)	第100図	概報番号	A地区SB1
S B 1 2	4.35×3.6	1.8+1.8	•••••		南北棟	深さ35cm~50cm 柱痕跡径10~20cm		95100E		
SB13	3 × 2	1.65+1.2+1			E 28° S	径10~30cmの円形 深さ15cm~20cm	(奈良)	第100図	概報番号	A地区SB3
3613	4.5×3.0	1.8+1.2			東西棟	柱痕跡径10~20cm		A3100E		
S B 1 4	身舎2×2 北・西面庇	1.8+1.8+庇	1.8		E18° S	径20~40cmの円形 深さ20cm~30cm 柱痕跡径10~20cm	飛鳥 以降	第100図	概報番号:	· A地区SB4
	身舎3.6×3.0 庇 各1.8	1.5+1.5+庇	1.8		東西棟					
S B 1 5	4 × 2	1.2+1.8+1.8	8+2.1		E 29° S	径20~40cmの円形 深さ20cm~25cm	(奈良)	第100図	概報番号	: A地区SB5
	6.9×3.0	1.5+1.5			東西棟	柱痕跡径20cm				
SB17	3×2 総柱	2.25+1.8+1	.8		E 28° S	径20~30cmの円形 深さ25cm~50cm	(奈良)	(奈良) 第101図		
	5.85×4.5	2.1+2.4			東西棟					
SB18	3 × 2	1.65+1.65+	1.65		E34° S	径25~30cmの円形 深さ10cm~20cm	(奈良)	第101図	概報番号	: A地区SB2
	4.95×3.3	1.65+1.65		×	東西棟					
SB25	5 × 1 ?	0.65+0.65+0	.65+0.65		E24° S	径30~50cmの円形 深さ20cm~30cm	(弥生)	第218図		
	32.5×2.6	2.6			東西棟					
S B 2 6	3 × 2	2.7+2.7+1.5			E15° S	径20~40cmの円形 深さ15cm~30cm	(飛鳥~ 奈良)	第101図		
	6.9×3.3	1.65+1.65			東西棟	柱痕跡径20cm		<u> </u>		
SB27	2 × 2	1.8+1.8			E14° N	径20~40cmの円形 深さ20cm~50cm	飛鳥時代	鳥時代 第101図		
	3.6×3.0	1.5+1.5			東西棟	柱痕跡径20cm				
S B 2 8	身舎2×2 総柱 北東西面庇	庇1.5+2.4+ +庇1.5	2.4		E 22° S . 東西棟	径30〜40cmの円形 深さ 5 cm〜25cm	平安時代	第101図	概報番号	: A地区SB6
	身舎4.8×4.5 庇北0.9東西各1.5	庇0.9+2.25-	+2.25							
SB36	3×3 総柱	1.5+1.2+1.	5		N 0°	径40~90cmの円形 深さ30cm~50cm	(飛鳥)	第102図	概報番号	: B地区SB1
	4.2×4.2	1.5+1.2+1.	5			柱痕跡径20~30cm				werr
S B 3 7	2 × 2	1.8+1.8			E 24° S	径30~90cmの円形 深さ25cm~40cm	(古墳~ 飛鳥)	第102図	概報番号	: B地区SB2
	3.6+3.0	1.5+1.5			東西棟	柱痕跡径20~30cm				
SB38	3×2 総柱	1.6+1.6+1.	6		E38° S	径40~90cmの円形 深さ25cm~45cm	奈良時代	第102図	概報番号	: B地区SB5
	4.8×4.2	2.1+2.1		-	東西棟	柱痕跡径20cm				
SB39	4×3 総柱	1.5+1.35+1	.35+1.2		E 21° S	径20~90cmの円形 深さ25cm~35cm	飛鳥時代	第102図	概報番号	: B地区SB4
	5.4×3.9	1.5+1.2+1.	2		東西棟	柱痕跡径20~30cm	,			
SB40	3×2 総柱	1.5+1.2+1.	5		N28° E	径20~80cmの円形 深さ20cm~25cm	奈良時代 後期	第102図	概報番号	: B地区SB3
	4.2×3.75	1.95+1.8			南北棟	柱痕跡径20cm				

第6表 掘立柱建物一覧表1

遺構名	間数(間)	析 行 柱間寸法	棟方向	   柱掘形・柱根・柱痕跡	時代	図版番号	備考
JE 177-7CI	桁行×梁行(m)	(m) 梁 行	1末/月刊	111410	## 1 C	四次田分	- and
C D 4 1	3×2 総柱	1.2+1.05+1.2	N20° E	径40~80cmの円形	飛鳥~奈良	第103図	概報番号:B地区SB7
S B 4 1	3.45×3.3	1.65+1.65	南北棟	深さ20cm~35cm 柱根径15cm		弗103区	
0.0.4.0	3×2 総柱	1.35+1.2+1.2	N20° E	径40~60cmの円形	奈良時代	<b>6</b> 251.00 ₪	概報番号:B地区SB6
SB42	3.75×3.6	1.8+1.8	南北棟	深さ25cm~45cm 柱痕跡径20cm		第103図	
C D 4 0	3 × 3	1.5+1.5+1.5	N6°E	径20~80cmの円形 深さ10cm~40cm	(飛鳥)	第103図	
SB43	4.5×3.3	1.1+1.1+1.1	南北棟	保さ10cm~40cm 柱痕跡径20cm		<b>第100</b> 区	
0 D 4 4	身舎2×2 南・東面庇	2.1+2.1+庇2.4	E43° S	径30~50cmの円形 深さ25cm~35cm	(平安)	AAX 1 0 0 1007	
SB44	4.2×2.4 南面庇1.8 東面庇2.4	1.2+1.2+庇1.8	東西棟	柱痕跡径20cm		第103図	
SB45	5 × 2	1.8+1.5+1.5+1.8+1.8	E43° S	径40~80cmの円形 深さ20cm~40cm	奈良前期	第103図	概報番号: B地区SB8
2040	8.4×5.1	2.55+2.55	東西棟	柱痕跡径10~20cm		3710023	
SB46	3 × 2 ( 3 )	1.5+1.5+1.8	E 38° S	径20~70cmの円形 深さ15cm~35cm 柱痕跡径20cm	飛鳥時代	第104図	南北棟の可能性もあり その場合N38°E
5540	4.8×3.6	1.5+2.1 (1.2+1.5+0.9)	東西棟				C V M L I NOO L
SB47	3 × 2	2.1+2.1+2.1	E 35° S	径40~70cmの円形 深さ20cm~30cm 柱根 径13cm	奈良時代	第104図	概報番号:B地区SB10
5547	6.3×3.9	1.95+1.95	東西棟			7010183	
SB48	2×2 総柱	2.4+2.4	E 35° S	深さ15cm~25cm	(奈良)	第104図	
	4.8×3.6	1.8+1.8	東西棟				
SB49	3×2 総柱	1.35+1.2+1.35	N37° W	径30~50cmの円形 深さ30cm~35cm	奈良時代 第	第104図	概報番号: B地区SB9
	3.9×3.6	1.8+1.8	南北棟	柱痕跡径10~20cm			
SB50	4 × 2	1.65+1.8+1.8+2.4	N39° W	径30~70cmの円形 深さ35cm~40cm	(奈良)	第104図	
	7.65×4.2	2.1+2.1	南北棟	柱痕跡径10~20cm			
S B 5 1	3 × 2	1.95+1.95+1.95	E 35° S	径30~60cmの円形 深さ15cm~20cm	(奈良)	第105図	概報番号:B地区SB11
	5.85×3.9	1.95+1.95	東西棟	柱痕跡径10cm			
SB65	3×3 総柱	1.2+1.5+1.2	E37° S	径30~60cmの円形 深さ25cm~45cm	飛鳥時代	第105図	概報番号:B地区SB12
	3.9×3.6	1.2+1.2+1.2	東西棟	柱痕跡径20cm			
SB66	2×2 総柱	1.65+1.65	N33° E	径20~60cmの円形 深さ20cm~30cm	(奈良)	第105図	概報番号:B地区SB13
	3.3×3.3	1.65+1.65		柱痕跡径20cm		,	
SB67	身舎3×3 北面庇	1.5+1.5+1.5 庇(1.2+1.2)+0.9+1.2	N34° E	径20~60cmの円形 深さ10cm~30cm	(奈良)	第105図	
	4.5×4.5 庇1.5	庇1.5+1.5+1.5+1.5		柱痕跡径20cm			
SB68	3 × 2	2.1+1.8+1.8	N28° W	径20~50cmの円形 深さ15cm~35cm	(奈良)	第105図	北1間分は床はりの可能性
	5.7×3.6	1.8+1.8	南北棟	柱痕跡径10cm		45105区	
SB72	3×2 総柱	1.5+1.5+1.5	E 42° S	径30~60cmの円形 深さ cm~ cm	飛鳥時代	第106図	概報番号:B地区SB15
22.2	4.5×3.0	1.5+1.5	東西棟	柱痕跡径20cm		>1	

遺構名	間数(間)	桁 行 . 柱間寸法	棟方向	柱掘形・柱根・柱痕跡	時代	図版番号	備考
WE 1117-121	桁行×梁行(m)	(m) 梁 行	126231-3		,	данх д	, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,
SB73	2×2 総柱	1.65+1.5	N32° E	径30~40cmの円形 深さ20cm~30cm	古墳~飛鳥	第106図	
	3.9×3.9	1.65+1.5		柱痕跡径20cm			
SB74	3×2 総柱	1.2+1.2+1.5	N18° E	径30~50cmの円形 深さ25cm~35cm	奈良時代	第106図	概報番号:B地区SB14
	3.9×2.7	1.2+1.5	南北棟	柱痕跡径20cm			
SB79	3×2 総柱	1.2+1.2+1.2	E12° S	径50cmの円形 深さ20cm~25cm	古墳~飛鳥	第106図	概報番号:B地区SB16
	3.6×3.6	1.8+1.8	東西棟	柱痕跡径20cm			
S B 8 0	身舎 3 × 3	1.5+1.5+1.5+庇1.2	E 22°S		飛鳥時代	第106図	東に庇の出る可能性あり
	4.5×4.2	1.8+1.2+1.2					
SB87	2 × 2	2.25+1.95		径30~50cmの円形 深さ15cm~30cm	飛鳥時代	第106図	概報番号:B地区SB20
	4.2×3.9	1.95+1.95	東西棟	柱痕跡径15cm			
S B 8 8	3×2 総柱	2.1+2.1+2.55	E17° S	E17°S	平安後期	第107図	概報番号: B地区SB19 南東隅土坑?
	6.75×4.8	2.4+2.4	東西棟				
SB89	3×2 総柱	1.65+1.5+1.5	E37° N	径30~70cmの円形 深さ20cm~50cm	(奈良)	第107図	概報番号:B地区SB18
	4.65×3.6	1.8+1.8	東西棟				
SB90	2以上×2総柱	1.65+1.65+ α	N37° W	37°W 径50~70cmの円形 深さ15cm~25cm	(奈良)	第107図	
	3.3以上×4.2	2.4+1.8	南北棟				
SB91	2以上×2総柱	1.8+1.8+ α	E42°S	径40~70cmの円形 深さ25cm	飛鳥時代	第107図	概報番号: B地区SB33
	3.6以上×3.6	1.8+1.8	東西棟	柱痕跡径20~30cm			
SB92	2以上×2	α +1.35+1.65	N26° W	径40~60cmの円形 深さ25cm	奈良前期 第107図	第107図	概報番号:B地区SB34
	3.0以上×3.3	1.65+1.65	南北棟	柱痕跡径10~20cm			
SB93	3×1以上	1.2+1.05+1.5	N44° E	50~80cmの方形 深さ20cm	(飛鳥)	第107図	
	3.75×-	<u> </u>	南北棟	柱痕跡径30cm			
SB94	4 × 2	1.5+1.5+1.5+1.35	N16° E	径20~60cmの円形 深さ10cm~20cm	(飛鳥~ 奈良)	第108図	概報番号:B地区SB35
	5.85×4.05	1.95+2.1	南北棟	柱痕跡径10cm			
SB95	3 × 2	1.5+1.8+1.5	E7°N	径30~60cmの円形 深さ15cm~25cm	飛鳥時代	第108図	
	4.8×3.9	2.1+1.8	東西棟	柱痕跡径15~20cm			
SB96	4 × 2	1.35+1.65+1.5+1.2	E44°S	径30~60cmの円形 深さ20cm~35cm	飛鳥時代	第108図	概報番号:B地区SB47
	5.7×3.9	1.95+1.95	東西棟	柱痕跡径20cm			
SB97	3 × 2	1.95+2.25+1.95	N38° W	径40~60cmの円形 深さ20cm~35cm	飛鳥時代	第108図	概報番号:B地区SB46
	6.15×4.2	2.1+2.1	南北棟	保さ20cm~35cm 柱痕跡径20cm		₩100円	
SB98	2×2 総柱	1.8+2.1	N20° W	径30~80cmの円形 深さ25cm~50cm	飛鳥~奈良 時代	第108図	概報番号:B地区SB45
2200	3.9×3.15	1.5+1.65	南北棟	柱根径10cm	-919	71-100E	

第8表 掘立柱建物一覧表3

遺構名	間数(間)	桁 行	棟方向	杜掘形・柱根・柱痕跡	時代	図版番号	備考
<b>运行</b> 口	桁行×梁行(m)	(m) 梁 行	1 <del>/</del> 1/ 1/ 1/ 1/ 1/ 1/ 1/ 1/ 1/ 1/ 1/ 1/ 1/	1114470、111次,111次的	H-GT   C	<b>四瓜田</b> 7	ия <i>э</i>
C D O O	3×1以上総柱	1.2+1.2+1.2	N28° W	径60~80cmの円形	奈良時代?	AMC 1 0 0 157	概報番号:B地区SB44
SB99	3.6×1.65以上	1.65 + α	市北棟	深さ20cm 柱痕跡径40cm		第108図	
C D 100	2×2 総柱	1.5+1.5	N45° E	径40~60cmの円形	古墳時代	##c100 EVI	概報番号:B地区SB56
S B 100	3.0×3.0	1.5+1.5		深さ20cm~25cm 柱痕跡径20cm		第109図	
0.0104	3×2 総柱	1.2+1.5+1.2	N43° W	径20~40cmの円形	奈良時代	##:100 EVI	概報番号:B地区SB57
S B 104	3.9×3.6	1.8+1.8	南北棟	深さ20cm~25cm 柱痕跡径20cm		第109図	
0.7100	2×2 総柱	1.8+1.8	E37° S	径25~35cmの円形	奈良時代	After a control	概報番号:B地区SB21
S B 109	3.6×2.7	1.35+1.35	東西棟	深さ20cm~25cm		第109図	
0.7110	2×2 総柱	1.8+1.8	N25° E	径40~60cmの円形	(古墳~	Mr. 4 O O ETT	概報番号:B地区SB22
S B110	3.6×3.3	1.65+1.65	市北棟	深さ25cm~30cm 柱痕跡径20cm	飛鳥)	第109図	
<b></b>	3 × 2	1.2+1.5+1.2	N 0° W	径40~70cmの円形	(飛鳥)	Address	概報番号:B地区SB23
S B 111	3.9×3.6	1.8+1.8(2.1+1.5)	市北棟	深さ20cm~30cm 柱痕跡径20cm		第109図	
	3×2 総柱	1.5+1.2+1.35	E14° S	径50cmの円形 深さ30cm~40cm 柱痕跡径20cm	飛鳥~奈良		概報番号:B地区SB24
S B112	4.05×3.6	1.8+1.8	東西棟		舟1	第109図	
	3×2 総柱	1.2+1.2+1.2	N41° E	径40~70cmの円形 深さ30cm~35cm 柱痕跡径20~30cm	古墳~奈良	*****	概報番号:B地区SB25
S B 113	3.6×3.6	1.8+1.8	… 南北棟			第110図	
0 D 115	4 × 2	1.2+1.8+2.1+1.8	E24° S	径20~50cmの円形	(古墳~		概報番号:B地区SB26
S B 115	6.9×3.9	2.1+1.8	東西棟	深さ25cm~30cm   柱痕跡径20cm	飛鳥)	第110図	
0 D 110	2 × 2	2.1+2.7	N29° W	径20~60cmの円形	飛鳥時代	<b>4</b> 45110 ₪	
S B 118	4.8×3.0	1.5+1.5	南北棟	深さ10cm~25cm		第110図	
0.0110	3 × 3	1.3+1.3+1.3	N32° W	径30~50cmの円形	飛鳥時代	概報番号:B地区SB38	
S B 119	3.9×3.9	1.3+1.3+1.3	•	深さ30cm~35cm 柱痕跡径20cm		第110図	
0.7100	3 × 2	1.8+1.95+1.65	N35° W	径40~70cmの円形	古墳時代	M*440 EI	概報番号: B地区SB37
S B 120	5.4×3.9	1.95+1.95	南北棟	深さ35cm〜40cm   柱痕跡径10〜20cm		第110図	
C D 101	3 × 3	1.35+1.35+1.35	N34° E	径30~60cmの円形	飛鳥時代	After 1 + O First	概報番号: B地区SB36
S B 121	4.05×3.6	1.2+1.2+1.2	南北棟	深さ25cm~40cm 柱痕跡径20cm		第110図	
	3×2 総柱	1.2+1.2+1.2	N43° E	径30~60cmの円形	奈良時代	Art 1 1 T	概報番号: B地区SB48
S B 124	3.6×3.3	1.65+1.65	南北棟	深さ20cm~30cm 柱痕跡径20~30cm		第111図	
C P.16-	3×2 総柱	1.5+0.9+1.5	N14° E	径40~50cmの円形	飛鳥時代	Arts 4.4.	概報番号: B地区SB49
S B 125	3.9×3.6	1.8+1.8	南北棟	深さ30cm~35cm 柱痕跡径20~30cm		第111図	
	3 × 3	1.5+1.65+1.65	E34° S	径40~60cmの円形	飛鳥~	<b>M</b>	概報番号: B地区SB50
S B 126	4.8×3.9	1.2+1.35+1.35	東西棟	深さ25cm~30cm 柱痕跡径20cm	奈良初	第111図	
	3×2 総柱	1.2+1.2+1.2	N36° E	径40~60cmの円形	奈良時代		概報番号: B地区SB51
S B 127	3.6×3.3	1.65+1.65	 南北棟	深さ15cm~30cm   柱痕跡径20~30cm		第111図	

第9表 掘立柱建物一覧表4

海镰夕	間数(間)	桁 行	棟方向	柱掘形・柱根・柱痕跡	時代	図版番号	備考
遺構名	桁行×梁行(m)	柱間寸法	株刀円	仕堀形・住保・住保跡	P417	凶似雷马	1/H +5
	3 × 3	1.5+1.8+0.9	N7°W	径50~70cmの円形	飛鳥時代	1 .	
S B 128	4.2×3.6	1.2+0.9+1.5	… 南北棟	深さ30cm~40cm	6 c末	第111図	
C D 100	3×3 総柱	1.2+1.5+1.5	N 7° W	径40~70cmの円形	飛鳥時代	<b>₩</b> 111₩	概報番号:B地区SB60
S B 129	4.2×3.6	1.2+1.2+1.2	南北棟	深さ30cm~45cm 柱痕跡径25~30cm		第111図	
C D 120	3×3 総柱	1.2+1.2+1.2	E40° N	径20~50cmの円形 深さ20cm	飛鳥時代	第111図	
S B 130	3.6×3.3	1.65 + 1.65	東西棟	柱痕跡径20cm		WHIII EN	
S B 131	3×2 総柱	1.35+1.2+1.5	E 4° S	径40~60cmの円形 深さ25cm~30cm	(飛鳥)	第111図	概報番号:B地区SB61
3 1131	4.05×3.0	1.5+1.5	東西棟	柱痕跡径10~20cm		77111E	
S B 134	身舎3×3 南面庇	1.2+1.5+1.35+庇1.2	N38° E	径40~50cmの円形 深さ25cm~30cm 柱痕跡径20~30cm	(奈良)	第112図	概報番号: B地区SB59
	4.05×3.9 庇1.2	1.2+1.5+1.2	南北棟	The Hard		7,5112[2]	
S B 135	3 × 2	1.5+1.5+1.5	N36° E	径30~50cmの円形 深さ25cm~30cm	(奈良)	第112図	概報番号: B地区SB58 建て替えの可能性あり
3 1100	4.5×3.0	1.5+1.5	南北棟	柱痕跡径20cm			Let a Kon had wy
S B136	3 × 2	1.5+1.8+1.5	N37° E	径50~60cmの円形 深さ25cm~35cm 柱痕跡径12~18cm	(飛鳥)	第112図	
3 B 130	4.8×3.0	1.5+1.5	南北棟			37112 KZ	
S B 137	2×2 総柱	1.8+1.8	N30° E	径40~80cmの円形 深さ20cm~35cm 柱痕跡径12cm	飛鳥~奈良 第112[	第112図	
3 1107	3.6×3.6	1.8+1.8	南北棟				
S B 138	3×1以上総柱	1.2+1.5+1.5	E 37° S	径50~80cmの円形 深さ40cm	(飛鳥)	第112図	
	4.4×1.8以上	1.8+ α	東西棟	柱痕跡径21cm		_	
S B 139	3 × 2	2.1+1.5+1.8	N4° E	径30~50cmの円形 深さ30cm~40cm	飛鳥時代 第112回	第112図	桁行1.5+2.1+1.8 の可能性あり
5 D 100	5.4×3.0	1.5+1.5	南北棟	par C occur 100m		жи	, and the property of
S B 140	3×2 総柱	1.8+1.5+1.8	E35° S	径50~100cmの円形 深さ30cm~50cm	(飛鳥)	第112図	
3 B 140	5.1×3.9	1.8+2.1	東西棟	柱痕跡径21~27cm		No. 11 P. C.	
S B143	4 × 2	1.5+1.2+1.8+1.8	E 37° S	径30~100cmの円形 深さ15cm~20cm	飛鳥時代	第112図	
5 5 1 10	6.3×3.6	1.8+1.8	東西棟	柱痕跡径20cm		,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	
S B 145	4以上×2	$1.5+1.35+1.5+1.5+\alpha$	N27° W	径40~60cmの円形 深さ35cm~40cm	奈良時代	第113図	概報番号:B地区SB29
S D 140	5.85以上×3.6	1.8+1.8	南北棟	柱痕跡径25cm		24110[Z]	
S B146	3 × 2	1.8+1.5+1.8	E43° S	径20~40cmの円形 深さ15cm~30cm	飛鳥~奈良	第113図	概報番号:B地区SB30
S D 140	5.1×4.5	2.25 + 2.25	東西棟	株さ15cm~50cm 柱痕跡径12cm		M2 T T O [2]	
C D 147	4 × 3	1.95+1.8+1.5+1.8	E43° S	径40~80cmの円形 深さ10cm~30cm	奈良時代	第113図	概報番号: B地区SB27 SB148→SB147へ建て替え
S B 147	7.05×5.1	1.65+1.8+1.65	東西棟	株さ10cm~30cm   柱痕跡径21cm		(文) (11 tck	の可能性あり
C D 140	4 × 2	1.65+1.8+1.8+1.65	E37° S	径40~70cmの円形 深さ20cm~30cm	古墳~飛鳥	第113図	概報番号: B地区SB28 SB148→SB147へ建て替え
S B 148	6.9×4.8	2.4+2.4	東西棟	深さ20cm~30cm 柱痕跡径15~24cm		<b>新113</b> 区	SB148→SB147へ建て替え の可能性あり

第10表 掘立柱建物一覧表 5

海掛力	間数(間)	桁 行	抽土台		m+ //s		<u> </u>	
遺構名	桁行×梁行(m)	- 柱間寸法 (m) 梁 行	棟方向	杜掘形・柱根・柱痕跡	時代	図版番号	備考	
0.7440	4 × 2	1.65+1.65+1.65+1.65	E11° S	径50~90cmの円形	古墳~飛鳥		桁には猫石を置いていた可	
S B 149	6.6×4.8	2.4+2.4	東西棟	深さ30cm~45cm 柱痕跡径20cm		第114図	能性あり SB156より古い	
S B 150	身舎 5 × 3 北面庇	1.8+1.8+1.65+1.65+1.8	N31° W	径50~100cmの円形 深さ25cm~35cm 柱痕跡径20~30cm	飛鳥時代	第114図	概報番号:B地区SB31	
	8.7×5.4 庇2.25	1.8+1.8+1.8+庇2.25	南北棟	11.0000 E20 Social		MILLE		
S B 152	3 × 2	2.4+2.7+2.1 (3.0+2.1+2.1)	E23° N	E 23°N 径20~40cmの円形 深さ10cm~20cm 柱痕跡径15cm		第107図		
	7.2×4.65	2.25+2.4	東西棟	in just in the same				
S B 155	3 × 2	1.8+1.8+1.65	E43° S	径40~60cmの円形 深さ25cm~30cm	(奈良)	第114図		
5 B 100	5.25×3.6	1.8+1.8	東西棟	柱痕跡径18~21cm		Mailate		
S B 156	3 × 2	2.1+2.25+2.25	E41°S	径40~70cmの円形 深さ25cm~30cm	奈良時代	第115図	概報番号:B地区SB32 SB149より新しい	
5 B 100	6.6×4.8	2.4+2.4	東西棟	柱痕跡径20cm		771110K	しロゴコルマ カギ(し)	
S B 157	4 × 2	1.2+1.35+1.05+0.75	E28° N	径30~40cmの円形 深さ20cm~25cm	飛鳥時代	第115図		
3 B 101	4.35×3.0	1.5+1.5	東西棟	柱痕跡径20cm		771116F		
S B 158	3 × 2	1.65+2.1+1.65	E 33° S	径40~90cmの円形 深さ25cm~35cm	飛鳥時代	飛鳥時代 第115図		
3 D 100	5.4×4.05	2.1+1.95	東西棟	柱痕跡径20cm		N I I I I		
S B 159	4 × 2	1.5+1.65+1.65+1.5	N43° W	【 径50~60cmの円形 深さ50cm~60cm	飛鳥時代	第115図	概報番号:B地区SB39	
5 D 100	6.3×4.05	1.95+2.1	南北棟	柱痕跡径15~25cm		W1110		
S B 160	5 × 3	1.65+1.65+1.8+1.8+1.65	E 23° S	径50~80cmの円形 深さ25cm~30cm	古墳~飛鳥	費~飛鳥 第116図	概報番号:B地区SB40	
3 B 100	8.55×5.25	1.65+1.8+1.8	東西棟	柱痕跡径12~32cm		区0111 <del>6k</del>		
S B 161	5 × 3	1.5+1.35+1.35+1.35+1.5	E21° S	径30~100cmの円形 深さ25cm~35cm	(飛鳥)	第116図		
5 5 101	7.05×4.5	1.5+1.5+1.5	東西棟	柱痕跡径20cm		₩110⊠		
S B 162	4 × 2	1.8+1.8+1.8+1.8	E 23° S	径50~90cmの円形 深さ35cm~40cm	古墳~飛鳥	第115図		
5 D 102	7.2×4.2	2.1+2.1	東西棟	柱痕跡径18~21cm		27110E		
S B 164	4 × 2	1.65+1.5+1.65+1.65	E43° S	径30~60cmの円形 深さ20cm~25cm	奈良時代	第116図	概報番号:B地区SB41	
5 5 104	6.45×4.05	1.95+2.1	東西棟	柱痕跡径10cm		₩1110⊠		
S B 165	4 × 2	1.2+1.05+1.5+1.8	N13° W	径45~55cmの円形 深さ30cm~40cm	飛鳥時代	## 11 C [W]		
2 D 103	9.6×4.35	2.1+2.25	南北棟	株さ30cm~40cm 柱痕跡径20~25cm		第116図		
S B167	3 × 2	2.1+1.95+1.95	N22° W	径40~60cmの円形 深さ25cm~35cm	奈良前期	第117図	概報番号:B地区SB42	
2 10101	6.0×3.9	1.95+1.95	南北棟	株さ25cm~35cm 柱痕跡径12~15cm		おけて図		
S B 168	3 × 3	1.95+1.8+1.95	N28° W	径40~70cmの円形 深さ25cm~30cm	奈良時代	<b>佐</b> 117阿		
2 1100	5.7×3.75	1.2+1.35+1.2	南北棟	株さ25cm~50cm 柱痕跡径18~21cm		第117図		
S B 169	4 × 3	1.95+1.95+1.8+1.5	E 23° N	径30~90cmの円形 深さ20cm~30cm	(飛鳥)	<b>结</b> 11057	概報番号: B地区SB43	
9 D 109	7.2×3.6	0.9+1.2+1.5	東西棟	深さ20cm~30cm 柱痕跡径20cm		第116図		

第11表 掘立柱建物一覧表 6

	間数(間)		桁	行	T				
遺構名	析行×梁行(m)	- 柱間寸法 (m)	梁	行	棟方向 	柱掘形・柱根・柱痕跡   	時代 	図版番号	備考
	4 × 2	1.8+1.8+1.8	3+1.8		N22° W	径50~80cmの円形	飛鳥時代	****	概報番号:B地区SB55
S B 170	5.4×4.05	1.95+2.1			南北棟	深さ30cm~35cm 柱痕跡径15~21cm		第117図	
	5 × 2	1.65+1.35+	1.5+1.5	5+1.8	N39° W	径40~50cmの円形	飛鳥時代	Mr. 1 BES	概報番号:B地区SB53
S B 171	7.8×4.2	2.1+2.1			南北棟	深さ25cm〜30cm 柱痕跡径12〜21cm	,	第117図	
C D 170	3 × 2	1.95+2.1+1	.95		N40° W	径40~80cmの円形	飛鳥時代	Ada 117 Tarl	概報番号:B地区SB54
S B172	6.0×3.75	1.95+1.8			南北棟	深さ30cm~45cm   柱痕跡径12~21cm		第117図	
S B 173	身舎 4 × 2 西面庇	身舎1.5+1.8 庇部2.1+1.6			N11° W	深さ25cm~35cm 柱痕跡径20cm		第118図	概報番号: B地区SB68
	6.6×3.9 庇1.35	庇1.35+1.95	+1.95		南北棟			,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	
S B174	2 × 2	1.8+1.8			E24° S	径30~70cmの円形 深さ15cm~30cm	古墳~飛鳥	第118図	概報番号:B地区SB69
0 0 1 1 1	3.6×2.7	1.35+1.35			東西棟	柱痕跡径18cm		7411012	
S B 178	6 × 2	1.5+1.35+1	.5+1.35 +1.5+		E38° N	径30~50cmの円形 深さ15cm~35cm 柱痕跡径10~20cm	飛鳥時代	第118図	
	8.55×4.2	1.95+1.95			東西棟				
S B 179	3 × 2	1.8+1.5+1.8	3		N40° W	径50~70cmの円形 深さ30cm~35cm 柱痕跡径20cm	奈良時代	第118図	概報番号:B地区SB52
	5.1×4.2	2.1+2.1			南北棟				
S B 180	4 × 2	1.65+1.65+	1.65+1	.95	N40° E	径30~50cmの円形 深さ25cm~30cm 柱痕跡径20cm	(飛鳥)	第118図	
	6.9×3.15	1.65+1.5			南北棟				
S B 181	3 × 2	1.5+1.35+1	.8		N1°W	径30~60cmの円形 深さ25cm~30cm	飛鳥時代	第119図	
	4.65×4.2	2.1+2.1			南北棟	柱痕跡径21cm			
S B 182	3 × 2	1.8+1.8+1.8	3		N36° W	径50~70cmの円形 深さ25cm~30cm	飛鳥~奈良 時代	第118図	概報番号:B地区SB62
	5.4×3.6	1.8+1.8			南北棟	柱痕跡径18cm			
S B 184	4 × 3	1.5+1.2+1.3	35+1.8		N13° E	径40~70cmの円形 深さ25cm~40cm	飛鳥時代	第119図	
	5.85×3.6	1.2+1.2+1.2	2		南北棟	柱痕跡径12~30cm			
S B 185	3×3 総柱	1.35+1.35+	1.35		E35° N	径30~60cmの円形 深さ30cm~35cm	(飛鳥)	第119図	概報番号: B地区SB66
	4.05×3.9	1.35+1.2+1	.35		東西棟	柱痕跡径15~24cm			
S B 186	3 × 3	1.2+1.35+1	.35		N37° W	径40~70cmの円形 深さ25cm~35cm	飛鳥時代	第119図	概報番号: B地区SB64
	3.9×3.75	1.35+1.2+1	.2		南北棟	柱痕跡径12cm			
S B 187	2 × 2	1.8+1.8			E20° S	S 径30~60cmの円形 深さ25cm~30cm	飛鳥時代	第119図	概報番号: B地区SB65
	3.6×2.7	1.35+1.35			東西棟	柱痕跡径18~21cm			
S B 188	3 × 1 ( 2 )	1.3+1.3+1.3	3		E27° S	径40~50cmの円形 深さ30cm~40cm	(奈良)	第119図	桁行1.35+1.2+1.35の可能 性
	3.9×4.2	4.2(2.1+2.1)	)		東西棟				総柱の可能性
S B 189	3 × 2	1.5+1.2+1.5	5		E40° N	径40~60cmの円形 深さ30cm~50cm	(飛鳥~ 奈良)	第120図	南1間分は床はりの可能性
881 0 0	4.2×3.3	1.5+1.8			東西棟	柱痕跡径12~32cm			

第12表 掘立柱建物一覧表 7

遺構名	間数(間)	桁 行 . 柱間寸法	棟方向	柱掘形・柱根・柱痕跡	時代	図版番号	備考
W2 117*1-1	桁行×梁行(m)	(m) 梁 行	1,423,113				, J
C D 101	1以上×2	1.65 + α	N1°E	径50~60cmの円形	(飛鳥)	第120図	
S B 191	1.65以上×3.3	1.65+1.65	南北棟	深さ20cm~55cm 柱痕跡径25~35cm		<b>寿120区</b>	
S B 193	5 × 3	1.65+1.5+1.5+1.5+1.65	E19° S	50~80cmの方形 深さ30cm~40cm	飛鳥時代	第120図	概報番号:B地区SB70
2 1 1 2 0	7.8×4.05	1.35+1.35+1.35	東西棟	柱痕跡径21cm 柱根 径10cm		#120 <u>M</u>	
S B 194	3×3 総柱	1.2+1.2+1.2	N41° W	径40~60cmの円形 深さ35cm~40cm	飛鳥時代	第120図	概報番号:B地区SB71
S D 134	3.6×3.6	1.2+1.2+1.2		柱痕跡径12~21cm		<del>77</del> 120[2]	
S B 195	3 × 2 ?	0.9+1.5+1.35	E32° S	径40~50cmの円形 深さ45cm~55cm	(飛鳥~ 奈良)	第120図	梁行3間の可能性あり。そ の場合、桁・梁逆転し、南
2 D 130	3.75×3.9	(2.4)+1.5	東西棟	柱痕跡径18cm	<b>示</b> 及/	77120E	北棟になる。
S B 196	3以上×2	$1.05 + 1.35 + 1.5 + \alpha$	E 28° S	S 径60~80cmの円形 深さ30cm~50cm	飛鳥時代	第120図	SB196→SB195建て替えの 可能性あり
5 B 100	3.9以上×2.6	1.8+1.8	東西棟	柱痕跡径18~27cm		7,1120[2]	7 1011207 /
S B 197	2 × 2	1.95+2.25	E31° S	径30~60cmの円形 深さ20cm~30cm	(飛鳥~ 奈良)	第119図	
5 B 101	4.2×3.3	1.65+1.65	東西棟	柱痕跡径15~21cm	<b>从</b> 及)	7,110	
S B 201	3(?)×2	1.65+1.95+2.1	E31° S	径30~40cmの円形 深さ10cm~25cm	(飛鳥~ 奈良)	発鳥〜 奈良) 第121図	西1間分床はりの可能性あ り
5 D201	5.7(?)×4.2	2.1+2.1	東西棟	IX C TOOM DOOM	<i>XX</i> )	NATE I	,
S B 202	2×2 総柱	1.5+1.5	N 0°	径30~50cmの円形 深さ30cm~35cm	(飛鳥)	第121図	概報番号:大古曽SB21
5 5 2 0 2	3.0×3.0	1.5+1.5	1	柱痕跡径18cm		7,	
S B 206	2×2 総柱	1.8+1.8	N8° E	径40~50cmの円形 深さ25cm~40cm	飛鳥時代 第121図	第121図	概報番号:大古曽SB12
5 B200	3.6×3.6	1.8+1.8		柱痕跡径21cm		NATE LES	
S B 207	3×3 総柱	1.5+1.5+1.5	N43° W	径30~40cmの円形 深さ20cm~50cm	飛鳥時代	第121図	概報番号:大古曽SB10
0 0 20.	4.5×3.9	1.2+1.2+1.5	南北棟	柱痕跡径20~30cm		Детег	
S B 208	3×2 総柱	1.2+1.2+1.2	E25° N	径50~90cmの円形 深さ55cm~70cm	奈良時代	<b>等</b> 代 第121図	概報番号:大古曽SB9 柱堀形が不定形であり、柱
5 B 200	3.6×3.6	1.8+1.8	東西棟	柱痕跡径25~40cm		No. 12.1 Ed	に床束をそえていた可能性
S B 209	2×2 総柱	1.65+1.65	N30° W	径20~50cmの円形 深さ20cm~30cm	(飛鳥)	第121図	概報番号:大古曽SB11
0 0 0 0 0 0	3.3×3.0	1.5+1.5	南北棟	,,,C 200		7,	
S B 211	4 × 2	1.2+1.2+1.5+1.2	E11°S	径40~60cmの円形 深さ25cm	飛鳥時代	第122図	概報番号:大古曽SB5
0 2 2 1 1	5.1×3.6	1.8+1.8	東西棟	柱痕跡径15~30cm		7	
S B 212	3×3 総柱	1.8+1.8+1.8	E41°S	径20~80cmの円形 深さ10cm~25cm	奈良時代	第122図	概報番号:大古曽SB4
0 0 0 0 1 1	5.4×5.1	1.5+2.4+1.2	東西棟	柱痕跡径18~27cm		Детада	
S B 215	3 × 2	2.1+2.1+1.8	E38° S	径50~90cmの円形 深さ30cm~50cm	奈良後期	第122図	概報番号:大古曽SB2
O D 110	6.0×4.2	2.1+2.1	東西棟	柱痕跡径18~27cm		71- YES 103	
S B 216	3 × 2	2.1+1.8+2.4	E34°S	径30~60cmの円形 深さ20cm~40cm	奈良時代	第122図	概報番号:大古曽SB3
	6.3×3.9	2.1+1.8	東西棟	柱痕跡径18cm			
S B 217	3 × 2	1.8+2.1+2.1	E29° S	30~70cmの方形 深さ 5 cm~15cm	奈良時代	第123図	概報番号:大古曽SB1
3 D411	6.0×4.2	2.1+2.1	東西棟	株さ 5 cm~15cm 柱痕跡径18~27cm		M2170[2]	

遺構名	間数(間)	- 柱間寸法	桁	行	棟方向	柱振形・柱根・柱痕跡	時代	図版番号	備考		
退得石	桁行×梁行(m)	(m)	梁	行	17来万円	1114010 1114 1114	P41V	凶脉雷弓	10mm 45		
S B 218	3 × 2	1.95+1.95+2	.1		N31° W	径50~80cmの円形 深さ30cm~60cm	飛鳥後半	第123図	概報番号:大古曽SB7		
5 D 210	6.0×3.9	1.95+1.95			南北棟	株 2 30cm ~ 60cm 柱痕跡径24~27cm		<del>第</del> 143区			
S B 219	5 × 3	1.8+1.2+1.5	+1.5+	1.5	N17° W	40~90cmの方形 深さ30cm~50cm	飛鳥時代 第123図	概報番号:大古曽SB8			
5 D 219	7.5×4.5	1.5+1.5+1.5			南北棟	株 2 50cm ~ 50cm   柱痕跡径30~40cm		<b>新140区</b>			
S B 220	2×2 総柱	1.65+1.8			E44° N	径20~30cmの円形 深さ 5 cm~25cm	奈良時代	第124図	概報番号:大古曽SB6 南北棟の可能性もあり		
5 D 220	3.45×3.0	1.5+1.5			東西棟	休さ 5 cm~25cm		<b>寿124区</b>	maurky 기略正 0 のりり		
S B 221	2 × 2	1.5+1.5			E30° N	径20~50cmの円形 深さ20cm~35cm		第124図	概報番号:大古曽SB13		
3 D 221	3.0×2.4	1.2+1.2			東西棟		奈良前期 	MATERIA			
S B 222	3 × 2	1.65+2.1+1.	95		N37° W	径30~50cmの円形 深さ20cm~25cm	(奈良)	第124図			
3 D 222	5.7×3.6	1.65+1.95			南北棟	柱痕跡径21cm		N2174 21			
S B 223	3 × 2	1.05+1.95+0	.9		N35° W	径30~40cmの円形 深さ20cm~30cm	(飛鳥)	第124図			
3 D 220	3.9×3.75	1.95+1.8			南北棟	AK & ZOCIII - SOCIII		N71645			
S A 1 6	東西5南北3	東西2.1+2.4-		1+2.1	E 29° S	径20~40cmの円形 深さ20cm~30cm	(奈良)	第100図			
	東西11.1南北4.35	南北1.8+1.65	+0.9			柱痕跡径20cm					
S A 210	1	-			E43° S	径30~40cmの円形 深さ 5 cm~25cm	(飛鳥)	第124図			
3 A 210	1.65	-			東西	深さ 5 cm~25cm					

第14表 堀立柱建物一覧表 9 棚列一覧表

#### c. 井戸

S E 52 調査区中央北に位置し、大 溝SD58の北岸にある。径3.3m、深 さ1.4mで円形の素掘り井戸である。 井戸の断面はすり鉢状を呈する。遺構 埋土は大きく3層に分けることができ る。第1層は灰褐色粘質土・褐灰色粘 質土、第Ⅱ層は黒灰色粘質土を基調と して緑灰色砂が入る層である。第Ⅲ層 は灰黒色粘土・黒灰色粘土を基調とし て緑灰色砂が混じる層である。

遺物出土状況 井戸の底部中央から 正立した状態で土師器甕 (956) が出 土しており、頸部には擦れた痕跡が認 められることから、おそらく縄を巻い て釣瓶として利用したものと考えられ

時期は、出土遺物から飛鳥時代から 奈良時代前半と考える。

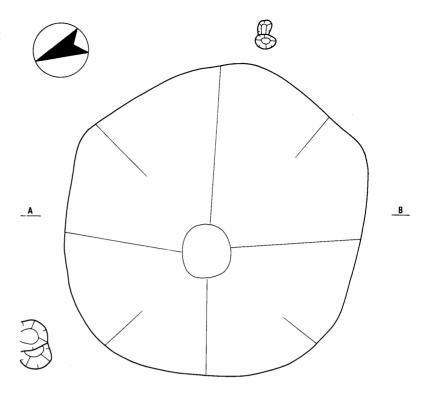
出土遺物 遺物には土師器坏・皿・ 甕や須恵器坏蓋・坏身・碌・甕などの 土器類のほか、曲物や棒状木製品など の木製品、砥石などの石製品も出土し ている。

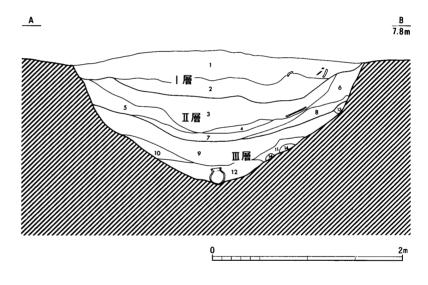
土師器 坏 (951) は、口径19.0cm を測る大振りの坏で、体部外面に沈線 がめぐる。

皿(952・953)は、それぞれ口径 15.0cm・24.0cmで、ともに口縁部の形 態は、内側に肥厚して丸くおさまる。 952の底部外面はヘラケズリしている。 また953は外面全体をヘラケズリして おり、体部の内面には放射状暗文や螺 旋状暗文を施している。

甕(954~959) は、口縁部をつまみ

上げて、端部外面に面をもつもの (956~959)。 口縁 端部を尖り気味におえるもの (958・959)。 口縁部を くの字状に曲げて端部外面に面をもつもの (959) が ある。954は口径14.4cmの小型甕である。955~956・ 958は口径15.2cm~16.2cmの中型甕である。955は体 部の外面全体をヘラケズリし、内面を横方向にハケ



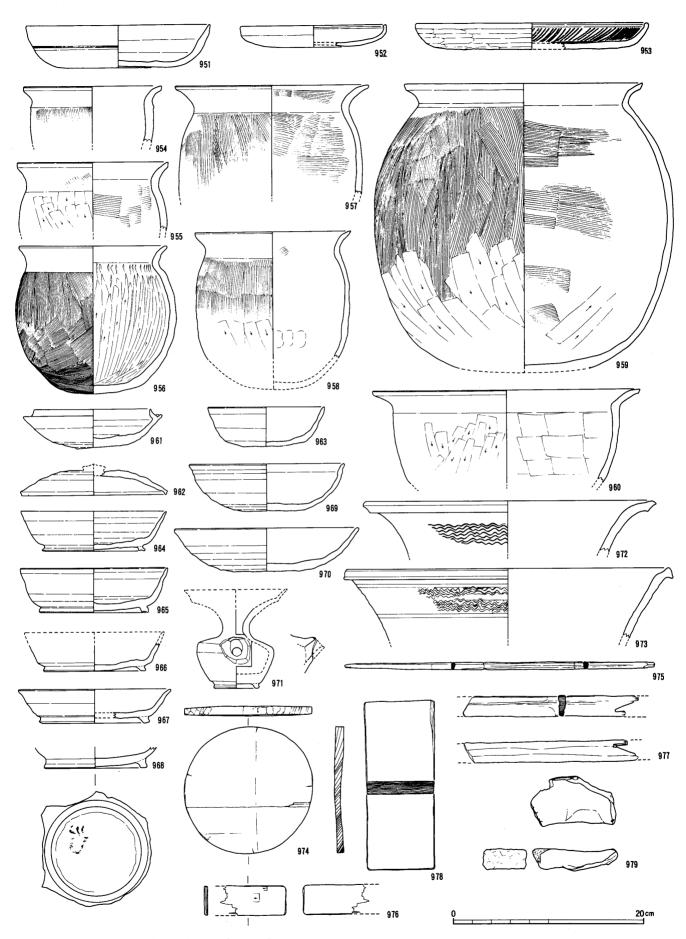


- 灰褐色粘質土 淡褐灰色砂混褐灰色粘質土 褐灰色粘質土 淡黑色粘土 **黒灰色粘質土** 濁緑灰色砂土 黑灰色粘土
- 灰黑色粘土 獨緑灰色砂混黒灰色粘質土 濁灰色砂+濁緑灰色砂(粘土混入) 10
- 11 暗緑灰色砂混粘土 12 黒灰色砂混粘土
- 13 黑色粘質土 14 黒色粘土

第125図 S E 52実測図(1:40)

3

メを施す。956は体部外面を細かいハケメを施し、内 面は縦方向に密にヘラケズリする。958は体部の外面 下半をヘラケズリする。内面下半にユビオサエ痕を とどめる。957·959は、それぞれ口径20.2cm、25.0 cmの大型甕で、957は体部内外面にハケメを施し、959 は体部内外面の下半をヘラケズリする。



第126図 S E 52出土遺物実測図(1:4)

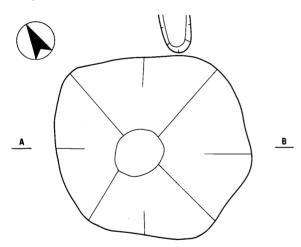
鍋(960)は、口縁部をくの字に外反させ、口縁端部を水平近く曲げて上方につまみ上げる。体部内外ともヘラケズリをおこなう。

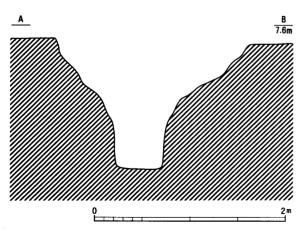
須恵器 坏身 (961) は、古墳時代タイプの坏身である。口径は12.2cmで、底部はヘラ切り未調整である。田辺編年のTK209型式期に比定され、混入品と考えられる。

坏蓋A (962) は、内面にかえりを持たない蓋である。天井部から内湾気味に口縁部に至り、端部を下方に折り曲げる。つまみを欠損するが、偏平な擬宝珠状のつまみが付くと考えられる。

坏A (963) は、高台を持たない坏である。口径 12.1cmを測り、底部はヘラ切り未調整である。

坏B (964~968) は、高台を有する坏である。964~967は丸みをもつ腰部から体部が直線状に立ち上がる。964~968の高台はハの字に開く、968の底部外面には墨痕が残る。転用硯として使用された可能性をもつ。



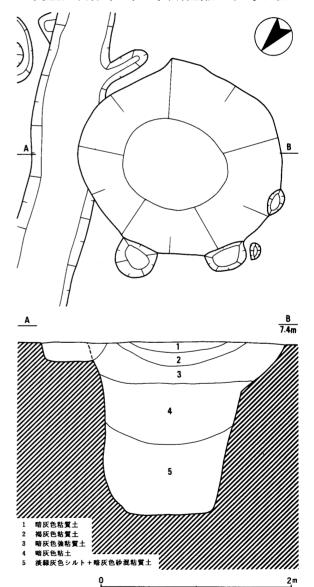


第127図 SE59実測図(1:40)

椀(969・970)は、969は口径に対して器高が高い 椀で口縁部を外反させる。970は口径に対して器高が 低く、体部が斜め上方に直線的に伸びて口縁部を丸 くおさめる。ともに底部から体部下半にロクロケズ リする。

甕(972・973)は広口甕の口縁部である。972は口 縁端部を肥厚させて断面方形を呈する。973は口縁端 部を下方に垂下させ、ともに口縁部外面に波状文を 施す。973は2条の沈線間に施される。

木製品 曲物 (974) は、曲物底板である。口径は



第128図 S E 133実測図(1:40)

26cm~27cmで歪みが見られ、厚さは1.0cmである。側板との接合ため、5か所に不均等に釘痕跡が残る。

用途不明品 (975~978) は、975は棒状の加工製品 である。976~978は板状の木製品で、977は先端を削 る。

石製品 砥石 (979) は、面が凹面になっており、 使用による擦痕が認められる。

S E 59 大溝 S D 58の東側の調査区で検出した井戸である。南北径1.6 m、東西径2.0 m の長円形を呈する。深さは1.3 m で、検出した面から約50 cm程下で段をつくり、段から下は傾斜が急となり細くなる。遺構埋土は、上層が暗灰色粘質土、下層が黒褐色粘土である。

出土遺物 土師器坏・甕や須恵器坏蓋・坏身・高 台坏・高坏などの他、井戸の底部から横櫛や下駄な どの木製品が出土している。遺物から奈良時代のも も含まれるているが、飛鳥時代前半と考える。

土師器 坏 (980) は、口縁部を直線的に外方に立

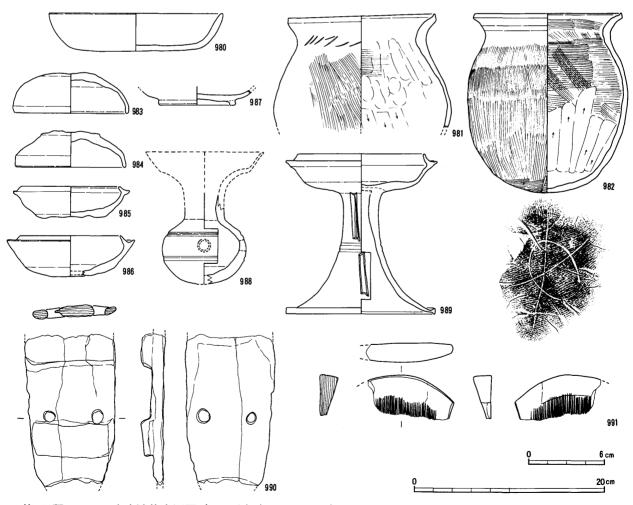
ち上げ、口縁部を丸くおさめる。

甕 (981・982) は、ともに口縁部を上方につまみ上げて端部外面に面をもつ中型の甕である。981・982 の体部はやや長い球状を呈している。調整は、ともに体部外面上半を縦方向、下半を斜め方向に、また内面は上半を横方向にハケメを施し、下半は下から上方向にヘラケズリする。982の底部外面には「⊗」のヘラ記号が見られる。

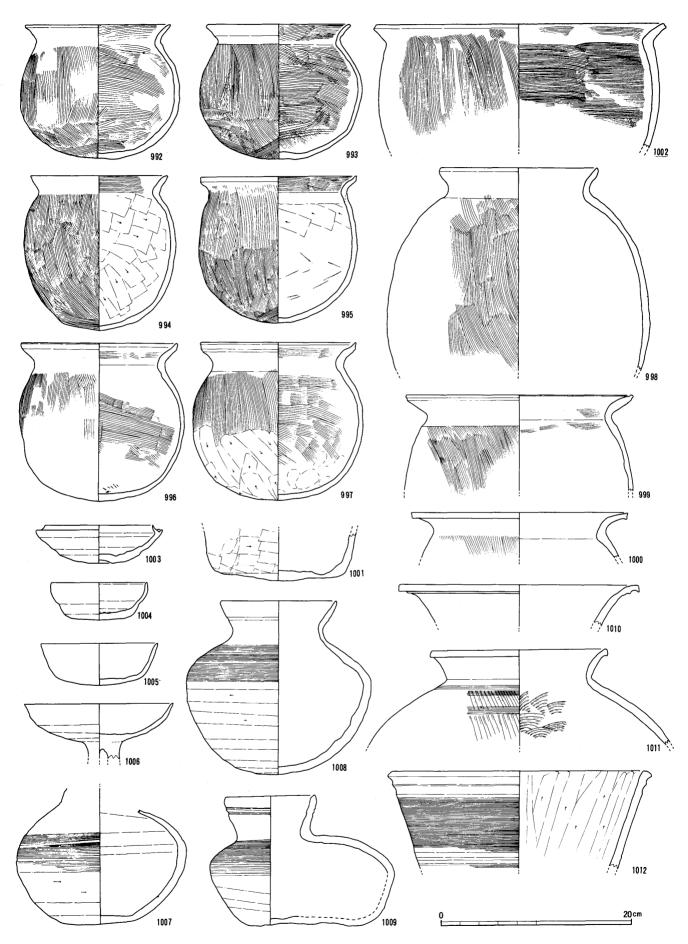
須恵器 坏蓋 (983・984) は、それぞれ口径11.4 cm・11.6cmで、983は、丸みをおびた天井部から口縁部が内湾気味になる。984は、平らな天井部から口縁部を直立気味に屈曲させる。ともに天井部はヘラ切り未調整である。

坏身 (985・986) は、それぞれ口径10.1cm・10.3 cmで、985は受部が短く、立ち上がりも短い。986の 受部は体部に沿って斜め上方にのびる。

井戸の下層から坏蓋(984)と坏身(985)が出土 しており、焼成および法量から984と985はセットに



第129図 SE59出土遺物実測図(1:4)(991は1:3)



第130図 S E 133出土遺物実測図(1:4)

なると考えられる。また984・985よりやや大きい983 と986もやはりセットになると思われる。

坏B (987) は、高台をもつ坏である。底部のやや 内側に断面が方形で接地面を平らにする高台が付い ている。

聴 (988) は、球形の体部に2条の沈線がめぐり、 沈線間に円孔を穿つ。口縁部は欠損しているももの の、頸部は上半で外反し、口縁部は直線的に開くと 考えられる。

高坏(989)は、ゆわゆる長脚二段の有蓋高坏で、 脚部に方形の透孔が穿たれている。

木製品 下駄 (990) は、歯部を削り出した連歯下 駄である。前孔は前縁部が欠損しているために不明 であるが、後孔は後歯の前に 2 か所みられる。前後 の歯部は台部と同じ幅で作っており、歯部の断面は 方形を呈する。台部の前縁部と後縁部は炭化してお り火を受けたと思われる。木取りは柾目取りをする。 BII b型式に相当しよう。

横櫛 (991) は、挽歯式で、背が反り弧状を呈する。 歯は 3 cm当たり平均24枚を挽き出している。残存長 6.2cm、高さ3.2cm、厚さ1.4cmを測る。大溝 S D 58出 土の横櫛より古相を呈する。

SE133 調査区南側のやや西よりに検出した井戸で、径2.0~2.2m、深さ1.0mを測る。南西側で検出面から1m程下から傾斜が急になる。井戸の埋土は、第1層が暗灰色粘質土、第2層が灰褐色砂質土、第3層が暗灰色強粘質土、第4層が暗灰色粘土、第5層が淡緑灰色シルト及び暗灰色砂混粘質土である。時期は、出土遺物から飛鳥時代前半から中頃と考えられる。

土師器 甕 (992~1001) は、口径15cm~17cm前後の中型甕 (992~997) と口径16cm~31cmの長胴甕 (998~1000) がある。中型甕では、頸部がくの字状に外反し、口縁端部が尖り気味におさまるもの (992・994)、丸くおさまるもの (993)、頸部がくの字状に外反して口縁端部を上方につまみ上げ、端部外面に面をもつものや凹面状になるもの (995~997) がある。形態としては体部が球形の甕 (992・993・995・

997)、やや長い球形を呈する甕(994・995・996)に分けることもできる。調整は、992・993・996は体部の外面全面を縦方向にハケメを施し、内面は口縁部から体部全面にハケメを施している。994・995の蹇は、体部外面と口縁部内面はハケ調整するが、体部内面はヘラケズリする。997は体部外面の下半をヘラケズリする。長胴甕は、口縁端部を上方に尖り気味のもの(998)と端部外面に段をもつ(999)と凹面にする(1000)がある。1001は底部のみであるが、甕の底部と考える。

鍋(1002)は、口縁部をく字状に曲げて端部外面 に面をもつ鍋である。体部外面は縦方向のハケメ、 内面は口縁部から体部にかけて横方向のハケメを施 している。

**須恵器** 坏身(1003)は、口径11.2cmで、短い受 部をもち内傾する立ち上がりも短い。

坏A (1004・1005) は、それぞれ口径11.0cm・12.4 cmで、1004は体部が一度内湾した後に、さらに大きく内湾する坏で、底部ヘラ切り未調整である。1005 の底部はヘラ切りの後ナデで調整する。

高坏(1006)は口縁部が緩やかに外反する。また 坏部の底部外面にロクロケズリが見られる。

広口壺(1007・1008)は、1007は口縁部を欠き、 歪みが大きい。1008は口縁部を広く外反させ、体部 最大径は体部の上半にある。口頸部に1条の沈線が めぐり、体部上半部はカキメを施している。

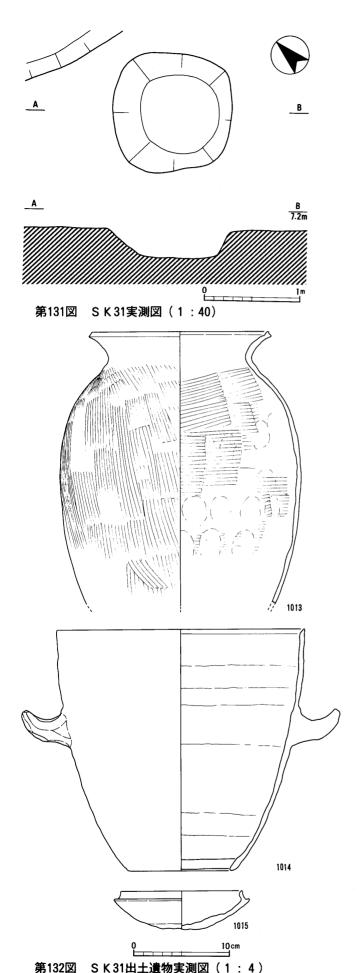
平瓶(1009)は、体部径に対して器高が低く全体に偏平で体部上半にカキメが施され、口頸部に2条の沈線をめぐらす。

甕(1010・1011)は、ともに口縁端部を垂下させる甕で、1010は口縁端部近くに凸線を巡らす。1011 は体部外面に平行タタキのちにカキメを施す。また 内面に同心円状の当て具痕が認められる。ともに頸 部外面には文様帯は見られない。

甑 (1012) は、体部外面にカキメを施し、内面には下方から上方に向けてロクロケズリをおこなう。また口縁部の下および体部に各々2条の凹線をめぐらしている。

#### d. 土坑

SK31 調査区北側SD24の南に位置する。長径



1.4m×短径1.3m、深さ33cmを測る。長軸方向はN4 5°Wである。東側が短い隅丸方形を呈している。断面は西側がやや緩く底部は平らである。

### 出土遺物

土師器 甕 (1013) は長胴甕で、口径18.4cmを測る。口縁端部を上方につまみ上げ、端部外面に面をつくる。体部外面を下から上へハケメを施し、内面上半は横方向にハケメを施す。内面には成形のときのユビオサエ痕が残る。

甑(1014)は、体部外面は磨滅のため調整が不明であるが、内面には粘土紐の痕跡が残る。口径26.0 cm、器高25.4cmである。

**須恵器** 坏身(1015)は、口径12.6cmで、受部が 短く内傾する立ち上がりをもつ。底部はヘラ切り未 調整である。

SK56 調査区中央の西側で検出した。径1.9mの ほぼ円形を呈し、深さは0.8mを測る。長軸方向はN 43°Eである。断面の形態は逆台形状を呈す。

#### 出土遺物

須恵器 坏蓋 (1016) は、復元口径14.2cmで、なだらかに口縁部にいたり、天井部と口縁部との境には稜や沈線はみられず、口縁部の内面に弱い段をもつ。天井部は平坦と考えられる。

坏身(1017)は、復元口径11.8cmで、内傾してや や直立する立ち上がりをもつ。

高杯蓋(1018)は、坏身につまみを付した様な形態を呈する。口径は13.8cmである。

高坏(1019)は、脚部の径が広く、口縁端部を垂下させる。短脚高坏の脚部であろう。

木製品 下駄(1020)は、残存長23.8cm、残存幅10.2cm、高さ2.4cmで、歯部を削り出した連歯下駄である。木取りは柾目取りである。隅丸方形状の前孔と後孔が各1か所みられ、前孔は左に片寄り後孔は後歯の前にみられる。歯は台部と同じ幅でつくられ断面は方形を呈する。BII b型式に相当すると考えられる。

SK69 調査区中央でSD58の屈曲部の南側に位置する。長径3.9m×短径3.8m、深さは52cmである。長軸方向はN40°Wである。平面形態は不定形な土坑である。また底面は二段になる。平面形態から竪穴住居の可能性も考えられるが、主柱穴も検出され

ず土坑とした。

出土遺物 遺構からは、土師器坏・甕や須恵器坏 蓋・坏身・壺・甕など多くの遺物が出土している。

土師器 坏 (1021) は口縁部をヨコナデで、体部をユビオサエで調整する。口径は11.6cmである。

高杯(1022)は、緩やかに外反する杯部をもち口 縁端部を丸くおさめる。

甕(1023~1026) は、すべて口縁端部をつまみ上げるもので、1023・1024は、それぞれ口径12.4cm、13.0cmの小型甕である。1025・1026は口径20.4cm・19.0cmの長胴甕である。1023・1024は体部外面は縦方向にハケメを施し、1024は体部内面をハケメののちに全面をヘラケズリする。長胴甕は体部外面を縦方向のハケメで、内面は、1025は口縁部から体部までハケメ、1026は体部にハケメを施す。

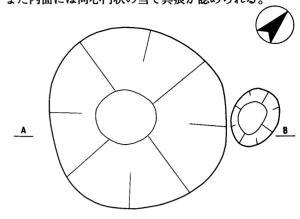
鍋(1027・1028・1029)は、1027は口径43.6cmの大きな鍋である。内面には粘土帯の継ぎ目の痕跡が認められる。1028・1029は、ともに口径29cm前後で、法量の似かよった把手付きの鍋である。ともに口縁端部は上方につまみ上げる。内面の調整は、1028は風化のため不明であるが、一部にハケメがのこる。1029は体部外面を縦方向のハケメで、口縁部から体部の内面全面に横方向にハケメを施す。

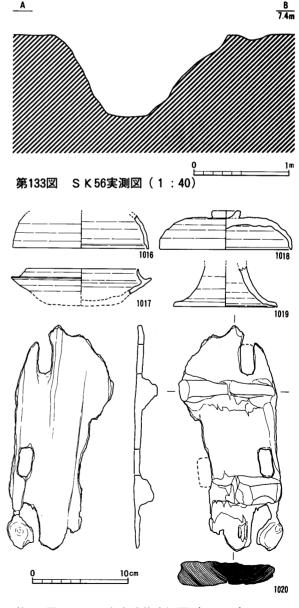
**須恵器** 坏蓋 (1030~1033) は、口径10.6cm~11.5 cmの口径の小さい坏蓋である。天井部から口縁部にかけて丸みをおびるもの(1030・1032)と平らな天井部から口縁部を垂下させるもの(1031・1033)に分かれる。

坏身(1035~1040)は,口径8.6cm~9.8cmを測る。 1040は、古墳時代タイプの坏身が最小になったもの であろう。これらの底部の調整はヘラ切り未調整ま たはヘラ切りの後にナデで調整する。

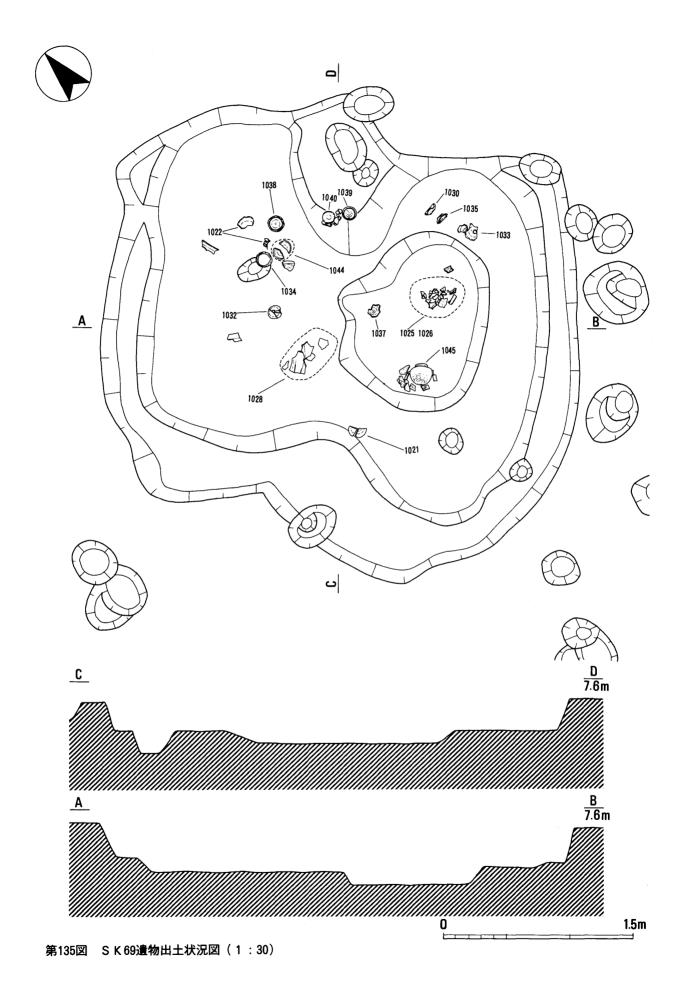
坏A (1041・1042) は、無高台の坏で、それぞれ 口径10.3cm・11.8cmで、底部はヘラ切り未調整である。 高坏 (1043) は、ハの字に開く脚端部を上下に肥 厚させて外面に面をつくる。

壺(1044・1045)は、1044は口縁部を直立させる 小型の短頸壺である。1045はくの字に屈折して頸部 を外傾して口縁端部を丸くおさめる広口壺で、体部 の下半部から底部にかけてはロクロケズリで、上半 部はカキメを施す。 **甕**(1046)は、外反する頸部から口縁端部を肥厚するもので、体部外面はタタキの後にカキメを施す。 また内面には同心円状の当て具痕が認められる。





第134図 SK56出土遺物実測図(1:4)



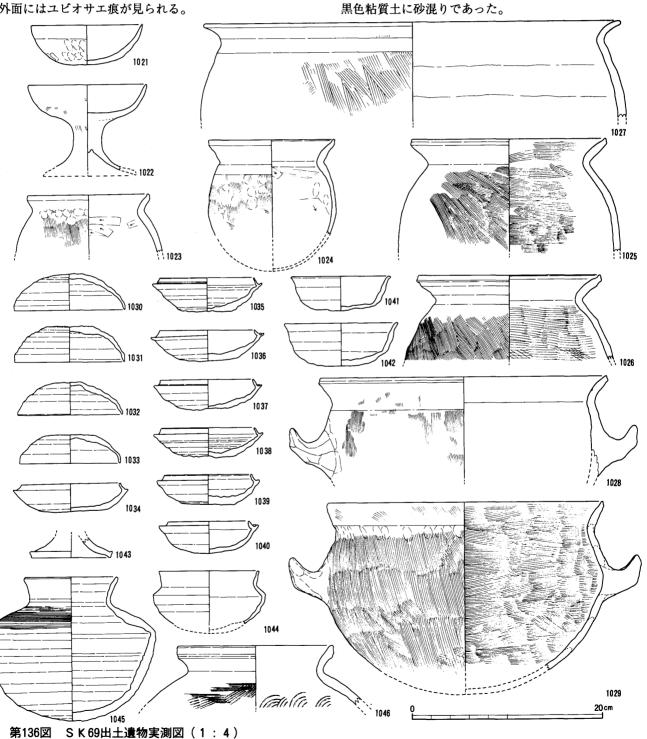
— 126 **—** 

S K 103 飛鳥時代のS D 109と切り合い関係をもつ。S K 103と同時代であるが、切り合い関係から S K 103の方が古いと考えられる。長径2.3 m ×短径2.2 m、深さ5~8cmを測り、長軸方向は N 40° W である。平面の形態は浅い不定形な土坑である。

# 出土遺物

土師器 坏 (1047) は、口径10.4cmの古墳時代に 見られる坏で、口縁部内面に面をもち椀状を呈する。 外面にはユビオサエ痕が見られる。 須恵器 坏蓋 (1048) は、口径11.0cmで、平らな 天井部から緩やかに内湾して口縁部に至る。天井部 と口縁部との境には稜や沈線は見られない。端部は 丸くおさまる。

SK117 調査区中央に位置する。長径1.2m×短径1.1mで、深さは1.0mである。長軸方向はN2°Eである。形態や深さから井戸の可能性もある。埋土は上層で濁黒色粘質土、中層で黒色粘質土、下層で黒色粘質土に砂湿りであった。



出土遺物状況 中層の黒色粘質土中から壊れた状態で土師器甕 (1049) と完形の須恵器坏身 (1050) が出土した。

# 出土遺物

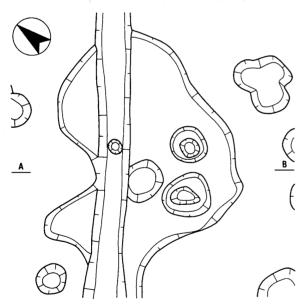
土師器 蹇 (1049) は、頸部をくの字に屈折させて口縁端部を丸くおさめる。口縁部の内面は強いヨコナデのため凹面状を呈している。体部の外面下半部は横方向のヘラケズリをおこなっている。

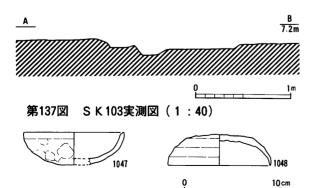
須恵器 坏身(1050)は、口径10.4cmで、立ち上がりが短く直立気味に立ち上がる。また受部の端部も短く直立気味におさまる。底部はヘラ切り未調整である。

SK122 長径6.8m×短径1.6mで、深さ19cmを測り、長軸方向はN48°Wである。平面の形態は北西から南東方向に細長く浅い土坑である。長軸方向の断面形は緩やかで南側が上がる。

#### 出土遺物

土師器 甕(1051)は、口縁部が緩やかに外反して斜め上方にのびる。端部は比較的に薄く仕上げて





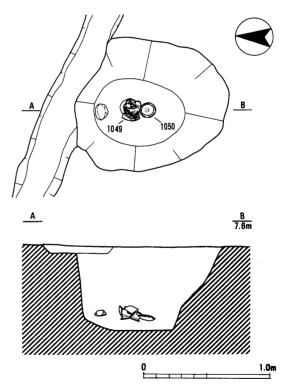
第138図 SK103出土遺物実測図(1:4)

いる。口径が大きい甕と考えられる。

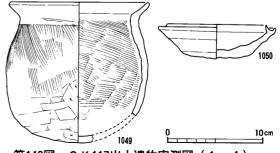
SK123 調査区中央やや南寄りでSK122に東に接する土坑である。長径4.3m×短軸4.2mで、深さは37cmであり、長軸方向はN63°Wである。平面の形態は隅丸方形状を呈する。

出土遺物 土師器坏・甕のほか、須恵器坏蓋・坏身・高坏・鉢・甕などがある。

土師器 坏 (1053~1055) は、口径12.1cmの大振りの坏 (1053) と口径10cm前後の坏 (1054・1055) とがある。いずれも口縁部をヨコナデ、底部から体部にかけてユビオサエの後にナデで調整をおこなう。



第139図 SK117遺物出土状況図(1:30)



第140図 SK117出土遺物実測図(1:4)

1057・1059は口縁端部を丸くおさめる。1058は口縁 部内面に面をもつ。

甕(1056・1057)は、それぞれ口径12.2cm・20.6 cmの小型甕と大型甕である。1056は口縁部を強いヨコナデにより受口状につくる。1058は口縁部を強く外反させ、端部を斜め上方につまみ上げて端部外面に面を有する。

**須恵器** 坏蓋 (1058~1060) は、1058・1059は、それぞれ口径10.8cm・11.2cmで、やや平坦な天井部から口縁部を直立気味にして端部を丸くおさめる。また天井部と口縁部との境には沈線がめぐる。1060は、口径12.1cmで、天井部と口縁部との境がなく、緩やかに口縁部に至る。

坏身 (1061~1065) は、口径8.6cm~9.9cmで、内傾する短い立ち上がりをもつ。底部の調整は、1062はロクロケズリで、1061・1063~1065はヘラ切り未調整である。

坏蓋A (1066) は、内面にかえりがつく坏蓋である。口径は9.6cmで、天井部に乳頭状のつまみが付き、かえりの稜が口縁端部より下に出る蓋である。同じ 坏蓋でもやや古相を呈すると考えられる。

椀(1067)は、丸い体部をもつ坏であり、底部は ロクロケズリで調整する。

高坏(1068・1069)は、1068は坏部の体部外面に 2条の沈線がめぐる。1069は脚部のみであるが、脚 部には透孔は見られない。

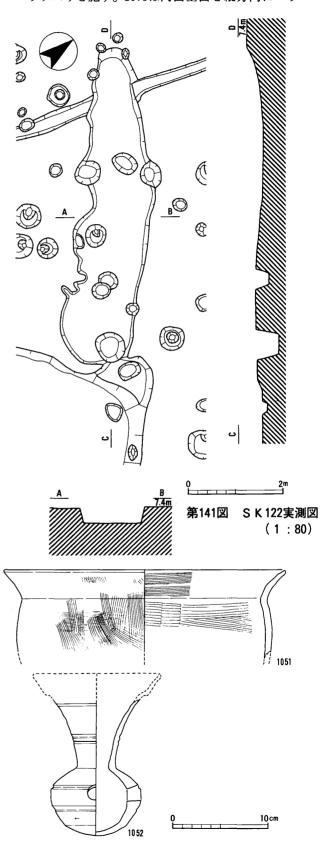
鉢(1070)は、内湾する口縁部がS字状に立ち上がる鉢で、体部はロクロケズリで調整する。

甕(1071)は、頸部はU字状に外反して口縁端部を上方に上げ丸くおさめる。体部外面は平行タタキの後にカキメを施す。内面には同心円状の当て具痕がみられる。

SK144 調査区中央東側に位置する。長径1.9m ×短径1.6m、深さ68cmであり、長軸方向はN103° Wである。平面の形態は、東側がすぼまる楕円形を 呈している。

# 出土遺物

土師器 甕 (1072~1074) がある。1073・1074は 口径14.0cm・15.6cmの甕で、1072は口径21.4cmの大型 甕である。これらの甕の口縁端部は、上方につまみ 上げて外面に面を有する甕である。また、調整は体 部外面を縦方向にハケメで調整し、内面は、1074は 上半を横方向のハケメを施し、また下半は縦方向に ヘラケズリを施す。1075は内面全面を縦方向にヘラ

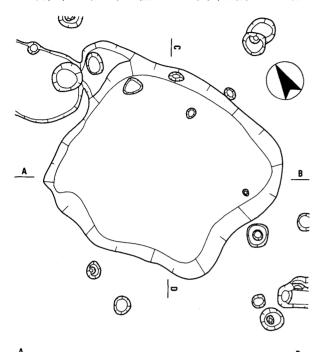


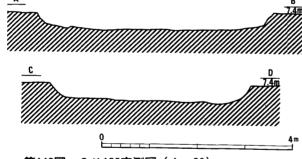
第142図 SK122出土遺物実測図(1:4)

ケズリすると考えられる。

**須恵器** 坏蓋 (1075・1076) は、口径9.5cm前後である。1075は天井部をヘラ切り未調整である。1076 はヘラ切りの後にナデで調整する。

坏身(1077)は、口径8.8cmであり、底部はヘラ切





第143図 SK123実測図(1:80)

り未調整である。これらの坏蓋・坏身は古墳時代タイプの最終末の形態であろう。

高坏蓋(1078・1079)は、それぞれ口径14.2cm・15.8cmで、天井部には、ヘラ切りの後に断面逆台形状のつまみを付ける。また内面にかえりをもつ。内面のかえりは、その稜線が口縁端部と同一線上または内側にあり、SK123出土の坏蓋(1066)より時期的に新相と考えられる。

高坏(1080・1081)は、緩やかに外反する坏部をもち、脚部は基部から直線的に下がった後にハの字状に開く、脚端部は垂下して外面に面をもつ。1080は、坏部外面にロクロケズリの調整が見られる。1081の坏部は、天井部をヘラ切りの後にナデで調整をおこなう。また脚部には2条の沈線がめぐる。

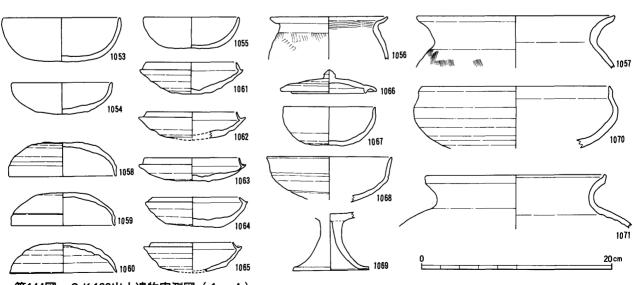
S K 154 調査区中央の東側に位置する。弥生時代中期のS K 153と切り合い関係をもっており、S K 154 はS K 153を切る土坑である。長径2.2m×短径1.8mで、深さは15cmを測る。長軸方向はN55°Wである。平面形態は五角形状を呈している。

#### 出土遺物

土師器 甕 (1082) は、口径16.0cmで、口縁端部をつまみ上げる中型甕である。体部の外面は、縦方向のハケで調整をおこない。内面は横方向のハケメを施す。

**須恵器** 坏身(1083)は、口径8.9cmで、底部から 体部にかけて丸みをもち、立ち上がりに対して短い 受部をもつ。底部はヘラ切り未調整である。

SK205 長径1.6m×短径1.5mで、深さは84cmで



第144図 S K 123出土遺物実測図(1:4)

ある。長軸方向でN83°Wである。平面の形態は、 円形を呈する土坑である。底部は平底である。埋土 は2層に分層でき、上層が黒色粘質土で、下層が黒 色粘土である。下層になるほど粘質度が強まる。

出土遺物状況 上層から須恵器坏蓋、坏身、有蓋 高坏等が出土している。また下層からは木片などが 出土していること・土坑の形態や土壌からトイレ遺 構と考えられ、土壌のサンプリングを行ったが、ト イレ遺構でないことが判明した。

#### 出土遺物

須恵器 坏蓋(1084)は、口径12.6cmで、平坦な 天井部から内湾して口縁部に至る。口縁端部の内面 に退化した段が見られる。天井部はヘラ切り未調整 である。

坏身(1085・1086)は、1085は底部をヘラ切り未 調整で、1086はロクロケズリで調整する。

高坏(1087)は、立ち上がりが内傾して直立気味 に立ち上がる。また脚部はハの字に開く。

## e. 溝

SD20 調査区北側に位置する。調査区内での検出長60.5m、幅2.0m、深さは40~60cmを測り、断面形はやや開いたU字形を呈する。弥生時代後期から古墳時代時代前期のSD19を切って南西から北東に向けてほぼ同じ幅で直線的に流れる。方向はE4°Nである。直線的に流れることから人為的につくられた可能性をもつ。

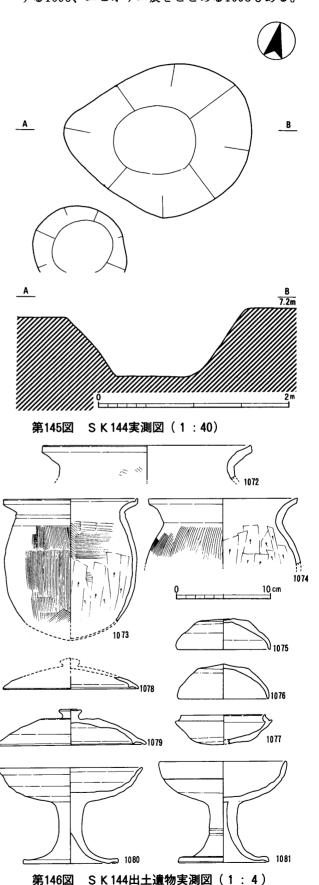
## 出土遺物

土師器 手捏ね土器 (1088) は、器壁が厚く体部は直立気味に立ち、口縁端部はやや内傾して丸くおさめる。外面の調整は磨滅が著しいため不明である。口縁部内面にユビオサエ痕が見られる。

椀(1089・1090)は、ともに器壁が厚く、1089は 口縁部のヨコナデにより、端部外面に凹面をもち内 面に内傾する面をもつ。1090は内外面にユビオサエ 痕が見られる。

甕(1091~1106)は、口縁部の形状で分けることができる。1091・1096~1098・1102・1105・1106は口縁部を上方につまみ上げて外面に面をもつ甕で、これらは体部の外面を斜めまたは縦方向にハケメを施し、口縁部の内面から体部上半にかけて横方向に

ハケメを施すものを主とする。この他にナデで調整 する1096、ユビオサエ痕をとどめる1098もある。

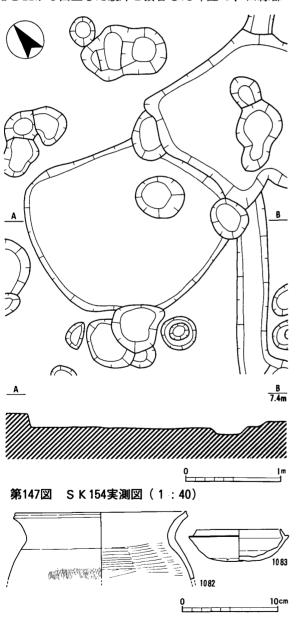


1098は口縁部をく字状に曲げて口縁端部を上方に折り曲げる甕である。1100・1102は口縁端部の外面に凹面や面をもつ甕で、体部の内面は、1100はナデを施し、1102は内面底部をヘラケズリする。1103は、口縁部を強く外反させ端部を尖り気味におさめる甕である。

鍋(1106)は、口縁端部を丸くおさめる鍋で、体部の外面全面をハケメを施し、内面全面を斜め方向にヘラケズリする。

円形加工円盤 (1138) は、土師質で径3.8cm、厚さ 1.1cmである。

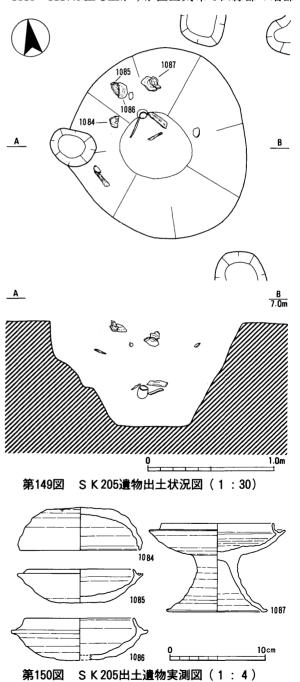
**須恵器** 坏蓋 (1107~1115) は、1107はSD20と SD21から出土した破片と接合した坏蓋で、口縁部

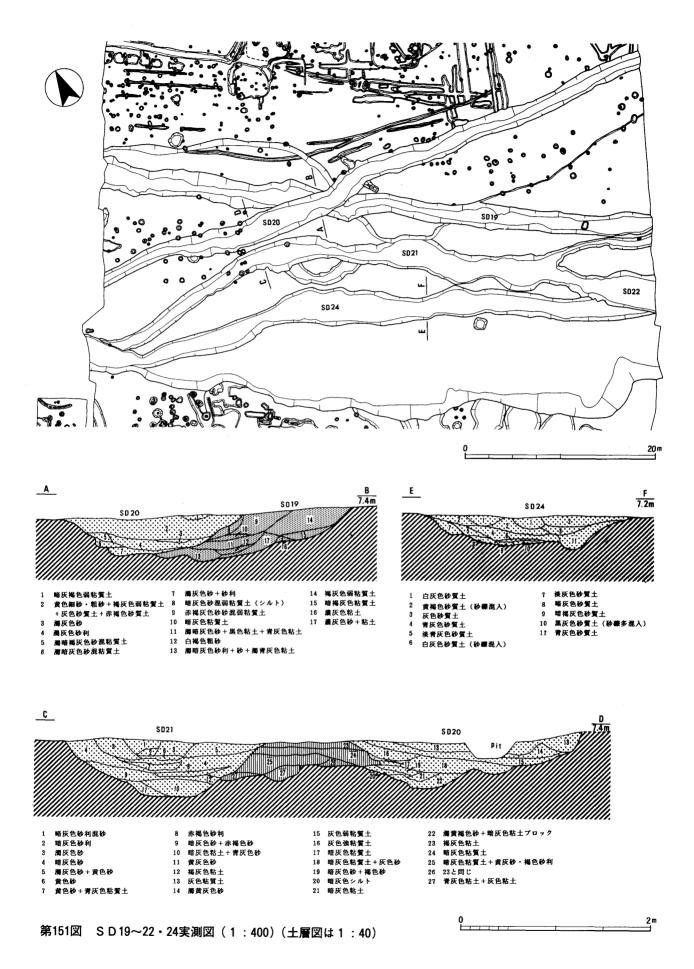


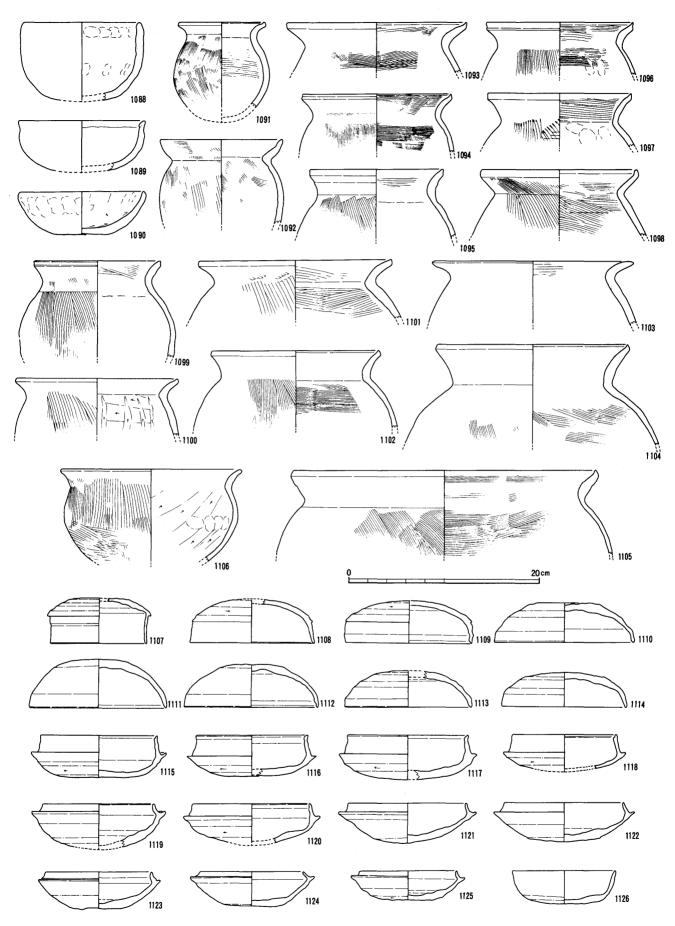
第148図 SK154出土遺物実測図(1:4)

の長さが3cmと長く、天井部を丁寧にヘラケズリされている。5世紀末頃のものと考えられる。1108・1109は天井部と口縁部との境に段をもち天井部はロクロケズリで調整する。1110~1113は丸みをもつ天井部から緩やかに口縁部に至る。1113を除く他は天井部をロクロケズリで調整する。1113は天井部をヘラ切りの後にナデで調整し、口縁端部の内面に段を有する。また1115はやや偏平な天井部で、調整はヘラ切り未調整である。

坏身(1115~1125)は、口径10.2cm~12.6cmで、 1115~1117は立ち上がりが直立気味で口縁部の端部







第152図 SD20出土遺物実測図(1)(1:4)

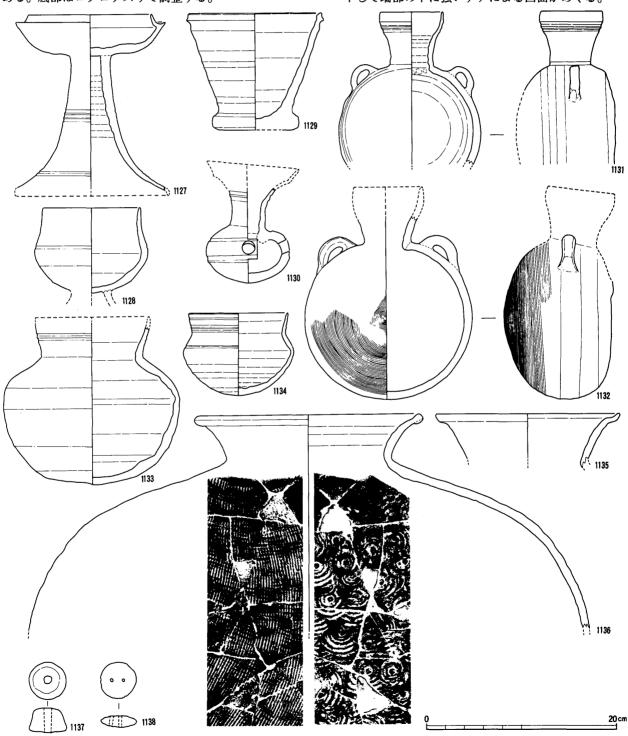
内面に面がみられる。底部はロクロケズリを施している。1118は口縁部の端部内面に沈線が見られる。また1119~1125は、受部が短く立ち上がりも内傾気味である。底部の調整は、1119・1120がロクロケズリで、1121~1123はヘラ切り未調整である。1124はヘラ切り後にナデで調整する。

杯A (1126) は、無高台の坏で、口径は10.9cmである。底部はロクロケズリで調整する。

高坏(1127)は、長脚高杯で脚部および裾部に、 それぞれ3条と2条の沈線がめぐる。

脚付盌(1128)は、内湾する体部から口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁部がややすぼまるグラス状を呈する。底部にはハの字に開く短い脚部が付くと考えられる。

鉢 (1129) は、いわゆるすり鉢で、口縁端部が垂下して端部の下に強いナデによる凹面がめぐる。



第153図 S D 20出土遺物実測図(2)(1:4)

聴(1130)は、球形の体部中央の2条の沈線間に 円孔を穿ち、体部の最大径は中位にある。

提瓶(1131・1132)は、ともに体部の肩の左右に環状の把手が付く。1138は受け口状の口縁部をもち外面に2条の沈線を施す。

壺(1133・1134)は、1133は広口壺で、やや内湾させて立ち上がる口縁部をもち、頸部に2条の沈線を施す。1134は短頸壺で体部に2条1対の沈線を、頸部に2条1対の沈線と1条の沈線を施す。

甕 (1135・1136) は、1135は口縁端部が受口状を 呈する。1136は頸部を緩やかに外反させた後に口縁 端部を肥厚させる。1136の体部外面は平行タタキ、 内面には同心円状の当て具痕をとどめる。

紡錘車(1137)は、須恵質で半截円錐形を呈する。 土製I c 類に属する。土製I c 類は 6 世紀後半から 7世紀前半と考えられ、溝の時期と一致する。

SD21 SD20の南側に位置する東西溝である。 調査区西端の検出したところで北東に向きを変えて、 さらに流路を東に向ける。調査区内で検出した長さ は98.4m、幅は2.0~3.5mを測る。場所により溝幅が 異なるが、深さは40~75cmである。溝幅や深さが不 規則な点から自然流路と考えられる。またSD21の 東側でSD22が分れる。

# 出土遺物

土師器 坏(1139)は、口径12.0cmの椀状を呈し、口縁端部の内面に面をもつ坏である。

高坏(1140・1141)は、ともに口径13.4cmの短脚で椀状の坏部をもち、口縁端部を尖り気味におさめる。また坏部の外面にユビオサエ痕をとどめる。

要(1142~1147)は、口縁部の形状により分かれる。1142は、口縁部がL字状に折れて直線的にのびて口縁部を丸くおさめる。体部外面は上半を縦方向にハケメを施し、下半はヘラケズリする。また内面は、口縁部は横方向にハケメを施し、体部は縦方向のハケメを施した後にヘラケズリする。1143は口縁部をほぼ水平に外反させ、体部内面はユビオサエの後に僅かにハケメが認められる。また口縁部が体部に比べて小さい。1144~1147は、口縁部を上方につまみ上げ端部の外面に面をもつ甕である。1146は球形の体部をもち、体部の外面は斜めの方向にハケメを施し、内面は頸部から体部上半にかけて横方向に

ハケメを施し、下半はヘラケズリする。1147は長胴 甕である。

鍋(1148・1149)は、1148は鍋とした。口縁部を 上方につまみ上げて端部外面に面をもつ。体部外面 に縦方向のハケメを、内面は口縁部から体部の上半 にハケメを施し、下半は縦方向にヘラケズリしてい る。1149は、口縁部を上方につまみ上げて面をもつ 鍋で、体部外面を縦方向にハケメ、内面は口縁部か ら体部上半に横方向にハケメを施す。

手捏ね土器 (1150~1152) で、1150は口径3.6cmである。1152は円筒形を呈す。用途は不明である。祭 祀に関係するものであろうか。

須恵器 坏蓋(1153~1164)は、1153は口径15.3 cmで天井部を手持ちケズリする。口縁部の内面に段をもつ。1154は口径12.5 cmで、天井部と口縁部との境に稜をもち、口縁部内面には段が見られる。1155~1159は、口径12.8 cm~15.3 cmで、1154は天井部と口縁部との境に沈線状の稜をもち、1156・1158・1159は口縁部の内面に段および面を有する。天井部の調整は、1155はロクロケズリで、1156~1158はヘラ切り未調整、1159はヘラ切りの後にナデで調整する。1160は丸みをもつ天井部から口縁部に至り、口縁端部は丸くおさめる。天井部はロクロケズリで調整する。

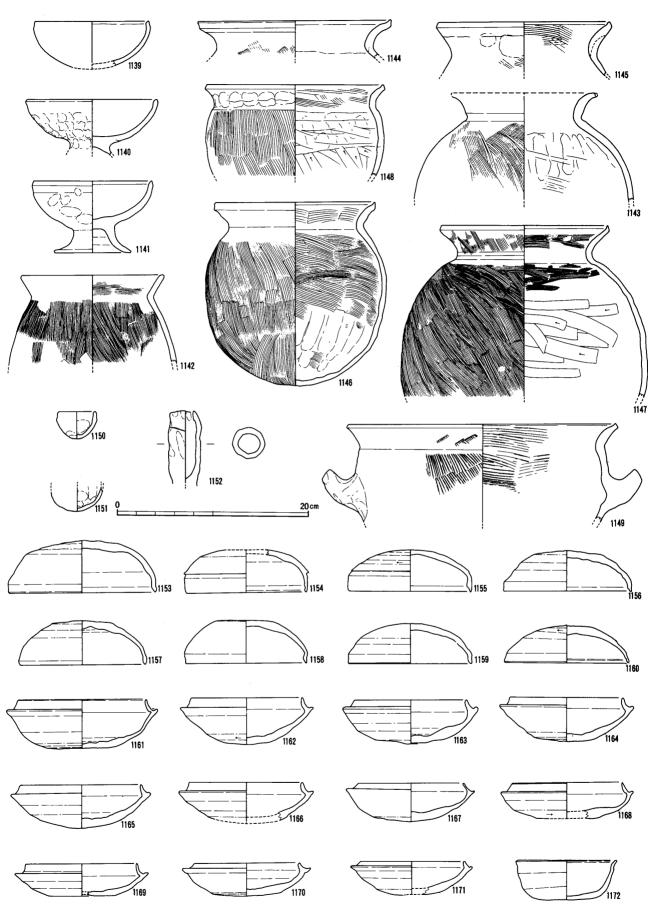
坏身(1161~1171)は、口径10.9cm~12.5cmで、全体に立ち上がりが短く内傾する受部をもつ。1161・1162の底部はロクロケズリであり、その他はヘラ切り未調整である。

坏A(1172)は、口径10.4cmで、丸みを帯びた体部から口縁部が外反する。底部はヘラ切り後にナデ調整する。

蓋(1173)は、有蓋高坏の蓋で、口径は13.3cmで、 やや歪みをおびる。天井部にはロクロケズリの後に ナデで調整し、つまみを付ける。

聴(1174)は、体部最大径が上位にあり、体部最大径に突出した注口をつける。底部の端部にはハの字に開く高台を有する。

椀(1175・1176)は、それぞれ口径9.6・13.4cmで、1175は、口縁部を内傾させ体部に3条の沈線をもつ。1176は、口縁部を外反させる椀である。ともに底部はロクロケズリされ、丁寧に仕上げられているとこ



第154図 S D 21出土遺物実測図(1)(1:4)

ろから金属器模倣品と思われる。

壺(1177)は体部の外面下半には密に、また体部 上半には粗に平行タタキが見られる。

鉢(1178)は、口縁端部を上に曲げて受口状を呈する口縁部をもつ。

**甕**(1179~1182)は、口縁部の形態により分けられる。1179・1180は口縁部が短く端部を肥厚させる 甕で、1181・1182は口縁部を外反させる甕である。 1181の口縁部は、口縁端部を上下にのばして縁帯を つくる。また1182は、1179・1180と同様に口縁端部 を肥厚させ丸くおさめる。1182は頸部にカキメを施 し、体部の外面に平行タタキを施す。内面に同心円 状の当て具痕をとどめる。

S D 22 S D 21の東で分流する東西溝である。検出した長さ17.0m程で,溝幅は $1.9\sim2.5$ mで場所により異なる。また深さは $50\sim60$ cmを測る。S D 22の東で分かれて流れる。また溝上面より近江系の緑釉陶器椀 (1937) が出土している。

# 出土遺物

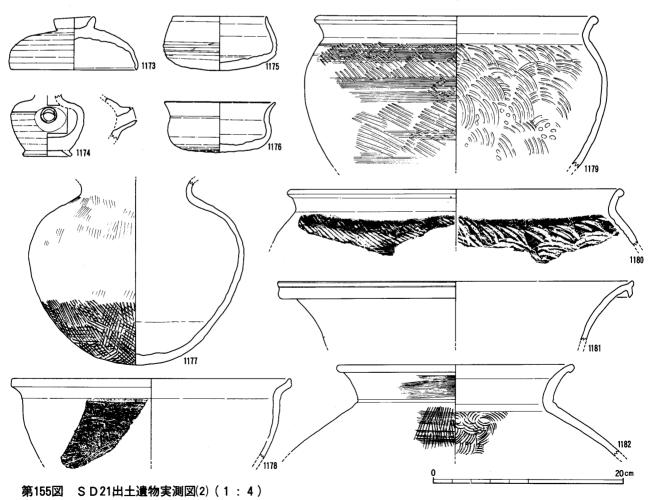
土師器 甕 (1183・1184) は、1183は口径16.2cm で、頸部をくの字に曲げ口縁部を外反させ端部を丸くおさめる。体部の外面および内面の全面を横方向にヘラケズリを施す特徴的な甕である。1184は口径16.0cmの甕である。口縁部はヨコナデにより内面に凹面をつくる。やや体部が縦方向に長胴甕と考えられる。

鍋 (1185) は、口径16.6cmで、口縁部を尖り気味におさめ、外面の体部をハケメを施し、内面はナデで調整する。

勾玉(1210)は土師質である。長さ3.5cm、厚さ1.6 cmを測る。古墳時代の所産で当該時期ではないと思われる。

須恵器 坏蓋 (1186~1196) は、口径12.4cm~14.2 cmである。1186は平坦な天井部から口縁部との境に 稜をもち天井部は雑なロクロケズリを調整する。1187・1188の口縁端部の内面に段をもつ。1196を除く他は 天井部をヘラ切り未調整のままである。

坏身(1197~1200)は、口径10.4~12.4cmである。



1197・1199は底部の調整はロクロケズリを施し、他はヘラ切り未調整である。

坏蓋A(1202)は、天井部に擬宝珠状のつまみが つき内面にかえりをもつ。かえりは口縁部の稜より わずかに下に出る。口径は7.8cmである。

坏A(1203)は、口縁部は口径9.1cm~10.7cmと歪んでおり、また口径に対して器高は5.2cmを測る深い坏である。底部から体部下半にかけてロクロケズリする。

高坏(1204・1205)は、1204は無蓋高坏である。 脚部の下半を欠き、脚部に方形の透かしをもつ。また坏部の外面には2条の凸線が施され、その間に櫛 状工具による縦方向のハケメをめぐらす。1205は有 蓋高坏である。受部には明瞭な稜をもたない。

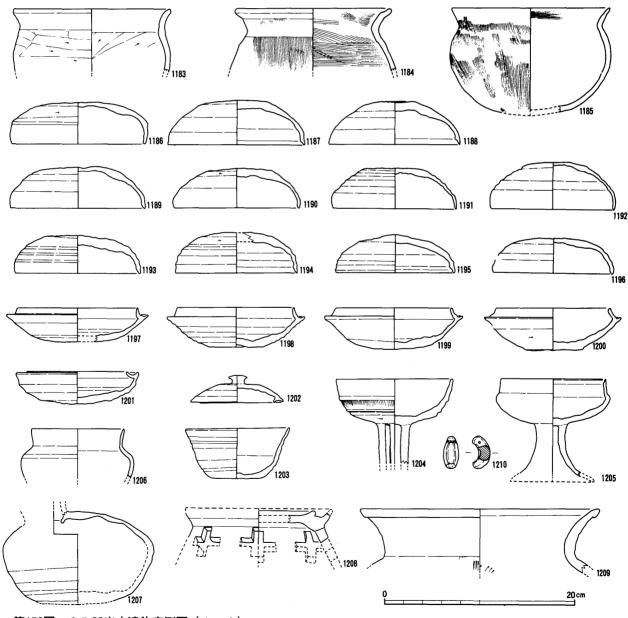
壺(1206)は、口径9.6cmの短頸壺である。口縁部が直立して口縁端部を尖らせる。

平瓶(1207)は、口縁部を欠損する。偏平な体部をもち、体部には稜は見られない。体部の下半はロクロケズリする。

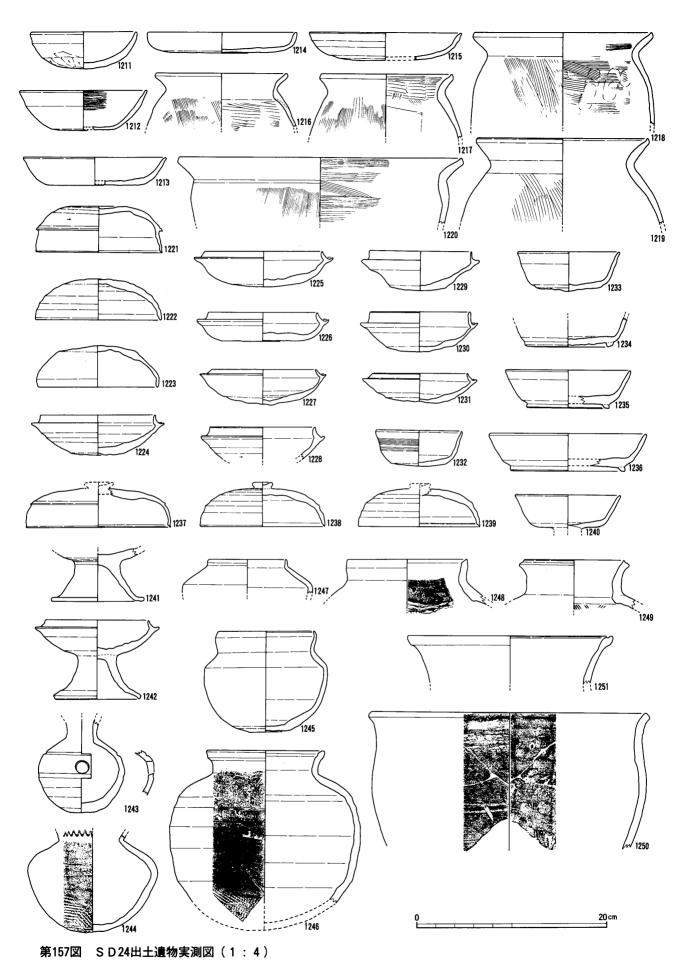
円面硯(1208)は、小片であるが硯面部と脚端部を復元した。脚部には十字型の方形透かしをもつ。

甕(1209)は、口縁部を緩やかに外反させ端部を 肥厚させる。体部外面には平行タタキを施し、内面 には同心円状の当て具痕を見られる。

SD24 調査区北側に位置しSD21の南に流れる 東西溝である。SD21と同様に流れを東にとり、調



第156図 SD22出土遺物実測図(1:4)



査区から15mほど南東に流れて向きを東にとる。検出長60.0mで,溝幅は場所により異なり2.0~4.0mを測る。深さは50~60cmである。溝幅や深さが違う点から自然流路と考えられる。また遺物から時期は飛鳥時代前半から奈良時代前半頃と考えられる。

## 出土遺物

土師器 坏 (1211・1213) は、1211は口径11.0cm で、底部外面をヘラケズリする。1213は磨滅のため調整不明である。

皿 (1214・1215) は、1214は口縁部を直立気味に立ち上げる。1215は体部から緩やかに口縁部に至り、口縁端部を尖り気味に外反させる。ともに口径16cm前後で、底部の調整もヘラケズリである。

甕 (1216~1219) は、口縁端部を上方につまみ上げて端部外面に面をもつものである。口径は1216・1217がほぼ同径で13.5cm前後である。1218・1219はそれぞれ口径18.8cm・17.9cmの長胴甕である。

鍋(1220)は、口径29.6cmで、口縁端部を上方につまみ上げて外面に面をもつ。体部外面は縦方向にハケメ、内面は口縁部から体部にかけて横方向にハケメをおこなう。

黒色土器 椀(1212)は、口径13.2cm、器高4.2cm でA類に属する。体部外面は磨滅のため不明瞭であるが、内面には横方向にヘラミガキを施す。斎宮編年の平安時代前Ⅱ期に比定されよう。。混入品と考えられる。

須恵器 坏蓋(1221~1223)は、口径12.6cm~13.1 cmで、1221は平坦な天井部と口縁部との境に稜をもち、口縁端部内面に段を有する。天井部はロクロケズリで調整する。他の坏蓋や坏身に比べ古相であり、混入品と考えられる。1222・1223は丸い天井部から口縁部に至り、1222は口縁部内面に面をもち、1223は口縁部が垂下し、口縁端部を丸くおさめる。天井部の調整は、1221はロクロケズリで、1222はヘラ切りの後に板状工具による調整をおこなう。1223は、天井部はヘラ切り未調整である。

坏身(1224~1231)は、口径9.9cm~12.3cmで、受部は短く、立ち上がりも短く内傾する。1224・1229・1230の立ち上がりはほぼ垂直に立つ。1229は底部が狭く特徴的な器形である。1229・1230は共に底部へラ切り未調整である。

坏A (1232・1233) は、無高台の坏で、1232は口径9.0cmで、体部外面にカキメを施す。1233は口径10.6cmで、底部はヘラ切り未調整である。

坏B (1234~1236) は、高台をもつ坏で、体部が 内湾気味にのびる坏身で、1234の高台は断面方形を 呈する。1235・1236の高台はハの字に開き、断面が 方形を呈する。高台の接地面は平坦である。

高坏蓋(1237~1239)は、有蓋高坏の蓋である。 1238・1239は当該時期の坏蓋につまみをつけるもの である。1237は天井部と口縁部との境に段が見られ ス

高坏 (1240~1242) は、1240は当該時期の無台の 坏身に、1241・1242は古墳時代タイプの坏身に脚部 を付けた形態を呈する。

**聰(1243)は、球形な体部で、 2 条の沈線の間に** 円孔を穿つ。体部下半はヘラケズリで調整する。

壺(1244~1249)は、1244は広口壺の体部で、口 縁部に波状文を施している。1246は、口径10.1cmで、 口縁部が内傾する小振りな短頸壺である。1246・1248 は共に口径12cm程の短頸壺である。1247は口縁部を やや内傾させる壺である。

鉢(1250)は、口径29.0cmの大型の鉢である。丸 みを帯びた体部から口縁部を外反させ、端部外面に 面をつくる。外面は体部にカキメ、頸部と体部下半 にタタキが認められ、内面は横方向にヘラケズリす る。

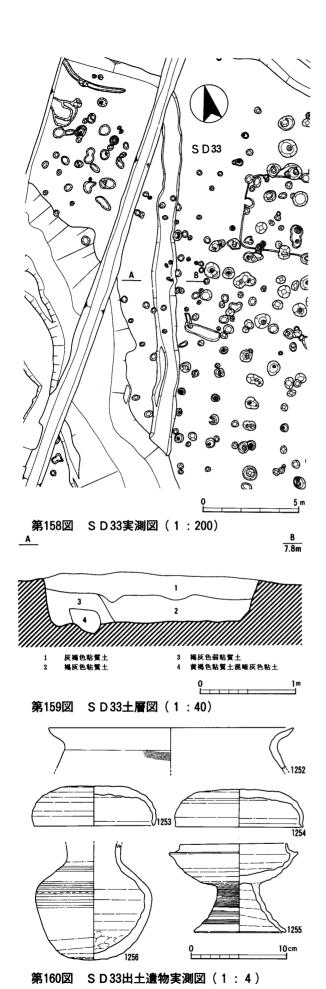
要(1251)は、口縁端部を肥厚する広口甕である。 SD33 調査区西端に位置し、南流する南北溝である。検出長19.3m、幅は1.0~1.2m,深さは20cmを測る。大溝SD58に切られるが、さらに南に向かいSD62に続くと考えられる。溝の埋土は概ね2層に分層することができ、上層が灰褐色粘質土、下層は弱褐灰色粘質土である。

## 出土遺物

土師器 甕 (1252) は、口径25.6cmで、口縁端部 を斜め上方に尖り気味におさめる。

須恵器 坏蓋(1253・1254)は、ともに平らな天井部からやや内湾するように口縁部に至り、口縁端部内面に面を有する。天井部はヘラ切り未調整である。口径は各々12.4cm、13.3cmである。

高坏(1255)は、ハの字状に開く脚部の外面にカ



キメを施す。11.1cmである。

直口壺(1256)は、底部をロクロケズリし、頸部と体部最大径にカキメが見られる。

SD57 調査区東側を流れる南北溝で、検出長30.0 m、溝幅は0.3~0.9 mを測り、深さ5~25 cmである。 北側で弥生時代中期の土坑SK55を切り合い、SK55を切る溝である。南の南北溝SD142に続く溝と考えられ、SD142と共に住居群をめぐる溝と想定される。

SD60 調査区西側にある南北溝で、検出長59.6 mで、溝幅は0.3~0.7m、深さ10~25cmを測る。 SD58から南に向かい、途中クランク状に屈曲する。 SD60・SD62・SD71・SD82・SD83・SD86・SD108と多くの溝と切り合う。切り合い関係から飛鳥時代中頃のSD62より新しく、奈良時代前期のSD86より古いと考えられ、飛鳥時代後半頃と想定される。

SD61 調査区の西側に位置する南北溝で、大溝 SD58から南に流れる。検出長10.0m、幅0.5mで、 深さ6cmと浅い溝である。SD60・62・82と切り合い 関係をもち、これらの溝より新しいと考えられる。

### 出土遺物

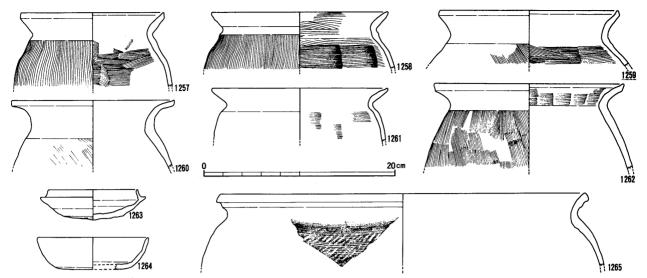
土師器 甕 (1257~1262) は、1257・1259・1260・1262は口縁端部をつまみ上げて端部外面に面をもつ。1258・1261は口縁端部を丸くおさめる。調整は、1258は体部外面は縦方向のハケメを施し、内面は口縁部から体部まで横方向のハケメを施す。1262は口縁部内面を横方向のハケメを施し、1257・1259・1261は体部の内面を横方向のハケメを施す。

**須恵器** 坏身(1263)は、口径9.2cmと小振りで、 底部の調整はロクロケズリである。

坏A (1264) は、高台を有しない杯で、体部が内 湾気味に立ち上がる坏で、口径は11.6cmである。

**甕**(1265)は、口径38.2cmの大型の甕で、口縁部 外面に凸線がめぐる。

**S D 62** S D 61と同様に調査区の西側に位置する 南北溝で、北から流れるS D 33が大溝S D 58の南の S D 62に続く溝と考えられる。また奈良時代前期の S D 86によって切られ、流れを南東から南に変える。 S D 33と合わせると検出した長さは55.6 m になる。 幅は0.3~0.7 m で、深さは10~25 cm である。



第161図 S D 61出土遺物実測図(1:4)

#### 出土遺物

**須恵器** 坏身(1266)は、口径10.8cmで、底部は ロクロケズリを施す。立ち上がりがやや長い。

坏A (1267) は、高台を有しない坏で、口径10.8 cmを測る。底部はヘラ切りの後にロクロケズリで調整する。

SD82 調査区西側に位置する南北溝で、切り合い関係から奈良時代前期のSD86より新しく、中世のSD71より古い。検出長36.4mで、溝幅は0.3~0.4m、深さ9~16cmを測る。

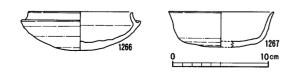
SD83 調査区の東に位置する南北溝で、検出長29.0m、幅1.1m、深さ20cm前後を測る。SD60・62・82・108や奈良時代前期のSD86と切り合い関係をもつが、いずれの溝もSD83を切る溝であり、SD83が最も古相の溝と考えられる。飛鳥時代前半頃の溝と考えられ、南のSD198とほぼ同時期と思われる。

# 出土遺物

土師器 甕 (1268) は、口径21.3cmの甕で、口縁端部をつまみ上げる。端部外面が凹面状を呈する。

**須恵器** 坏身(1269)は、口径13.3cmで、立ち上がりは長くやや直立気味に立ち、この時期でも古い様相を呈する。

SD86 調査区東側に位置する東西溝で、調査区



第162図 SD62出土遺物実測図(1:4)

西壁で2条の溝として検出し、中央部で最大幅5.4mを測る溝になる。調査区東壁近くでは幅1.1mの1条の溝になる。検出長61.7mで、深さ20cm前後を測る。土層断面から、当初は中央部で幅広く流れていたSD86が、後に南側へ流れを変え、中央部の最大幅のところで南に屈曲する溝と北側を流れる溝の2条の溝に分かれたと考えられる。

### 出土土器

**土師器** 土錘(1277)は、球状を呈し、最大径3.0 cmを測る。

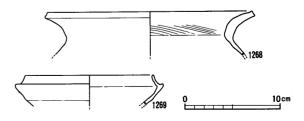
**須恵器** 皿 (1270) は、□径12.4cmで、底部をロクロナデで調整する。

坏蓋(1271)は、やや窪んだ天井部に偏平な擬宝珠状のつまみをつける。口径15.3cmを測る。

坏B (1272~1274) は、高台を有する坏で、底部 の端部につき内端面で接地するもの(1272) や接地 面が平坦なもの(1273・1274) とに分かれる。

**甕** (1275・1276) には、ともに広口**甕**の口縁部である。1275は口縁端部を肥厚し、1276は口縁端部を 上面に面をもつ。

石製品 砥石(1278)がある。上面は使用によって凹面を呈する。



第163図 S D 83出土遺物実測図(1:4)

SD132 調査区中央やや南西側に位置する東西溝で、溝の東側は汚れた土が土坑状に堆積しており、東側はこの不定形な土坑により切られる。また井戸SE133・溝SD198と切り合い関係をもち、その関係からSE133より古く、SD198より新しい溝と考えられる。また溝内から細かいハケメを施す土師器甕の細片や須恵器の細片が出土してるので飛鳥時代と考えられる。検出長8.8m、幅は0.5~0.7mで、深さは10cmを測る。

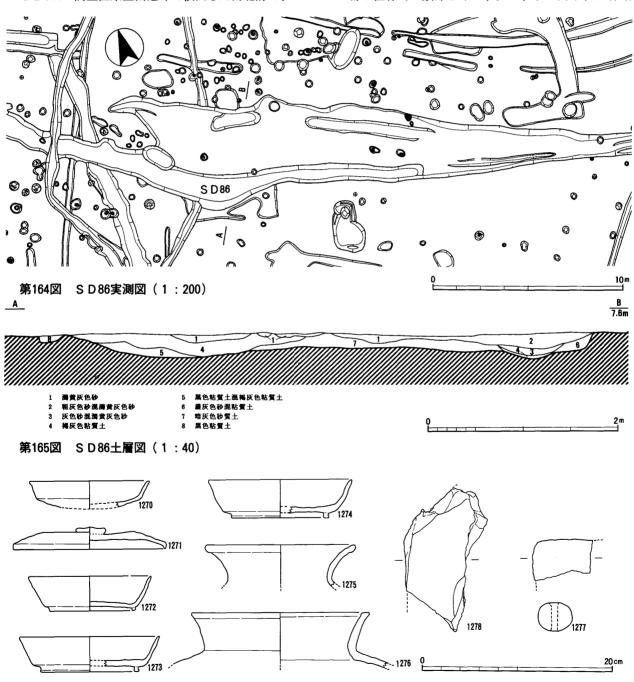
SD141 調査区東壁面近くで検出した南北溝で、

途中で方向を南西に変える。南のSD176に続くものと考えられる。検出長45.2m、幅は $0.7\sim1.2$ mで、深さは20cm程である。

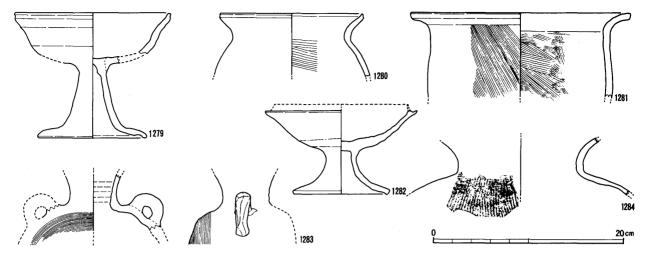
# 出土土器

土師器 高坏 (1279) がある。口径16.2cmを測る。 口縁部はS字状に外半し、脚端部は垂下して内面に 凹面をもつ。

甕(1280・1281)は、1280は口径14.8cmで、口縁端部をつまみ上げる。1281は口径19.6cmを測り、体部が直線的で頸部をくの字状に水平に曲げ、口縁端



第166図 SD86出土遺物実測図(1:4)



第167図 S D 141出土遺物実測図(1:4)

部に面取りをする。体部の内外面にハケメを施す。

**須恵器** 有蓋高坏 (1282) は、口径17.8cmを測る。 脚部は短脚で、受部は古墳時代タイプの坏身の形態 を呈している。

堤瓶(1283)は、体部下半から頸部にかけての破 片である。体部の肩には環状の把手が付く。

**甕**(1284)は、頸部から体部片で、体部外面には 平行タタキが施され、内面はナデで消されている。

SD142 調査区東側に位置し、東壁と平行する南 北溝である。溝の北側は7.6m程離れたSD57から続 く溝と考えられる。また溝の南側は、旧大古曽遺跡 A地区で検出したSD214に続く溝と考えられる。検 出長43.6m、溝幅は0.3~0.4mで、深さは6~10cmを 測る。

S D 176 S D 141から続く南北溝で、南側は向きを西に曲げる。検出長48.9m、幅0.8~1.2m、深さ10~20cmを測る。西側のS D 200との間に S A 210が存在する。

#### 出土土器

土師器 高坏 (1285) は、口径15.7cmでSD141の 高坏 (1279) と同一形態である。 6 世紀末の所産で あろう。 **須恵器 甕** (1286~1288) は、1286は口径17.2cm で風化のため調整は不明である。1288は甕の頸部片 で沈線と波状文を外面に施す。

S D 183 調査区中央部に位置する南北溝で、検出 長13.5m、幅0.8~1.2m、深さは20~26cmを測る。こ のS D 183は、S D 192・176とともに建物群を囲む溝 と考えられる。

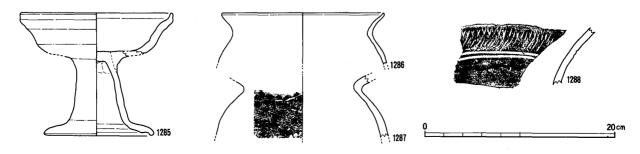
### 出土遺物

土師器 甑(1289)は、口縁部の一部を欠損したためか、体部と破片の修復のため、補修孔が左右と下の3か所に2孔1対で穿たれている。補修孔の直径は0.8cm前後である。口径22.4cm、器高27.5cm、底径11.0cmで口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形である。

甕(1290)は、口径12.8cmの小型の甕である。体 部外面を縦方向にハケメを施し、内面をナデによる 調整を行う。

**須恵器** 高坏蓋(1291)は、天井部を1/3程をロクロケズリで調整し、丸みを帯びた天井部に偏平なつまみを付ける。口径は13.9cmを測る。

**SD192** SD176につながる溝で、検出長4.7m、 溝幅0.8~0.9m、深さ10~24cmを測る。2.3m程の間



第168図 S D 176出土遺物実測図・拓影図(1:4)

を於いて北に位置するSD183とともに建物群を囲む 溝と考えられる。切り合い関係からSD183と同時期 と思われる。

S D 198 調査区西側に位置する南北溝で、検出長 25.5mで、溝幅0.5~1.0m、深さは14cmを測る。北側 に位置する S D 83に結びつく溝と考えられる。

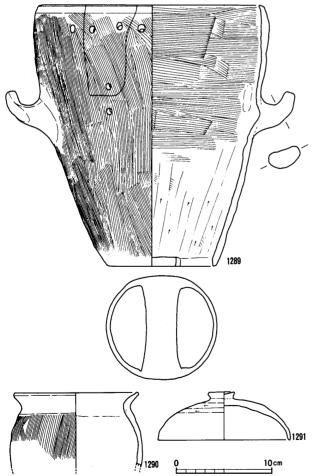
## 出土遺物

土師器 高坏(1292)は、短脚の高杯で、脚部は 太い基部からやや真直ぐに下がり脚裾部で開く。脚 端部は丸くおさめる。脚部径は8.4cmである。

甕(1293)は、口径26cm程の大型甕で、口縁端部は、上につまみ上げ外面に面をもつ。体部最大径は上位にあり下半は窄まる。体部外面は縦方向のハケメを施し、内面にはユビオサエ痕が明瞭に残る。

須恵器 坏身(1294)は、口縁部のみであるが、 口径12.6cmで立ち上がりは直立気味である。

**SD200** 調査区南側に位置する東西溝で、北から東に緩く曲がる。検出長17.5m、溝幅1.0~1.1m、深さ4~14cmを測る。SD198に結びつく溝と考えられる。



第169図 S D 183出土遺物実測図(1:4)

#### 出土遺物

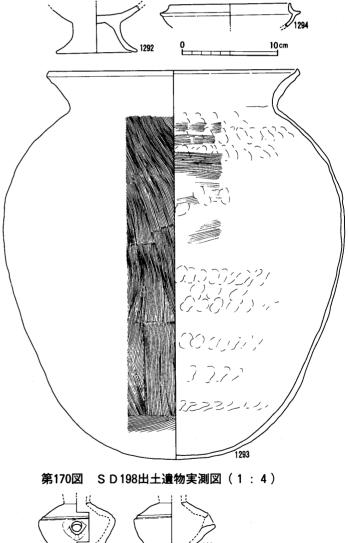
**須恵器** 郞(1295)は、体部上部に沈線をもち、 その沈線を上にして突出した注口を上向きに付ける。 体部の1/4程をロクロケズリを施す。

S D 214 調査区南東側に位置する東西溝である。 北のS D 142から南に続く溝と考えられる。検出長2.6 m、溝幅は0.34mで、深さ9cmを測る。

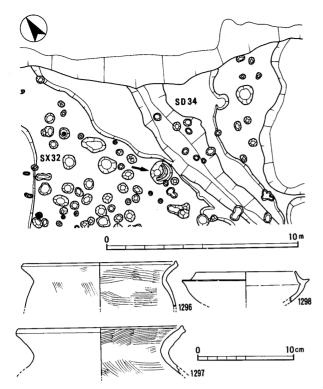
# f. ピット

橋垣内遺跡の飛鳥時代から奈良時代のピットおよび出土遺物について概述する。

B-I22P7 径1.2m程の円形で、深さ56cmを測る。形態からピットというより小土坑と言える。埋土は2層に分層でき、上層は少し炭化物を含む灰褐

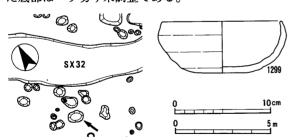


第171図 SD200出土遺物実測図(1:4)

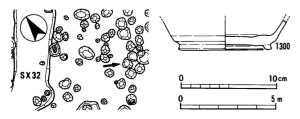


第172図 B-I22P7実測図(1:200) 出土遺物実測図(1:4) 色粘質土で、下層は多量に炭化物を含む暗灰色粘質土である。ピットから出土した遺物には、土師器甕(1296・1297) や須恵器坏身(1298) がある。土師器甕はともに口縁端部をつまみ上げるもので、体部内面は頸部から体部にかけて横方向にハケ調整を施している。坏身は立ち上がりがやや長く、口径は10.2 cmである。

B-J18P1 S X32周溝の南にあたるピットから上面より須恵器坏(1299)が出土した。坏の体部は内湾気味に立ち上がり口縁部を丸くおさめる。また底部はヘラ切り未調整である。

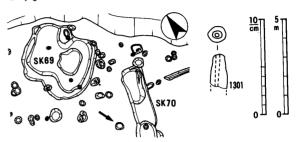


第173図 B-J18P1実測図(1:200) 出土遺物実測図(1:4)

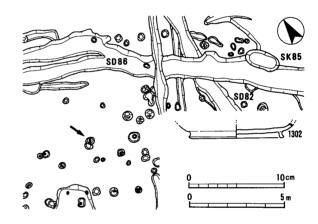


第174図 B-J21P6実測図(1:200) 出土遺物実測図(1:4)

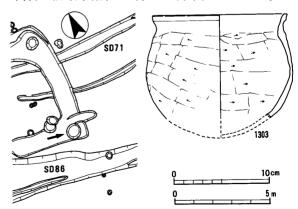
B-J21P6 S X32周溝の東にあたるピットから須恵器坏 (1300) が出土した。坏の底部の端部にハの字に立つ短く太い高台が付き、高台の断面は方形を呈する。奈良時代でも前期にあたると考えられよう。



第175図 B-016P1実測図(1:200) 出土遺物実測図(1:4) B-016P1 SK70の西に位置するピットで土師質の土錘(1301)が出土した。残存長3.7cm、外径1.9cm、内径0.4cmを測る。

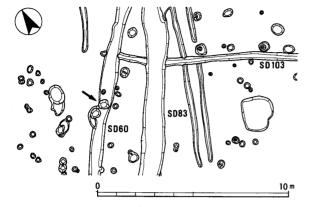


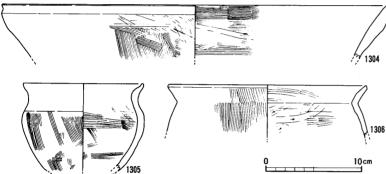
第176図 B-R10P 5実測図 (1:200) 出土遺物実測図 (1:4) B-R10P 5 SD86とSD82が交差する西にあたるピットから須恵器の坏 (1302) 底部が出土した。高台は細く外端部を上方に上げ気味におさめる。



第177図 B-S17P3実測図(1:200) 出土遺物実測図(1:4) B-S17P3 古墳時代の竪穴住居の可能性をもつコの字状に検出された土坑の南東隅のピットから

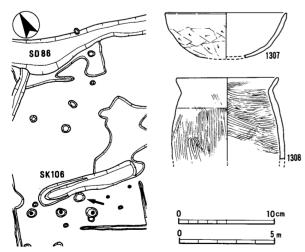
土師器甕(1303)が出土した。甕は口縁端部を肥厚させて方形を呈している。体部内外面とも横方向のヘラケズリで調整する。





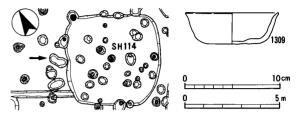
第178図 B-U10P3実測図(1:200) 出土遺物実測図(1:4)

B-U10P3 SD60内のピットから土師器甕 (1304~1306) が出土した。1304は口径40cm程の大型であり、鉢とも考えられる。また口縁端部は肥厚して外面に段を有する。口径12.2cmの小型甕 (1305)は、口縁部を内湾気味に丸くおさめる特徴的な甕である。1306は体部内面をハケメを施した後に横方向にヘラケズリで調整する。

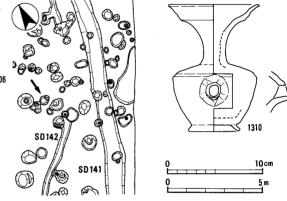


第179図 B-U12P1実選図(1:200) 出土遺物実選図(1:4) B-U12P1 SK106の南に位置するピットで、

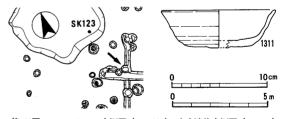
土師器椀(1307)と甕(1308)が出土した。椀は口径12.8cmで、口縁部を尖り気味にする。底部はヘラケズリで調整する。甕は、口径10.6cmの小型の甕である。甕の口縁部はくの字に曲がり、端部を丸くおさめる。



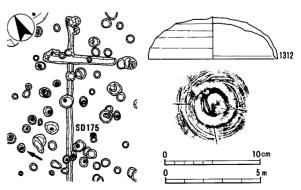
第180図 B-W15P5実測図(1:200) 出土遺物実測図(1:4) B-W15P5 SH114の西のピットから須恵器坏 1309) が出土した。坏は口径9.8cmで、底部の外面はヘラ切り未調整である。



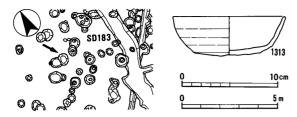
第181図 B-X20P18実測図(1:200) 出土遺物実測図(1:4) B-X20P18 SD142の北、SD141の西に位置するピットで、須恵器郞(1310)が出土した。



第182図 B-Z11P4実測図(1:200) 出土遺物実測図(1:4)



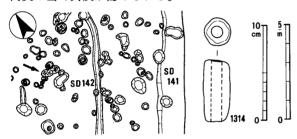
第183図 B-イ10P10実測図(1:200) 出土遺物実測図(1:4)



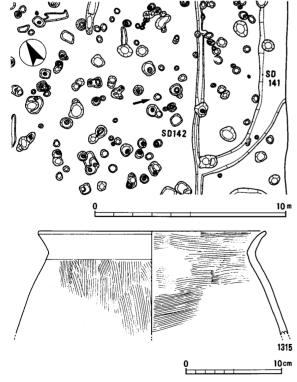
第184図 B-口12 P 12実測図(1:200) 出土遺物実測図(1:4)

**B-Z11P4** S K123の南西、S D175の溝内で 検出されたピットで、須恵器坏(1311)が出土した。 坏は底部をヘラ切り後にナデで調整する。

Bーイ10 P 10 須恵器坏蓋 (1312) が出土している。坏蓋は天井部から稜をもたずに丸みを帯びて口縁部にいたり端部の内面に段をもつ。天井部はヘラ切り未調整のままである。また天井部の内面に同心円文の当て具痕が認められる。



第185図 B-口17P4実測図(1:200) 出土遺物実測図(1:4)

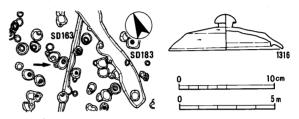


第186図 B-口18 P 1 実測図(1:200) 出土遺物実測図(1:4)

B-口12 P12 SD183の西に位置するピットから 須恵器坏(1313)が出土した。坏は口径11.8cmで、 底部はヘラ切り未調整のままである。

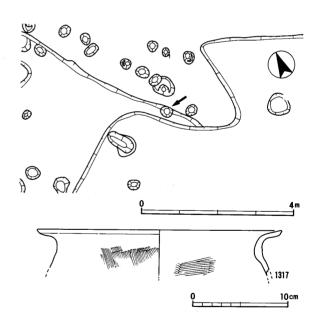
B-ロ17 P 4 ピット内から土師質の土錘(1314) が出土した。土錘は長さ6.6cm、外径2.9cm、内径1.1 cmである。

B一口18 P 1 口径23.8cmの長胴甕 (1315) が出土した。甕は口縁部をくの字に曲げて端部を丸くおさめる。体部は縦方向にハケメ、内面は口縁部から体部にかけて横方向にハケメを施す。



第187図 B-ハ12 P 1 実測図(1:200) 出土遺物実測図(1:4)

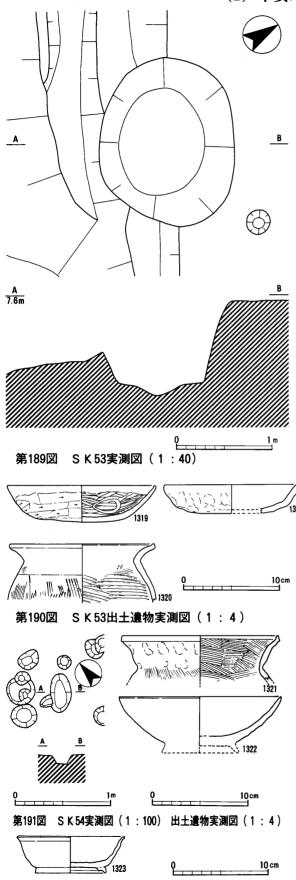
B-ハ12 P 1 S D 163の西に位置する径30cm程の 小ピットの上面から須恵器坏蓋(1316)が出土した。 坏蓋はきのこ状のつまみがつき、内面にかえりを有 する。口径は12.3cmである。



第188図 D-B11P5実測図(1:100) 出土遺物実測図(1:4)

D-B11P5 調査区南側の黒ボク際で検出した ピットで、ピット内から土師器甕(1317)が出土し た。甕は口縁部を水平近くまで外反させ、外面体部 は縦方向のハケメを施し、内面には横方向のハケメ が残る。

# (2) 平安時代の遺構と遺物



第192図 S D 199出土遺物実測図(1:4)

## a. 掘立柱建物

平安時代と明確にわかる掘立柱建物は、3棟で ある。

SB28は2間×2間総柱の身舎に3面庇が付く。 SB44も2間×2間の身舎(側柱)で、こちらは 2面庇である。

SB88は、3間×2間の総柱建物である。南東部の一区画には深さ18cmの土坑がある。土坑は一部区画外に広がることから疑問が残るが、この掘立柱建物に伴う南東隅土坑と考えられる。 (本堂弘之)

### b. 土坑

S K 53 調査区北側中央の大溝 S D 58が東に屈曲 する北岸の肩に位置する。長径1.8m×短径1.4m、 深さ1.0cmを測る。長軸方向N63°Wである。平面の 形態は楕円形を呈する。

### 出土遺物

土師器 坏(1318)は、口径14.0cmで、外面にユビオサエ痕が明瞭に残る。器壁が厚い土器である。

甕(1320)は、口縁部を上につまみ上げるが、口 縁部のヨコナデが弱く、端部が丸味をおびる。また 体部外面は縦方向のハケメを施し、内面は横方向の ハケメを施している。

**黒色土器** 坏(1317)は、黒色土器A類で、外面は横方向にヘラケズリで調整され、内面には幅の広い雑なヘラミガキと螺旋状暗文が見られる。

S K 54 調査区北側で S D 34の東に位置する。平面の形態は楕円形を呈する小土坑である。長径0.8 m ×短径0.5 m、深さ25cmを測り、長軸 N 42°Wである。

# 出土遺物

土師器 甕 (1321) は、口縁部をくの字に曲げて 端部をつまみ上げる。頸部にユビオサエ痕を明瞭に 残す。また内面は頸部から体部にかけてハケメを施す。 椀 (1322) は、剥離のため調整は不明である。混 入品と考えられる。

## c. 溝

S D 199 調査区南西部に位置する東西溝である。 検出長7.1 m、溝幅0.5~0.6 m、深さ15 cmを測る。埋 土は砂質が多く自然流路と考えられる。溝埋土から 緑釉陶器椀(1323)がほぼ完形で出土した。

#### 出土遺物

**緑釉陶器** 椀(1323)は、低く太い高台の内面に 段をもち、外端部で立つ。近江産で10世紀後半頃と 思われる。

S D 204 調査区南西側に位置する南北溝である。 平安時代の溝 S D 199から続き、さらに東の溝へと続く溝と考えられる。検出長4.5 m、溝幅0.8 m で、深さ3~15 cm を測る。

# (3) 飛鳥から平安時代の遺構と遺物

#### 漕

SD58 調査区中央部で検出した大溝で、毛無川によって形成された淡灰黄色砂質土、黒色粘質土 (黒ボク) および黄灰色粘土の地山を削っている。溝は調査区から25mほど南東に向かって南流し、屈曲して流れを東に向ける。溝の東端部は調査区東側で検出した攪乱土坑群により削平されている。溝幅は調査区西壁側で7.1m、中央部でやや狭って幅5.8mになり、東端部でさらに3.5mになる。溝幅は西側が広く、東に向かうほど狭まる。深さは平均80㎝を測り、最深部は溝が屈曲するところで1m程になる。大溝の断面は、概ね北側の傾斜が緩やかで南側の方は傾斜が急である。また東に向かうほど溝断面の傾斜は緩くなる。

遺構埋土は、第Ⅰ層群および第Ⅱ層群に大きく分 層することができる。第1層群は1層:灰褐色粘質 土で砂の混入が見られるところがある。また2層: 褐灰色粘質土が1層の下層に堆積しており、これら 1層及び2層は溝全体に安定した堆積が見られる。 第Ⅱ層群は安定した埋積層を成しておらず、砂質土・ 砂・小砂利が混入する状態で堆積しているため、分 層することは困難であるが、この第Ⅱ層を上層、下 層の2層に分けた。上層は黄灰色砂質土、褐灰色砂 質土を基本層とする。その下層では灰褐色砂・粗砂 の堆積が見られる。この第Ⅱ層群の上部には木質を 含む。また下部は灰色砂質土・粘質土、灰褐色粘質 土を基本層としており、さらにその下層では緑灰色 砂・粗砂、黒灰色粘質土及び砂質土の堆積が見られ る。また調査区東壁に向かうほど砂および粗砂層が 厚く堆積し、青灰色砂・小砂利の堆積の割合が多く なる。また第Ⅱ層群中には白黄色砂・赤褐色砂がラ ミナ状にまた地山の黒色粘土がブロック状に見られ る。このように第Ⅱ層群は、溝の西側では灰色砂・ 小砂利、白色砂・小砂利、中央から東側にかけては 青灰色砂・小砂利が堆積している。これらの砂・小砂利の堆積から溝の流れは急であったと思われる。 (第193図)

出土遺物 遺物は、主に第 II 層群から出土しているが、上述したように第 II 層群は溝の流れによってかなり攪乱を受けており、時期が異なる土器が混在して出土している。具体的な出土遺物としては、土師器皿・甕、須恵器坏蓋・坏身・椀、灰釉陶器椀・皿、黒色土器椀などの土器類や弓・横櫛・曲物・火鑽板などの木製品が出土している。この他の遺物としては、フイゴ羽口などの土製品や砥石などの石製品も出土している。

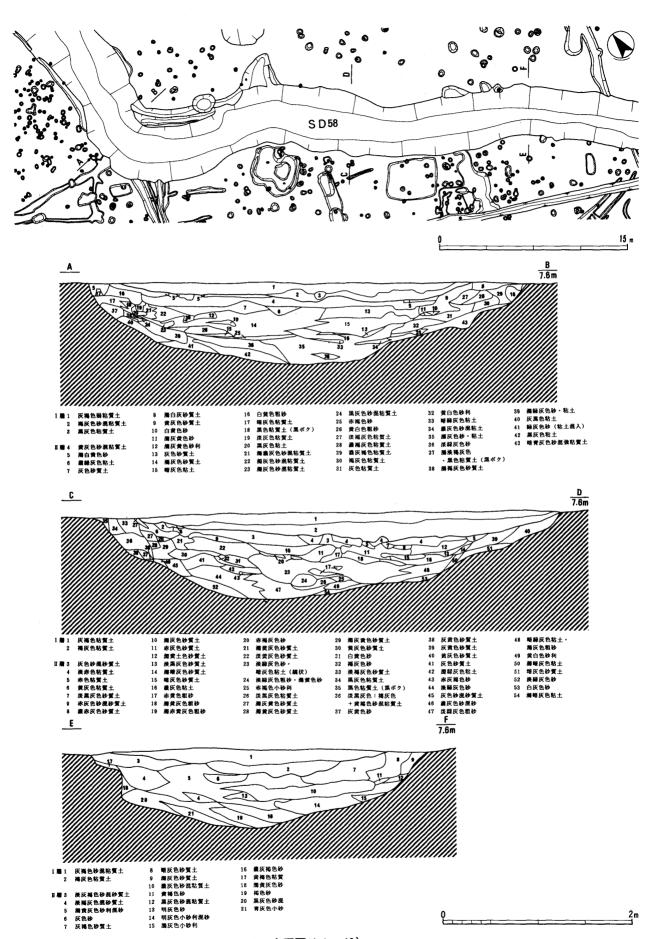
#### SD58出土の遺物

#### a. 飛鳥時代から奈良時代の遺物

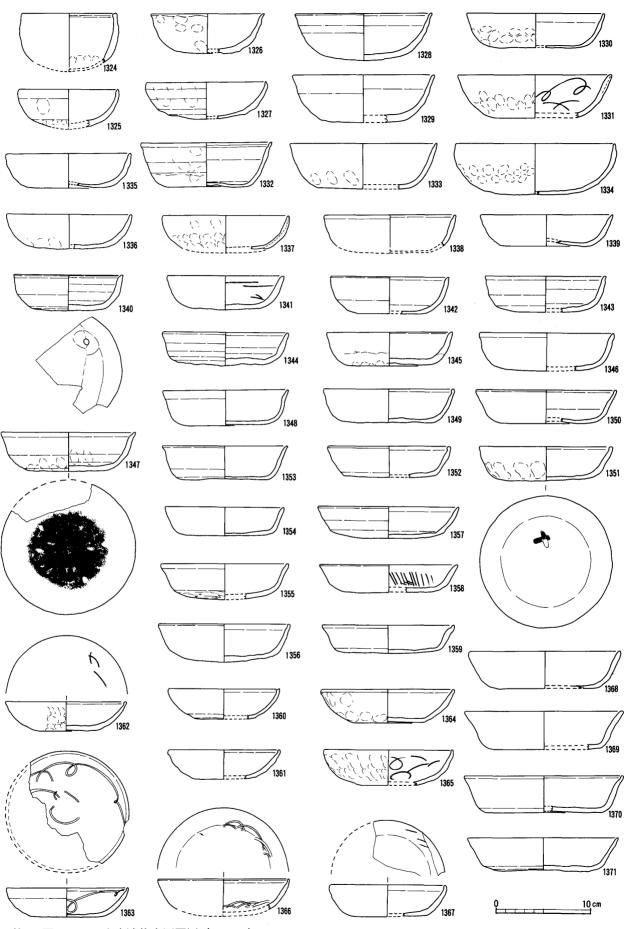
土師器 手捏ね土器 (1324) は、口径9.6cmで、体部から口縁部にかけて内湾する土器である。

椀(1325~1339)は、1325は口径10.4cmで、底部が丸く、ユビオサエのままである。1326は口縁部を外反させる椀で、1327はやや偏平な器形を呈する。1325・1327の椀は、飛鳥時代後半と考えられる。1328~1334は、口径14.2cm~16.6cmの大振りの椀である。1328が口径14.2cm、1329が口径14.7cmで、口縁部をヨコナデする同巧同大の椀である。1328は体部の調整は風化のために不明であるが、丸みを帯びた底部から口縁部を強くヨコナデする。1329は底部未調整である。1320は、口縁部を強くヨコナデし、体部外面にユビオサエが見られる。1331・1333は口縁部を尖り気味におわる。1332は、口縁部の強いヨコナデによって口縁部内面に沈線が見られる。1334は体部を内湾気味に立ち上がる。

椀A (1335~1339) は、粗製のもので、口径12.6 cm~13.1cmを測る。平らな底部から内湾気味に立ち 上がり、口縁端部を丸くおさめる。体部外面にはユ



第193図 SD58実測図(遺構図は1:300, 土層図は1:40)



第194図 S D 58出土遺物実測図(1)(1:4)

ビオサエ痕が見られる。

椀B(1340~1348·1351)は、厚手の椀で、平ら な底部から体部が内湾して口縁部に至り、口縁端部 を外反させるものである。口径11.4cm~13.2cmのも の (1340~1345·1348)、口径14.0cmのもの (1336· 1337・1351) がある。1340の底部は焼成後に円穴を 穿つ。1347の底部にはヘラ描きが見られる。

坏は、粗製のものもあるが、内面に螺旋状や放射 状の暗文を有するものも多数出土している。

1349~1351は、平らな底部から体部が緩いS字状 に延びて口縁端部が肥厚して丸くおさまる。口径12.6 cm・13.6cmの1349・1351と、口径14.5cm前後の1350・ 1351がある。1351の底部には「× | の墨書が見られ る。1352は、口縁端部を丸くおさめるが、底部と体 部の境の腰部が強く、底部はヘラケズリである。奈 良時代に属そう。1378は、平坦な底部から体部が直 線的に立ち上がり、口縁端部内面に沈線をもつもの である。底部ユビオサエのままである。1355~1359 および1368~1371は、おおむね奈良時代の所産の土 器であろう。

坏(1392~1426)は、口縁部の形態により坏A・ 坏Bに分かれる。口径により1~3に分類した。

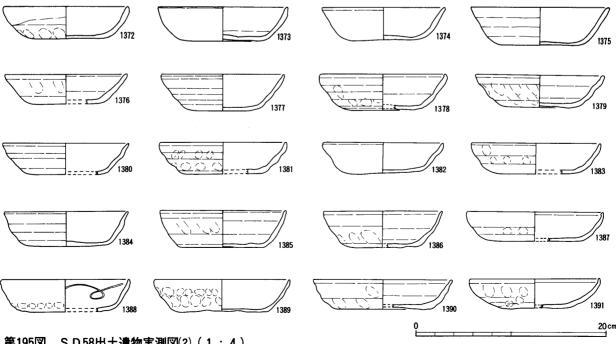
坏Aは、平坦な底部から体部が斜め上方に伸び、 口縁端部を丸くおさめるもので、口径に対して器高 が高いもの(1392~1394・1396~1403・1414・1421・

1423・1425・1426)。これらは内面に螺旋状暗文、体 部に放射状暗文を施すものが多い。口径11.6cmのA 1 (1392) 、口径12.6cm~13.6cmのA 2 (1393·1394· 1396~1401·1414) 、口径14.0cm·14.2cmのA 3 (1402·1403)、口径15.8cm~17.4cmのA 4 (1421· 1423・1425・1426) がある。調整は、1396・1417・ 1421の外面はヘラミガキが施され、1423は体部全面 にヘラケズリを施す。1384・1419の底部はヘラケズ リ、1397・1399~1401・1425の底部はユビオサエの ままである。1414の底部には「+」の墨書が見られ る。

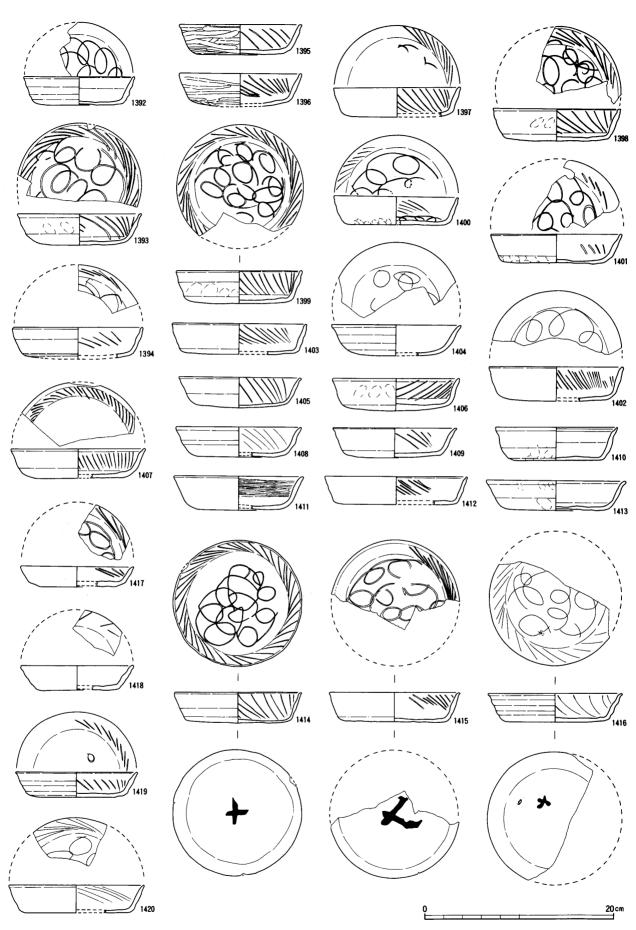
口縁部と底部の境がやや丸みをおびるもの (1393・ 1402) は、口縁部と底部との境が明瞭なもの(1394・ 1396・1398・1401・1415など)がある。

また、口径に対して器高が低いもの(1417~1420) がある。これらも法量により、口径11.7cm・11.8cm の1417・1418、口径12.6cmの1419、口径14.2cmの1420 に分かれる。

坏Bは、平坦な底部から体部が斜め上方に伸び、 口縁端部が外反するものであるBa(1395・1405・ 1406・1409・1410・1415・1416)。これらの内面には 螺旋状暗文、体部に放射状暗文を施すものが多い。 口径12.6cm~13.6cmのBal(1395・1405・1406・ 1409·1415)、口径14.0cmのBa2(1416)がある。 1395の体部はミガキが施され、1415の底部はヘラケ



第195図 SD58出土遺物実測図(2)(1:4)



第196図 S D 58出土遺物実測図(3)(1:4)

ズリ、1415・1416の底部には「×」の墨書が見られる。また平坦な底部から腰部が丸く体部が曲線的に丸みを帯びるものBb(1404・1407・1408・1411・1413・1422・1424)がある。内面に螺旋状暗文、体部に放射状暗文を施すものが多い。口径12.6cm~13.6cmのBb1(1409・1408・1411)、口径14.0cm~14.6cmのBb2(1407・1413・1422)、口径16.0cmのBb3(1424)に分かれる。

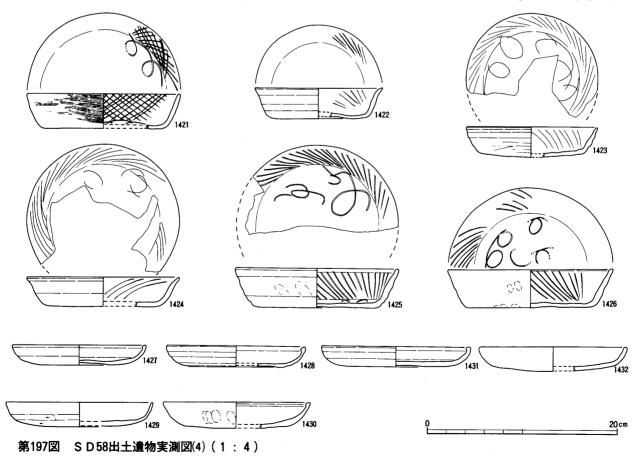
皿Aは、口縁端部が内側に肥厚し丸くおさめるもので、口径14.0cm・14.4cmのA1(1427・1428)、口径15.4cm~16.4cmのA2(1431~1435)、口径22.4cmのA5(1455・1456・1458)に分かれる。1430・1433・1434・1455・1458の内面には放射状暗文と螺旋状暗文を施す。1458は底部をヘラケズリで調整する。1430の底部はユビオサエである。

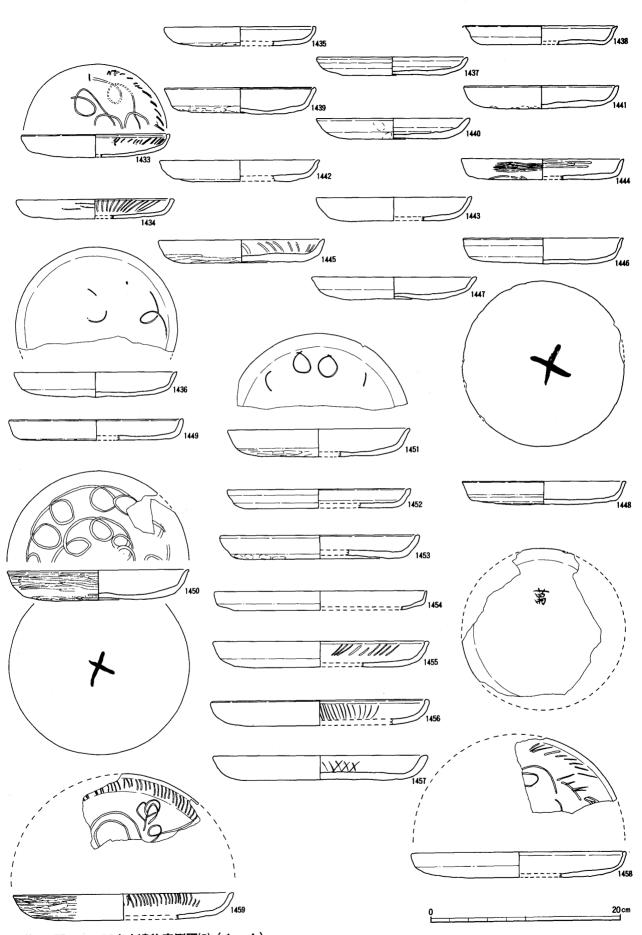
皿Bは、口縁端部が外反するもので、口径により 16.0cm~16.8cmのB2(1438・1442・1446)、18.8cm ~19.0cmのB4(1450・1451)に分かれる。1446は 底部をヘラケズリで調整する。1450の内面には螺旋 状暗文、外面は丁寧なヘラミガキを施す。底部には「×」の墨書が見られる。1451の底部はヘラケズリで調整され、内面には螺旋状暗文が見られる。

皿Cは、口縁端部上面に面をもつもので、口径により15.6cm~16.2cmのC2(1437・1441・1446・1448)、17.0cm~17.2cmのC3(1443・1447・1448)、22.4cm~23.0cmのC5(1457・1459)に分かれる。1437・1448・1455は底部ヘラケズリ調整で、1444の外面は細かいヘラミガキを施し、内面にも横方向にヘラミガキを施している。1459の外面には丁寧なヘラミガキを、内面には雑な放射状暗文と螺旋状暗文を施している。1446の底部には「×」の墨書が見られ、1448の底部には「萬」がヘラ書きされている。

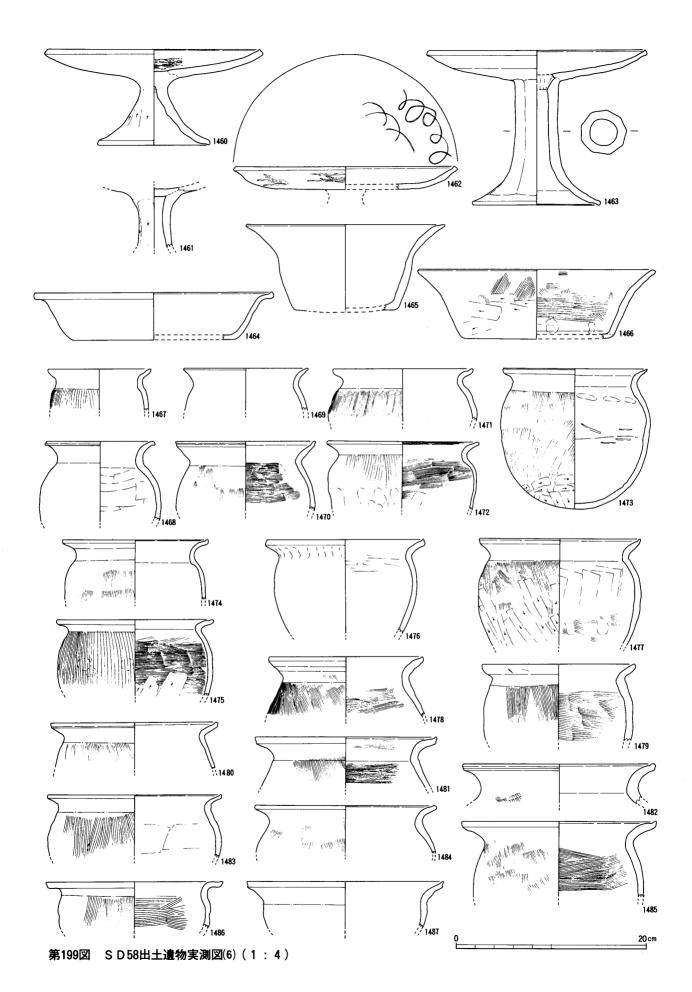
皿Dは、口縁端部を丸くおさめるもので、口径により15.3cm~16.0cmのD2(1429・1439・1440)、17.0cm~17.2cmのD3(1443・1444)、20.7cm~22.2 cmのD5(1453・1454)に分かれる。1429は底部へラケズリ調整で、1439・1440・1453の底部はユビオサエである。

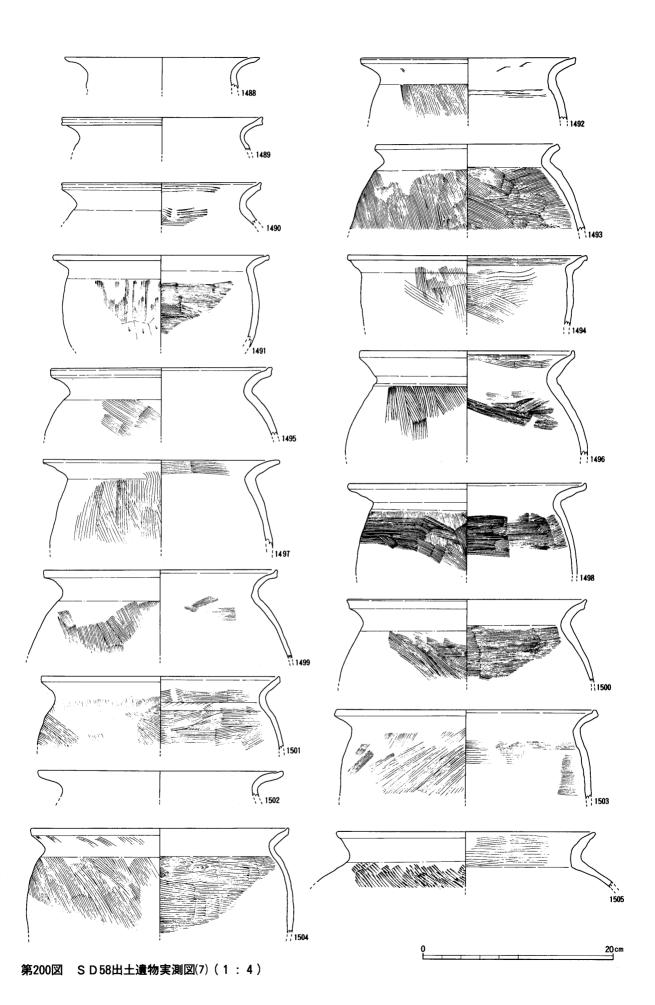
高坏は、1460は脚部がハの字状に開く高坏で、坏部内面にヘラミガキが施される。1462は坏部だけで



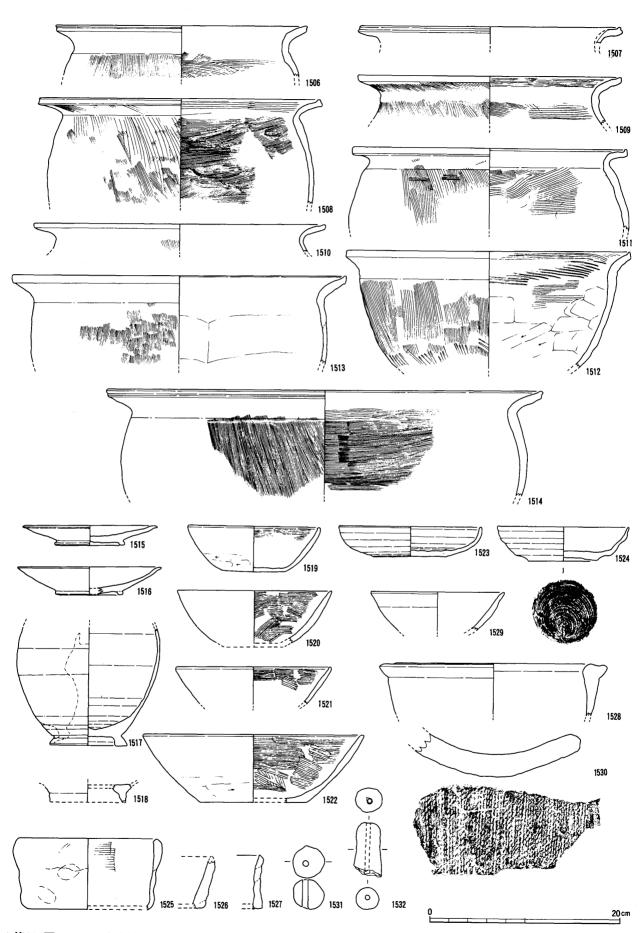


第198図 S D 58出土遺物実測図(5)(1:4)





— 159 —



第201図 S D 58出土遺物実測図(8)(1:4)

あるが、外面に細かいヘラミガキ、内面には螺旋状 暗文を施す。

鉢は、1465は口径が器高に比べて高い鉢である。 1461は外面体部を斜め方向のハケメの後、下半を横 方向にヘラケズリする。内面にはハケメが残る。

甕は、頸部から口縁端部の形状により、大きくは 甕Aから甕Gに分類される。主になるものは、甕A ~甕Cである。

**甕**Aは、外反する口縁部から端部で上方につまみ上げて端部外面に面をもつもの(1473・1476~1478・1481・1485)である。1473・1477は体部内面をヘラケズリし、外面は縦方向のハケメの後に下半をヘラケズリする。1481・1485は体部の内外面にハケメを施す。

**甕**Bは、外反する口縁部から端部で上方につまみ上げ、端部外面に凹面または段をつくるもの(1470・1490・1495・1506・1507)である。

**甕**Cは、外反する口縁部から端部で強いヨコナデにより内面が凹面状になるもの(1467・1471・1475・1498・1502・1509・1510)である。

**甕**Dは、口縁部をく字状に強く屈曲して端部外面 に面をもつもの(1494)である。

甕Eは、口縁部を緩やかに外反させ端部外面に面をもつもの(1493)である。

要Fは、口縁部が緩く外反し端部が丸く肥厚する ものFa(1483)、頸部がく字状に外反して端部が 丸く肥厚するものFb(1475)に分けられる。

甕Gは、口縁端部内面に凹面をもち、外面には沈線が巡るものGa(1470)、緩やかに外反する頸部から口縁端部が垂下するもの(1463)がある。

**甕**Hは、口縁端部を尖り気味に外上方に引き出す もの(1469・1473・1477・1488・1505)である。1473・ 1477は体部外面上半をハケメ、下半をヘラケズリする。

鍋は、口縁端部の形態により鍋A・Bに分類できる。

鍋Aは、甕Aと同じ口縁部の形態をもつもので、 外反する頸部から口縁端部で上方につまみ上げ、端 部外面に面をもつもの(1512・1513)である。口径 は、30cm代である。調整は、1512の外面は縦方向の ハケメ、内面は口縁部から体部上半が横方向のハケ メで調整され、下半はヘラケズリされる。 鍋Bは、外反する頸部から口縁端部で上方につまみ上げ、端部外面に凹面をもつもの(1514)がある。 復元口径は45.6cmを測る。

須恵器 坏蓋(1533~1536・1545)は、古墳時代タイプの坏蓋である。口径9.6cm~14.4cm前後で、丸みを帯びた天井部をもち口縁部との境がないもの(1534・1536)と平らな天井部を有するもの(1533)がある。1535は口縁端部内面に段をつくり、やや古相を呈する。天井部の調整は基本的にヘラ切り未調整であるが、ロクロケズリするもの(1536)もある。1545は口径10cm未満で坏蓋が矮小化したものであろう。

坏身(1537~1544)は、立ち上がりをもつ古墳時代タイプの坏身である。口径11.0cm~11.4cmで内傾する短い立ち上がりをもつ。1534は口径に対して器高が低く偏平である。底部の調整は主にヘラ切り未調整である。

坏蓋A(1546~1548)は、口縁部内面にかえりをもち、天井部につまみを有する蓋である。1546は口径7.6cmと小径で、天井部に宝珠形のつまみをつけるが、かえりは口縁部の稜とほぼ同一におさまる。1547・1544のかえりは口縁部の稜より下に出る。1547は口径8.8cm。1548は口径9.8cmで、偏平な器形から他器種の蓋とも考えられる。

坏蓋B (1549~1559) は、内面にかえりを有しない坏蓋である。輪状のつまみをもち、天井部が直線的に口縁部に至る (1552)、平坦な天井部をもち口縁部を折り曲げる (1449・1551・1556)、平坦な天井部から内湾させた後、水平にのび口縁端部を屈曲させる (1553・1554) がある。1556の天井部には「×」、1557は内面に「志」、1558は天井部に「○」の墨書が書かれている。また、1557の内面には墨痕が見られ、墨を入れた容器の蓋と考えられる。

蓋 (1560・1561) は、短頸壺と考えられる。1560 は口径14.8cmで擬宝珠状のつまみ付け、1561は輪状 のつまみを付ける。それぞれ口径は11.0cmと11.8cm である。

坏A (1569~1582) は、高台を有しない坏身である。1569~1572は口径11.2cm~13.2cmで、腰部に丸みをもつ。底部はヘラ切り未調整である。また1573・1574は底部をヘラ切りの後にロクロケズリを施すも

ので、平らな底部を有する。体部が直線的にのび口縁端部が外反する(1575・1576・1581)、口縁部が直線的に延び端部を丸くおさめる(1579)、平坦な底部から内湾する体部をもつ(1580)がある。調整は、1577は底部ヘラ切り未調整、1578~1582はロクロケズリで調整される。法量では、口径12cm前後、13cm~14cm前後、17cm前後に分かれるようである。器高は3.1cm~3.9cm前後が主であるが、やや深い4.6cm~5.2cmの1579~1581があり、特に1579・1580は大振りの坏である。また1582の底部には墨書が見られる。

坏B (1583~1606) は、高台を有する坏身である。 体部が斜め外方にのび、高台が底部の内側につけら れ腰部が張出しているBa(1595・1602)、1595は 底部が下がる。1595・1602は猿投窯編年の高蔵寺2 号窯式期に相当しようか。体部が斜め外方に直線状 にのび、断面方形の高台がつくBb (1583・1587・ 1589・1593・1597・1599・1600・1604・1605) があ り、1600は高台をハの字につける。口縁部が緩やか に外反し、高台を体部と底部との境よりやや内側に つけるBc (1584·1591·1592·1594) がある。口 縁部が外反し、高台が底部と体部の境につくBd (1585・1603) がある。口縁部が内湾気味か直立気味 で、高台が底部と体部の境につくBe (1586・1588・ 1589・1590) がある。8世紀中頃以降と考えられ、 猿投窯編年では、岩崎25号窯式期以降に相当しよう か。口径は、13cmから14cm前後までと14cmから15cm 前後まで、20cm以上に分けられそうである。1604は 底部に「×」のヘラ記号が認められ、1605は「酒」 が、1606は「×」が底部に墨書されている。

高坏(1562~1568)は、脚部に透かしがなく、1562~1564は有蓋高坏、1565~1567は無蓋高坏である。 口径は10.8cm~12.7cmであり、当該時期の坏身と同形の受部をもつ。1564は太い基部から開く脚部をもつ短脚の高坏である。1566は脚端部を斜め上方につまみ上げ、外面は傾斜する面をつくる。1567の坏部は内湾させ、脚端部が下方に拡張させて面をつくる。1568は短脚であり、端部は内湾して丸くおさめる。脚部に段がみられ、内湾する脚部から台付盌の脚部とも考えられる。

椀 (1607~1612) は、基本的に、底部を糸切りする椀である。口径は12.5cmを中心に、11.4cm~13.2cm

までである。ほぼ似かよった法量を示す。猿投窯編 年の岩崎25号窯式期以降に相当しよう。

皿 (1613~1620) は、口縁端部が外反する皿A (1613~1617) と丸くおさまる皿B (1618~1620) に分けられる。すべて底部から体部にかけてロクロケズリで調整する。1620は器壁が厚い。1619の底部には「労」の墨書が見られる。

盤B(1621)は、高台を有する盤で、底部内側に 方形の高台がつく。

聴(1622)は、低い高台をもち偏平な体部を有する。猿投窯編年の高蔵寺2号窯式期であろうか。

平瓶(1623・1624)は、体部に稜をもつ1623と平底で稜をもたない1624がある。ともに底部をロクロケズリする。1624には体部上面に「×」のヘラ描きがある。

有蓋脚付壺(1625)は、口径は5.8cmである。

長頸壺(1626~1630)は、1626と1627は高い高台がハの字に開き、平坦面で接地する。ともに体部に稜をもつ。1627は頸部に2条の沈線を施す。1628・1629は長頸壺の高台部で、ハの字に踏ん張った高台の端部を斜め上方に肥厚させて外面に面をもつ。ともに内端で接地する。1630は球状の体部に断面方形の高台が付き、底部は高台を凌駕する。猿投窯編年の高蔵寺2号窯式期であろう。

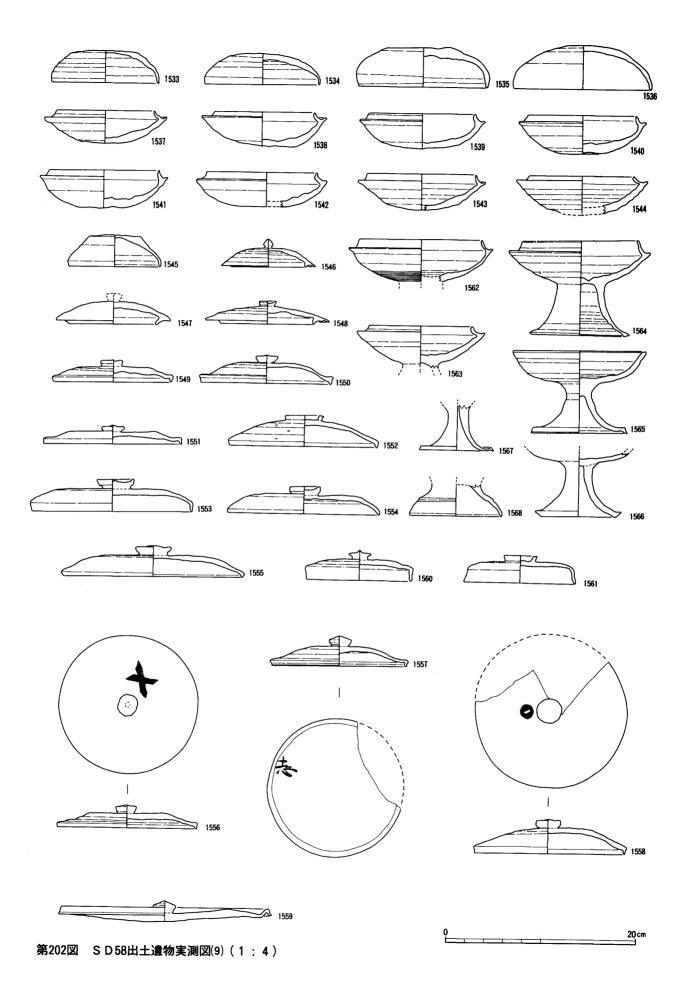
短頸壺(1631)は、長胴の短頸壺で体部の両肩に 断面方形の把手がつく。

広口壺(1632~1634)は、口縁部が直線状にのびる1632がある。1633・1634は口縁部が外反する壺で、1633は口縁端部を上下に引き出し、頸部には2条の沈線を施す。1634は口縁部外面に凸線がめぐり、口縁端部を垂下させる。

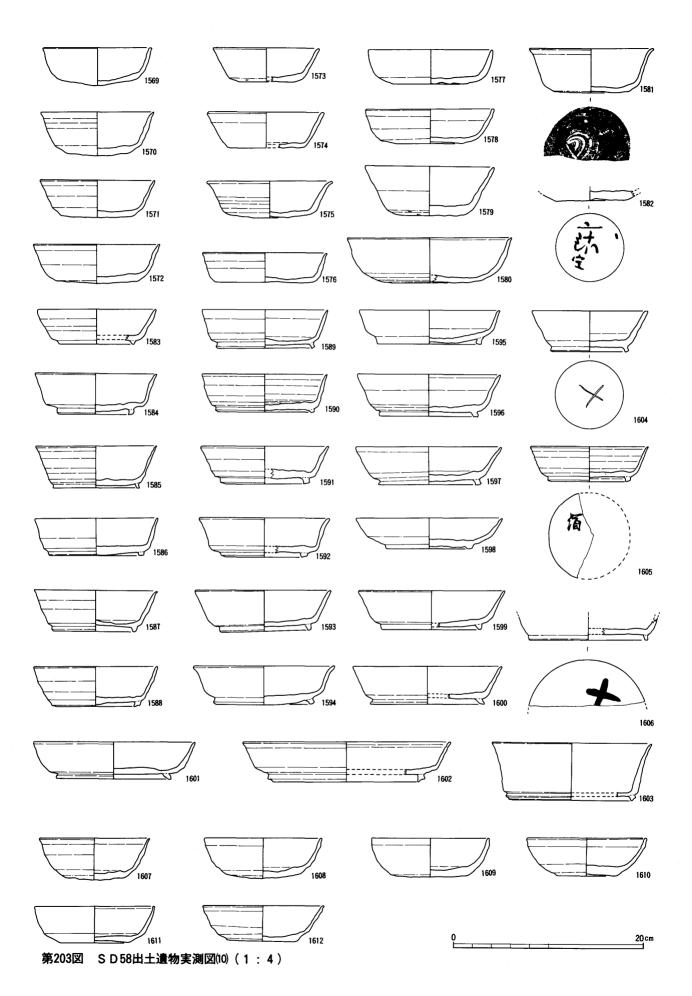
鉢は、鉢Aから鉢Fに分類される。

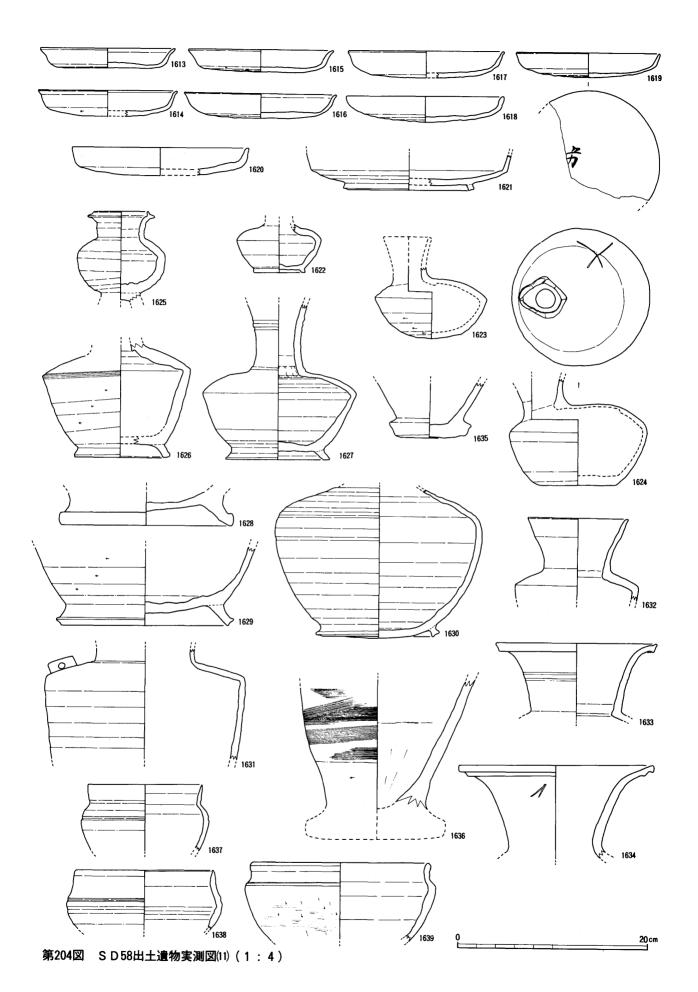
鉢A (1635・1636) は、いわゆるすり鉢である。 1635の底部はヘラ切り未調整である。

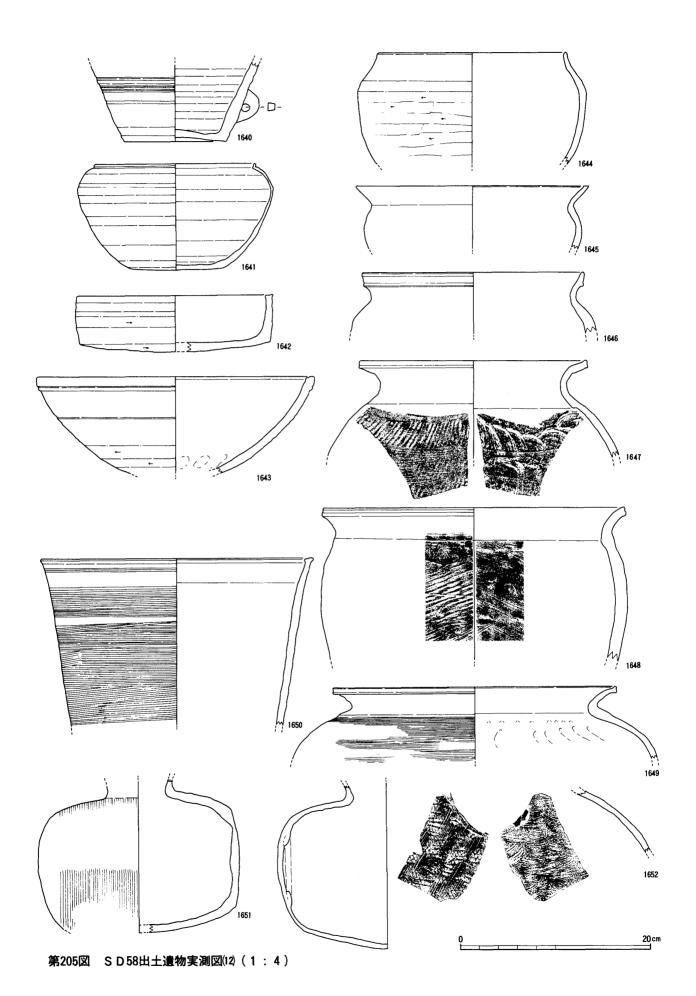
鉢Bは、内湾する体部から内側に段をなして直線的に上方に立ち上がるもの(1637・1638)で、口径12.0cm程で口縁端部を丸くする(1637)と、口径14.3 cmで、口縁部は直線的に上方に立ち上がるが、口縁端部を内側に内傾させる(1638)がある。1638は、1637を一回り大きくした形状を呈する。1638の体部には2条の沈線がめぐる。

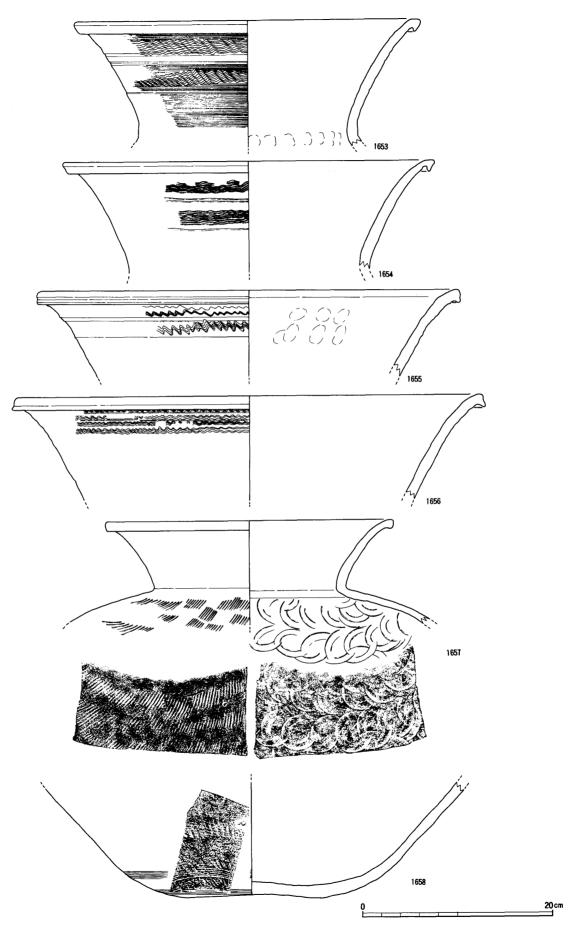


**—** 163 **—** 

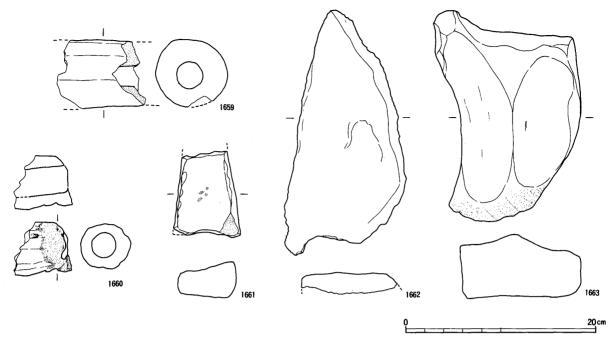








第206図 S D 58出土遺物実測図(13) (1:4)



### 第207図 S D 58出土遺物実測図(14)(1:4)

鉢C (1639) は、口縁部を内側に曲げ、直立する ものである。体部外面はヘラケズリの後、カキメを 施している。

鉢D(1640)は、底部径10cm程で体部が直線的に 斜め上方にのびる。体部には沈線が施され、断面環 状の把手がつく。

鉢E(1641)は、いわゆる鉄鉢で、器壁が薄く平 らな底部から体部が内湾して口縁端部を上に屈曲さ せたものである。

**鉢**F(1642)は、平らな底部から体部が直立して 立つ器壁の厚いものである。

鉢F (1643) は、口径29cm程の大型品である。緩 やかに内湾した体部は、肥厚して断面方形の口縁部 をもって縁帯をつくる。

**甕は、甕Aから甕Eに分類される。** 

**甕**A(1644)は、体部が緩やかに内湾して、口縁 部が上方にのびる甕で、体部外面は横方向にヘラケ ズリされる。

選B (1645・1646) は、口縁端部上面に面をもつ 1645と斜め上方につまみ上げて外面に縁帯をつくる 1646がある。1645は口径24.4cm、1646は口径23.0cm である。

**甕**C(1647~1649)は、くの字状に鋭く外反して 端部外面が凹状に窪む甕である。

蹇D (1653~1658) は、口縁部が外反して端部が

垂下する広口甕である。口径30cm~49cmで、1653~1657は頸部外面に沈線と波状文をもつ。1657の体部外面には平行タタキ、内面には同心円および円弧状の当て具痕を残す。

1652は、小型甕の体部片である。

甑(1650)は、口径24.4cmで体部外面にカキメで 調整される。

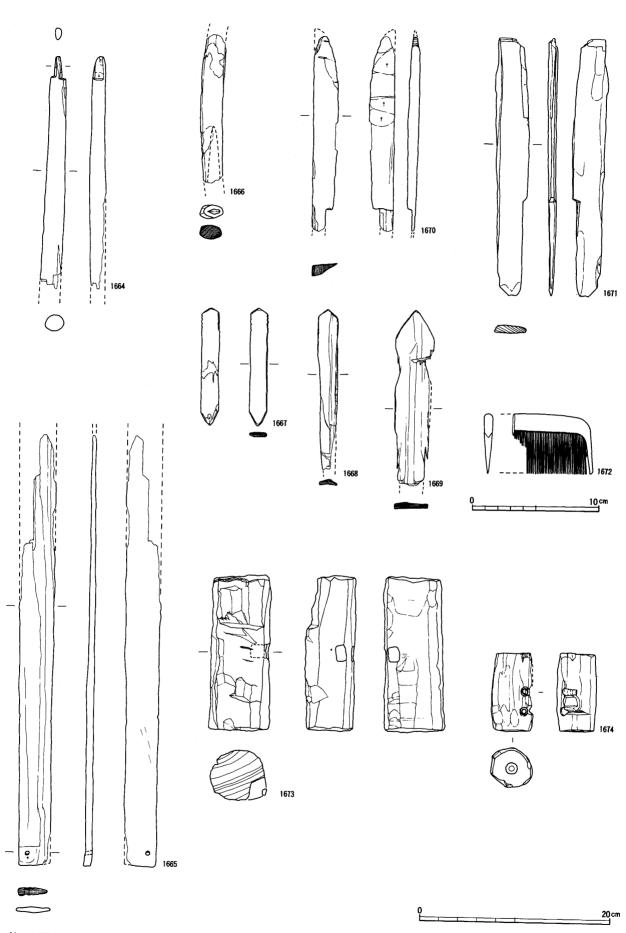
横瓶(1651)は、体部に縦方向のカキメを施した 後に底部をヘラケズリする。

## b. 平安時代の遺物

土師器 椀 (1360~1367) は、口縁端部が肥厚して丸くおさまるものである。口径により11.6cm~12.6cmのE1 (1360~1363・1367)、13.2cm~13.7cmのE2 (1364~1366)に分かれる。底部の調整は、基本的にナデまたはユビオサエのままであるが、1367・1366はヘラケズリを施す。1362・1363・1365・1366の内面には螺旋状暗文が残る。平安時代初頭頃と考えられる。

坏 (1372~1391) は、在地産の粗製のものである。 基本的に底部ユビオサエのままで体部もユビオサエ 痕が明瞭に残る。平安時代初頭から中期頃の所産と 考えられる。

皿 (1437~1440・1447) 、口縁端部が内側に肥厚して丸くおさまるもので、口径15.7cm~16.0cmの1437・



第208図 SD58出土木製品実測図(1)(1:4)(1672は1:3)

1440、1439・1440の底部はユビオサエである。1447は、口径17.2cmで、口縁端部上面に面をもつものである。これらは平安時代初頭から平安時代中期頃に比定されようか。

甕は、甕Aから甕E・Fがある。

ここでは、平安時代としたが、奈良時代にはいる ものもある。

**甕**A(1472)は、頸部が緩やかに外反して、口縁端部が丸くおさまるもので、口縁部に強いヨコナデを施す。体部外面上半をハケメ、下半をヘラケズリで調整する。

**甕**B(1474)は、頸部がゆるやかに外反して、口 縁端部をつまみ上げるもので、内面が凹面状を呈す る。体部外面にハケメを施す。

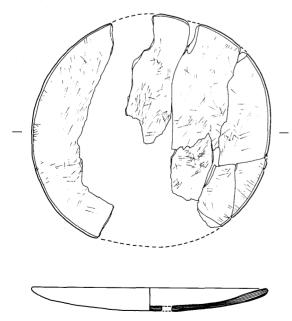
**甕**C(1489・1508)は、口縁端部外面に凹面をつくるものである。1489の口縁端部はやや肥厚し、1508は口縁端部内面が丸く肥厚する。

**甕**Dは、口縁端部を上方に屈折させ、端部外面に 面をもつもの(1496・1499・1503・1511)である。 平安時代初期と考えられる。

**甕**E(1528)は、ゆわゆる「清郷型」甕で、口縁部を肥厚させ、端部を水平に引き出した後に受け口状につくる。野末氏のb類に相当しよう。

鍋 (1486・1487) は、口縁部を上方につまみ上げる。口径は、それぞれ18.6cm・20.6cmである。

高坏(1463)は、口縁端部外面に面をもち、脚部



第209図 S D 58出土木製品実測図(2)(1:4)

を9面にヘラケズリで面取りする。

製塩土器 (1525~1527) のうち、1525は器高7.4cm、1526・1527は器高5.4cm~5.8cmを測る。1525の内面にはハケメが残る。

**須恵器** 坏蓋(1559)は、口径に対して器高が低く、平坦な天井部から Z 字状の口縁部をもつ。

灰釉陶器 皿 (1515・1516) がある。1516は角高台で、ハケ塗りしたものである。猿投窯編年の黒笹14号窯式期に比定されよう。また、1515は黒笹90号窯式期に比定されよう。

長頸瓶(1517)は、体部上半から上を欠損するが、 黒笹90号窯式期に比定されよう。

緑釉陶器 椀 (1518) は、高台部の小片である。 黒色土器 椀 (1519~1522) は、全て黒色土器 A 類で、口縁端部が直線的にのびて丸くおさめるもの (1519・1520) 、端部を丸く内側に肥厚させるもの (1521・1522) がある。いずれも外面にヘラケズリ、 内面にヘラミガキが施される。斎宮編年の前 Ⅱ 期に 相当し、9世紀後半代に比定されよう。

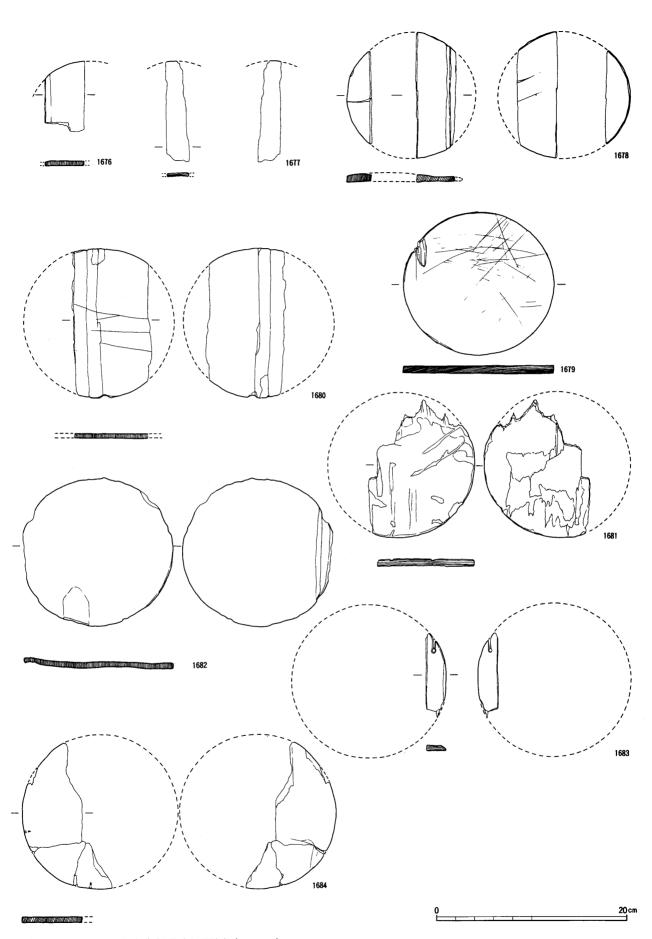
ロクロ土師器 坏(1523・1524) は、それぞれ口 径13.8cm・15.0cmで、底部に糸切り痕が残る。

### c. 鎌倉時代以降の遺物

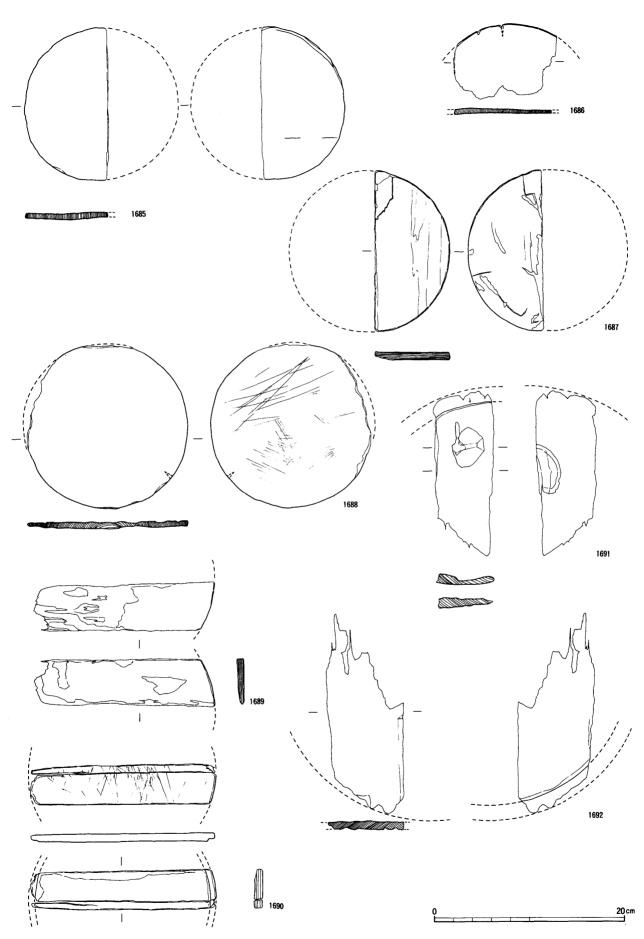
白瓷系陶器 椀(1529)は、口縁部片であるが藤 澤編年の第6段階に比定されよう<sup>®</sup>。



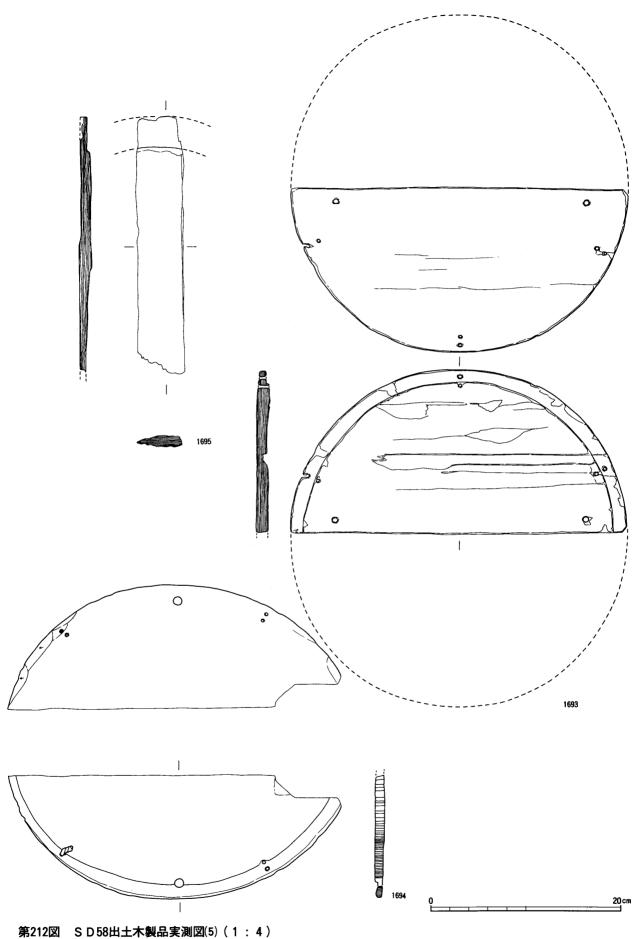




第210図 S D 58出土木製品実測図(3) (1:4)



第211図 S D 58出土木製品実測図(4)(1:4)



#### d. その他の遺物

瓦 平瓦 (1530) は、平瓦で内面に縄目、外面に 布目が見られる。

**土製品** 土錘 (1531・1532) は、1531は径3.2cmで 球形を呈し、孔径0.5cmを測る。1532は残存長5.8cm、 径2.7cmで長形の土錘で、孔径0.4cmである。

フイゴ羽口 (1659・1660) は、共に両端を欠損する。外面はヘラケズリにより調整される。1659は径7.3cm~7.5cm、内径2.8cm、1660は径5.0cm~5.4cm、内径2.5cmである。

**石製品** 砥石 (1662・1663) のうち、1663は2か 所に使用による凹面が見られる。

木製品 SD58からは弓、横櫛、火鑽板、斎串、 曲物をはじめ武器、服飾具、生活用具類から建築部 材に及ぶ木製品が出土している。特に曲物の出土は 多く21点になる<sup>®</sup>。

弓 (1664) は、現存長24.4cm、径2.0cmで、丸木材をそのまま利用して作られている。両側面を削り出して弓弭を作り、弓躬端部は丸く削り出している。弦を巻いた痕跡は不明である。

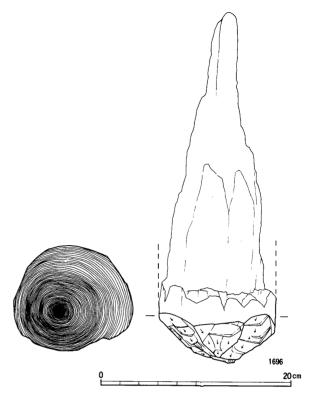
剣鞘(1665)は、刃身痕は見られないが、削り出して孔をつくっているところから、剣鞘の半身の部分と考えた。

刀子柄(1666)は、両端が折損しているが、残存 部には長さ6.0cm、幅1.3cm、厚さ0.5cmの茎をおさめ るための孔が認められる。

斎串(1667・1668)は、2点出土している。1667 は板材の上端を圭頭状にして下端を剣先状につくり、 左右に5か所切り込みを入れる。CⅥ型式にあたる。 1668は下部を欠損するが、切り込みを入れないCⅠ 型式に相当する。

人形(1669)は、圭頭状の頭部をしており、頸部には肩をつくる切り込みの一方向から数回切り込んでいるのみで、左右ともに折れている。また腕部は同じように数回切り込んで作っている。脚部は欠損している。一見人形には見えない。

刀形 (1670・1671) は、1670・1671ともに板材を 削り込んで刀身と、刀身の幅より狭く柄と言うより も茎のようにかたちどるB型式に相当しよう。1670 は、刀身を半分から切先に向けて片面全面を削り、 かたちを作っている。1671は板材の一方の縁を削り、



第213図 S D 58出土木製品実測図(6) (1:4) 刃を作り出している。

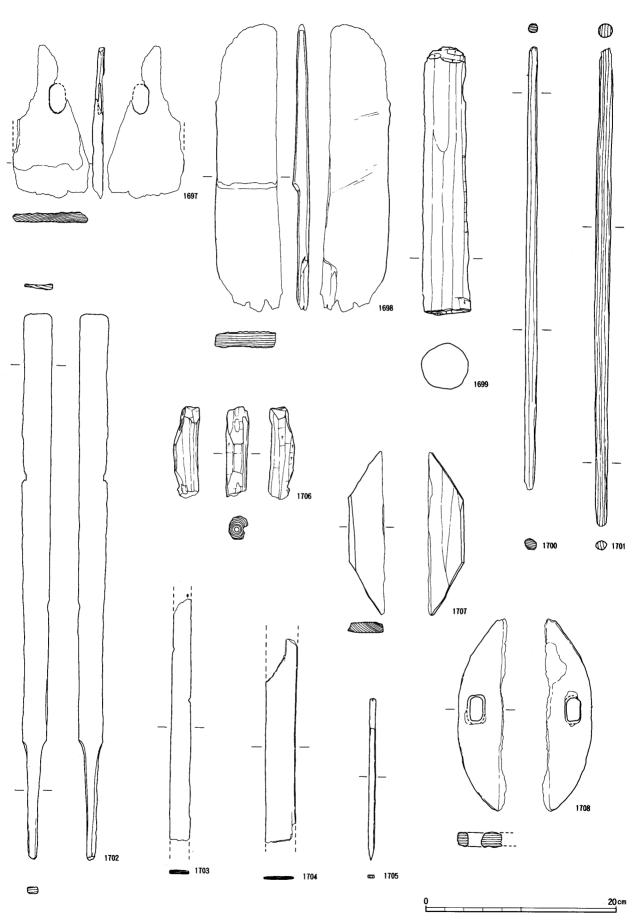
横櫛(1672)は、挽歯式で肩部は丸味をもつ。 1 cmあたり平均 9 枚の歯を挽き出している。現存長6.5 cm、高さ4.7cm、厚さ0.7cmを測る。 A II 型式にあたり 8 世紀後半に比定されよう。

木錘(1673)は、板目取りした材を削り、中央部 に紐を通す方形の孔を開ける。木錘を吊るした時、 重心が低くなるように断面三角形を呈する。

火鑽板(1674)は、長さ8.3cm、径4.4cmで、形状は円形に近い六角柱状に削られ、芯部は繰り抜かれている。中央部分に火鑽杵を回転させた火鑽臼が2か所見られる。火鑽臼の径は上端で0.9cm、下端で0.5cmである。深さは1.3cm程である。また下方の火鑽臼の径は上端で0.8cmでキリカキが見られる。火鑽臼の径は上端で0.8cmでキリカキが見られる。火鑽臼の径から火鑽杵の径が推定されるが、火鑽杵の径は、縄文から江戸時代まで太さ1cm前後のものであり、本遺跡出土の火鑽板からの推定する火鑽杵の径も同様と言えよう。

皿(1675)は、口径25cmである。外面に工具のハツリ痕が見られる。木取りは横木取りである。

曲物 (1676~1695) には、底板と蓋がある。底板は (1676~1689) の14点で、蓋は (1690~1695) の6 点である。1676は復元径13.4cmを測り小型の曲物



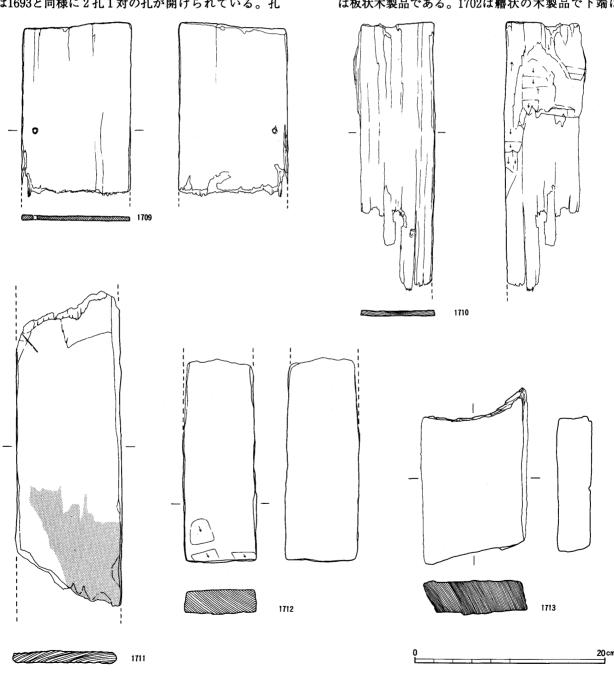
第214図 S D 58出土木製品実測図(7)(1:4)

底板である。1679は底板で、径15cm強で1682・1684とほぼ径が揃う。また1679には均等に5か所に釘を配している。1683は曲物の蓋で、小片であるが孔が1か所認められる。1685は径16.0cm。1686は1か所に釘痕跡が残る。1688は径17.4cm。1679~1689は径15cm~18cmの中型の曲物である。1690~1695は蓋で内面の周縁を一段低くつくる。この周縁に側板を立てて樺皮紐で結合したと考えられる。そのため、1693には2孔1対の側板に固定する孔が3か所に見られ、補修のための孔が2か所開けられている。また、1694は1693と同様に2孔1対の孔が開けられている。孔

の1つに樺皮紐が残る。1691~1695は径30cm以上で 大型の曲物と言えよう。

柱(1696)は、建物の柱であろう。径12.8cmで、 柱先端は杭に2次使用されたため削られている。先 端から7cmより上は腐食している。

用途不明品(1697~1713)、1697は板目取りで、中央部に楕円形の孔が穿たれている。上端と下端は 欠損している。1698は柾目取りで下端は削られている。また段をもつ。1699~1701は棒状木製品である。 3本とも削りにより面取りがされている。1702~1704 は板状木製品である。1702は艪状の木製品で下端は



第215図 S D 58出土木製品実測図(8)(1:4)

削りにより柄状を呈している。1703・1704は板目取りである。1705は下端部を削り出している。1706は削りにより面取りし、また芯部をくり抜いているところから火鑽板の可能性がある。1707は柾目取りで

台形状である。1708は中央に隅丸長方形状の孔が穿たれている。1709~1713は板状木製品で全て柾目取りである。1709には辺部に孔が見られる。

# 6. 鎌倉時代から江戸時代の遺構と遺物

この時期の遺構を大別すると、①鎌倉時代の遺構、 ②江戸時代以降の遺構に分かれる。各時代の遺構は 以下のとおりである。

# ① 鎌倉時代の遺構

S D71 · 77 · 108

# ② 江戸時代以降の遺構

S D84·163·175 攪乱土坑群

# 全体の遺構配置

鎌倉時代の遺構は、調査区中央部に位置する東西 溝SD71・77の2条とその南の東西溝SD108がある。 SD71・77はほぼ幅3mの間隔をおいて平行してお り、道路の可能性がある。またSD108と平行するよ うに数条の溝が南北に一定の間隔を於いて見られ、 畑地の開墾溝と考えられる。

江戸時代以降の遺構は、南北溝SD84、SD84から南に続く南北溝SD163、その西に位置する南北溝SD175の3条がある。また調査区の中央東には攪乱土坑群がある。

# (1) 鎌倉時代の遺構と遺物

# 溝

SD71 調査区の中央部に位置する東西溝で、途中SD82、SD62を切って南西からS字状に湾曲しながら北東に向かう。検出長52.6mほどで、幅は0.4~0.67mと細くほぼ同じ幅で、深さ5~20cmを測る。土師器鍋や山茶椀の細片が出土しており、鎌倉時代と考えられる。

S D 77 調査区西側にある東西溝で、中世の溝 S D 71と平行して流れるため、S D 71と同時期と考えた。検出長13.1 m、溝幅は0.4 mで、深さは10 cm である。

SD108 調査区中央部にある東西溝である。検出 長20.3m、幅は0.4mで、深さは10cmを測る。出土遺 物には、13世紀前半に比定される山茶椀片がある。

# (2) 江戸時代の遺構と遺物

#### a. 溝

S D 84 調査区中央やや東よりに位置する南北溝で、南にS D 163へ続く溝と考えられる。検出長26.3 mを測り、幅は0.3~0.5 mで、深さは10~20cmを測る。

SD163 調査区中央部に位置する南北溝で、SD84から繋がると考えられる。検出長51.2mと長く、幅は0.4mと細い。直線的に南に流れる溝である。深さは30cmを測る。出土遺物には志野焼の椀底部片などがある。

SD175 調査区中央に位置する南北溝である。検 出長15.4mを測り、溝幅は0.3mで細い溝である。深 さ10cmを測る。

#### b. 攪乱土坑群

調査区の東側で、北東部に広がる。径1.5m~5.5m の不整形な円形または楕円形で、深さは約0.8mであるが深さは土坑により異なる。土坑の底は平坦であるが、断面形は袋状になるものもある。一身田町専修寺の阿弥陀堂建立にあたり、窪田の地より瓦を焼く粘土を採土したことが、「如来堂御建立録」(巻末参照)に記されている。検出した攪乱土坑群はこの跡と考えられるが、土坑は狭い間隔を於いて、不規則に並んでおり、土取りの跡としては疑問がのこる。

出土遺物 これらの攪乱土坑群からは飛鳥時代や 奈良時代の須恵器・土師器のほか、近世陶磁器など が出土しており、土坑群の時期は近世以降と考えら れる。このほかの遺物に陶馬が出土している。 **陶馬** 1714は頭部から頸部の一部のみであるが、調査区で検出した土坑群の最南端の土坑から出土した。飾馬に属するもので、顔面部は口・眼・耳孔・鼻孔をへうによって孔を穿つことで作り、また面繋をへうによる沈線で描くことで非常に写実性をもって表現されている。立髪は粘土の貼り付けにより作り、ヘラ描きによる縦方向の沈線などの表現は立髪には見られない。また胴部と接合するための断面五角形状の柄を頸部内側に貼り付けている。頭部から頸部のみで胴部の鞍については不明であるが、面繋が粘土紐を用いず沈線により表現しているところから小笠原編年の第Ⅰ段階B型式と考えられる。

土師器 1715は口径12.0cmを測る椀である。17167・1717は坏で、1716は底部から体部にかけてヘラケズリを施す。1717は底部をユピオサエで調整し、口縁部内面に沈線がめぐる。1718は皿で、口径19.0cmを測り、口縁端部は丸く肥厚し内面に沈線をつくる。1719は口縁端部を上方につまみ上げる甕で、内面は口縁部から体部にかけて横方向にハケメを施す。1720は耳栓である。長径3.3cm×短径2.7cmの楕円形を呈しており上面と下面は凹面状にくぼむ。

須恵器 1721はかなり偏平な古墳時代タイプの坏蓋で、天井部はロクロケズリの後に不定方向のナデで調整する。1722は口径10.9cmの坏身である。1723は底部をヘラ切りの後ナデ調整する無高台の坏である。1724は高台を有する坏である。1725は高台を有する盤であろう。1726は長頸壺の体部の下半部である。1727は口縁部を上方につまみ上げる鉢である。坏の底部はロクロケズリである。1728~1730は甕である。1728の体部外面にはタタキの後にカキメを施す。1730の口縁部外面には工具による刺突文が巡る。1729の口縁部には沈線が見られる。

**灰釉陶器** 1731は内面に灰釉を漬け掛けによる皿である。

このほかに図示していないが、弥生土器片や古墳 時代の円筒埴輪片なども出土している。

# 7. その他の遺構と遺物

遺構からの遺物の出土がなく、遺構埋土などから遺構相互の関係を判断できなかった遺構である。

S B 25

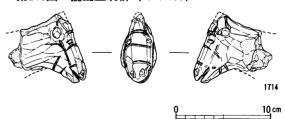
S K 203 · 213

#### 遺構配置

調査区北側で検出したSB25は、桁行の柱間が狭



第216図 攪乱土坑群(1:400)



第217図 土坑群出土遺物(1)(1:4)

い。また調査区南側で検出したSK203・213は、飛鳥時代または奈良時代と考えられよう。

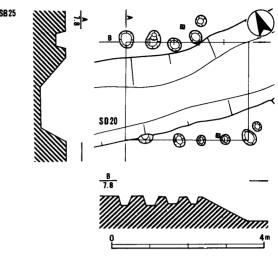
# a. 掘立柱建物

SB25は調査区の北方でSD20に切られた形で検出された。桁行は、65cmと短い柱間で5間である。 出土遺物がなく断定はしがたいが、形状からみて弥生時代の高床式倉庫と思われる。その場合、梁行は 1間であろう。 (本堂弘之)

# b. 土坑

SK203 調査区南中央に位置する。長径1.1m× 短径83cmで、深さは40cmを測る。長軸方向はN72° Wである。また平面の形態は不定形の土坑である。 出土遺物は細片のみで、時期不明とした。

SK213 調査区の南東端に位置する。長径1.0m ×短径0.8mで、深さは38cmを測る。また平面の形態 は楕円形を呈する土坑である。遺構埋土は黒褐色砂 質土及び黒色粘質土である。出土遺物は細片のみで、 時期不明とした。



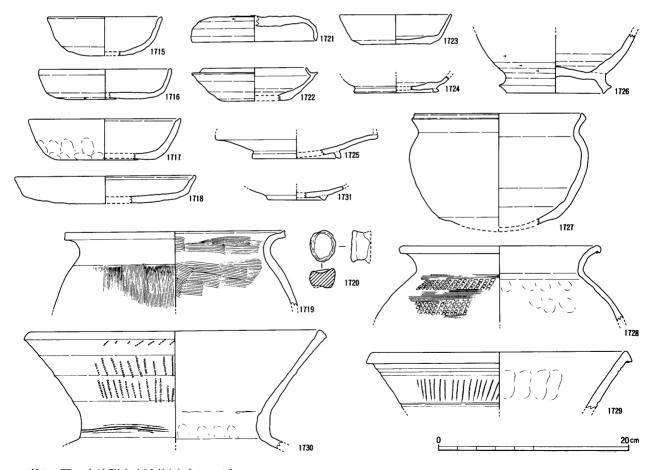
第218図 SB25実測図(1:100)

# c. 包含層出土遺物

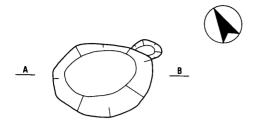
#### 飛鳥時代から奈良時代の遺物

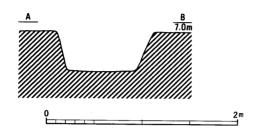
この時期の遺物には土師器や須恵器があるが、本 遺跡では土師器の出土量が少なく、須恵器の出土量 が圧倒的に多くを占めている。少ない土師器の中で も甕類が多いのが特徴的である。

土師器 坏 (1732~1735) は、口径9.8cm、器高3.3

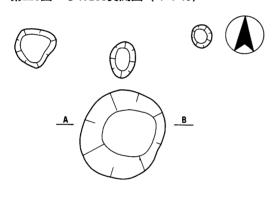


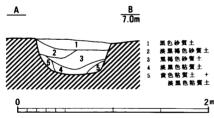
第219図 土坑群出土遺物(2)(1:4)





第220図 SK203実測図(1:40)





第221図 SK213実測図(1:40)

cmで丸味のある底部から内湾して立ち上がり、口縁部内面に面をもつ。古墳時代に通有の坏である。1733は、体部が緩やかに外反して口縁部を尖らせ気味におわる。1734は、口縁端部を内湾気味にする坏で、体部の内面には放射状暗文、底部には螺旋状暗文を施す。1735は、口縁部を強いヨコナデにより内外面が細まるものである。

坏B (1736) は、高台を有する坏である。□径19.5 cmを測る。

皿 (1737・1738) は、口径16.8cm・17.0cmとほぼ 同じ口径であるが、1738は口縁端部を肥厚させて丸 くおさめ、内面には放射状暗文と螺旋状暗文がのこ る。

高坏(1739・1740)は、脚部片である。1739の外面には縦方向にハケメが見られる。

土馬(1741)は、貼り付け痕跡が認められることから、脚部の接合痕跡と考えられ土馬の胴部とした。

甕(1748~1769)は、口縁部により分類される。

**甕**Aは、外反する口縁部の端部をつまみ上げて端部外面に面をもつものであるAa (1749・1750・1752・1759・1763・1767)。Abは、外反する口縁部の端部をつまみ上げて端部外面に凹面または沈線をもつもの (1754・1759・1760・1762) である。またAc (1733) は、端部外面に段をもつものである。

**甕**B(1765)は、外反する口縁部から端部で強い ヨコナデを受けたものである。

**甕**Cは、外反する口縁部から端部で尖り気味におわるものCa (1748・1751・1753・1768)。くの字に強く外反させ端部を尖り気味におわらせるものCb (1767) がある。

**甕**Dは、口縁部を緩やかに外反させ端部外面に面を持つ(1749・1756・1764)がある。

甕E (1755・1758) は、緩やかに外反する口縁部 から端部を丸くおさめるものである。

要F (1769) は、緩やかに外反する口縁部から端部を尖り気味にさせたものである。頸部がく字状に屈曲し、口縁端部を丸く肥厚させている。

この他に甕は、種々の口縁部の形状を呈する。調整は全体に残りは悪いものの、1751のように体部外面下半をヘラケズリを施して体部内面全面をハケメを施すと思われるものもあるが、主になるのは体部外面を縦方向のハケメ、内面上半を横方向のハケメ、下半をヘラケズリするものである。

鍋 (1770~1773) は、口径23.6cmの小型の鍋 (1770) と口径30cmを越えて体部に把手を有する大型の鍋 (1771~1773) がある。1770は、甕A a と同様に口縁端部を上方につまみ上げた鍋である。大型の鍋 (1771~1773) も甕A a と同様の口縁部の形態をもつ。この2個体の鍋は口径35.6cm・36.8cmとほぼ同じで、形態もほぼ同様と考えられる。1772の口縁部は肥厚して丸くおさめており、甕Eに相当すると思われるが肥厚するところが異なる。1770は体部内面全面に横方向のハケメを施す。1771の内面は下から上へ斜

めにヘラケズリする。

甑 (1774・1775) のうち、1774は甑の把手である。 1775は甑の底部で内外面にハケメを施す。

**須恵器** 坏蓋 (1776~1786) は、1776・1779は、 口径13.8cm・14.2cmで、口径が大きく天井部がやや 偏平である。1777・1778・1782~1785は口径9.6cm~ 口径12.1cmとやや小振りで、基本的には天井部はへ ラ切り未調整である。1785は口径9.0cm、器高3.5cm で、天井部はロクロケズリで調整する。口径に対し て器高が高く短頸壺の蓋であろうか。また、1786は 蓋としたが坏とも考えられる。

坏身 (1787~1810) は、1788~1791は口径13.0cm ~14.0cmの坏身で、1792~1795は口径12cm前後でやや小さくなる。底部はロクロケズリやヘラ切り未調整をする。1796~1800・1802・1803~1806は口径10 cm~11cm前後で、さらに小振りになった坏身で、1805はヘラ切り後にナデ調整する。1807~1909は口径9cm程である。底部の調整はヘラ切り未調整である。1807・1808は短い立ち上がりが受部より僅かに上に出る。1806の底部には「三」のヘラ書きが見られる。

坏蓋A(1811~1815)は、内面にかえりがつく蓋で、1811・1812は、口径7.2cm・口径9.4cmで、1813~1815は、1813は口縁部の稜線からかえりがやや下に出る。1814は稜線上におさまる。1815は短いかえりが内面につく。

坏蓋B (1816~1822) は、内面にかえりを有しない蓋である。口縁部まで傘状に広がり、口縁部を折り曲げる1817・1822などがある。

短頸壺蓋(1824)は、平らな天井部から口縁部を 内湾させる蓋で、天井部にカキメを施す。時期的に は6世紀中頃であろう。

坏A(1825~1838)は、高台がない坏である。腰が丸いもの(1825~1832)と腰が張り方形状を呈するもの(1832~1835)がある。腰が丸いものの底部は、主にヘラ切り未調整で、ロクロケズリする1831・1832もある。口径12.8cm~13.5cmを測る。腰が張り方形状を呈する1833は、底部を糸切りの後にヘラケズリする。1834・1835はヘラ切り後にロクロケズリする。1837・1838は大振りの坏である。ともに底部はヘラケズリする。

椀A(1839·1840)は、底部を糸切りする椀であ

る。1839は底部を糸切りした後にナデ調整が見られる。1840は口径10.4cmを測る。ともに岩崎25号窯式期以降であろう。

坏B (1841~1864) は、高台をもつ坏である。1860 は、口径17.6cmを測る大型品である。高い高台が底部内側に付き内端部で接地する。金属器を模倣したものであろう。口縁部が外方に直線状に延びる1855や1856、口縁部が内湾気味の1857・1859があり、腰部が丸みを帯びて体部が内湾する1848・1862、腰部が丸みを帯びて体部が内湾し、口縁端部が外反する1863がある。また底部片が多いが、高台が高く外端部で接地する1841・1852・1853、ハの字状に開き方形を呈し外端部で接地するもの1843・1847・1849・1850、また低い高台で方形を呈するもの1845などがある。1854の内面には「キ」のヘラ記号が見られ、1864の底部には「大」の墨書が見られる。

有台盤(1865)は、口径22.4cmを測り、底部の内側に付いて低い方形の高台をもつ。

盤(1866)は底部片で、復元底径21.6cmを測る。

台付盌(1870)は、底部から内湾して口縁端部が立ち上がる坏部をもち、脚部は短く緩やかに開く。 金属器を模倣したものと考えられる。

高坏(1867~1869)は、1867は脚端部を上方に上げ、外面に面をもち、1868は内湾し断面方形を呈する脚端部をもつ。

聴(1871~1877)は、1871・1872は体部に円孔をもつものである。1873~1875は突出する注口をもち、1876・1877は突出する注口と高台をもつものである。 猿投窯編年では、1873~1875が岩崎17窯式期、1876・1877は岩崎41窯式期に比定されよう。

平瓶(1878)は、体部が丸みを帯び、体部最大径に沈線がめぐる。

直口壺(1879)は、口径5.6cmを測る。

長頸壺 (1880~1885) は、体部の肩が張り稜をもつものである。1884は体部が偏平で稜をもたないもので、底部に小さく低い梯形の高台をつける。

長頸瓶(1886・1887)は、1886・1887は高台から 体部片である。

1888~1891は、口縁部及び頸部片である。1888は 短頸壺または双耳壺の口縁部片、1889は長頸壺の口 縁部片、1890は水瓶の頸部片、1891は長頸壺の頸部 片と考えられる。

獣脚(1892)は、ヘラケズリで調整されており、 縦に3条の溝を入れてダイナミックな爪先をつくる。 同様の脚をもつものに松阪市出土の三足壺がある。

円面硯(1893~1900)は、1893・1894は共に脚台部上に凸線が巡り、その下部に一条の凹線がめぐる。透かしは、方形か十字形の透かしをもつと考えられる。1894は硯面部推定径15.8cm、また陸部推定径11.8cmである。1895は脚台部下部のみが残存しているだけであるが、隅丸の十字状の透かしをもつと推定される。1896は内堤をもち、脚部に2か所に方形の透かしが残る。1897は内堤がなく陸部が外縁より低い。方形の透かしをもつと考えられる。1899・1900は硯面部片であるが、1900は方形の透かしをもち陸部の残存から共に外縁より高い陸部を有すると考えられる。1897は硯面部径15.9cm、透かしの短辺9cm程でおよそ21cm間隔に透かしを施す。

鉢A(1901)は摺鉢で、口径15.6cmで、直線的に 斜め上方にのびる体部の外面にカキメを施す。

鉢B (1902・1903) は、1902は口縁端部をくの字 状に屈折させた鉢で、1903は口縁部を緩やかに外反 させる。体部上半にカキメを施す。

短頸壺 (1904) は、口縁部を外反させ端部をつま み上げるものである。

広口壺A (1910~1912) は、口縁端部を垂下させ て縁帯をつくる。口縁部にはカキメを施す。

広口壺B (1905・1906) は、口縁端部を肥厚させる壺で、1905の頸部には2条1対の沈線がめぐる。

広口壺C (1908) は、口縁端部を上下に肥厚させて外面に縁帯をつくる。

広口壺D(1909・1913)は、受口状に口縁端部をつくる。1913は外面にタタキ、内面は同心円文をナデで調整する。

広口壺E(1914)は、口径20cm程の小型品であり、 頸部をくの字に外反させ、口縁端部を垂下させて外 面に縁帯をつくる。

鉢C (1915・1917) は、口径24cm程の小型品であり、頸部をくの字状に外反させ、口縁部を方形につくる。体部外面には平行タタキを施し、内面には同心円の当て具痕をとどめる。

甕A(1918~1920)は、頸部がくの字に外反し、

口縁端部を肥厚させて端部を垂下させる。1918の体部外面にはカキメを、1919にはカキメと平行タタキを施した後に2条1対の沈線をめぐらす。ともに体部内面は下から上へヘラケズリする。

蹇B (1916) は、口縁部をL字状に屈曲させて端 部を肥厚させる。

甕C(1921)は、頸部が外反する広口甕で、口縁端部が方形状に肥厚する。頸部外面には沈線と波状文を施す。

甕D(1922)は、頸部が外反し、方形状の口縁端部をつくる。頸部外面には沈線と波状文を施す。

蹇E (1923~1925) は、頸部が外反し、口縁端部が垂下する。1923・1925は、頸部外面に波状文を施す。

甕F(1926・1927)は、口縁部へ直線的にのび、 端部を尖らせ三角形状の形状にする。

甕体部(1928)は、頸部径から甕E∼甕Gの体部 と考えられ、体部外面にタタキの後カキメを施し、 内面には同心円の当て具痕が残る。

甑A(1929)は、口縁端部を斜め上方につまみ上げる。復元口径25cm程である。

甑B(1930)は、口縁端部を肥厚させて外面に縁帯をつくる。体部外面には2条の沈線が施され、内面には下から上へヘラケズリする。

土錘(1931)は須恵質である。長さ6.6cm、孔径1.2 cmである。

#### 平安時代の遺物

土師器 甕 (1969) は、いわゆる「清郷型」甕である。水平に引き出した口縁部をさらに受口状に作るもので野末氏のb類に属しよう。復元口径11.4cmで、時期は平安時代後期と考えられる。

製塩土器 (1742) は、いわゆる「志摩式製塩土器」 の口縁部である。

灰釉陶器 椀 (1932~1934) のうち、1932は内湾 する高台をもち体部は薄い。1933は方形の高台で高 台端部内面に段をつくる。灰釉はハケで塗る。1932 の高台は三日月形を呈し、灰釉を漬け掛けする。1933 は黒笹14号窯式期に、1934は黒笹90号窯式期に比定 されよう。

皿(1935)は、方形の高台をもち、内面全面に灰

釉が掛かる。黒笹14号窯式期に比定されよう。

緑釉陶器 椀 (1936~1938) は、腰部に丸みを帯び、断面三角形の高台を貼り付け、高台内側に段を有する。釉調は、1936は淡緑色、1938は濃緑色を呈する。1937は、飛鳥時代の溝SD22の上面で出土したもので、近江産で、時期的には平安時代中期頃と考えられる。

#### 鎌倉時代から江戸時代の遺物

土師器 鍋(1743~1745)は、1743は図の上部が口縁部と考えれ、内側に突起状になると思われるものが貼り付けられている。鍋であろうか。1744は口縁部のみであるが、端部を内側に折り曲げ肥厚させて内面に面をもつ。平安時代後半から鎌倉時代初頭に相当しよう。1745は、口縁部を折り返して上方につまみ上げる南伊勢系鍋の口縁部で、伊藤編年の第4段階d型式に比定されよう。

白瓷系陶器 皿 (1939~1950) は、高台を有する 1939~1942・1949があり、他は無高台である。1939 は断面逆三角状の高台をもち、内湾する体部から口 縁部を外反させる。1939・1940は第4型式に属しよう。1941~1946は第5型式、1947は第6型式、1948 は第7型式に相当しようか。底部に1949は「大」、1950は「×」の墨書が書かれている。

椀(1951~1961)には、高台を有する1951~1953、1958~1961がある。1951~1953は第6型式である。1954・1955ともに口径13cm前後、器高4.5cm前後の同じ法量で、体部が直線的に延びて口縁端部下部が窪む。1956は平坦な底部から体部が直線的に延びて口縁端部外面に面をもつ。1957も法量も同じで口縁部も1956と同様と考えられる。ともに第7型式に属そうか。1958・1959は第8型式に相当しよう。底部に1958は「※」、1959は「大」が、また内面にも墨痕が見られる。1960は体部と底部に墨書が見られる。1961は判読できない。

陶器 甕 (1970・1971) は、常滑産の大甕でN字 状の口縁部を有する。口縁部は頸部に密着し幅広い 縁帯をつくる。1971は15世紀前半、1970は15世紀後 半であろう。

鉢(1972・1973)は、常滑産の片口鉢で、口縁部 と底部である。1972の口縁端部は断面T字状に引き 出される。15世紀前半の所産であろう。

磁器 青磁椀 (1962~1968) は、1962・1963は龍泉窯系青磁椀で大宰府編年の椀 I — 5 a 類に相当し、13世紀中葉頃と考えられる。1967・1968の椀底部はケズリ出し高台である。

古瀬戸(1974)は、底部に糸切り痕が認められ、 内面には灰釉が見られる。器形は不明である。

天目茶椀(1975)は、口縁端部が斜め上方に屈曲 して内面に面をもつ。登窯Ⅱ期に相当し17世紀中葉 頃と考えられる。

丸椀 (1976~1978) は、1976は底部である。1977 は有田焼の染付丸椀で、18世紀末から19世紀初頭に 比定される。1978は広東椀である。

大皿(1979)は、瀬戸産の絵皿で「夕景暮帆図」 が描かれている。登窯区期に比定され、19世紀後半 頃と考えられる。

型抜皿(1980)は、内面全面に緑釉を施釉する。 方形の高台を貼り付ける。

土製品 土錘 (1746・1747) のうち、1746は円柱 状で長さ5.8cm、径2.8cm、孔径1.1cmである。1747は 高さ2.3cm、底径2.2cmで、上部に0.4cm程の小さい孔 がある。近世以降の土錘と思われる。

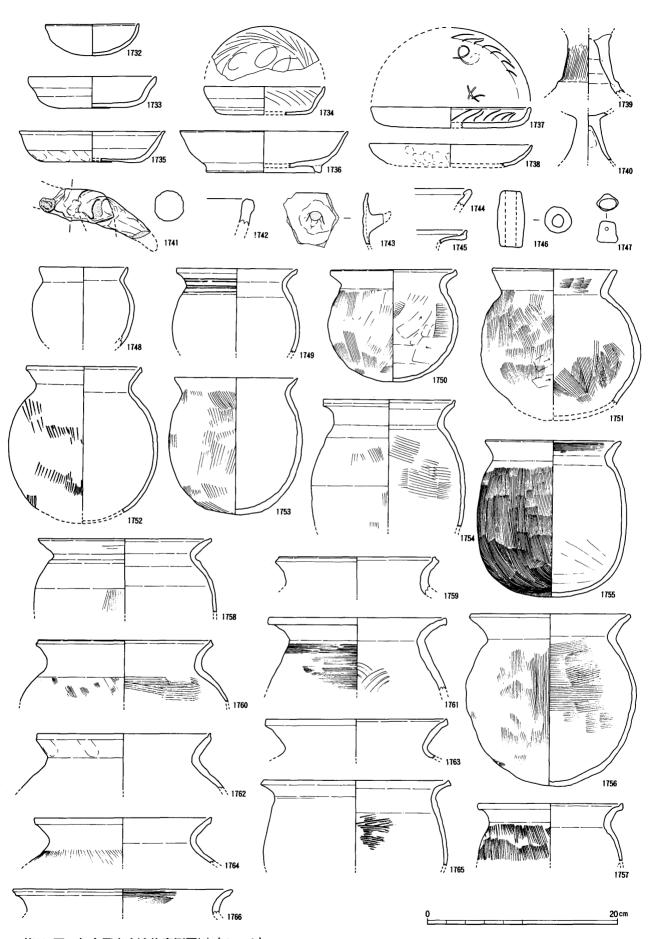
行火(1981)は、行火としたが器形は不明である。 外面は剥離しているが瓦質で側面に径0.9cmと復元径 2.6cmの大小の円孔が見られる。また上面にも径0.8 cmの円孔が見られるが、中まで貫通していない。内 面は火を受けて橙色に変化している。内面の火を受 けた痕跡と円孔から行火とした。

瓦 軒桟瓦 (1982・1983) は、共に軒丸部の瓦当部内区に右巻三ツ巴文を施す。1982は外区に10個の珠文をめぐらす。巴文の頭部は丸く尾部は太めである。1983は、軒丸部を右側に軒平部を左側に作る左桟瓦である。軒丸部の瓦当面には、巴文のみで珠文をもたない。また巴文の頭部は尖っており、尾部は細く長い。軒平部には均整唐草文を施す。ともに江戸時代以降である。1984は器形は不明である。

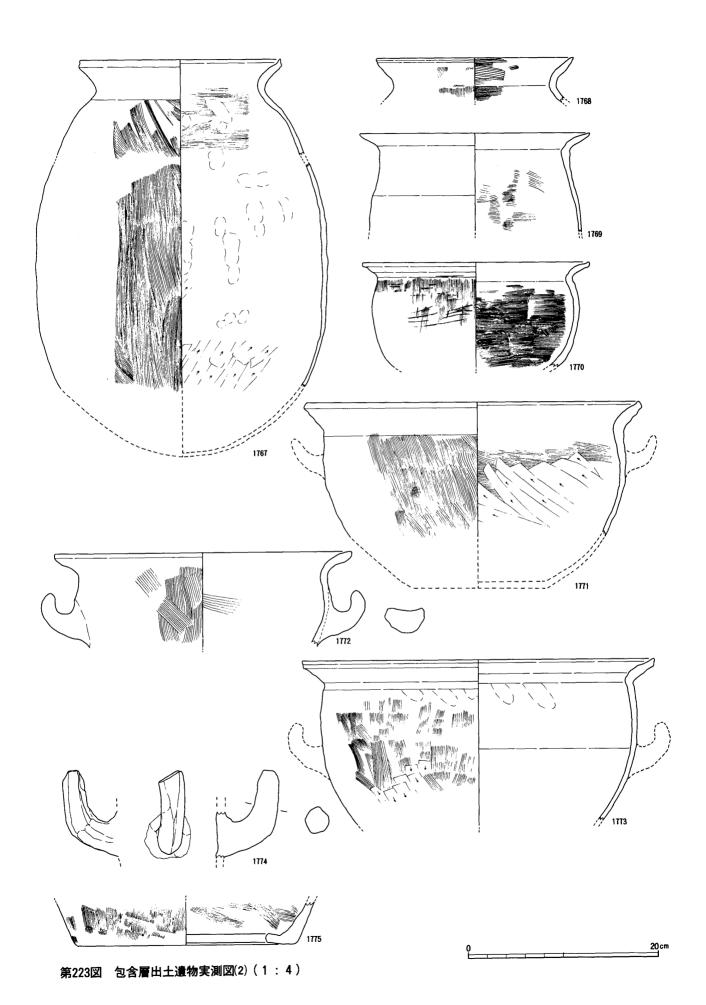
丸瓦(1985・1986)は、内面に布目痕が、外面に は縄目が見られる。

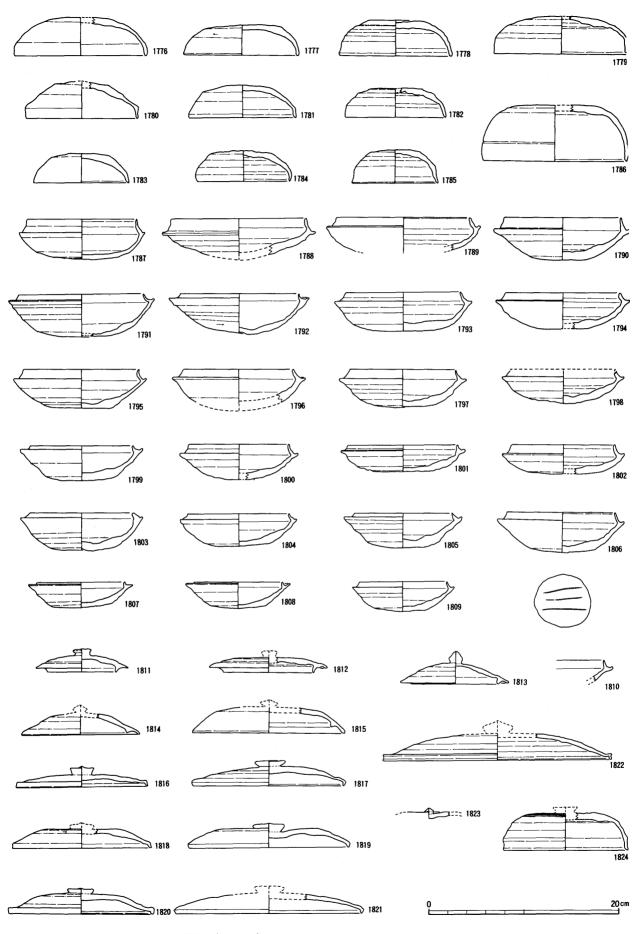
平瓦(1987)は、外面に布目痕を残す。

金属製品 剃刀柄 (1988) は、柄の部分のみである。表面に緑青が見られる。残存長6.7cm、高さ1.3

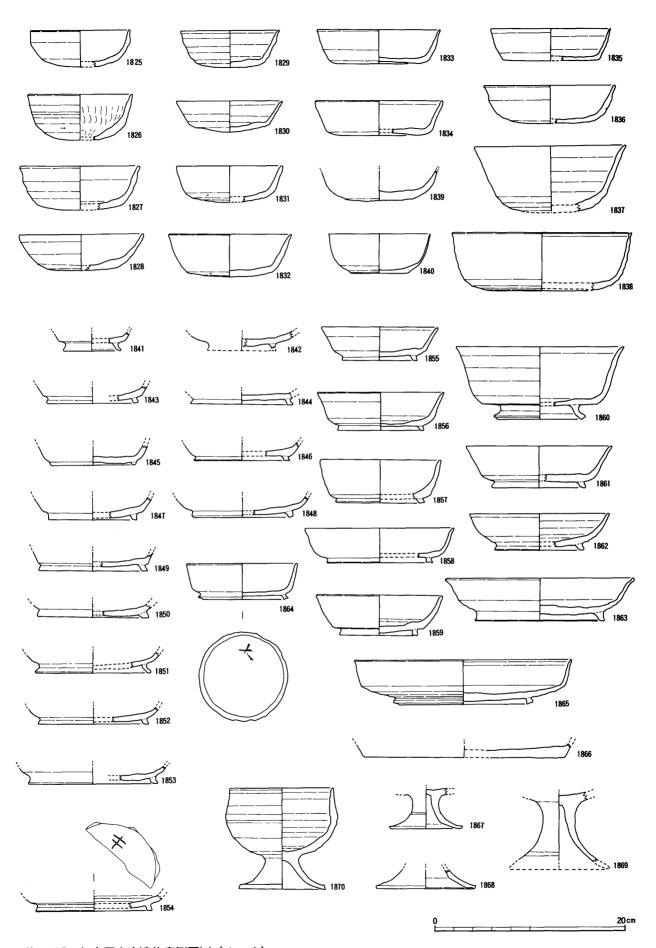


第222図 包含層出土遺物実測図(1)(1:4)

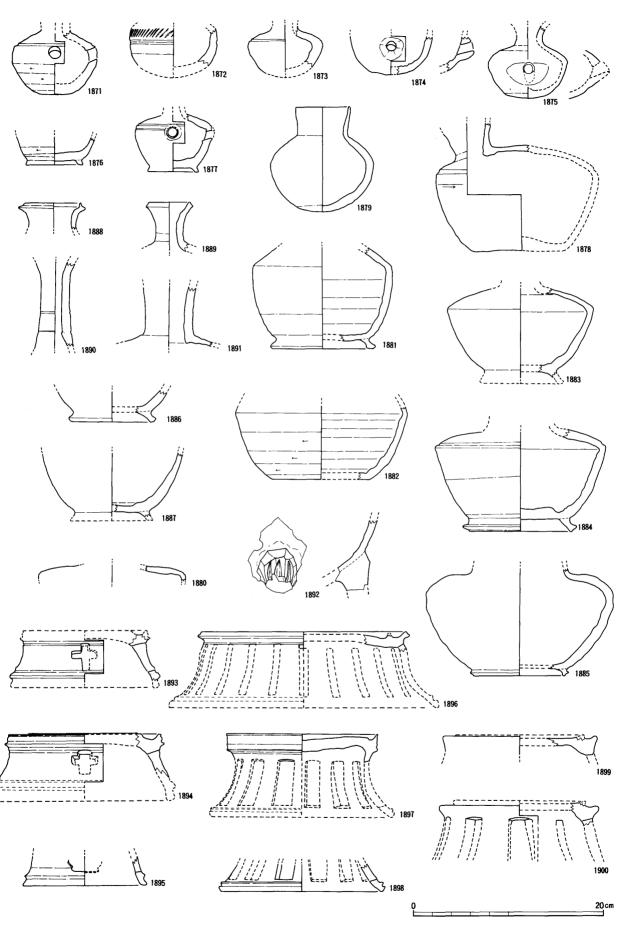




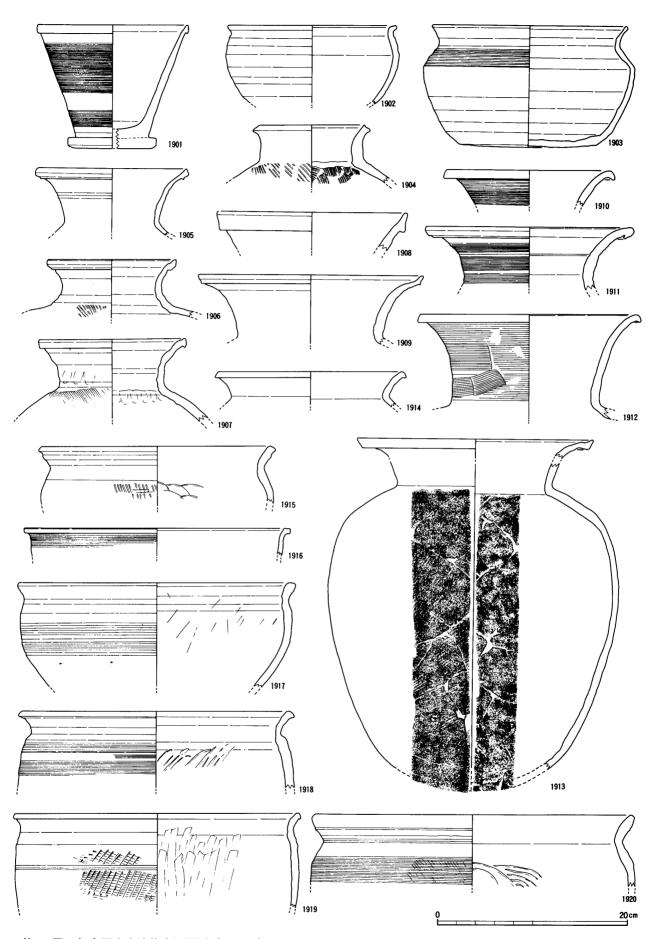
第224図 包含層出土遺物実測図(3)(1:4)



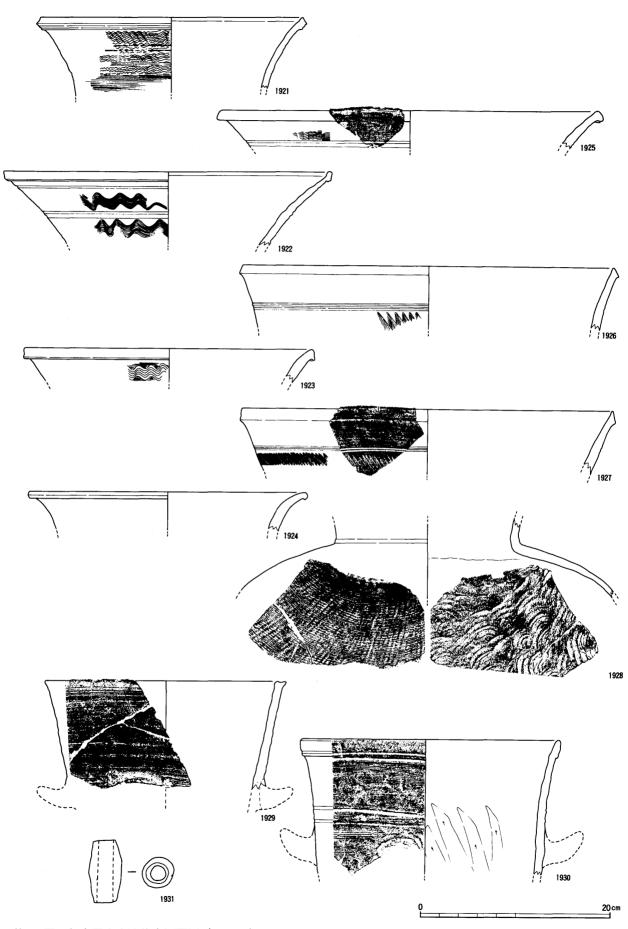
第225図 包含層出土遺物実測図(4)(1:4)



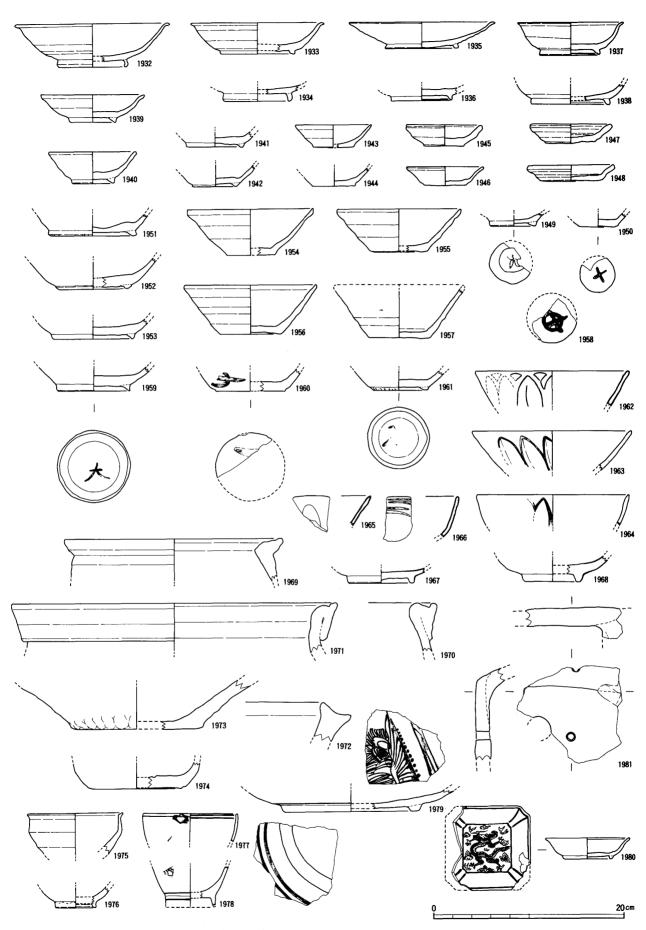
第226図 包含層出土遺物実測図(5)(1:4)



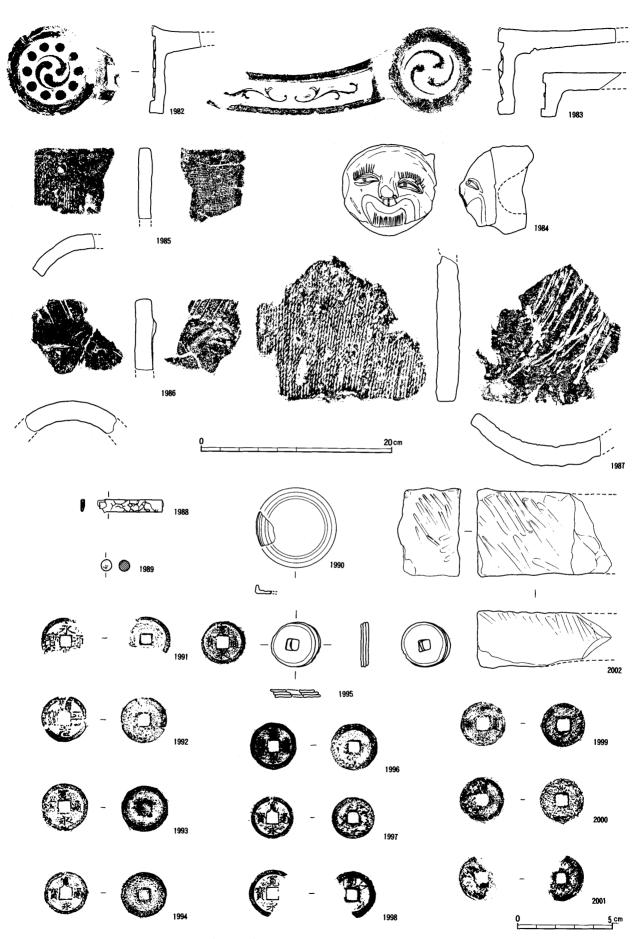
第227図 包含層出土遺物実測図(6)(1:4)



第228図 包含層出土遺物実測図(7)(1:4)



第229図 包含層出土遺物実測図(8)(1:4)



第230図 包含層出土遺物拓影図(9)(1:4)

cm、幅0.4cmを測る。

鉛玉(1989)は、径1.1cmで重さは約20gである。 和鏡(1990)は、7分の1程しか残っていない。 僅かだが内区と外区を画する界圏が認められる。縁 は内傾式縁に相当するものであろう。界圏は、界線 をもって表現するのが一般的であるが、この鏡は沈 線で表現しているのが特徴的である。。

銭貨(1991~2001)は、これらは全て緑青が見られる銅銭である。1991は「永楽通寳」で、1992は上

#### (註)

- ①田辺昭三『陶邑古窯址 I 』 平安学園考古学クラブ1966年 また須恵器や猿投窯編年については、次の文献を参考と した。
  - ·斎藤孝正「猿投·美濃須衛」『季刊 考古学』第42号 雄山閣 1993年
  - ・城ヶ谷和広「尾張猿投窯と尾北窯〜飛鳥時代に見られる須恵器生産の様相〜」(財) 愛知県埋蔵文化財センター 1993年
  - · 「愛知県 猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)」 愛知県教育委員会 1983年
- ② 「木器集成図録 近畿古代編」 奈良文化財研究所 1985 年
- ③同前掲書②
- ④河北秀美「三重県出土のいわゆる紡錘車の形態とその時期」「Mie history vol. 3」三重歴史文化研究会 1991 年
- ⑤黒色土器については、大川勝宏「斎宮の黒色土器-供膳 形態を中心に-」「斎宮歴史博物館 研究紀要二」斎宮 歴史博物館 1993年による。
- ⑥野末浩之「愛知県における11~12世紀の煮沸形態」「愛知県陶磁資料館研究紀要7」愛知県陶磁資料館 1988年
- ⑦齊藤孝正「猿投窯における灰釉陶の展開」「考古学ジャーナル No.211」ニューサイエンス社 1982年 以後、灰釉陶器の編年は本書による。
- ⑧藤澤良祐「研究紀要 I 」瀬戸市歴史民俗資料館 1982年 および次の文献による。
  - ・藤澤良祐「山茶椀の現状と課題」「研究紀要 第3号」

の「治」の部分は不鮮明ながら、右は「平」、下は「元」の篆書体であり、「治平元寳」と読める。1993~1998は「寛永通寳」である。1995は 3 枚が融着している。1998は背文字らしきものが見られるが判続不明である。1999は錆化が進んでいるが、「寛永通寳」と読める。2000・2001は判読不明である。

石製品 用金不明2002は現存長14.0cm、幅9.3cm、 高さ6.2cmで、各面に鑿の痕跡がみられる。

(宮田勝功)

#### 三重県埋蔵文化財センター 1994年

- ⑨木製品については、「木器集成図録 近畿古代編」奈良 文化財研究所 1985年を参考とした。
- ⑩火鑽板については、高嶋幸男・岩城正夫 『古代日本の発 火技術』群羊社 1981年によると、三重県での火鑽板の 出土例は、桑名郡多度町の柚井遺跡から 2 枚が出土して おり、三重県教育委員会 『三重考古図録』1954年に掲載 されている。また火鑽臼については高嶋幸男「6 発火具・ 照明」 『古墳時代の研究 3 生活と祭祀』 雄山閣 1991 年を参照した。
- ⑪小笠原好彦「土馬考」「物質文化」25号 1975年
- ②中村 浩「畿内とその周辺地域の須恵器」 『世界陶磁全 集2日本古代』小学館 1979年に蔵骨器として利用され ていた松阪市出土の三足壺がある。
- (3)同前掲書(6)
- ①伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」「Mie history vol.1」三重歴史文化研究会 1990年
- 15同前掲書9
- 16常滑産大甕・鉢については、「全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』1994年による。
- ①横田賢二郎・森田勉「大宰府出土の中国輸入陶磁器について」「九州歴史資料館研究紀要4」九州歴史資料館 1987年
- ⑱藤澤良祐「IX. -瀬戸大窯の編年的研究-」「研究紀要Ⅴ」瀬戸市歴史民俗資料館 1986年
- 19同前掲書18
- ②広瀬都巽『和鏡の研究』角川書店 1978年

遺構番号	規 模(m)	深さ(m)	時代	備考
S E 52	3.3	1.4	飛鳥・奈良	素掘り
S E 59	1.6×2.0	1.3	飛鳥	,
S E 133	2.0×2.2	1.0	飛鳥	,

第15表 井戸一覧表

<b>連体</b> 平 口	規模	% se ( )	巨林士白	時代	備考
遺構番号	長軸 × 短軸 (m)	― 深さ (cm)	長軸方向	時代	7/19 45
S K31	1.4 1.3	33	N45° W	飛鳥前	
S K53	1.8 1.3	100	N63° W	平 安	
S K54	0.8 0.5	25	N43° W	平 安	
S K 56	1.9 1.9	89	N42° W	飛鳥前	
S K 69	3.9 3.8	52	N42° W	飛鳥後	
S K 103	2.3 2.2	8~5	N40° W	飛鳥前	飛鳥時代のSD198と切 り合うが、関係は不明
S K117	1.2 1.1	100	N 2° E	飛鳥後	井戸の可能性あり、飛鳥 時代のSD108と切り合 う、関係は不明
S K122	6.8 1.6	19	N48° W	飛鳥前	
S K123	4.3 4.2	37	N63° W	飛鳥後	
S K144	1.9 1.6	68	N103° W	飛鳥後	
S K 154	2.2 1.8	15	N55° W	飛鳥後	弥生時代中期のSK153 と切り合う
S K 203	8.3 1.1	40	N72° W		
S K 205	1.6 1.5	84	N83° W	飛鳥前	
S K213	1.0 0.8	38	N33° E		

第16表 土坑一覧表

\u00e44 144 445 FF	TIA 111 PT ( )	<b>NII</b> 100 ( )		m.t. 15	\tag{1}	1A .1. 17 .		Normal ( )	H-L 15
遺構番号	検出長(m)	溝幅 (m)	深さ (cnn)	時代	遺構番号	検出長(m)	溝幅 (m)	深さ (cnn)	時代
S D20	60.5	2.0	40~60	古墳・飛鳥	S D86	61.7	1.1~5.4	20	奈良
S D21	98.4	2.0~3.5	40~75	古墳・飛鳥	S D103	20.4	0.3	10	鎌倉
S D22	17.0	1.9~2.5	50~60	古墳・飛鳥	S D132	8.8	0.5 ~0.7	10	飛鳥
S D24	60.0	2.0~2.4	50~60	飛鳥・奈良	S D141	45.2	0.7 ~1.2	20	飛鳥前
S D33	19.3	1.0~1.2	20	飛鳥	S D163	51.2	0.4	30	江戸
S D57	30.0	0.3~0.9	5~25	不明	S D175	15.4	0.3	10	江戸
S D58	71.0	3.5~7.1	80	飛鳥・平安	S D176	48.9	0.8 ~1.2	10~20	飛鳥前
S D60	59.6	0.3~0.7	10~25	飛鳥後	S D141	45.2	0.7 ~1.2	20	飛鳥前
S D61	10.0	0.5	6	飛鳥	S D176	48.9	0.8 ~1.2	10~20	飛鳥前
S D62	55.6	0.3~0.7	10~25	飛鳥	S D183	13.5	0.8 ~1.2	20~26	飛鳥前
S D71	52.6	0.4~0.67	5~20	鎌倉	S D198	25.5	0.5~1.0	14	飛鳥前
S D77	13.1	0.4	10	鎌倉	S D199	7.1	0.5~0.6	15	平安
S D82	36.4	0.31~0.4	9~16	奈良以降	S D200	17.5	1.0~1.1	4~14	平安
S D83	29.0	1.1	20	飛鳥前	S D204	4.5	0.8	3~15	平安?
S D84	26.3	0.3 ~0.5	10~20	江戸	S D214	2.6	0.34	9	不明

第17表 清一覧表

# №. 遺構・遺物のまとめと考案

# 1. 橋垣内遺跡における弥生時代中期の墓制

橋垣内遺跡では、旧河道SR2の南側で、住居を伴わない弥生時代中期後葉の方形周溝墓2基と多数の土坑群の存在が確認された。ここでは、弥生時代中期の橋垣内遺跡の性格を考えるため、検出された遺構の機能や性格を考えたうえで、全体の位置づけを図りたい。

#### (1) 橋垣内遺跡の土坑の横造と性格

方形周溝墓に関しては、それが墓であることは言を持たないが、伴っている土坑については、本文中で5つに分類したように、形態的にも複数のパターンが認められる。土坑の性格については断言はできないが、

- ・方形周溝墓と同時期(弥生時代中期後葉)である こと
- ・方形周溝墓と土坑以外の遺構は調査区の比較的端 に存在するSD2程度で、方形周溝墓と土坑とは セットで存在しているような状況であること
- ・橋垣内遺跡と同様に弥生時代中期の方形周溝墓と 土坑群が確認された一志町鳥居本遺跡では、土坑 埋土にリン・カルシュウムが高濃度に含まれてお り、土坑が埋葬に関わった遺構の可能性が高いと 指摘されていること

などのことから、橋垣内遺跡の例についても、おそらくすべての土坑ではないにせよ、その多くが方形 周溝墓へは埋葬されなかった者のための土坑墓であったものと思われる。

土坑の形態は、県内の他遺跡でも注意されてきた うちに含まれる。そこで、本書で分類した土坑それ ぞれの特徴を再確認したうえで、橋垣内遺跡以外の 例も含めて土坑の概観を行う。

# 第1類 溝状長方形もしくは溝状長楕円形土坑

本遺跡では、SK55を典型とする。短辺に対して 長辺の比率が非常に長いもので、一見すると方形周 溝墓の周溝のような形状をとるものである。埋土中 に土器が多量に含まれる場合がある。橋垣内遺跡以 外では、方形周溝墓の可能性も指摘されている津市 亀井遺跡SK1・SK2®も、それが方形周溝墓の周 溝でないとすれば本例に含まれよう。

#### 第2類 楕円形土坑または隅丸長方形土坑

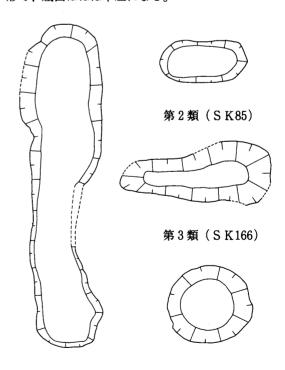
本遺跡ではあまり良好な例がないが、一応、SK81やSK85等を典型とできようか。短辺と長辺の比率が1:2~3程度に納まるもので、床面が平坦にはならず、ゆるやかなカーブを呈するものである。

# 第3類 隅丸二等辺三角形土坑(概報でいう、いわゆる「しゃもじ形」土坑)

本遺跡ではSK166を典型とし、SK190もその可能性がある。形状的に非常に特徴があり、平面形は、各隅が丸みを帯びた細長い鋭角の二等辺三角形状を呈している。「底辺」に相当する幅広の部分のほうが急角度で深く掘り込まれており、「頂点」に相当する部分はそれよりも浅く、ゆるやかな掘り込みとなっている。一志町鳥居本遺跡SK42も報告書の分類では「細長い形状の土坑」とされているが、この類型の典型である。

#### 第4類 円形土坑

本遺跡では、SK75を典型とする。断面形は逆台 形で、底面はほぼ平坦になる。



第1類(SK55) 第4類(SK75) 第231図 橋垣内遺跡の土坑分類 (縮尺不統一)

#### 第5類 上記以外の不定型土坑

本遺跡では、SK153などを典型とする。ただし後世の切り合いや遺存状況なども考慮する必要があり、最終的には円を指向するものと方を指向するものとに収斂されていく可能性がある。

このうち第2類については、その平面形が一志町鳥居本遺跡や亀山市大鼻遺跡で確認されている長方形土坑に類似する場合もあるが、明確な長方形土坑とは認識できる例はなかった。長方形土坑は、大鼻遺跡報告書で指摘されているように、床面が平坦で箱形の掘形をもつ例については、箱式木棺墓であると思われる。当時の意識としては、木棺は方形周溝墓のような上位層も採用するものであり、単なる土坑よりは当然格の高いものであると認識できる。したがって、木棺墓と確認された場合には、当然「土坑墓」の範疇には含まれない。

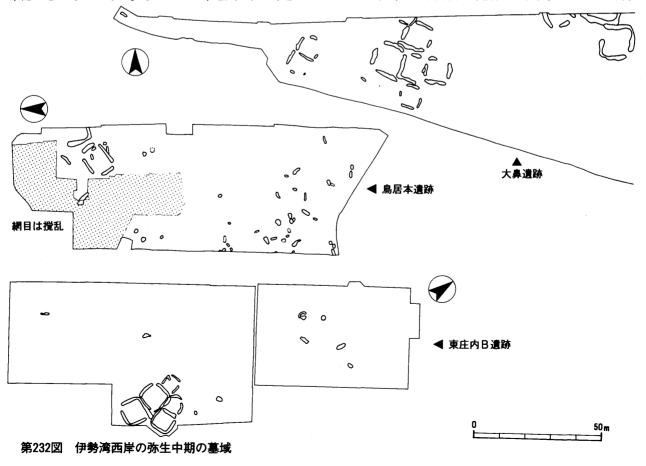
橋垣内遺跡の土坑は、木棺墓と思われる長方形土 坑が明確なかたちでは存在しないという不確定要素 は残るものの、県内の鳥居本遺跡の他、名張市の下 川原遺跡や中戸遺跡、鈴鹿市東庄内 B 遺跡などでも 確認できるものである。したがって、基本的に当地 域も含めた一般的な弥生墓制の範疇を越えるもので はなかろう。

#### (2) 伊勢湾西岸域弥生時代中期墓制の存在形態

これまで述べてきたとおり、橋垣内遺跡では、S R2よりも南側に方形周溝墓2基を中心として土坑 墓が伴うかたちで墓域が広がっている。いわば、方 形周溝墓と土坑墓が混在して墓域を構成しているの である。

これに対し、前述の大鼻遺跡では弥生時代中期の3群にのぼる方形周溝墓による墓域が確認されているが、そこに土坑墓は現状では確認されておらず、箱式木棺墓は一番近い方形周溝墓とは約63m離れて単独で存在している。この箱式木棺墓は、調査区端に存在することや、時期比定に不確定要素を残しているが、少なくとも大鼻遺跡の墓域は、橋垣内遺跡のような方形周溝墓と土坑墓とが混在するような存在形態はとっていない。

大鼻遺跡と同様の例は、亀山市東庄内 B 遺跡でも見られる。東庄内 B 遺跡では、 5 基の方形 周溝墓が集中して築かれる北側に土坑墓が散在する状況をとっており(ただし南側は未調査であり、そちらへも方



形周溝墓もしくは土坑墓が広がっている可能性はある)、墓城内での墓の種類による区分けがあったようである。

一志町鳥居本遺跡も、同例の可能性がある。ここでは、方形周溝墓群の南北に土坑墓が存在しているようにも見えるが、北側の土坑墓とされているものが調査区の制約のため明瞭ではないが方形周溝墓の一部である可能性がある。そうすると、一部に土坑墓と方形周溝墓の重複がみられるのものの、基本的には墓域の北部に方形周溝墓、南部に土坑墓群が存在していたことになる。

同一区域内に別種の墓が混在して存在している橋 垣内遺跡と、墓の種類毎に占地場所が分かれて存在 しているらしい大鼻遺跡や東庄内 B 遺跡とでは、墓 域のあり方が異なり、引いてはそれが集落での階層 分化の進行度を示していると解釈できる可能性はあ る。しかし、大鼻遺跡や東庄内 B 遺跡では、方形周 溝墓が数基以上存在するのに対し、橋垣内遺跡では 方形周溝墓が 2 基しか確認されていないという差異 もあり、墓域に示された差は、階層分化ということ に加えて、集落規模の差を反映しているものと思わ れる。

#### (3) 橋垣内遺跡弥生墓制の成立とその背景

津市と安濃町を中心とする安濃川流域は、三重県内でも弥生時代の遺跡が濃密に分布する地域のひとつである。なかでも、納所遺跡は、弥生中期の当地域における物資集積・分配に係わった拠点的集落と思われる。そして納所遺跡を核とした安濃川左岸の数百基もの竪穴住居が確認された長遺跡や、低地部の掘立柱建物集落である蔵田遺跡、生産遺構である水田が確認された森山東遺跡などは、石器の供給関係などからうかがえるように、あたかも有機的なひとつの遺跡群のように存在している。

橋垣内遺跡が所在する志登茂川流域は、地理的には低丘陵を挟んで安濃川水系よりも北に位置しているが、丘陵といっても極めて低いもので、歴史的には安濃川水系と志登茂川水系は全く一体のもの、おそらく安濃川流域の集団が北へ分派したものと捉えることが可能である。

この地域では、すでに弥生中期中葉の段階で、共 同墓地から抜け出した特定集団もしくは特定家族の 歴代墳墓と考えられる安濃町倉谷方形台状基が出現している。これは、東海地方でも現状では最古に属する事例であり、安定した大遺跡である納所遺跡の存在と周辺部の活発な遺跡形成活動を背景として、地域内の階層分化が進みつつある状況を示しているものと思われる。

橋垣内遺跡では、遅くとも中期後葉の墓域が出現する以前の中期中葉には遺跡形成が始まっていたことが河道から出土した土器から窺うことができ、志登茂川流域への弥生人進出の一端を示している。旧河道にしがらみを打ち込んで灌漑用の水を引き込もうとしたのはおそらくこの時期であるが、まもなく溝は埋没し、中期後葉には墓域へと土地利用が変更される。

弥生時代中期の橋垣内遺跡は、地域で決して大きな遺跡であるとはいえないが、安濃川水系を中心とする弥生中期の発展と軌を一にして盛衰した遺跡のひとつなのであろう。

#### (4) 中期遺跡群の解体

橋垣内遺跡も含め、活発な遺跡形成と階層分化の 進行によって発展してきた当地域であったが、弥生 中期末から後期にこの地へ何らかの大きな衝撃が加 わったようである。このことは、中期に隆盛を誇っ ていた遺跡が中期末を過ぎると衰退もしくは廃絶し て、これとは別に後期から本格的に始動する遺跡が 増加することに現れる。具体的には、納所遺跡は中 期末まで活発な活動を示していたが後期に入ると少 数の溝が確認できるだけとなり、長遺跡やそれに南 接する山籠遺跡も後期に入ると活動を停止すること などに代表され、逆に六大A遺跡や高松C遺跡など は後期から活発な活動を開始することに顕著にみら れる。このことは、弥生中期に存在していた納所遺 跡を核とする遺跡ネットワークがこの時期に何らか の変革によって解体したことを示しているものと思 われる。

橋垣内遺跡では、一見弥生中期から後期、さらに 古墳時代への遺物の出土が連綿とあり、連続性が窺 えるようにもみえるが、SR2の南側に展開してい た中期後葉の墓域は後期にまで造墓活動は続かず、 やはり何らかの変化の動きとみることもできよう。 こういう点では、納所遺跡や長遺跡の動向と何らか の関連があるものとも捉えられる。 (穂積裕昌)

#### 2. 弥生~古墳期の土器資料について

橋垣内遺跡では、弥生中期には方形周溝墓や土坑から少量ながら良好な土器の一括資料が、弥生後期から古墳前期にかけては一括性には乏しいものの河道や溝から大量の土器が出土している。 それらのみでは総括的に当地域の土器体系を確認することはできないが、それら土器から派生する問題について、いくつかのテーマに別けて考えてみたい。

#### (1) 弥生時代中期土器について

#### a. 研究略史

これまでの当地域の中期土器編年は、納所遺跡編年を嚆矢とするが、その納所遺跡の報告書は、出土した遺構・遺物が膨大なものであったために完全なものとは云いがたく、せっかくの遺構一括資料が必ずしも正しく位置づけされてはいない。具体的には、土坑一括の完形土器群を、編年表では櫛描文で飾られた壺をⅢ様式に、口縁部に凹線文を施して体部無文の壺をⅣ様式に位置づけていることに顕著に現れている。これは、まず土坑一括という事実を議論の最初に置かず、当時の既存の編年観に一括資料を分解して組み込んだことによる。しかし、現在では、櫛描文と凹線文とで単純に分別する編年観自体が否定されており、凹線文の時期にも櫛描文で飾る土器が一定程度存在することが指摘されている。東海で

はなおさらその観が強い。

こうした状況を受けて、上村安生氏は、その後の 資料増加の成果も踏まえて新たな編年案を提示して いる。

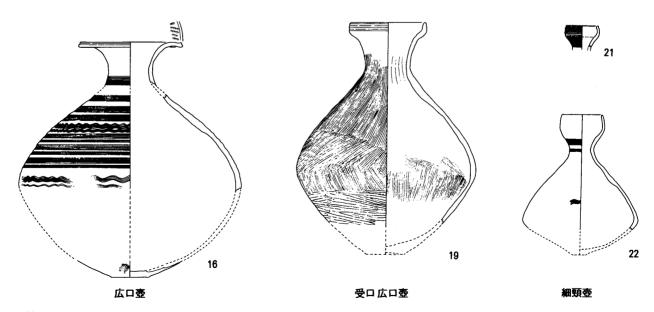
橋垣内遺跡で出土した中期弥生土器は、量的には あまりまとまったものとはいえないが、方形周溝墓 や土坑といった遺構から出土している例が多く、今 後、当地域の中期土器編年や地域性を考えるうえで 重要な資料になるものと思われる。

本報告では、資料的制約から新たな編年の枠組み を提示するには至らないが、遺構出土資料を位置づ けることによって、今後の当該地域の土器編年に少 しでも寄与したい。

#### b. S X 32出土遺物について

橋垣内遺跡の弥生中期土器のうち、上記の問題を 最も端的に示すのが方形周溝墓S X32出土土器群で ある。S X32は主体部が削平を受けているため、主 体部数なども不明で、供献の土器類か単一時期かど うかはわからない。しかし、土器を見るかぎり一括 もしくは近接した時期の所産と捉えることができよ う。当遺構からは、とくに壺形土器に関しては凹線 文土器出現以降の伊勢湾西岸地域の最も基本的な器 種がまとまって出土している。以下、S X32出土土 器を中心に、少し考察を加えたい。

S X32出土のの壺には、広口壺・受口広口壺(上村氏のいう「受口細頸壺」、以下、カッコ内は上村氏



第233図 S X 32出土土器にみる伊勢湾西岸中期弥生壺の主要 3 形式 (S=1:6)

の器種細別)・細頸壺(内湾口縁細頸壺)という3 つの形式が認められている。

広口壺は、口縁端部をやや拡張して内面と場合に よっては口唇部へも刻み列を施し、体部上半を櫛描 文で飾ったものである。

受口広口壺は、口縁部を受口状に屈曲させてその 外面に凹線文を施したもので、体部を基本的にハケ 調整のまま残すが、下半部にヘラミガキを施す場合 もある。文様は基本的に存在しないが、頸部に櫛描 直線文などを施す例もある。体部から頸部への接続 は、ゆるやかに屈曲しながら連続的に推移すること も特徴のひとつである。

細頸壺は、口縁部が袋状に大きく膨らみ、そこから続く頸部が短いもので、口縁外面に凹線文を施す例と施さない例がある。

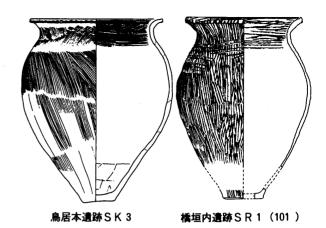
以上の3形式は、伊勢湾西岸地域の壺形土器のうち、最も基本となる形式ということがいえる。とくに尾張地域や近畿地方と比べ、壺全体に占める受口 広口壺の組成上の高さが本地域の特徴である。

この受口広口壺は、当地域への凹線文手法の波及 以前から存在しているもので、鳥居大遺跡 S K 1 な どに古い時期の良好な例が見られる。凹線文採用以 前は、体部が無文のものと、多重沈線等を櫛描きや へラ描きで飾る例が相半ばする。しかし、凹線文を 受容する頃を境として、次第に体部無文のものに収 斂されていく。

S K32出土土器群の時間的位置づけについては、 細頸壺の口頸部が全体に短小で大きく膨らんだ状況 から、この形式の最終末に近い。中期末に属するも のであろう。今後、当該地域の中期末の良好な一例 として、亀井遺跡 S K 1 などとともに基準資料のひ とつになりうるものと思われる。

#### c. 伊勢湾西岸(海浜部)の甕形土器について

当地域において、弥生時代中期でも中葉以降に組成上の主体を占める甕は、く字形口縁の口縁端部に刻みを施し、体部外面をタテハケ、口縁部内面にヨコハケを施したいわゆる「大和形甕」と呼ばれるものの系統に属する甕で、そこに口縁部に刻みを施さない通有のく字形口縁甕と受口甕が小量伴う。ただし、伊賀の大山田村北切遺跡や、伊勢でも亀山市東庄内B遺跡など、山間部では受口甕が組成に占める



第234図 伊勢湾西岸の大和形甕(左)と 「大和形甕系伊勢湾西岸類型」(S=1:6)

割合が高く、石黒立人氏が指摘する内陸部と海浜部という地域区分を反映している。以下は、主に海浜部を対象としている。

ここで「……の系統に属する甕」といったのは、 当地域では、通常の大和等でみられる「大和形甕」 のような外面調整をタテハケのみで終わらせたもの の他に、タテハケ(多分に「条痕」的粗さ)に加え て外面体上部に櫛もしくはハケ状原体による直線文 を施した一群も存在するからである。このような土 器は、成形・調整といった土器の基本属性の共通性 から、いわゆる「大和形甕」との類縁性が窺われ、 大きくはその系統に属する甕と考えてよいであろう。 特に伊勢湾西岸地域から多く出土しており、かつて 石黒立人氏が指摘したように。、当地域で固有の甕と 考えられ、その強い在地性から「伊勢湾西岸系甕」 と呼称しうるものである。その場合、「大和形甕系伊 勢湾西岸類型」と理解することが可能であろう。

なお、ここで「体部内面タテハケ・口縁内面ヨコハケ・口縁端部(特に面取りした口唇の下部)刻み」によって特徴づけられた土器を単に「大和形甕」と呼称するのは、起源地の問題を一応棚上げしてのことである。それは、成立の原郷が受口甕の場合の近江ほど明瞭でなく、例えば伊勢湾西岸地域をとっても大和と同時期には「大和形甕」が出現している。

そして、中期でも後葉に入ると、大和形甕の体上 部に櫛もしくはハケ状の原体による列点文・直線文・ 波状文のうちの、2~3種の文様を交互に施した土 器が出現する。こうした文様は、同時期の受口甕の 文様と共通するものであり、口縁端部に刻みを施さない通有のく字形口縁蹇にもこの文様を導入したものがある。これは、形式を越えた文様手法の取り入れが行われているといえよう。ただ、体部は大和形といっても、口縁端部処理手法は、口唇の上下に押圧もしくは刻みを加えるものが多く、口唇下部を刻んでいた当初の伊勢湾西岸型の「大和形甕」からはかなり変容している。

中期末は、伊勢湾西岸系を含む大和形甕・く字形口縁甕は、その文様規制に崩れが目立つようになる時期である。上述のような受口甕の文様を組み込むものや、大和形甕のようであっても口縁端部の刻みが欠落したもの、く字形口縁甕の口縁内面に大和形甕の特徴であったヨコハケが施されたものが現れるなど、それまでの土器が保ってきた属性の解体が顕著になる。ただし、この時期以降に増加する受口甕は、それがもつ固有の属性を保っている。このことは、取りも直さず、海浜部での受口甕の増加とともに、中期末に在地の土器製作も何らかの改変期を迎えつつあったことを暗示するものであろう。

以上のことを踏まえ、当地域の弥生時代中期の甕形土器の状況を整理すると、以下のようになろう。
・大和では II 様式に成立して II ~ III 様式期に盛行する弥生中期前半を代表する甕である大和形甕は、当地域でも遅くとも大和とほぼ同時には出現し、終末は大和より遅く、IV様式期まで存続する。

- ・「大和形甕系伊勢湾西岸類型」も、Ⅱ~Ⅳ様式期 を通じて存在しており、特に中期中葉以降に主体 的な甕となる。
- ・一方、通有のく字形口縁甕も少数ながら存在して おり、なかには体部にタタキ手法を取り入れた 「畿内」的な土器も存在する。
- ・これらの土器は、Ⅱ様式期は肩の張りが弱いが、 時期とともに肩部の丸みを強めていく。
- ・中期末になると、受口甕の増加とともに、受口甕 の影響を受けた体上半部文様を大和形甕・大和形 甕系伊勢湾西岸類型・く字形口縁甕ともに採用し たり、それぞれの要素を取り入れた「折衷型」の 土器が出現するなど、受口甕以外の甕は、それま で保っていた規範から外れた土器が出現するよう になる。

#### (2) 弥生後期~古墳時代の土器について

この時期の資料は、ほとんどが旧河道や溝から出土しているものばかりであり、出土状況をみても一括のものはほとんどない。しかしながら、中勢地域でこの時期の資料がこれだけまとまって提示できたのは橋垣内遺跡が初めてであり、若干の考察を加えてみたい。

#### a. SR3土器溜出土遺物について

SR3土器溜出土土器は、廃棄時の時間的な近接性が窺える資料である。器種組成的には甕と高坏が卓越し、壺がほとんど含まれないことを特徴としている。これは土器溜自体の性格によるものである。

甕は、通有のく字形口縁甕と受口口縁甕(以下、受口甕)がほぼ相半ばする状況で、そこに初現期の S字状口縁台付甕形土器(以下、S字甕)が少量ながら加わっている。S字甕のみならず、受口甕・く 字形甕ともに台付のものが多く、当地域でのS字甕 出現期の甕の様相を端的に示すものである。

高坏は、脚部が端部に向かって短く内湾するか、直線気味に開く欠山式でも最も新しく位置づけられるものを主体とし、それに坏部が浅い椀状を呈し、脚部が外反して開く比較的薄手の高坏が小量伴う。この高坏は、一見5世紀頃に主体を置くものにも類似しているが、脚中央に円形透孔が穿たれており、やはり古い時期に位置づけられるものであろう。

このように、SR3土器溜出土土器は、欠山式の 最も新しい様相を呈する一群で、壺が欠落するもの の、中勢地域における古墳時代初頭の土器の好例で あるといえよう。

#### b. 伊勢湾西岸地域の甕形土器のあり方

SR3出土土器でもあてはまっていることであるが、伊勢湾西岸地域の中でも、中北勢地域の弥生時代後期から古墳時代初頭の甕は、中期末に大和形甕の系統の土器が消滅した後、く字形甕とともに受口甕が組成上大きな比重を占めている。数量的には両者はほぼ相半ばするか、むしろ受口甕のほうが勝っているといってよい。これは、SR3をはじめとする橋垣内遺跡の例だけでなく、多少の偏差はもちながらも中北勢地域全体の様相といってよかろう。とくに、雲出川以北にその傾向は強く、松阪市域以南になると、逆に受口甕の比率はかなり低くなる。

これまで、受口蹇といえばすぐ「近江系」と連想する向きも無きにしも非ずで、極端な例では受口甕が伊勢の遺跡から出土していることをもって、それを短絡的に近江からの人口移動で説明した考えもあった。しかし、たとえ「受口」という土器のもつ一属性が近江で成立したものであったにせよ、あくまでその土器成立の起源地の問題と、その後の展開とは関連はあっても別次元の問題であるはずである。もっとも、伊勢湾西岸域で受口蹇が特別な存在でないことは、漠然と認識されてきたことであり、一般にすべての人が上記のような認識でいるわけでもない。先にもみたように、中期中葉以降、伊勢湾西岸地域でも山間部は受口甕が卓越するし、中期末以降は海浜部でも受口甕が増加している。

ここではまず、弥生時代後期~古墳時代初頭の伊 勢湾西岸地域、なかでも特に雲出川以北も、受口甕 の主体的な分布域になっていることを改めて確認し ておきたい。

弥生時代後期を中心とした時期の当地域の受口甕は、文様的には口縁部に刻みを施し、体上部に直線文・列点文・波状文のうち2~3種を組み合わせて施すものが主体である。また橋垣内遺跡では、受口ではあるが口縁端部を上内側へ強くつまみ上げ、そこに列点刺突文を施したような土器(例えば487や488)も存在する。

以上のうち、特に受口部外面と体上部文様の特徴は、近江では野洲川流域を中心に、その周辺地域である湖東〜湖南地域の受口甕の特徴と共通する。つまり、鈴鹿山脈を挟んだ南北に同様の文様を持つ土器群が広がっているわけである。これは、古代から現代まで一貫して近江と伊勢を結ぶ主要道が野洲川流域と鈴鹿川流域地域を結んでいることを考えると、自然に理解できる内容である。

受口甕自体の時間的な型式学的変遷については、 橋垣内遺跡では弥生後期~古墳時代の主要遺構は河 道や溝など一括性に乏しく、土器の細部について言 及できない。しかし大きな流れとして、他地域の受 口甕と同様に、①口縁全体が内傾して端部にも内傾 した面をもつもの→②受口部が真っ直ぐに立つよう になるが、端部は内傾したもの→③受口部が真っ直 ぐに立ち、端部も水平になるもの→④受口部が真っ 直ぐに立つが、端部が外側へつまみ出されるもの→ ⑤受口部が外傾し、端部も外側へ出るもの、という 一般的な変遷は是認されよう。もちろん、①から⑤ にかけて、口経よりも体部最大径の割合が増大する ことと、体上半部を中心に施されていた文様が次第 に頸部直下付近に押し上げられ、やがて無文化する という傾向もある。ただし、これらは細かい点につ いては個体差も大きく、1個体のみで所属時期を特 定することは難しい。 (穂積裕昌)

#### 3. 飛鳥時代掘立柱建物群の成立とその背景

橋垣内遺跡の調査では、飛鳥時代から鎌倉時代に 及ぶ総数136棟もの掘立柱建物を確認した。北側は毛 無川により、南側は低い地形によって画されている ものの、西側の県道で調査した部分へも広がってお り、東側へもまだ遺跡が延びていることが推定でき、 全体の実数は当然さらに多かったものと思われる。

掘立柱建物相互の関連や、個々の建物形式の問題に関しても、棟や柱筋を揃えて存在する建物小群がいくつか認められることや、例えばSB41やSB219などのように桁行の柱間が狭い3間×2間の総柱建物がどうも飛鳥時代から存在するらしいことなど興味深い内容は数多い。しかし、それらは今後の検討に譲るとして、今回は当地域における掘立柱建物出現期の状況について素描しておきたい。

橋垣内遺跡では、6世紀末以降、広汎に掘立柱建物による集落が成立することを確認した。竪穴住居はほとんど含まず、小規模な家屋もすべて掘立柱建物が採用されている。

こうした状況は、旧窪田郷地内に存在する他の遺跡、中勢道路関連で発掘した北から六大A遺跡、六大B遺跡、橋垣内遺跡、見当山丘陵南麓となる最南端の大古曽遺跡、それに県道関連で発掘した大垣内遺跡まで同様である。細かく見れば、大古曽遺跡や橋垣内遺跡が飛鳥~奈良時代、大垣内遺跡が奈良~平安時代、六大B遺跡が平安時代、六大A遺跡がほぼ全時代と、中心となる時期は異なるものの、志登茂川・毛無川流域の窪田郷では、6世紀末以降、集落形成の当初から掘立柱建物を採用した集落が成立し、地域的にも一気に活況している。

通常、倉庫を除く居住用住居への掘立柱建物導入

は、その地の首長層等の有力階層がまずその導入を 開始し、次第に下の階層へも導入を広げていくこと が多い。当地域では、首長による祭祀関連遺跡は建物 られる六大A遺跡で古墳時代の小規模な掘立柱建物 が確認されるとともに、大型の掘立柱建物の出土建物 が確認されるとともに、大型の掘立柱建物が出土建物 を推測させる大量の優秀な掘立柱建物部材が出土建物 導入も県内他地域と同様とも思えるが、橋垣内遺跡 をはじめとする窪田地区の遺跡群では、6世紀末 短いる。このことをみる限りは、当地への掘立柱建物 をはじめとする窪田地区の遺跡群では、6世紀末 掘立柱建物を採用している点が重要である。こうに 掘立柱建物を採用している点が重要である。こうに た状況は、一般層における掘立柱建物採用が9世紀 以降と思われる伊勢においてはやや特異なあり方を 示すものであり、ひいてはこの地域の相対的な先進 性を示するの、と評価することができる。

それとともに、橋垣内遺跡をはじめ、六大A遺跡 や六大B遺跡では相当量の円面硯が出土しているこ とや、六大A遺跡では蹄脚硯も存在すること、時代 は下るが六大B遺跡での北を意識した大型掘立柱建 物群の存在、多量の緑釉陶器が出土したこと、六大 A遺跡や六大B遺跡では木簡も出土したことは、注 目に値する。これらのことは、窪田郷域が古代奄芸 郡下でも中心的な地域であり、具体的には初期郡家 を含めた郡の中心施設が当地に存在したことを推測 させる。こうした律令的な支配組織の実現の結果、 当地域の掘立柱建物等にみる文化的先進性が達成さ れたのではなかろうか。その場合、掘立柱建物の初 現は、いわゆる初期郡家成立時期よも若干遡る可能 性があるが、これらについては先行する有力階層居 宅の存否も含め、今後の当地域の考古学的調査の類 例増加を持ちたい。 (穂積裕昌)

#### 4.遺跡周辺の古代集落の住居形態について

志登茂川流域と安濃川流域での古代集落について 遺跡から検出された建物をもとに遺跡を中心にして 考える。

志登茂川流域の古代集落が見つかった遺跡には、 当遺跡の西方にある安養院遺跡では、古墳時代後期 の竪穴住居、奈良時代と平安時代の掘立柱建物が見 つかっており、出土した遺物の中には陰刻花文を施 した緑釉陶器耳皿や円面硯がある。また検出した古 墳時代後期の竪穴住居は、出土遺物から6世紀末と考えられ、大きな範疇では飛鳥時代にはいるものであり、飛鳥時代には掘立柱建物が見つかっていないものの、遅くとも奈良時代には掘立柱建物へ移行していると考えられる。

当遺跡の北西にある東浦遺跡では、古墳時代から 奈良時代の竪穴住居や奈良時代から鎌倉時代以降の 掘立柱建物が見つかっており、おそらくは奈良時代 と考えられている掘立柱建物が見られることから竪 穴住居と掘立柱建物が併存していたものと考えられ よう。

志登茂川流域では、竪穴住居から掘立柱建物への住居形態の転換した時期は、志登茂川流域では当遺跡や大古曽遺跡が最も早く飛鳥時代であり、周辺の遺跡では、掘立柱建物の出現する時期はやや遅れて奈良時代からと考えられよう。

一方、安濃川流域では、多くの遺跡で住居跡が検出されている。下流域の見当山丘陵の南斜面に立地する宮ノ前遺跡は、縄文時代から中世にかけての遺構を検出した遺跡である。この遺跡では、飛鳥時代の竪穴住居とともに掘立柱建物が見つかっており、安濃川流域では、飛鳥時代の掘立柱建物としては初例である。また竪穴住居と掘立柱建物とが同時期に存在したと考えられる。

安濃川右岸に位置する浄土寺南遺跡。は、古墳時代から平安時代まで営まれた集落ある。奈良時代末から平安時代にかけての掘立柱建物は棟方向に規格性が見られ、出土した円面硯や緑釉陶器などから古代安濃郡の官衙遺構と推定されている。浄土寺南遺跡の住居は、竪穴住居が奈良時代まで続き、掘立柱建物は奈良時代末からである。

安濃川上流左岸に位置する松山遺跡では、「延喜式」よる平安時代の都と地方の駅を結ぶ古道と考えられる道が見つかっており、建物では、奈良時代末から平安時代末・鎌倉時代初頭までの竪穴住居や平安時代前期から鎌倉時代初頭までの掘立柱建物が検出されており、掘立柱建物は平安時代前期には見られ、平安時代末から鎌倉時代初頭の竪穴住居が見つかっている。

松山遺跡に西接する椋本南方遺跡では、昭和62年 度に調査され、奈良時代から平安時代前期の竪穴住 居や掘立柱建物、鎌倉時代の掘立柱建物が検出されている。平成4年度の調査では、新たに平安時代末の掘立柱建物、鎌倉時代前期の掘立柱建物が検出されている。この遺跡では奈良時代から平安時代前期にかけて竪穴住居が存在する。

安濃川流域では、飛鳥時代の掘立柱建物は、宮ノ 前遺跡の竪穴住居と併存する掘立柱建物が検出され たのみで、当遺跡に見当山丘陵を挟んで北と南に位 置しており、距離的に近くこの掘立柱建物は当遺跡 からの影響とも考えられる。安濃川流域の遺跡の多 くは奈良時代末から平安時代初頭頃に掘立柱建物へ の移行すると言えよう。

古代において志登茂川流域の橋垣内遺跡が、いち早く都の文化を取り入れたと考えられ、この集落が北へ移動したとされる六大B遺跡が古代窪田郷の地方官衙的な性格をもつ母体となるような中心的な集落であったと推測される。 (宮田勝功)

#### 5. 飛鳥時代の土師器甕について

井戸や土坑出土の甕の中には、体部を球形を呈するもので、口縁部が開くものがあり、体部の内外面の全面をハケメを施す甕がある。この形態の甕は北掘池遺跡では小型甕とされ、近江系の甕とされている。この種の甕は北掘池遺跡の甕と形態的に似ているものの外面の体部内外面の下半をヘラケズリするものと調整に差異が見られる。また器高に対して口径がやや長い甕があり、この種の甕は北掘池遺跡の中型甕と同じ形態であるが、体部の内面をヘラケズリするのが特徴である。また球胴を呈する甕の中には口縁部が外反して口縁端部を上につまみ上げる「伊勢型」甕の特徴をもつのの体部の外面下半をヘラケズリするものがあり、口縁部を開く小型の甕や球胴を呈する甕の調整は、近江系の影響と考えられる。

南伊勢では飛鳥時代では口縁端部をつまみ上げて 体部外面を縦方向のハケメを施し、内面はハケメの 後に体部下半をヘラケズリする「伊勢型」甕であり、 甕体部外面を下半をヘラケズリを施すものが斉一化 するのは平安時代以降である。当地方では、「伊勢 型」甕が主体を占めているものの、近江系の影響が 見られよう。 (宮田勝功)

#### 6. 陶馬について

土馬については、戦前から馬形遺物について研究された大場磐雄氏が、その先駆的研究をされている。大場氏によると土製、石製、鉄製、板製の4種に分類し、さらに各類を飾馬と裸馬に分類している。また前田豊邦氏は、大場磐雄氏の研究を踏まえ、4種の中でも特に多く出土する土製品について、馬具の有無などの形態的な観点からA類からD類に分類している。さらに小笠原好彦氏は、両氏の研究から形式変遷やその年代について研究し、2段階10型式に分類している。

県下における土師質の土馬の出土例は、明和町の 斎宮跡をはじめ松阪市杉垣内遺跡など県下各地から 多く出土が見られるが、須恵質の陶馬の出土例は以 外に少なく管見のおよぶ限りでは、第18表のとおり である。

鈴鹿市末野A遺跡の小土坑出土の陶馬は、頭部・脚部・胴部・尻部の4つの部分に分かれており、頭部の目・鼻は細竹で描かれている。またヘラ状のもので面繋・手綱を表現している。小笠原編年の第1段階B型式に相当しようか。また末野C遺跡出土の陶馬は遺構に伴うものではなく、包含層出土ものでである。なおこの陶馬は腹部のみであり、腹部に脚部が残存していることから陶馬もしくは他の動物と考えられている。また時期的には奈良時代から平安時代とされる。

大正9年に金丸但馬氏によって報告された「郡山野の古墳」出土とされる陶馬については、出土地点については掲載されている鳥瞰図より、現在の鈴鹿市郡山町の台地上に位置する古墳と考えられ、陶馬は、首部から胴部・脚部・胴部から尻部の3個体が図示されている。一番大きい個体である頸部から胴部には、鞍などの馬具は表現されておらず、裸馬と考えられ、頸部には立髪がヘラ状工具によって線刻されている。また胴部は中空に作られているのが特徴である。

また上野市出土の陶馬は、平成6年度に調査された御墓山窯跡(1号窯から3号窯)から、陶製仏殿・陶鈴・陶棺などとともに出土したものである。陶馬は頭部から体部にかけてが8点、脚部と考えられる もの3点が出土しており、飾馬と考えられる陶馬は、 現在のところ頭部から体部にかけてと脚部が見つかっている。この飾馬の陶馬は、頭部に粘土紐による面繋および手綱が表現され、また体部には粘土紐による鞍も残っている。時期はこの陶馬に伴う須恵器坏蓋から7世紀中頃から後半と考えられている。小笠原編年の第1段階A型式に相当されようか。また御墓山窯跡(第2次)調査では、目・口・鼻をヘラによって刻まれ、剥離しているが立髪を張り付けていたと考えられる陶馬が出土している。小笠原編年の第1段階B型式に相当しようか。

度会郡では多気町郷土資料館に展示されている陶馬がある。陶馬は頭部から頸部にかけて、轡と手綱の一部が残存しており、粘土紐で表現されている。また口はヘラにより刻まれており、眼孔・鼻穴は竹管らしき工具またはヘラ状の工具で表現されている。頭部の顎部には竹管らしき工具により沈線状に2条見られ、粘土紐貼り付けのためのものと思われる。このことから轡は粘土紐表現されていたと考えられる。小笠原編年の第1段階A型式に位置しよう。県下の陶馬でヘラによって表現されている陶馬は共伴遺物がなく時期の判断が困難であり、ヘラによって馬具を表現する陶馬は、7世紀後半から8世紀中頃までと考えられよう。表現が簡略されず克明に表現されている本遺跡出土の陶馬の時期は、7世紀末頃から8世紀前半頃に相当しようか。

なお小笠原編年では、飾馬からの馬具の省略に伴い裸馬が出現してくるのは、第2段階(8世紀中頃)からとされているが、御墓山窯跡出土の陶馬は、7世紀後半代であり、また同窯からは裸馬が出土しており同時に存在することが考えられ、このことは飾馬と裸馬とが同じ目的の為に作られたのか、また他の目的の為に作られたのであろうか。

一方、使用目的については、小笠原氏は、大場氏と前田氏の研究を踏まえ、[墓前祭祀]古墳から出土する土馬、[峠神祭祀]出土遺跡付近に峠が存在する、[井戸祭祀]井戸から出土した土馬、[河川祭祀]河川流域の遺跡出土の土馬、[祈雨祭祀]集落遺跡出土の土馬について見解を述べ、祈雨祭祀については、「一般農業村落から出土する土馬の場合、その大部分は祈雨にかかわった可能性がきわめた高い」とし、中央官がや平城京から出土する遺構に着目し、国家

的な規模で祈雨祭祀を行うことによって、地方村落 における祈雨祭祀権を地方の族長らにゆだねること によって村落共同体の掌握に一定の役割を担ってい たと解している。

本遺跡出土の陶馬は、攪乱土坑からの出土であるが、祈雨祭祀にもとづく古代の農業集落からの出土と考えられ、律令的祭祀形態として国家に組み込まれた祈雨祭祀が、村落構成員のもとに地方の族長によって執行され、その時に故意に破損させたとも理解されよう。 (宮田勝功)

#### 7. 攪乱土坑群について

当遺跡の北東で検出された攪乱土坑群は、本文記述のように江戸時代に建立されたとされる専修寺如来堂に係わる屋瓦粘土の採土跡と考えられる。

資料1は「如来堂御建立録」の一部である。以後「如来堂御建立録」を「御建立録」と呼ぶ。「御建立録」によると、如来堂の建立は、第十七世圓猷上人により享保4(1719)年に発願され、同年に造営が開始された。また享保6(1721)年に釿始が行われている。

如来堂造営時の瓦職人は、坂部(津市大里窪田) の瓦職人である宇田藤兵衛政光を世話頭として同藤 吉郎政重のもとに伊勢、志摩、伊賀などの各地から 瓦師が集められている。

瓦の製造に使われた土は、文中に「土ハ窪田より」とあるように現在の津市大里窪田の土地より採土されたとされる。この跡が当遺跡の攪乱土坑と考えられる。瓦を焼き始めた年代は、如来堂改築時に見られた瓦の銘文から延享元(1744)年から延享2年にかけてであり、実際に如来堂の屋根に葺き始めるのが、文中にある「丑ノ年」の延享2年(1745)で、この年から屋根の上之重から葺きはじめ、翌年の「寅年」には下之重まで葺き終わっている。如来堂の完成は、寛延元(1748)年に完成されたとされる。

「御建立録」は、一身田の高木家より専修寺に寄贈された文書であり、如来堂建立についての工程が詳しく書かれている。高木家は如来堂建立にあたり棟大工棟梁の任にあたり、代々専修寺の普請に携わったとされる。

また専修寺蔵で津市大里窪田に関わるものに資料

遺跡名	所 在 地	形 式	参 考 文 献				
末野A遺跡	鈴鹿市郡山町	第1段階B形式	鈴鹿市教育委員会「鈴鹿市史」1980年				
末野C遺跡	鈴鹿市郡山町						
徳居古窯跡群	鈴鹿市郡山町		金丸但馬「伊勢徳居付近の古代製陶所 遺跡」『人類学雑誌』第31巻11号 1917 年。 金丸但馬「徳居付近の古代製陶所遺跡」 『名勝舊蹟天然記念物調査報告 三重県 二輯』 1920年				
	津市大里窪田町字橋垣内	第1段階B形式	本書に掲載				
	度会郡玉城町原		山澤義貴「三重の古代窯」『日本やきも の集成』 6 近畿 I 平凡社 1981年				
	多気郡多気町笠木		,				
南ノ山古窯	同 所	第1段階A形式	,				
御 墓 山 窯 (1~3号窯) 平成5年度調査 平成8年度調査	上野市佐那具町字中坂	第1段階A形式 第1段階B型式	笠井賢治「(1) 御墓山窯跡出土の陶製 仏殿(厨子)」「1994年度上野市埋蔵文 化財年報告1】上野市教育委員会 1995年 「平成5年度 三重県埋蔵文化財センター 年報5」1994年 上野市教育委員会「御墓山窯跡(2次) 発掘調査概要」「上野市埋蔵文化財ニュー スNo.33】 1997年				
※伊賀国府 前田地区	上野市坂之下字前田		泉雄二「4.前田地区」「伊賀国府跡 (第4次)発掘調査報告」 1992年				

第18表 県内出土陶馬一覧表(※伊賀国出土の陶馬は、灰釉陶器である。)

#### [註]

- ①以下、鳥居本遺跡については、河北秀実「鳥居本遺跡」 『近畿自動車道(久居~勢和)埋蔵文化財発掘調査報告-第3分冊10-』三重県教育委員会 1991年
- ②以下、亀井遺跡については、谷本鋭次「津市河辺町 亀 井遺跡」『昭和47年県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発 掘調査報告』三重県教育委員会 1973年
- ③以下、大鼻遺跡については、山田 猛他 『大鼻遺跡』 三 重県埋蔵文化財センター 1994年
- ④門田丁三『名張市夏見 下川原遺跡』名張市遺跡調査会 1986年
- ⑤仁保晋作ほか「名張市赤目町 中戸遺跡」『昭和61年農 業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告 I 』三重県 教育委員会 1989年
- ⑥以下、東庄内B遺跡については、谷本鋭次「東庄内B遺跡」「東名阪道路埋蔵文化財調査報告」三重県文化財連盟ほか 1970年
- ⑦以下、納所遺跡については、伊藤久嗣『納所遺跡-遺構 と遺物-』三重県教育委員会 1980年
- ⑧三重県埋蔵文化財センター「一般国道23号中勢道路発掘 調査概要幅」 1996年
- ⑨三重県埋蔵文化財センター 『一般国道23号中勢道路発掘 調査概要』 WII・IX 1996・1997年
- ⑩倉田直純ほか「森山東遺跡」『一般国道23号中勢道路 (9工区)道路建設事業に伴う松ノ木遺跡・森山東遺跡・ 太田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1993 年
- ①穂積裕昌「津とその周辺地域」『日本の古代遺跡 52 三重』保育社 1996年
- ②平成7年度に安濃町教育委員会により調査された。
- ③中村光司ほか「山籠遺跡」 『一般国道23号中勢道路道路 事業に伴う大古曽遺跡・山籠遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査 報告』 三重県埋蔵文化財センター 1995年
- ⑭三重県埋蔵文化財センター 「一般国道23号中勢道路発掘 調査概要」 WI・WI 1995・1996年
- ⑮長谷川博「津市半田丘陵の考古学的位置について」 【高 田高校研究紀要 第2号】高田高等学校 1984年
- 低同前掲書①
- (7)同前掲書(7)
- (8)上村安生「壺形土器を中心とした凹線紋出現前夜の土器 について」『研究紀要 第4号』三重県埋蔵文化財セン ター 1995年
- ⑨新田 洋ほか「阿山郡大山田村 北切遺跡」昭和58年農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告」三重県教育委員会 1983年
- ②石黒立人「鈴鹿・信楽山地周辺の土ーイメージとしての山ー」「古代文化」第44号第8号 1992年
- ②石黒立人「伊勢湾地方から見た近江系土器 特に弥生中期をめぐっての断想 」『年報 昭和62年度』(財) 愛知県 埋蔵文化財センター 1988年
- ②藤田三郎・松本洋明「大和地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編I 木耳社 1989年
- ②これまでも、一志郡嬉野町の小谷赤坂遺跡の報告において甕に占める受口甕の比率が6/11と過半数を越えることが指摘されている(伊藤裕偉『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1996年)
- 図岩崎直也「邪馬台国出現前の近江」「滋賀考古」創刊号 1989年でもこの旨の指摘がなされているが、それをスト

- レートに近江からの人工移動で説明することは躊躇を覚える.
- ②植田文雄氏の御教示による。
- ②三重県埋蔵文化財センター【一般国道23号中勢道路発掘調査概要Ⅲ~Ⅳ】 1990~1994年
- ②山口 格「大古曽遺跡」前掲書(3)所収
- ②服部芳人ほか「大垣内遺跡現地説明会資料」三重県埋蔵 文化財センター 1993年
- ②糖積裕昌「大古曽遺跡A地区」『一般国道23号中勢道路 発掘調査概要Ⅵ』 1994年
- ⑩萱室康光ほか「安養院跡発掘調査報告」津市教育委員会1 990年
- ③小林 秀「東浦遺跡」『東浦遺跡・椋本南方遺跡ほか』 三重県埋蔵文化財センター 1993年
- ②山口 格「大古曽遺跡」前掲書③所収
- ③倉田直純ほか「宮ノ前遺跡」前掲書(3所収
- ④中村信裕「浄土寺南遺跡」「昭和55年度農業基盤整備事業 地域埋蔵文化財発掘調査報告書」三重県教育委員会1980年
- ③久志本鉄也他「松山遺跡」『三重県埋蔵文化財年報18昭 和62年度』三重県教育委員会 1988年
- ③森川幸雄他「椋本南方遺跡」『昭和63年度三重県埋蔵文 化財年報18』三重県教育委員会 1988年および石川隆郎 「椋本南方遺跡」『東浦遺跡・椋本南方遺跡ほか』三重県 埋蔵文化財センター 1993年
- ③山田 猛「Ⅱ.飛鳥・奈良時代」「北掘池遺跡発掘調査報告 第二分冊」 1992年
- ®大場磐雄「上代馬形遺物に就いて」『考古学雑誌』第27 券第4号 1937年
- 劉前田豊邦「土製馬に関する試論」「古代学研究」53号 1970年
- ⑩小笠原好彦「土馬考」「物質文化」25号 1975年
- ④県内陶馬一覧表は、河瀬幸信他「杉垣内遺跡」 『昭和61 年度農業基盤備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告書』 三 重県教育委員会 1989年の「県内土馬出土遺跡一覧表」 および「W発掘された遺物1.土馬」 『斎宮跡資料』 三 重県教育委員会 1978年の「三重県土馬出土遺跡地名表」 をもとに作成した。
- ⑩鈴鹿市教育委員会【鈴鹿市史 第1巻』 1980年
- ④鈴鹿市教育委員会中森成行氏の御教示による。
- ④金丸但馬「伊勢徳居付近の古代製陶所遺跡」 「人類学雑誌」 第31巻11号 1917年および金丸但馬「徳居付近の古代製陶所遺跡」 「名勝舊蹟天然記念物調査報告 三重県 二輯」 1920年
- 働上野市教育委員会【1994年度 上野市埋蔵文化財年報1】 1995年および上野市教育委員会【上野市埋蔵文化財ニュース №33】 1997年また御墓山窯跡出土の飾馬については、 上野市教育委員会豊岡勇氏並びに笠井賢治氏に御配慮と 御協力を頂いた。記して謝意を表する次第である。
- 働多気町歴史資料館の西村廣芳氏、同町教育委員会中里 守氏に御配慮と御協力を頂いた。記して謝意を表する次 第である。
- ⑩「如来堂御建立録」は、「重要文化財専修寺如来堂修理工事報告書」財団法人文化財建築物保存技術協会 1990年の巻末資料に掲載されているものを引用した。なお本書は、昭和58年から開始された如来堂の修理に係わる報告書である。
- ⑧「高田本山専修寺展ー歴史と美術ー」 三重県立美術館 1991年

# お末空前 達三様

# 如朱堂御建立錄

**2000年 2000年 2000年 2000年 2000年 2000年 2000年 2009年 2000年 2009年 2009年** 

当御善知識様証拠之如来御堂 御建立被為 思召立候由享保四年之 初春御末寺廿八日韓中井ニ茶所同行え 被 仰出御決定之上同三月当国え 御廻僧被 仰付候夫より今年延享五民年 御脊請御成就御遷仏迄庭三十年月候 一字保四年亥三月八日当国御廻僧拾五僧 **朱所同行壱人宛御族申御奉加之輿壊三ケ** 年之間毎日壱銭屋別ニ差上ケ候様御勧ィ 有之候其節平野白塚辺より白子筋迄若山 **崇見寺御廻り侯て古市薈因御随遂□侯** 李数弐拾ケ寺之御帳面銭合千四百 六貫拾六文乾金之節ニて両替 弐貫をきて 金ニ直ン五百六拾弐両弐歩余当国惣合テ 金四千五百両余也 右之金子ニテ御建立御用意御不足殊更時節 不都合故御普請匈渋滞之御事講中同行 御残念奉存簪因申侯へ此末万人諱杯と申 事相企侯ハ、不日ニ御造立可被遊と御噂仕候処 享呆八年卯七月廿九日相果申侯

- (田 智) -

文作海域人日本等門沒花完多 村田安若 村田安若 林宗 英河军室 阳荣 \$\$\$ 多香香 一御上棟、延享元<sup>申子</sup>年三月廿四日 基中候此御入用凡八百両 取焼立丑ノ年上ノ重葺中候次ニ寅年下ノ重ラ 請職人此方より雇藤兵衛世話頭と仕土、窪田より及御相談坂部藤兵衛家屋敷一ヶ月金壱両宛ニ借リ一御瓦諸方瓦邑より札入過半高直故<mark>意大夫</mark>御役僧中へ

棟梁 長谷川 重右衛門高大木 但馬

其外諸職人日雇等御祝儀物被遺侯

——(% 器)

(車修寺如来堂修理工事報告書より抜粋)

蚁'

「一札証文之事」

一札証文之事

一、阿弥陀堂地形土入用"付、廿九年已

先年寄役より申入侯処、其村畑無数

無之侯 " 付、達 V 御所望之旨申入侯

御所禄御事無拠趣「付、御請被

申、其節申合候は、土取跡永く

五**胺贰斗贰升五台**"相兜、今年迄

寄進所より差出候処、阿弥陀堂御

出来『付、明年より右年貢米御所

御納戸より被遣侯事『侯、然』処

御燒失以後、御不勝手」付、地面之儀

此方支配 " 致し年貢米貳拾

所ュセ地主不得心候得共、此方ュセ土場

前子年窪田村畑土御所望之段

(車修寺蔵)

別所顧母

寬延元辰年十二月

役人之証文。当家可見届之

遺侯、仍て為後日此度取斗侯、

**咸拾俵貳斗貳升五合ツ、永く** 

五敗ツ、地主より為御寄進<mark>版上、残</mark>て

右地面地主地主义金子差砾

御戻し有之度旨、及相談候処

年貢米永く被遣侯事御難儀」付

御門下斗"ても無之、殊"此方先

年寄役共阿弥陀堂役人より之証文も

有之侯得は、地面請取之儀、難成

段尤"侯、炔共

御所祿御不勝手之臟、地主無拠

被存、右年貢米之内、毎年

毎年 隼手 形米 <sup>1</sup> で 庸月 現可

伍藤此面 (黒印)

-208-

(専修寺如来堂修理報告書より抜粋)

帰国之節 調可申也

不能連印候 重て

别所志摩

別所顧母

右両人、未在府故

紙面之通永く相違有之

窪田村庄屋

間敷者也

国府谷壱岐 (黒印)

**產藤若狭(黒印)** 

**思口梅布郑曆 (毗四**)

**思口梅阿乙醇( > )** 

别所志摩

橋爪六左衛門駿

(民旗一个符纂) (民簿)

地主中

美濃い公事ュゼ在江戸ュ付印形無之候

(別紙―小符箋) (同文二枚)

# V. 総 括

橋垣内遺跡の調査では、弥生時代から古代を中心として、縄文時代から近世にいたるまでの膨大な遺構・遺物が出土した。報告書で遺構番号を付したものだけでも にものぼり、それ以外にも多数の小穴や性格不明の土坑類が存在している。小穴のなかには、今回の検討では掘立柱建物として拾えなかったが、掘立柱建物の柱穴であるものが多数含まれるものと思われ、本来的に掘立柱建物数はさらに多かったものと思われる。

それぞれ報告してきたように、橋垣内遺跡で確認された遺構・遺物は、今後の中勢地区の考古学的検討を進めていくうえでの基礎的な資料となるものと考えられる。以下、橋垣内遺跡の調査成果をまとめるとともに、それによって提起される今後の問題を整理し、総括としたい。

# 1. 調査成果のまとめ

# (1) 黒ボク形成時期に関する知見

橋垣内遺跡では、遺跡全域を覆う黒ボクが確認された。この黒ボクは、縄文時代晩期の河道(SR1)に切られており、それ以前に遡ることは明らかである。黒ボク中からは、縄文早~前期の土器が微量ながら出土し、黒ボクの形成時期を考えるひとつの知見を得た。この縄文早~前期という時期は、放射性炭素年代の結果とも整合し、当地域の黒ボク形成時期の一端がこの時期にあることを示している。ただ、黒ボクの形成が複数回にわたるかどうかなど、究明しきれなかった課題も残している。

# (2) 弥生中期後半墓域の確認

橋垣内遺跡では、SR2南側で方形周溝墓2基に 土坑墓が共存するかたちの弥生時代の墓域を確認し た。時期は、いずれも凹線文土器を伴う中期でも後 半のものである。今後の当該地域の社会組織の分析 や、集落構造の解明等にも有力な資料となろう。

# (3) 弥生中期後半の土器資料の出土

方形周溝墓や土坑、それに旧河道や溝から出土した大量の土器は、当地域の土器を考えるうえで重要

な資料となった。方形周溝墓や土坑から出土した弥 生中期の土器は、遺構単位の一括資料として、今後 の編年研究等の基準となるものであう。当地域にお ける「大和形甕」をはじめとする甕形土器のバリエー ションについても、一定の指針を得たものと思われ る。

# (4) 弥生時代後期~古墳時代の土器資料

一括性はいまひとつ乏しいものの、旧河道や溝などから出土した弥生後期から古墳前期の土器は多量であり、ある程度の問題提起はできたものと思われる。特に、当地域における受口甕のあり方については、橋垣内遺跡以外の状況とも考え合わせて、無批判に「受口甕=近江系」ではなく、伊勢湾西岸域、特に雲出川以北の中期末~古墳初頭についても、近江同様、受口甕の主体的な分布域であることを改めて確認した。

# (5) 飛鳥時代の掘立柱建物群の成立

橋垣内遺跡では、6世紀末以降、広汎に掘立柱建物が出現する。橋垣内遺跡の場合、竪穴住居はほとんど含まず、小規模な家屋も含めてすべて掘立柱建物が採用されていることに特徴がある。つまり、橋垣内遺跡への掘立柱建物導入にあたっては、有力者層から順次竪穴住居から掘立柱建物への転換が図られたのではなく、集落形成の当初から掘立柱建物なのである。このことは、一般層における掘立柱建物採用がさらに時代が下ると思われる伊勢においてはやや特異なあり方といえ、ひいてはそれが当地の文化的な先進性を示すものと思われる。

# (6) 古代の土器資料の大量出土

大溝SD58や、井戸、土坑から出土した飛鳥時代 以降の土器も膨大で、中勢地区ではこれまで報告されたなかで最もまとまった一群のひとつである。 SD58は、混在状況で出土しているため、細かな時間的な変遷は追えないものの、各器種の当地域におけるバリエーションがある程度確認できる。土坑や井戸などの一括性の高い資料ともども今後の当地域の土器の編年や地域性の研究に重要な資料となろう。

# (7) 「近世攪乱土坑」とその背景

橋垣内遺跡で多数確認された埋土に近世の遺物を含む土坑群については、高田本山専修寺の阿弥陀堂建立にあたって窪田の地で瓦を焼くために粘土を採土した、という『如来堂御建立録』に記載の内容と対応して考え、瓦用粘土採掘跡の可能性を考えた。ただしこれについては、遺構解釈の一案であり、確定したものではない。

#### 2. 今後の課題

今回の調査によって提起された課題は弥生から古墳の土器の問題や、古代集落の問題など多岐にわたっているが、ここでは、これから解明していかねばならない若干の課題を列挙し、今後の調査への指針としたい。

# (1) 集落規模の問題

今回の調査は、国道23号線のバイパスに伴うもの であり、遺跡の全域を発掘したものではない。その ため、遺跡の南北はほぼ抑えているものの、東西に ついては不明といわざるをえない。また、SR1 (縄文晩期) · S R 2 (弥生中期) · S R 3 (弥生後 期~古墳)・SD58(飛鳥~平安)などのような遺 跡を横断する大規模な河道や大溝の上下流側の状態 やその利用方法の実態解明も今後に残された課題で ある。特に、今回の調査区の西側で県道建設に伴っ て調査した橋垣内遺跡(県道橋垣内)でも縄文時代 の溝(B地区SD4)や古墳時代中期の溝(B地区 SD3)、平安時代以前の河道(A地区SD1)等が 確認されており、それらが今回確認された河道類の 上流にあたるかどうかが問題となる。すなわち、① 県道橋垣内B地区SD4とSR1、②県道橋垣内B 地区SD3とSR3、③県道橋垣内A地区SD1と SD58との対応である。見通しとして、県道橋垣内 調査区はより谷の出口に近い部分に相当しており、 基本的には両調査区の河道類は同一のものの上流と 下流を確認している可能性が高い。いずれにせよ、 今後の確認によってより詳細な集落の様相が判明し ていくであろう。

# (2) 掘立柱建物群成立の意義

橋垣内遺跡での飛鳥時代掘立柱建物群の成立は、 掘立柱建物の建設が大型建物から小形建物へ拡大し ていくのではなく、小形建物も含めて一斉に掘立柱 建物群が成立することに特色があった。しかしなが ら、この特徴は、橋垣内遺跡のに完結する特徴では なく、大古曽遺跡をはじめ、旧窪田郷内に存在する 毛無川上流部の遺跡群に共通したものとなる可能性 があり、橋垣内遺跡はその特徴がより明瞭なかたち で現れた例ではないかと思われる。

その場合、橋垣内遺跡のみならず、周辺の遺跡も 含めた全体としての地域の位置づけを図っていかね ばならない。橋垣内遺跡での掘立柱建物群の初現期 である6世紀末は、いわゆる初期郡家等の律令制的 官衛の一般的な成立期よりも先行しており、その位 置づけが問題となる。しかしながら、旧窪田郷は、 六大B遺跡のように、木簡が出土して北を意識した 建物配置をもって官衛的様相をもった遺跡が存在し ているのも事実である。橋垣内遺跡は、直接の居宅 かどうかはともかく、後に郡司を担うような地域有 力層に関連し、その膝下にあった集団の遺跡ともお えられ、今後、その具体的なあり方を追求していか ねばならない。特に、比較的大規模な建物が集中す る県道橋垣内C地区(第10図参照)の性格解明がひ とつの鍵になるものと思われる。

橋垣内遺跡西側の丘陵には式内大乃巳所(オオノコソ)神社が存在していて当地域の開発にあたって重要な役割を担っていたであろうことは想像に難くないし、橋垣内遺跡の北西側の谷筋は、その最奥部に5世紀末の内多古窯跡が存在していて、当地における須恵器生産地帯であった可能性もある。焼け歪んだ須恵器の存在や、フイゴ羽口等の存在は、橋垣内遺跡に拠った集団の性格を考えていくうえでも注目されよう。なお、大乃巳所神社の丘陵の反対側には、「嘉間(カマ)池」なる池が存在しているが、これは本来「窯池」であったことも考えられ、これも当地域の特性を示すものと思われる。

いずれにせよ、以上のことは、六大A遺跡、六大B遺跡、大垣内遺跡、大古曽遺跡など窪田郷の諸遺跡の動向とも関連しながら、地域全体の位置づけをはかったうえで、橋垣内遺跡が担った役割を明らかにしていく必要があろう。

(穂積裕昌)

# (付編1) **河道(SR)における**

# 杭列他の<sup>14</sup>C(放射性炭素)年代測定について

パリノ・サーヴェイ株式会社

# 1.試料

試料は、橋垣内遺跡A地区より採取した杭材1点, 自然木3点,土壌4点と関連対比試料として採取された土壌3点の計11点である(第1表)。

# 2. 測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室の協力 を得た1年代値の算出にはLIBBYの半減期5,570年を 使用した。

## 3. 結果

結果は、第1表参照。

# 4. 考察

橋垣内遺跡A地区の護岸施設に利用されたと見られるA地点杭列の杭材(NoA-1)は、弥生時代に相当する年代値が得られた。また、A地区旧河道より出土した自然木(NoB-5~B-7)では、ほぼ縄文時代晩期に相当する年代測定値が得られた。ただし、河道最下層の22層より出土したNoB-6が最

も新しい年代値であるなど、3点の自然木試料間に みられる年代差は、必ずしも層序関係と対応してい ない。3試料が河道内埋積物中より得られており、 いずれも他所より搬入堆積したものと考えられるこ とから、各埋積層堆積時期と直接結びつかない試料 もあるものと考えられる。

一方、河道壁にあらわれた自然堆積層のうち最上層の①層黒ボク(NaB-1)は縄文時代中期相当、③相黒灰色腐植質シルト・⑤層暗灰色腐植質シルト・⑧層黒灰色粘土質シルト(NaB-2~B-4)は縄文時代草創期ないしは旧石器時代相当の年代測定値が得られた。したがって、これらの自然堆積層は、更新世より完新世に至る堆積層と考えられる。

なお、関連対比試料No①~③では、縄文時代早期 (No②・③) および草創期 (No①) 相当の年代測定値 が得られたが、試料採取層準や層序関係等の詳細が 不明なため言及できない。

以上、各測定値の評価については、キーリC. T. ・武藤康弘(1982)「縄文時代の年代」縄文時代の 研究1. 縄文人とその環境p.246-275を参考とした。

試料No	遺跡・調査区	層・試 料	備考	GxX-Xo	年代(1950年よりの年代)
A – 1	橋垣内・A地区	旧河道岸・杭材	A 地点杭列(弥生時代)	15583	2090±90 y .B.P. (140 S.C.)
B-1	橋垣内・A地区	旧河道南壁土層	①層 黒ボク	15584	4500±130 y .B.P. (2550 S.C.)
B – 2	橋垣内・A地区	旧河道南壁土層	③層 黒灰色腐植質シルト	15585	12.020±270 y .B.P. (10.070 S.C.)
B – 3	橋垣内・A地区	旧河道南壁土層	⑤層 暗灰色腐植質シルト	15586	13.190±540 y .B.P. (11.240 S.C.)
B – 4	橋垣内・A地区	旧河道底土層	⑧層 黒灰色粘土質シルト	15587	37.030+44802850 y .B.P.(35.080 S.C.)
B - 5	橋垣内・A地区	旧河道内自然木	⑬層内出土	15588	2700±140 y .B.P. (750 S.C.)
B - 6	橋垣内・A地区	旧河道内自然木	②層内出土	15589	2480±100 y .B.P. (530 S.C.)
B - 7	橋垣内・A地区	旧河道内自然木	⑩層内出土	15590	3320±140 y .B.P. (1370 S.C.)
その地①	関連対比試料	トレンチ東壁土層	黒ボク	15591	10.160±210 y .B.P. (8210 S.C.)
その地②	関連対比試料	トレンチ西壁土層	黒ボク	15592	7060±120 y .B.P. (5110 S.C.)
その地③	関連対比試料	トレンチ南壁土層	黒ボク	15593	7450±180 y .B.P. (5510 S.C.)

第1表 橋垣内遺跡 B地区 C年代測定試料表および結果

# (付編2) 橋垣内遺跡における

# 花粉分析及び <sup>11</sup>C (放射性炭素) 年代測定について

パリノ・サーヴェイ株式会社

## 1. はじめに

橋垣内遺跡は、津市西部の郊外を通る中勢バイパスの一環である中勢道路の建設工事に伴い発掘調査が行われている遺跡である。遺跡の概要については後述するが、弥生時代以降の文化を考えるうえで重要な遺物・遺構が多数検出されている。

今回の調査は、遺跡における堆積層の時間指標を 得ることを目的として、放射性炭素年代測定を行い、 遺跡が営まれていた当時の古環境、とりわけ古植生 について推定することを目的として花粉分析を行っ た。その結果について報告する。

# 2. 調査地域の地形・地質の概要

遺跡が所在する津市地域の地形・地質については、 吉田(1987)の報告がある。それによれば、本地域 の地形は、いくつかの丘陵・台地・低地に区分され る。丘陵は、半固結の泥質層と砂層からなる東海層 群亀山累層によって形成されているため、丘陵の開 析は著しく進行しており、幅の狭い谷底平野が樹枝 上に発達し、稜線には尾根型の傾斜面が連続してい る。丘陵は、主要河川である中ノ川、志登茂川、安 濃川によって、北より鈴鹿・河芸・見当山・高塚丘 陵の四つの丘陵に区分されている。台地は、各丘陵 ないし河川沿いに段丘面として発達しており、高位・ 中位・低位段丘面に3区分されている。低地は、中 勢海岸地域とその西側に発達する、北より中ノ川、 志登茂川、安濃川低地の河成低地に分けられる。こ のうち河成低地には、氾濫平野が発達している(吉 田,1987)。

今回の調査を行った橋垣内遺跡は、志登茂川低地 の北西端に位置する。

## 3. 分析調査方法と分析試料

## (1)放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定は、学習院大学の木越研究室 が測定した。分析試料は合計 2 点であった。

# (2) 花粉分析

湿重約10gの試料について、HF処理→重液分離
→KOH処理→アセトリシス処理の順に物理科学処理を行い花粉化石を分離・濃集する。得られた残渣をグリセリンで封入しプレパラートを作成した後、 光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら出現する種類(Taxa)の同定・計数を行った。栽培植物とされるイネ属の同定は、ノマルスキー微分干渉装置を使用して花粉の表面模様を観察し、発芽装置の形態、大きさなどを考慮しながら行った。この際、化石の保存が悪く同定できないものやイネ属以外のイネ科は、他のイネ科として一括して扱った。

結果は一覧表として示し、化石が良好に検出された地点では花粉化石群集の変遷図を作成した。この変遷図中の各種類の出現率は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。

分析試料は合計18点であった。

# 4. 橋垣内遺跡

# 4-1. 遺跡の概要と調査内容

橋垣内遺跡は、津市大里窪田町字橋垣内に所在す 弥生時代から近世にいたる遺跡である。遺跡内のB-1調査区では、弥生時代は方形周溝墓や溝、古墳時 代から奈良時代は竪穴住居址や掘立柱建物址、近世 は粘土採取坑と考えられる土壙群などが検出されて いる。

本遺跡の調査では、弥生時代の遺構確認面の下位 にある黒色粘土の堆積年代を明らかにすることを目 的として放射性炭素年代測定を行い、同時にその黒 色粘土堆積期以降の古植生を推定することを目的と して花粉分析を行った。

## 4-2. 試料

試料は、B-1調査区のB1SCポイントとB1 ECポイントの2ヶ所の地点(それぞれHG1地点、 HG2地点とする)から採取した。両地点の堆積相の層相と試料採取層位を図1に示す。HG1地点の V層上面とHG2地点のVI層上面が弥生時代以降の 遺構確認面に相当する。

放射性炭素年代測定はHG1地点のV層(Na6) と四層(Na11)、花粉分析はHG1地点のI~VI・ IX・2回・XVI層(Na1~6・8・10・13・17・18)と HG2地点のVI・VII・IX・X層(Na1・2・4・6・7)について行った。

## 4-3. 放射性炭素年代測定結果

測定結果は表1に示す通りである。

# 4-4. 花粉分析

# (1) 花粉化石の産状

花粉化石は、HG1地点のV層最上部~I層(№5~1)では良好に検出されたが、その下位の試料とHG2地点の試料では化石の保存が悪く、化石数が少なかった(第3・4表)。花粉化石の保存が悪かった原因としては、堆積後の酸化や土壌微生物による分解の可能性が挙げられるが、地形発達過程など不明な点が多いため特定することはできない。いずれにしてもV層中部~W層では大半の花粉が分解消失している可能性が強いため、結果を統計的に扱うことを控えた。HG1地点におけるV層最上部~I層の花粉化石群集の変遷を第2図に示す。

# (2) 花粉化石群集の特徴

V層最上部から I 層の花粉化石群集は、針葉樹のマツ属が上部に向けて増加・急増傾向を示し、Ⅱ層以浅で優占することが特徴である。これとは逆にアガガシ亜属、クリ属ーシイノキ属といった広葉樹の種類は減少傾向を示す。一方、草木花粉ではイネ科が高率に出現する。このイネ科には栽培植物とされるイネ属が含まれる。その出現率は V 層では低率であるが、IV 層以上の層では高率であり、 Ⅱ・ I 層では特に高い。このほかに栽培植物とされるソバ属が連続して検出される。

# (3) 花粉化石からみた古植生

HG1地点の堆積層の年代は、放射性炭素年代測

定結果に基づくと、畑層が約11000年前、V層が約5100年前になる。また、V層上面は弥生時代以降の遺構確認面に相当する。これらの年代・時代性に基づくと、本地点におけるV層最上部以上の花粉化石群集の変遷は約5100年前以降の植生の変化を反映していることになり、特にⅣ層以上は弥生時代以降の植生の変化を反映していることになる。

遺跡周辺の台地・丘陵の植生は、弥生時代以降の時期になると変化し、それまでのカシ類・シイ類などの暖温帯広葉樹林(照葉樹林)から、マツ林(おそらくアカマツ林)へと交代していったと推定される。このような弥生時代以降の時期におけるマツ林の分布拡大は、人類の直接・間接的な植生干渉の影響に起因する二次林としてのアカマツ林の分布拡大を物語っているのであろう。

一方、栽培植物とされるイネ属がV層上部から現 在の耕土まで連続して検出される。さらに、栽培植 物とされるソバ属の花粉も連続して検出される。こ れら栽培植物の出現は、それらの植物の栽培が周辺 で営まれていたことを暗示している。ただし、V層 上部ではイネ属の出現率が低い。鈴木・中村(1977) によれば、現在のような集約度の水田表層のイネ属 花粉比率 (イネ科総数に対するイネ属の比率;これ は、稲作の集約化とともに水田のイネ科雑草が減少 の傾向にあることに基づいている) は少なくとも30 %以上を示すとしている。本層におけるイネ属比率 は10%と低く、また、上位の層からの攪乱などによ る落ち込みの可能性は考えられることから、本層が 堆積した頃に稲作が営まれていたとは断言できない。 今後、植物珪酸体分析(プラントオパール分析)を 行い、再検討する必要があろう。

# (引用文献)

鈴木功夫・中村 純 (1977) 稲科花粉の堆積に関する基 礎的研究. 文部省科研費特定研「古文化財」「稲作の起源 と伝播に関する花粉分析学的研究—中間報告—」 (中村純 編), p.1-10.

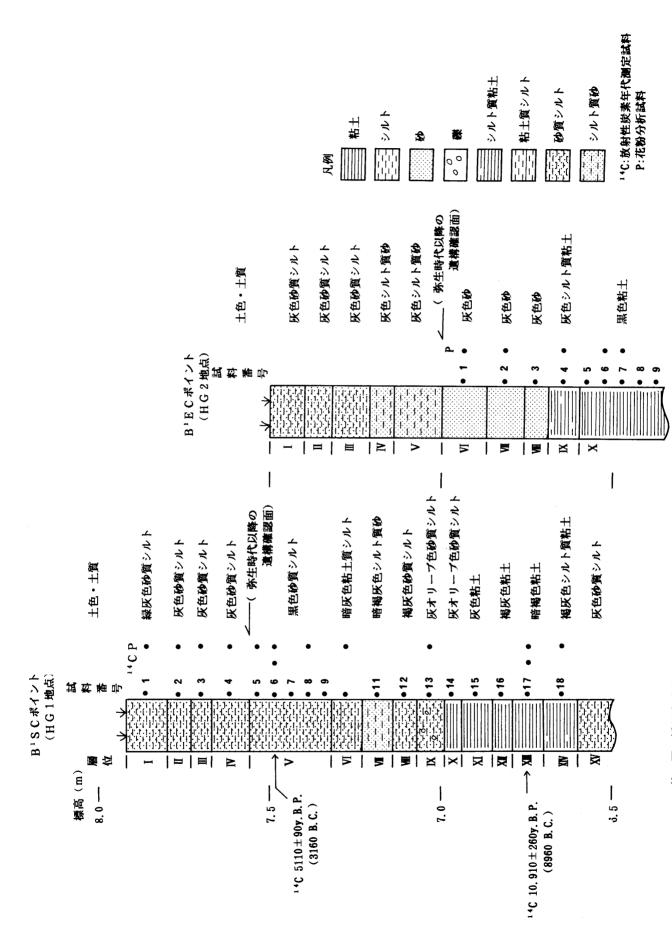
吉田史朗(1987)津市東部地域の地質、地域地質研究報告(5万分の1地質図幅),地質研究所,72p.

地点	層位 試料番号		年代 (1950年よりの年数)	Code Na	
H G I 地点	V層	No. 6	5110± 90 3160 B.C.	Gak-14890	
H G I 地点	狐屠	No.11	10.910± 260 8960 B.C.	Gak-14891	

第2表 橋垣内遺跡における放射性炭素年代測定結果

層位 種 類(Taxa) 試料番号	I 1	II 2	III 3	IV 4	V 5	V 6	V 8	VI 10	IX 13	ХШ 17	XIV 18
木本モツママコスイヤルマシバノノ属ララ属属を発展を発展を表する。 マー・カー 大名 はんしょう かん はんかく かん はん アン・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・	1 2 31 120 69 2 1 3 - 5 4 2 - - - 2	1 8 555 137   17  15 1 10 12  - 1 1 1 2 - - - 1 1	1 16 -45 1 16- 2 -11 1- 10 7 9 17 3 1   10   11   10   11   11   11    	9 48 - 75 17 61 - 2 11 11 11 42 14 9 2	6 17  15 12 44 6  13 2 1 6 1 18 44 26 3 2 - 1 - 2			- 1 3 - - - 1 1 - - - - 1 1 - - - - -	1		1
草 本オイ他カホッカー オイルカネッカー オイルカネッカー ター 科コウナグト 属 オグ属イツクク科工属ザシボラシノ科ギキボンクク科工属ザシボラシノ科ギキボンカー ネリサー ター 科コウナグト 属 サー が ネッサー ター 科コウナグト 属 サー エモー アセコ 他 タッル アナギャボシー アナギャボシー アナギャボシー アナギャボシー アナイ アカー スティー アナー アナー アナー アセコ アナー		186 433 3  6 11 1 1  2 7 6 3	- 391 334 2 - - - 2 11 2 - - 2 - 3 1 18 6 4	223 209 9  1 6 12 2 3  4 2  26 10 26	4 84 383 22 2 1 1 1 1 3 2 2 29 2 55 15 26 1		3		3 	- - - - - - - - - - - - - - - - - - -	
不明花粉  シ ダ 類 胞 子 ミズワラビ属 サンショウモ シダ類胞子	1 	2 - 1 57	15 1 1 1 15	22 - - 65	52 			4 	2 	2 	_ _ _ _ 1
Botryococcus  合 計     木 本 花 粉	7 242 461 1 2 706	262 268 2 58 590	141 776 15 17 949	320 533 22 65 940	220 631 52 39 942	0 0 0 0 1 1	0 3 2 0 5	7 2 4 1 14	1 4 2 0 7	0 0 2 15 17	1 0 0 1 2

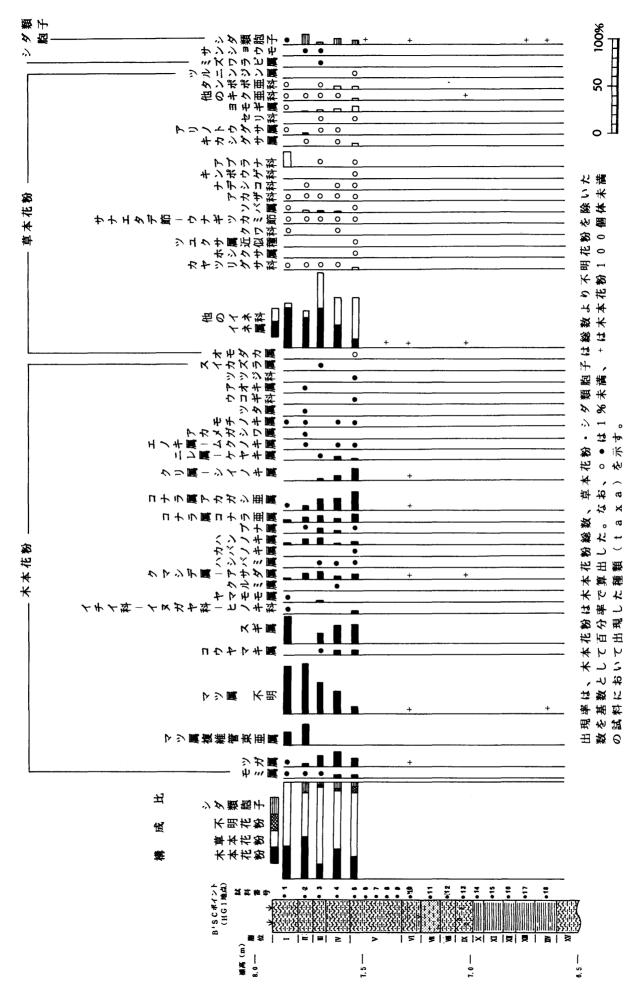
第3表 橋垣内遺跡HGIにおける花粉分析結果



第1図 橋垣内遺跡HGI・HG2地点の模式土層断面柱状図及び試料採取層位

×

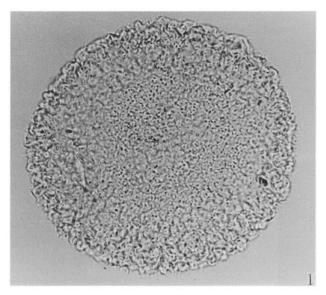
ø



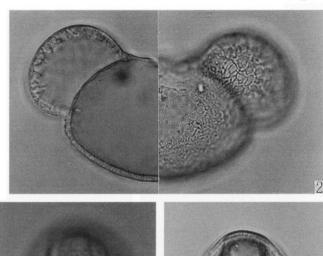
種	類(Taxa)	層位 試料番号	VI	VII 2	IX 4	X 6	XI 7
1里	類 (Taxa)	武作笛 夕	1		4	- 0	
木	本 花 粉 ツガ属 クマシデ属-アサダ属 テイカカズラ属		=	_ 1 _	1 - -	_ 1 1	- - -
草	本 花 粉 イネ科 ヨモギ属 他のキク亜科		=	Ξ	=	1 3 1	=
	不明花粉		1	3	5	5	1
シ	ダ 類 胞 子 シダ類胞子		_	1	16	7	_
合	計木草不シ総 計木草不シ総 計木草不シ総		0 0 1 0	1 0 3 1 5	1 0 5 16 22	2 5 5 7 19	0 0 1 0

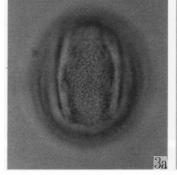
第4表 橋垣内遺跡HG2地点における花粉分析結果

P L 1

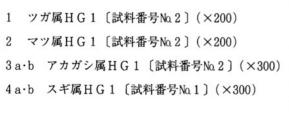


1, 2 (×200) 3 a · b, 4 a · b (×300) 50μ







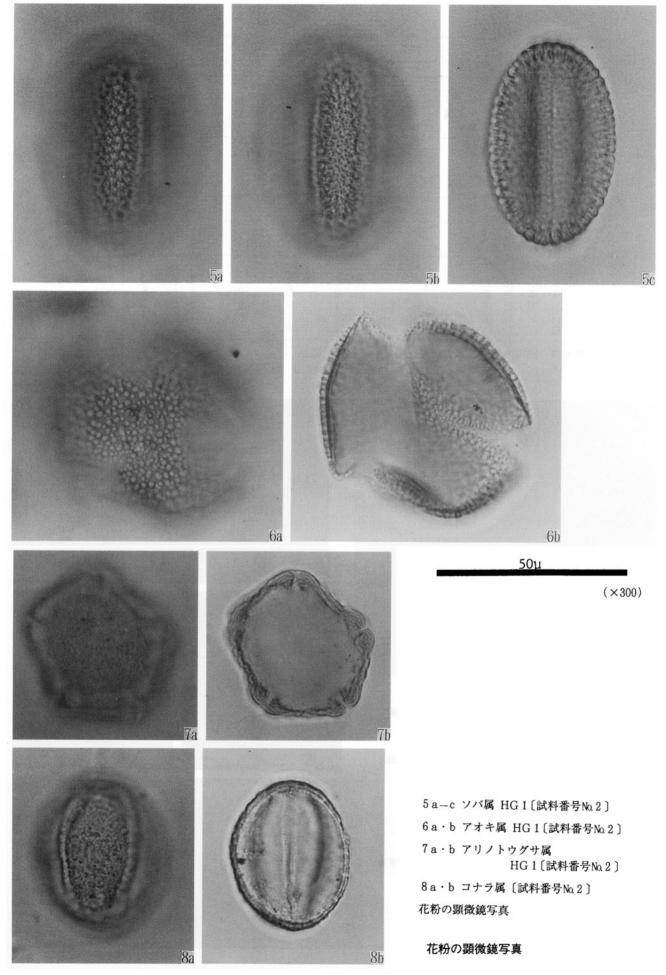


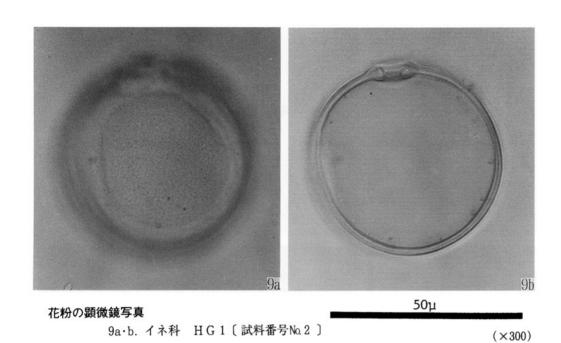


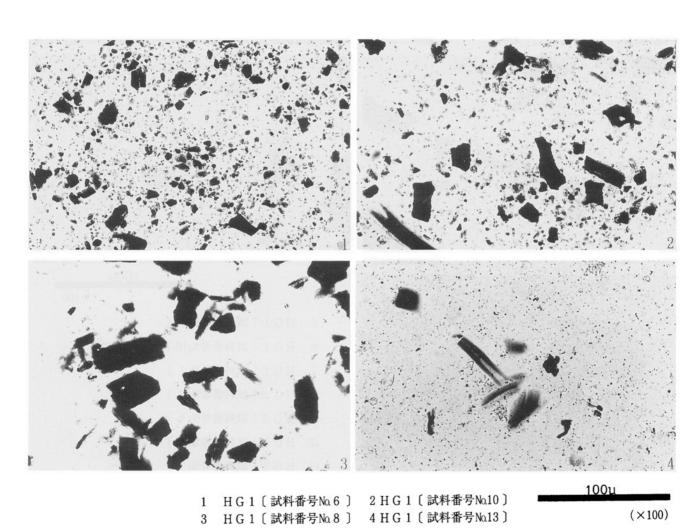


# 花粉の顕微鏡写真

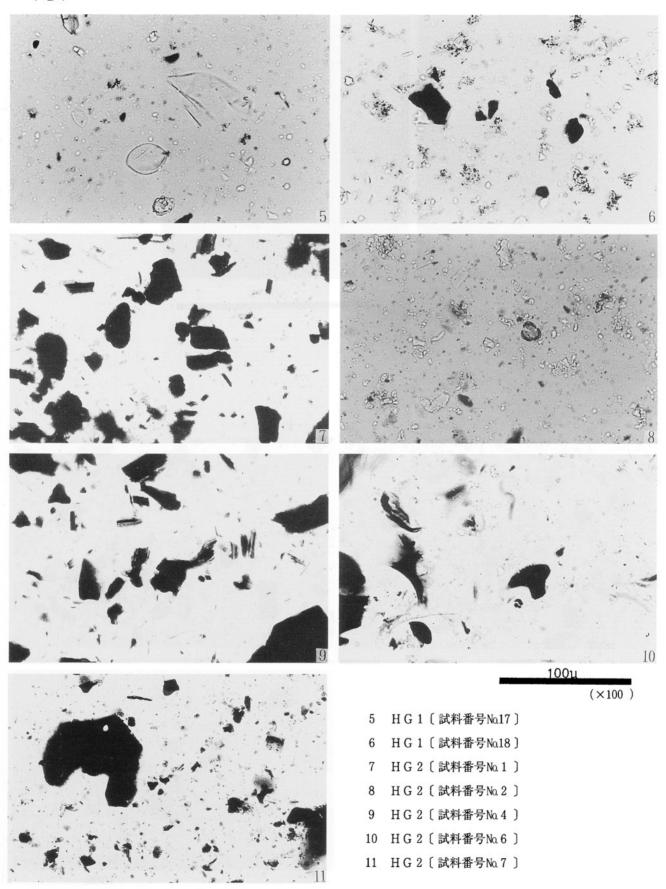
PL2







状況写真



状況写真



橋垣内遺跡A地区(北から)



橋垣内遺跡B-1地区(北から)



橋垣内遺跡B-2地区(東から)



大古曽遺跡A地区(南から)



パイロット道路部分(北から)



SR3 (西から)

P L . 4



SD19~24 (南西から)



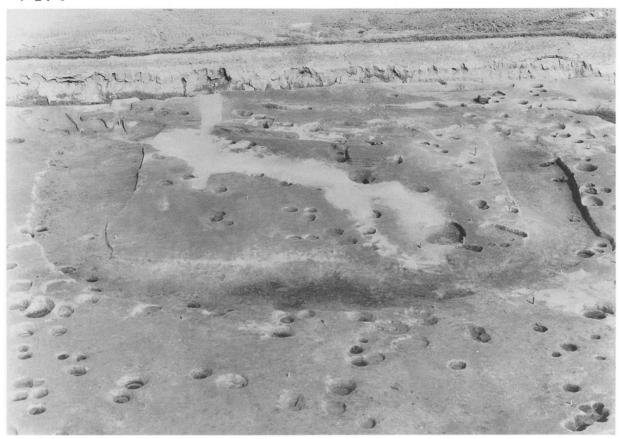
SR2井堰(北東から)



SR3遺物出土状況(南から)



SR3上層土器溜(北から)



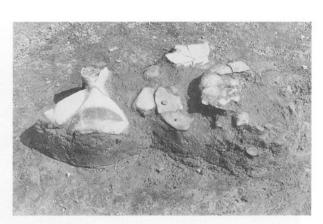
S X 32 (南から)



南周溝土器出土状況(南から)



同(北から)



同(南から)



同(南から)



SK55 土器出土状況 (西から)



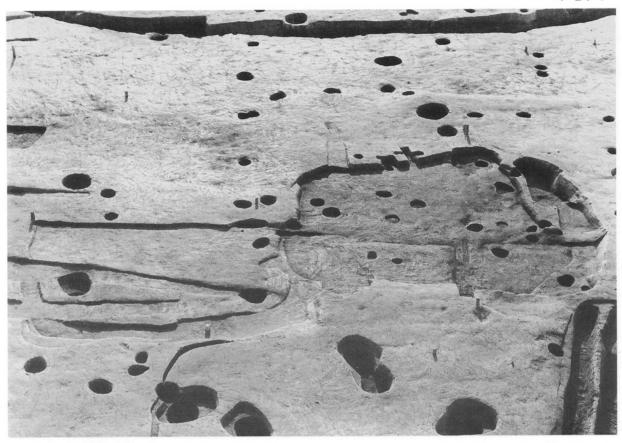
SK85 土器出土状況(南から)



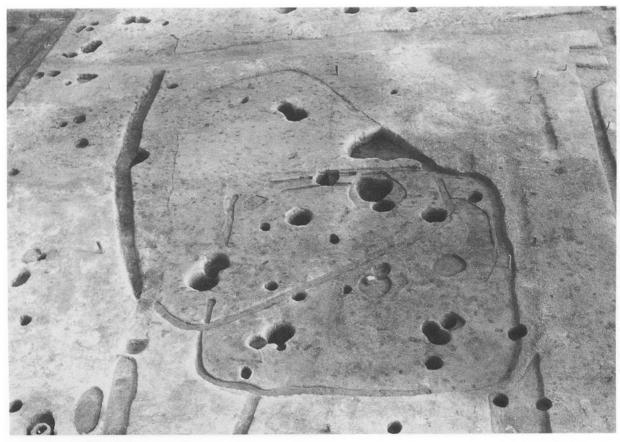
SK105 土器出土状況(南から)



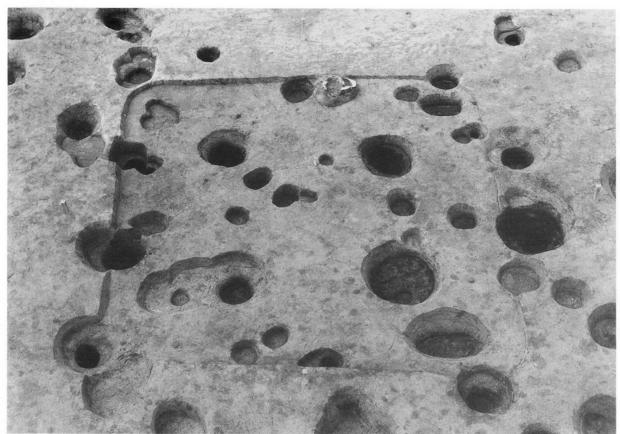
SK166 土器出土状況(南から)



SH7・8 (北から)



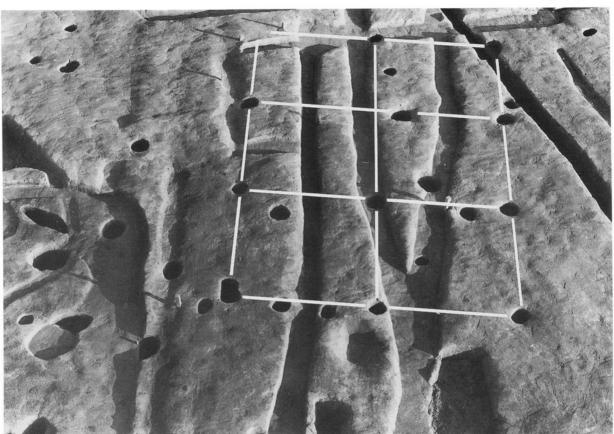
SH9・10 (西から)



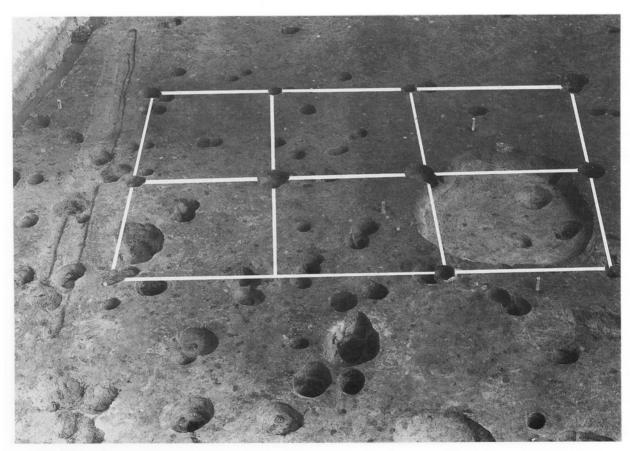
SH35(東から)



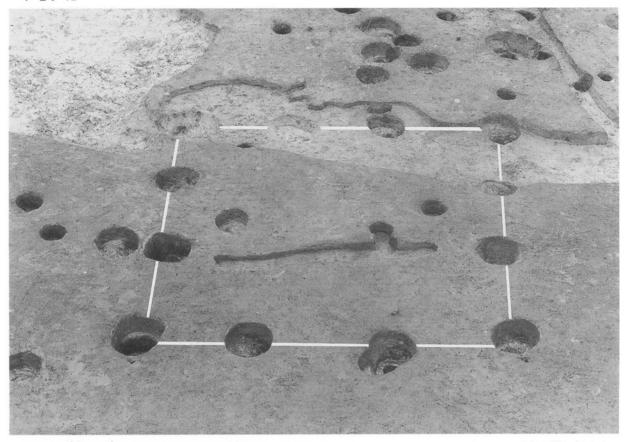
SH64(東から)



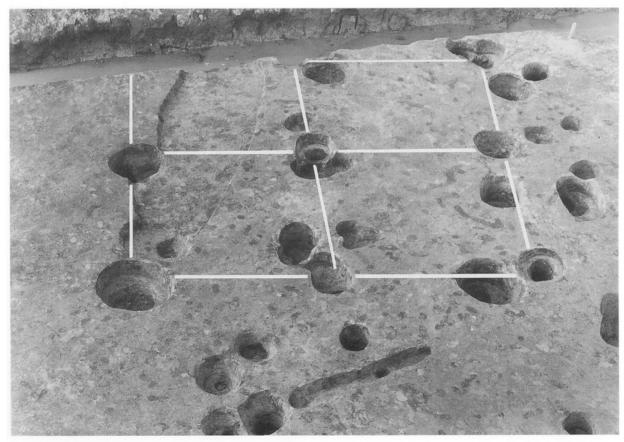
SB18 (西から)



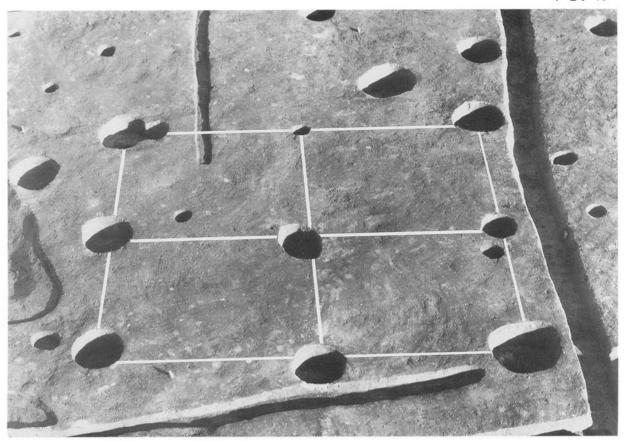
SB88(南から)



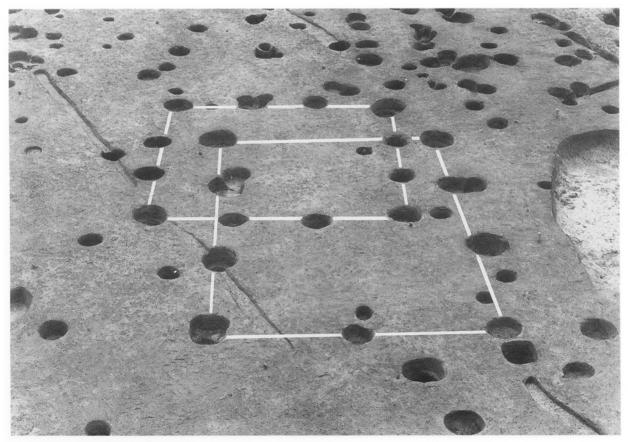
SB121 (北から)



SB91(東から)

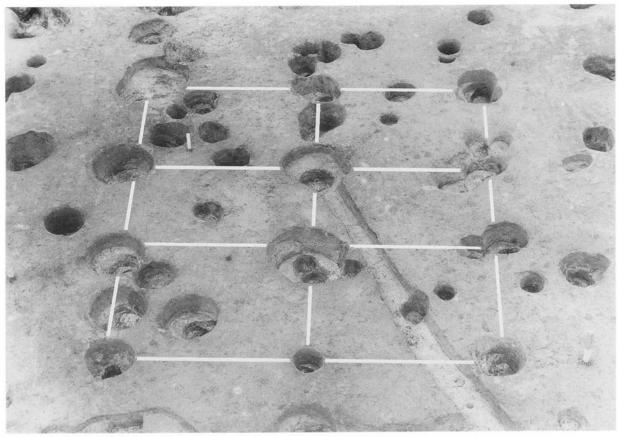


SB110 (西から)

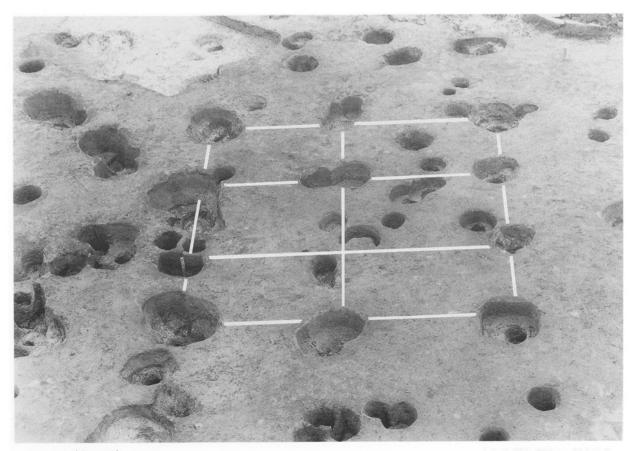


SB119 ・120 (西から)

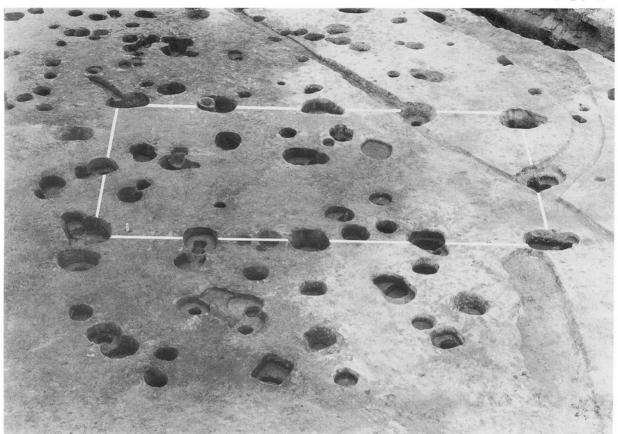
P L . 14



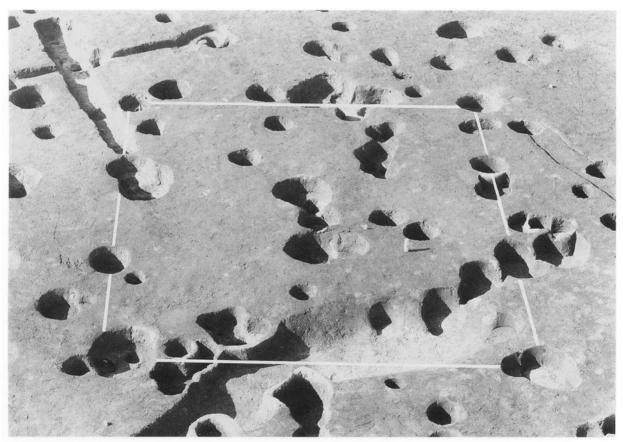
SB124 (北から)



SB127 (北から)



SB170(南西から)



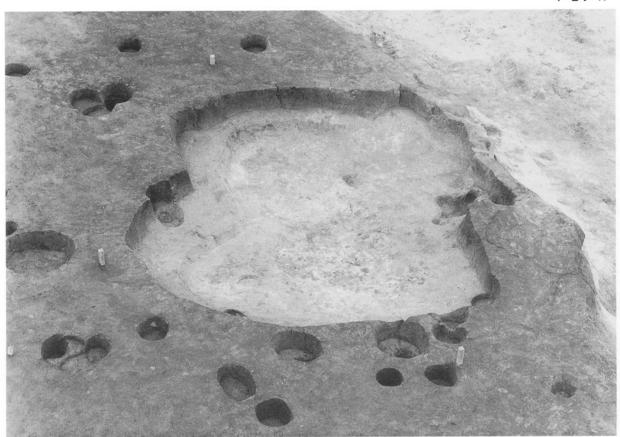
SB179(東から)



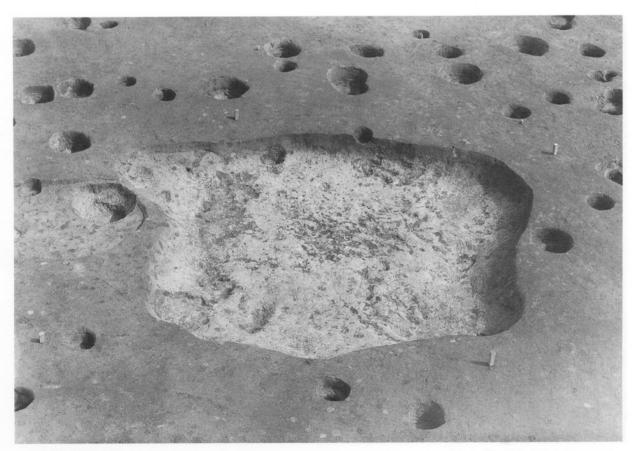
S E 52 (北から)



SE133(西から)



SK69(東から)



SK123(南から)



SD58(東から)



SD58 遺物出土状況(北から)



SD58 遺物出土状況(西から)



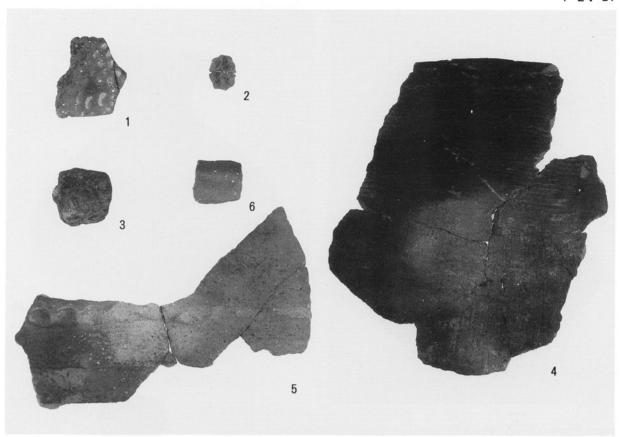
SD58 遺物出土状況(南から)



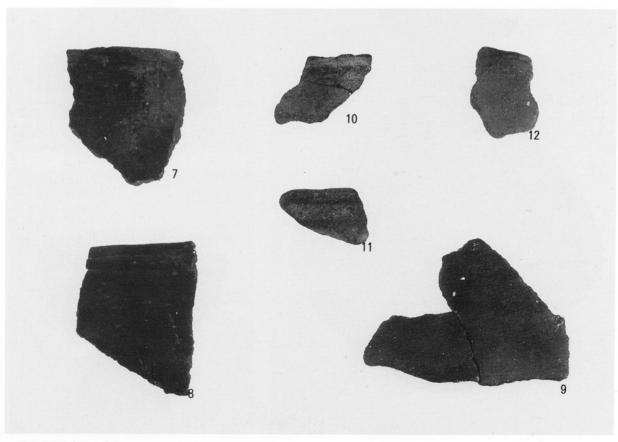
攪乱土坑群(南西から)



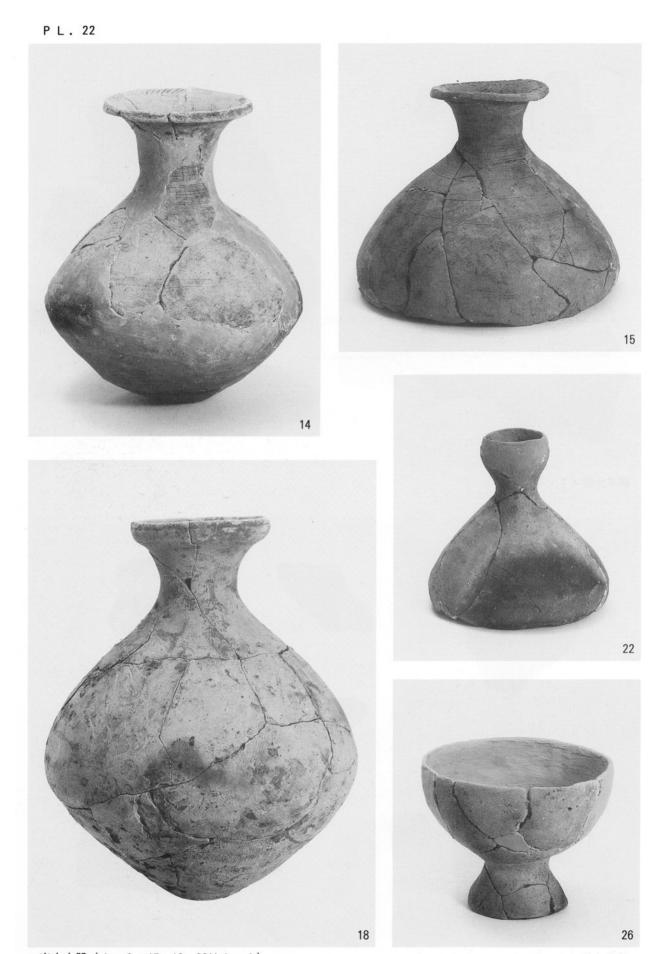
作業風景



縄文土器(1:3)



縄文土器(1:3)



出土土器(1:3、15・18・26は1:4)







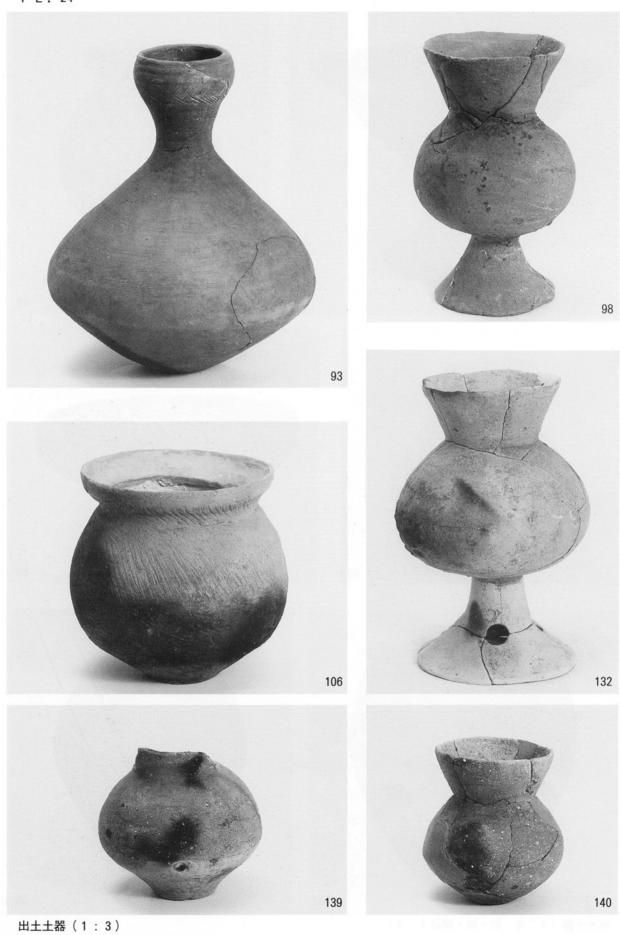






出土土器(1:3、67・68・50は1:4)

P L. 24



P L. 25



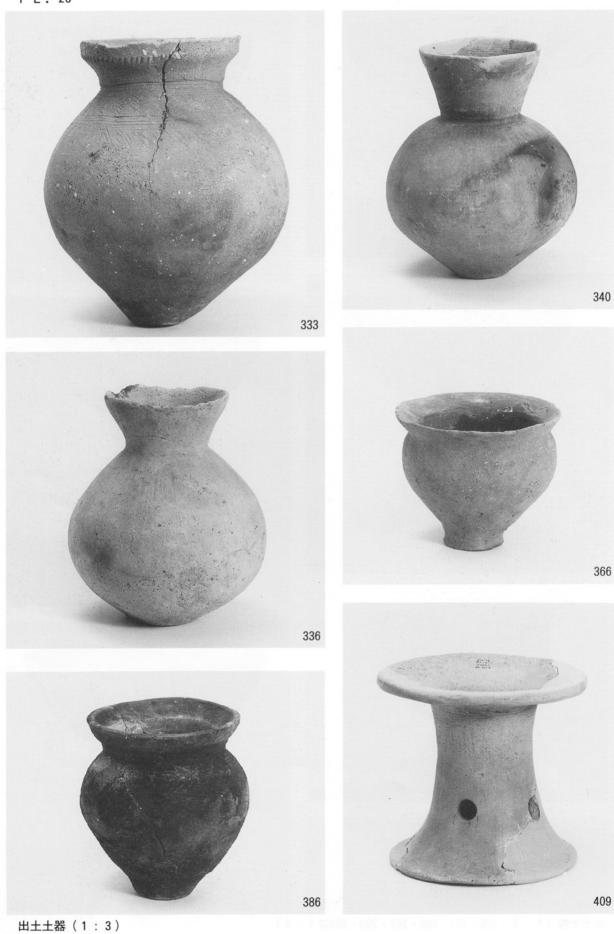
出土土器 (1:3)

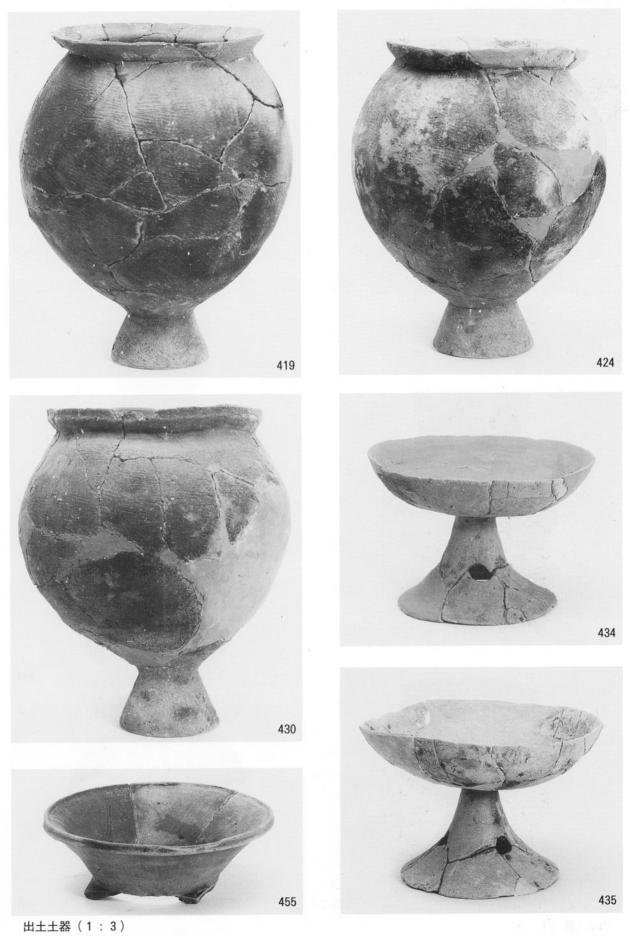




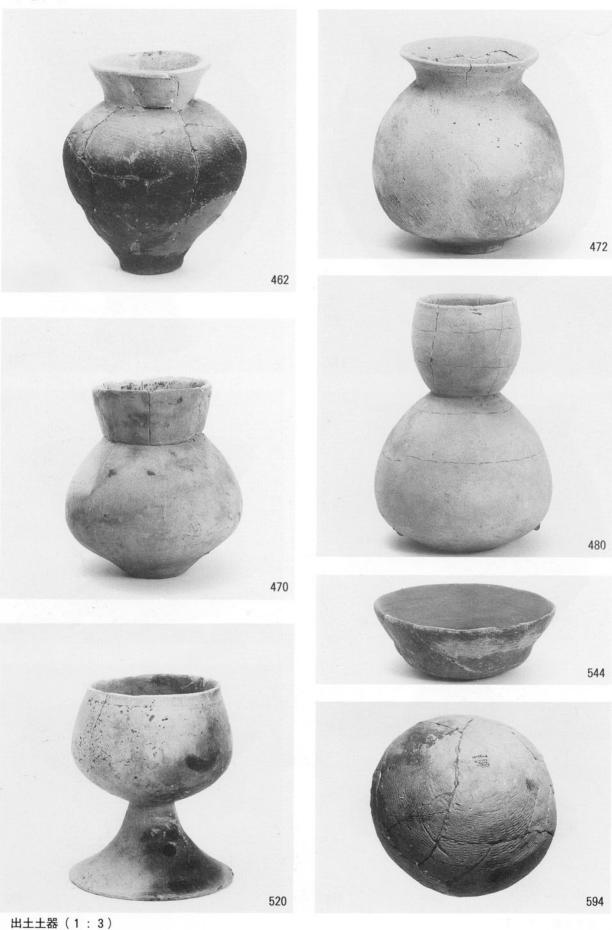
-247-

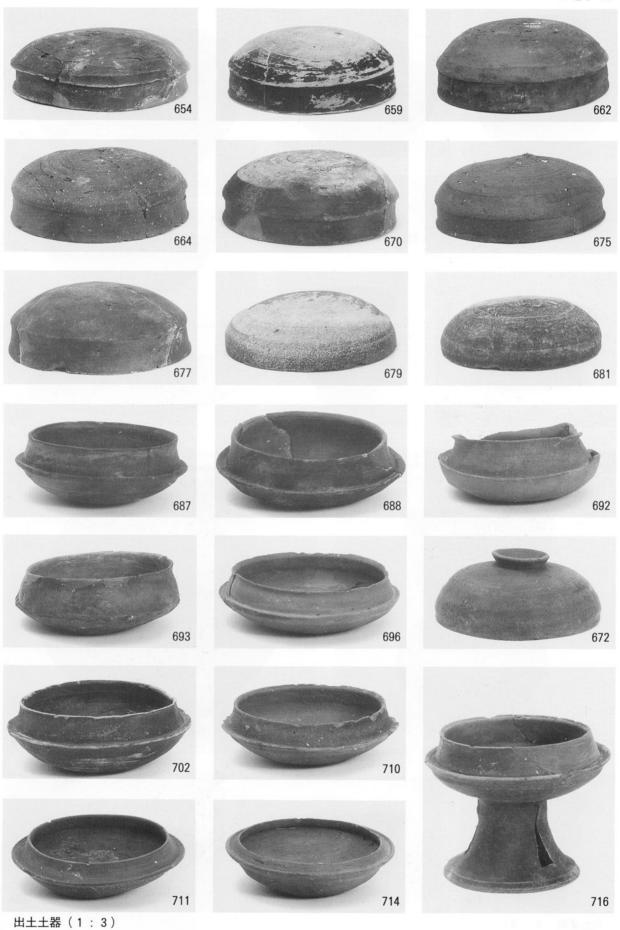
P L. 28



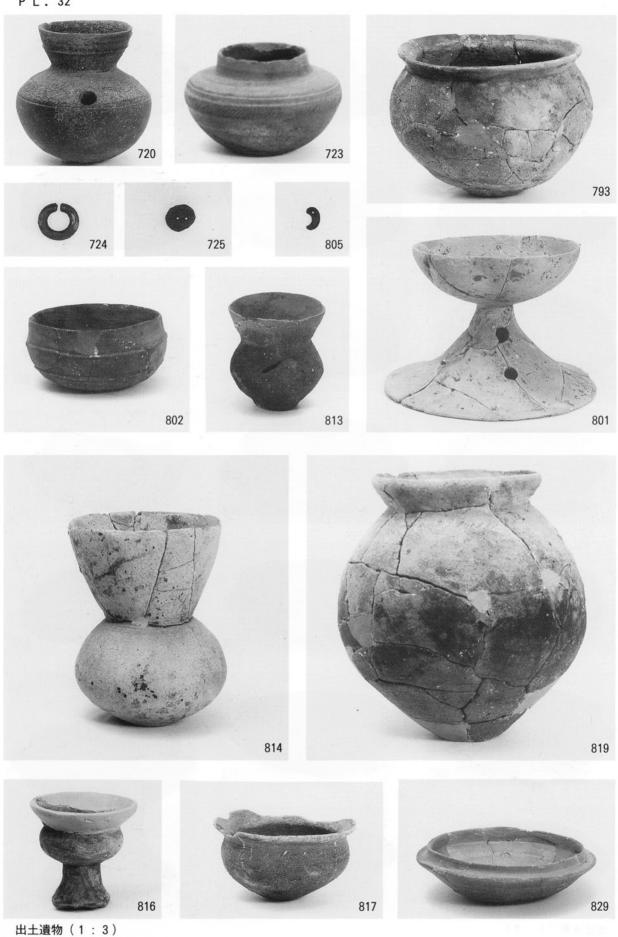


P L. 30





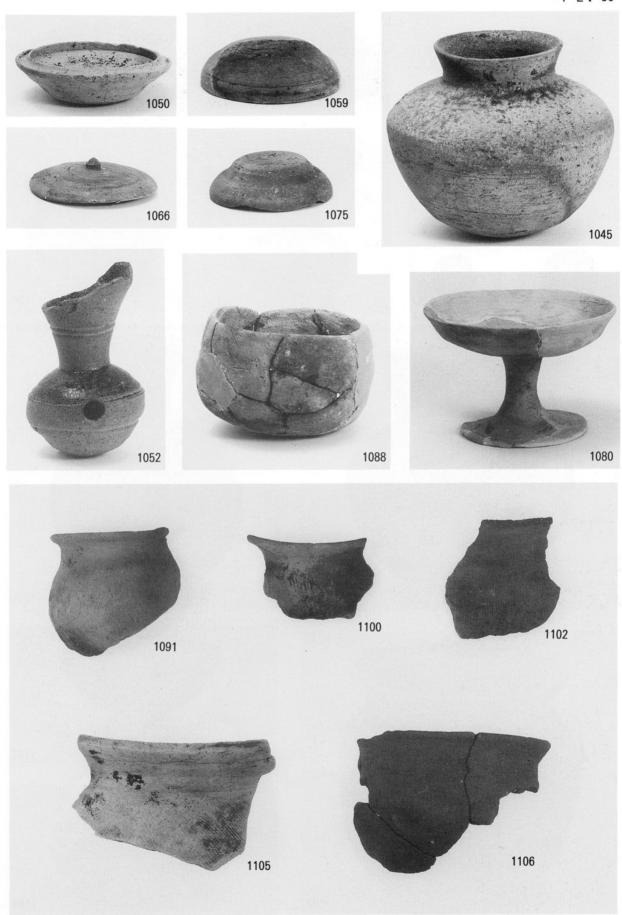
P L. 32





P L. 34

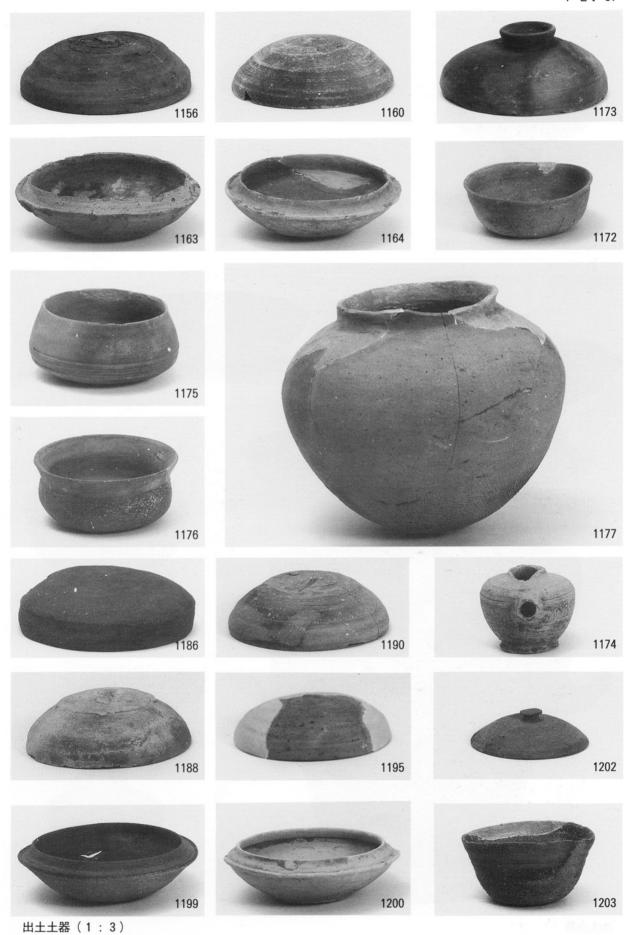




出土土器 (1:3)

P L. 36

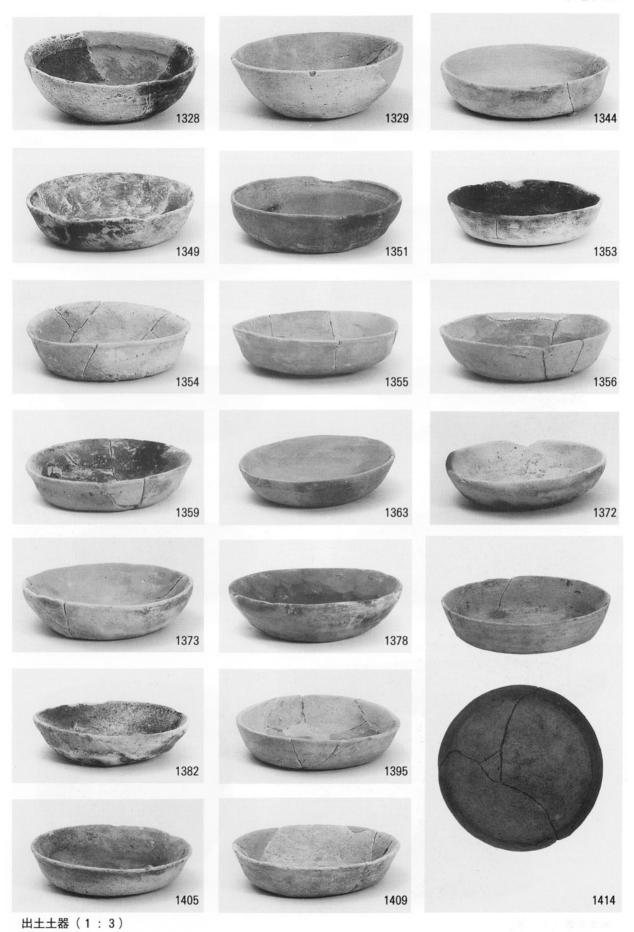




P L. 38



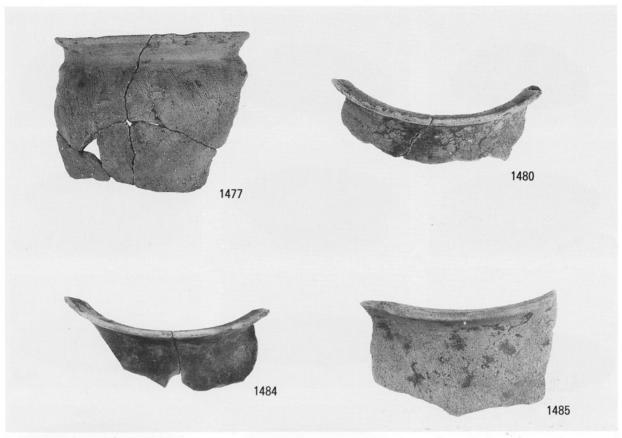
-258-



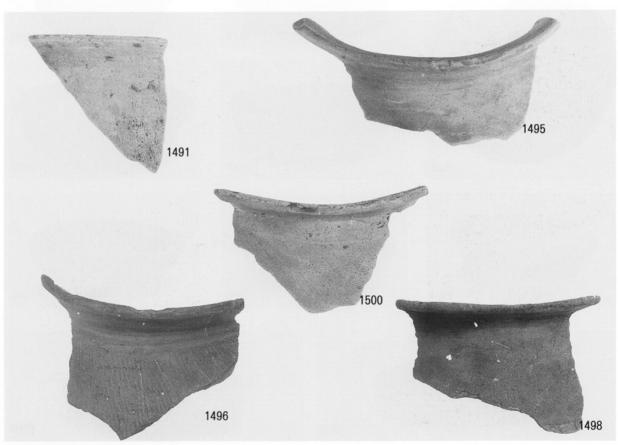
-259 -



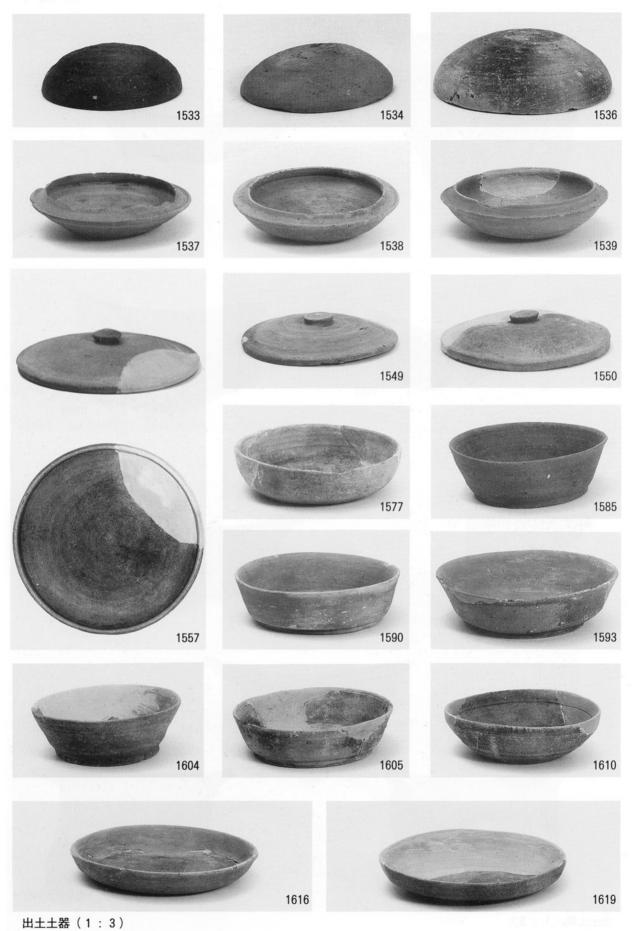
— 260 —



出土土器(1:3)



出土土器 (1:3)

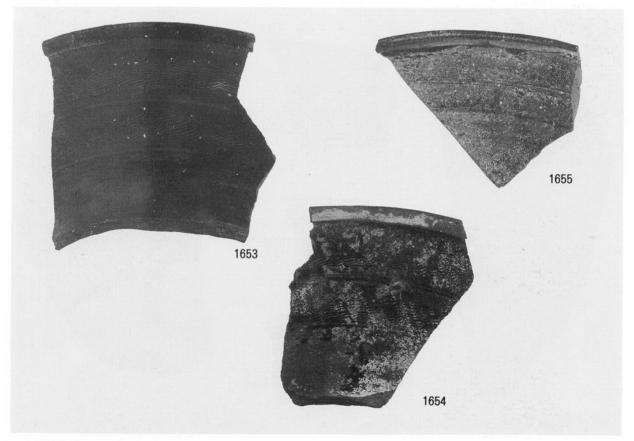






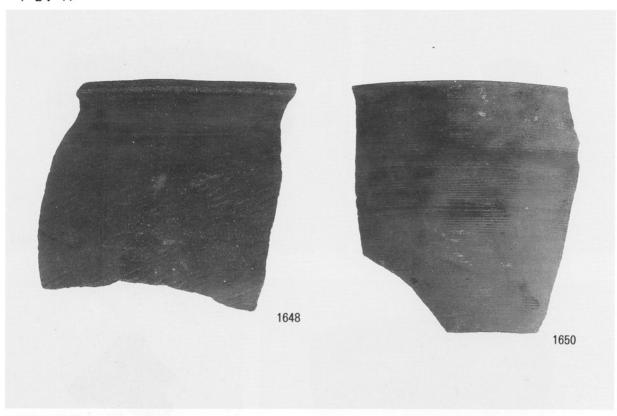




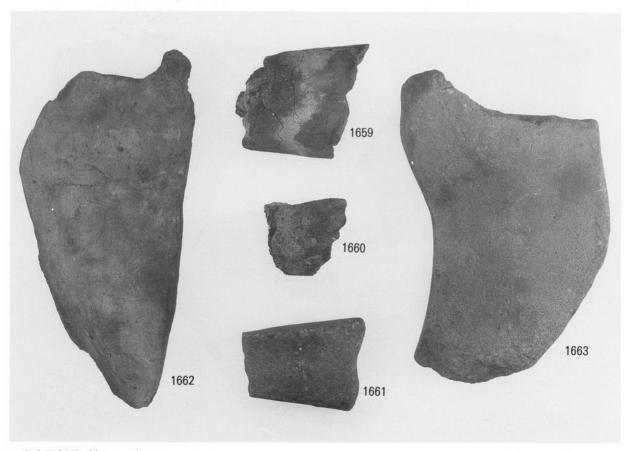


出土遺物(1:3)

P L . 44



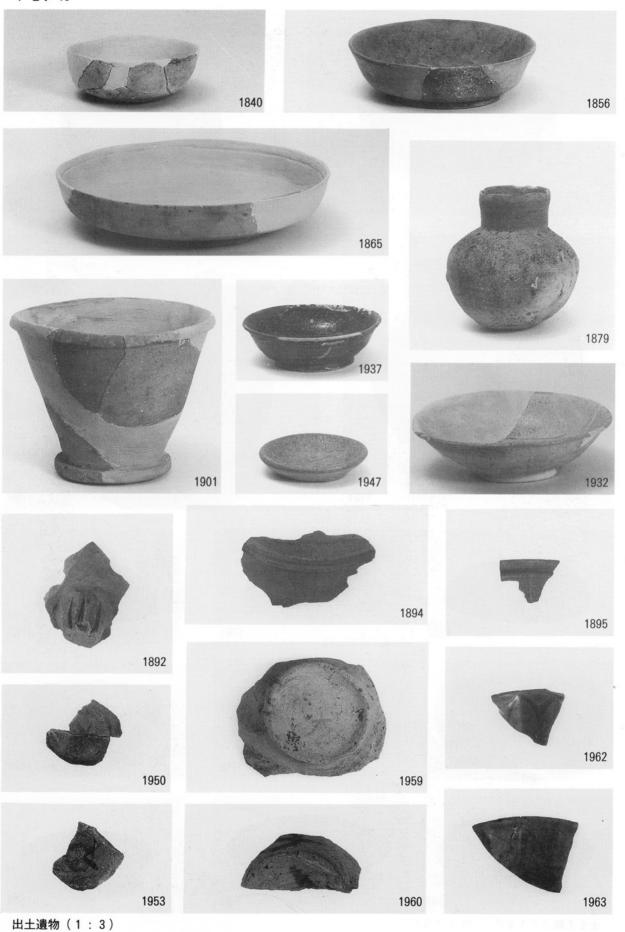
出土土器((1:3)



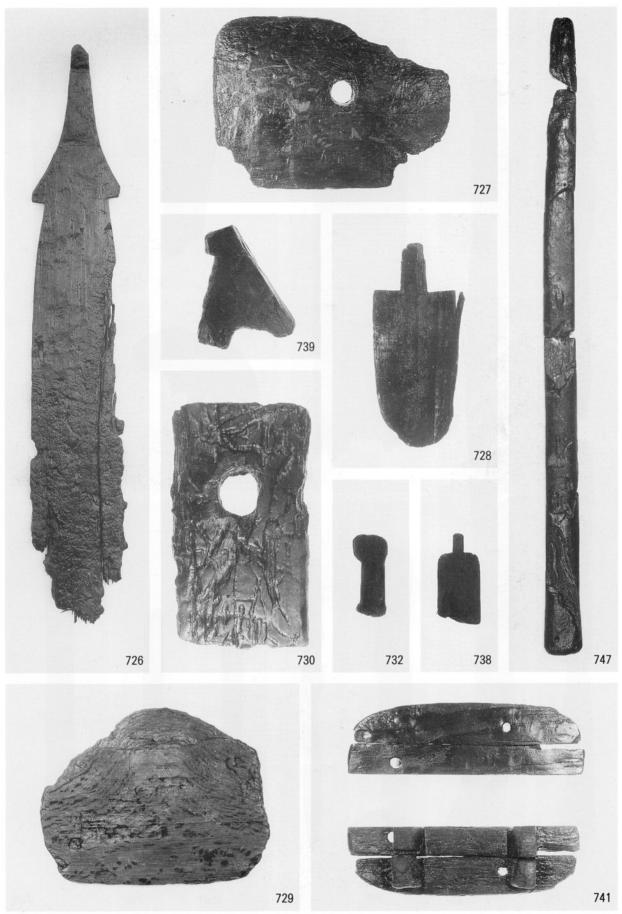
出土石製品((1:3)



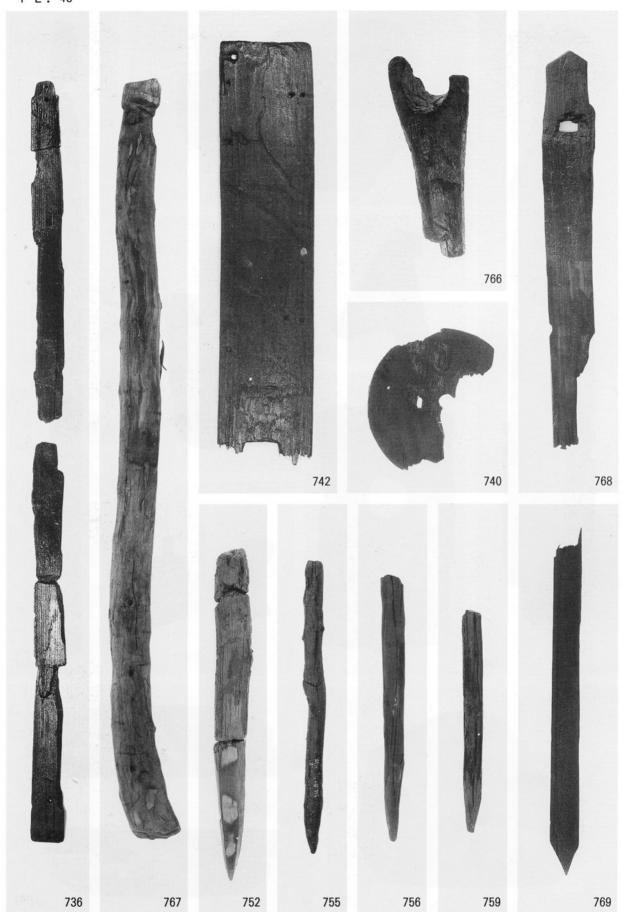
P L . 46



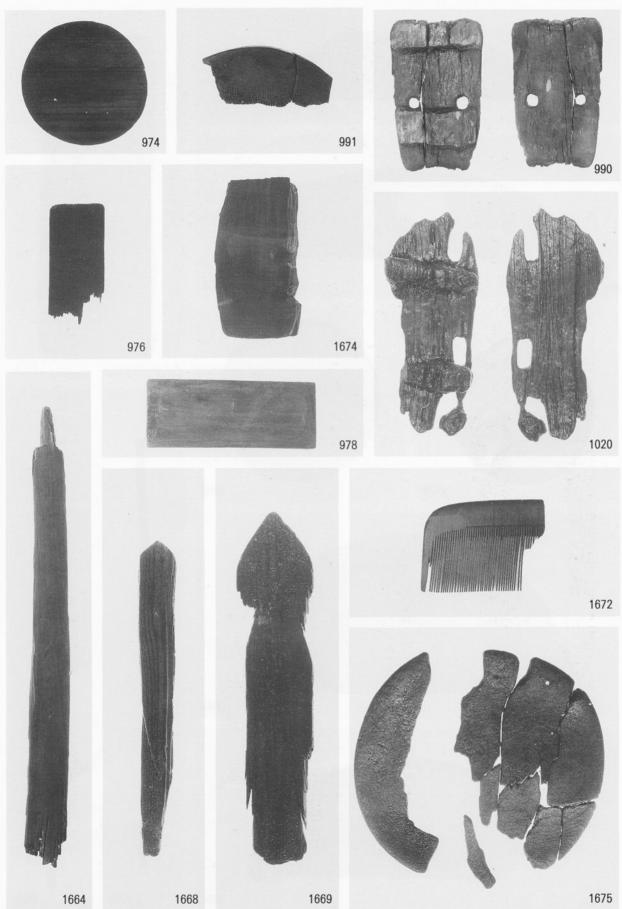
— 266 —



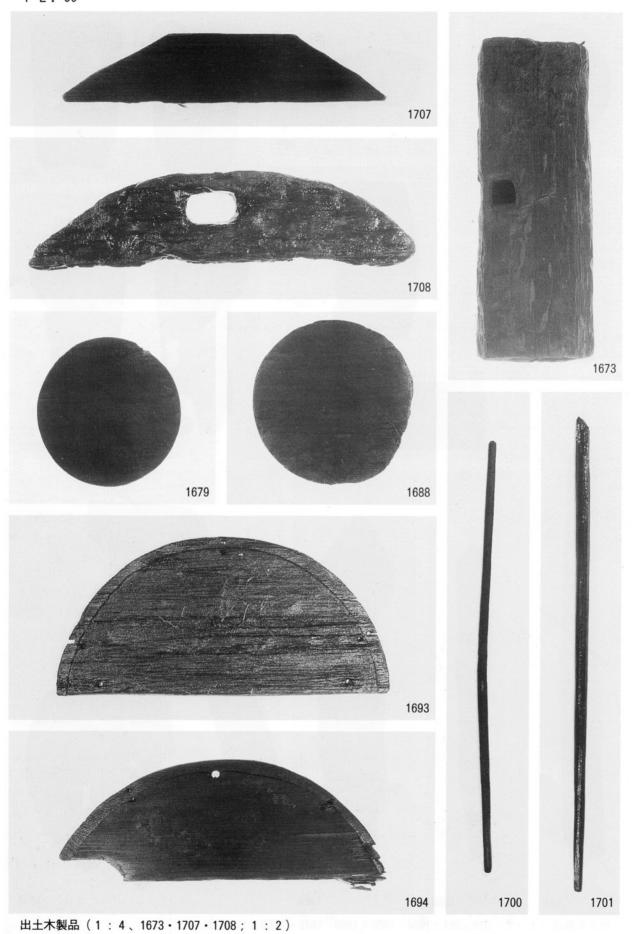
出土木製品(1:4、729;1:6)



出土木製品(1:4、767・752・755・756・759;1:8)



出土木製品(1:4、976・991・1664・1668・1669・1672・1674;1:2)



## 報告書抄録

ふりがな	いっぱんこくどうにじゅうさんごうちゅうせいどうろ (きゅうこうく) けんせつじぎょうにともなうはしかいといせきはっくつちょうさほうこく									
書 名	一般国道23号線中勢道路(9 工区)建設事業に伴う橋垣内遺跡発掘調査報告									
副書名										
卷次	·									
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告									
シリーズ番号	115— 7									
編著者名	本堂弘之・穂積裕昌・宮田勝功									
編集機関	三重県埋蔵文化財センター									
所在地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 05965-2-1732									
	西曆 1997年 3 月31日									
ふりがな	\$	りがな	ב	— <b>к</b>	小给	東緯	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所	在 地	市町村	遺跡番号	北緯	<b>宋</b> 辉	神雀翅间	mac 田相	例 1E /	
橋垣内遺 *** *** ***	・ まけいっし おきとくぼたらり 三重県津市大里窪田町 あぎはしがいと 字橋垣内		24201		34度 45分	29分	19890420~ 19900327	7,000	一般国道23号中勢 道路建設事業に伴	
					29秒	47秒	19900426~ 19910315 19911111~	4,925	う事前調査	
旧大古曽	会 素が	拿上裝裝送管的	24201	11			19911204 19920907~	100		
遺跡	字橋垣	内					19920918 19930506~	240		
					:		19930906	2,825		
	種 別	主な時代	主	な遺跡		主	な遺物	特	記 事 項	
はしがいといせき	44	弥生時代 方形周溝墓・土坑 弥生時代~				縄文土器・石器弥生土器		弥生時代中期の方形周溝墓・ 土坑群		
	集落		旧河道・溝 竪穴住居・土坑 竪穴住居・掘立柱建物 竪穴住居・掘立柱建物 掘立柱建物・土坑・溝 溝 攪乱土坑			土師器・須恵器 黒色土器 灰釉陶器 陶馬 木製品		区画溝を伴う飛鳥時代から 奈良時代の集落		
		古墳時代 飛鳥時代								
		飛鳥時代 奈良時代								
		宗良時代 平安時代								
		鎌倉時代								
		江戸時代								
		(エン・4.17	7見はユーグ	'L						

平成9(1997)年3月に刊行されたものをもとに 平成19(2007)年4月にデジタル化しました。

## 三重県埋蔵文化財調査報告 115-7

一般国道23号中勢道路(9工区)道路建設事業に伴う

## 橋垣内遺跡発掘調査報告

1997年3月

印刷光出版印刷株式会社